

ポケットモンスターXY 神に魅入られた悪使い

ヤマタノオロチ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

普通に人生を歩んでいた高校生は、帰りの途中で不幸な事故に遭って命を落としてしまう。そのまま天国行きかと思ったらアイドル的天使によって新たな世界に転送されることに。その世界は……ポケモン!?(しかもアニポケ)

またもや自分の気持ちが抑え切れずにやっつけてしまいました。今度はポケモンです。

基本アニメに沿って書いてきますが、時々オリジナルも入ります。是非楽しんで読んでください!

目次

設定と記録	1
プロローグ	10
空の戦い！VSヤヤコマ！！	16
ピカチュウとデデンネ。電気の絆！	29
ハクダンジム戦！VSビビヨン！！	47
激走！サイホンレース！！	66
ポケモントリマーとトリミアンの絆！	79
ミアレジム！シトロンの秘密	94
メガメガニャース登場！	114
竹林でポケモン搜索&ゲットだぜ！	133
ポケモンバイヤーを捕まえる！	153
新タイプ・フェアリータイプ	174
対決！少年忍者&パルファム宮殿に響く笛の音	193
悪の陰謀！恐怖のカラマネロ登場！！	215
示せ！強き絆の力	227
騎士の挑戦・バトルシャトー！	241
ポケビジョン！セレナとフォッコの絆を撮影せよ！！	253
黄金のコイキングを釣り上げろ！！	272
古代より甦りしポケモン！チゴラスとアマルス！！	293
海底の城！海の喧嘩者とギヤング、ゲットだぜ！！	315
シヨウヨウジム戦！VSガチゴラス&アマルルガ！！	342
甘い戦い！甘くない想い！？	360
恋のライバル出現！もう1人のグラエナ使い	391
カロスチャンピオン・カルネ登場！	410

コルニとルカリオ！強者を求めて	432
コルニとルカリオ！メガストーンを求めて	446
コルニとルカリオ！結果を求めて	464
コルニとルカリオ！真の結果を求めて	481
熱い漠のバトル！ノクタスVSゴロンダ	502
灼熱のスカイバトル！！	522
ポケモンサマーキャンプ！新たなライバル登場！！	537

設定と記録

主人公設定

【名前】 カイト

【性別】 男

【年齢】 14歳

【身長】 160cm

【性格】 冷静沈着で優しい。

不幸な事故で命を落とした青年が転生した新たな姿。生まれはホウエン地方だが、幼い頃に両親が亡くなってしまったためシンオウ地方・カンナギタウンに住んでいる育て屋の祖父の元で暮らした。7歳の時にチャンピオン・シロナの幼い妹のシノンに出会い、野生ポケモンから助けた事がきっかけで彼女達と関係を深め、2人が抱えていた悩みと問題を解決した事で、2人に愛されるようになった。

またその頃にシロナと一緒にとある遺跡の調査にやって来て、中で怪我していたアルセウスを助けた事でお礼にポケモンの言葉が分かるようにしてもらった。ポケモンに懐かれやすく、アニメの事はある程度覚えている。

ホウエン、カントー、ジョウト、シンオウ、イツシュを旅しており、シンオウを旅していた時にサトシ達と一緒に旅をした。ポケモンの知識は豊富で、バトルも各リーグで優勝するほどかなり強い。そのためチャンピオンや四天王と同じ実力者と評価されている。悪タイプのポケモンが好きで、バトルには必ず出しているほどである。

その為に付けられた異名が『悪使いIIダークマスター』である。容姿はゲームのXYの主人公(黒髪)と同じで、服装は緑のフルジツブジャケット、青のスキニージーンズ、黒のローファーで、黒のロゴ入りキャップ(黒の羽根飾り付き)を被っている。

【手持ちポケモン】

・グラエナ(♂)

カイトが一番最初に手に入れたポチエナが進化したポケモン。カイトとの絆は強く、バトルでも全手持ちポケモンの中で最高クラス。

面倒見の良いお兄さんの存在なためにカイトの次に他の手持ちポケモンから慕われている。そのために♀ポケモンからモテやすい。

タイプ：悪

特性：いかく

技：悪の波動、氷のキバ、噛み砕く、焼き尽くす、バークアウト

・ゾロア（♂）

実家の育て屋の祖父母から貰ったタマゴが孵化して誕生したポケモン。カイトを親に、グラエナやキュウコン達を兄・姉と思っている。少々甘えん坊だが人懐っこい性格で、誰からも好かれている。またグラエナのように強くなりたいたいと思っ努力している。ニヤースのように普通にしゃべる事が可能、しかし時々勝手に出てきてしまう事もある。アイス等の甘いものが大好き。

タイプ：悪

特性：イリュージョン

技：引っ掻く、ナイトバースト、悪の波動、高速移動

・ハブネーク（♂）

ホウエン地方を旅していた時にゲットしたポケモン。カイトがゲットする前は見た目から他のポケモン達や人間達から恐れられて1人ぼっちだった。それ故最初はカイトの事を全く信用しなかったが、長い時を経て今ではカイトや仲間達を信じるようになり、またバトルの主力ポケモンの1体となった。

タイプ：毒

特性：だつぴ

技：ポイズンテール、ヘドロウエーブ、毒々のキバ、地ならし

・プテラ（♂）

シンオウ地方でとある化石ポケモン復活事件の際にゲットしたポケモン。元から潜在能力が高く、カイトの特訓により空を飛べるポケモン達の中でも上位クラスに属する。また、よくカイトを背中に乗せて飛んだりする。

バトルが大好きで、ジム戦などにおいて早くやらせるとボールの中で騒ぐくらいだ。

タイプ：岩／飛行

特性：いしあたま

技：岩なだれ、翼で撃つ、竜の息吹、ギガインパクト

・ジバコイル

カントー地方で旅していた時にゲットしたコイルが最終進化したポケモン。鋼の体をしている割に熱い心を持っている。こちらもよくカイトを乗せて飛んだりする。また、休憩の時に近くにある電灯などにくつついてのんびりしながら電気を取っていたりする。

タイプ：電気／鋼

特性：じりよく

技：ラストーカノン、金属音、放電、電磁砲

・ヒトツキ ↓ ニダンギル (♂)

カロス地方で初めてゲットしたポケモン。見た目が剣である事から分かるように騎士みみたいな性格をしている。それ故カイトを守ろうとするあまり、ピンチの時にはボールから勝手に出たりする事もあつる。またこれまで竹林にてゴロンダを始め、様々なポケモン達と戦ってきた為実力は高い。

シヨウヨウジムで初のジム戦にレビューを飾り、当初は苦戦しつつもニダンギルへ進化する事でパワーアップし、見事勝利する事ができた。

タイプ：鋼／ゴースト

特性：ノーガード

技：シャドークロウ、切り裂く、金属音、連続斬り、燕返し、瓦割り

・ノクタス (♂)

ホウエン地方で旅していた時にゲットしたサボネアが進化したポケモン。プテラ同様にバトルが大好きで、得意のパンチ系の技で真正面から戦いに行く。また、熱血タイプで暇があればすぐに己を鍛えようと特訓を行う。それは夜でもやろうとするくらいで、よくカイトに早く寝ると言われる。

タイプ：草／悪

特性：すながくれ

技：不意打ち、ニードルアーム、ニードルガード、雷パンチ、ミサイル針

・ボスゴドラ（♀）

ホウエン地方で旅していた時にゲットしたココドラが最終進化したポケモン。オスポケモンが多いカイトのポケモン達の中で数少ないメスポケモンである。大きく鋼の身体を使った重量級のバトルを得意としている。また感情的になったり、カイトの事になると両腕で力一杯抱き締めるので、かなり注意が必要だ。

タイプ：鋼／岩

特性：いしあたま

技：メタルクロー、アイアンヘッド、ストーンエッジ、水の波動

・サメハダー（♂）

カロス地方のミュライユ海岸で起きた騒動後にゲットしたポケモン。通常のサメハダーよりもかなり大きい個体で、その大きな口でい로운な物に噛みつく。

凶暴ポケモンと言う肩書の通り、気に入らない事があるとすぐに怒り、その度にカイトやグラエナに沈められる。だがバトルの実力は中々で、水中戦になると滅多な事では負けない程だ。

タイプ：水／悪

特性：さめはだ

技：熱湯、毒々、噛み砕く、ロケット頭突き、アクアジェット

・ヘルガー（♂）

ジョウト地方で旅していた時にゲットしたデルビルが進化したポケモン。グラエナの数少ない弟子の1体で、彼に追い付こうと努力して彼の覚えていた技の1つ『雷のキバ』を受け継いだ。他にも遠吠えを聞けば相手が怯む事もある為、カイトから特性：威嚇をも受け継いだと言われるくらいだ。それらもあって上位クラスに属している。

タイプ：炎／悪

特性：もらいび

技：オーバーヒート、火炎放射、噛み砕く、雷のキバ、スモッグ

・ゴロンダ（♂）

カロス地方のとある森でゲットしたポケモン。その森には格闘自慢のポケモンが沢山いて、彼らとバトルし続けてきた事から実力は高い。その為にバトル好きな性格で、強い相手がいたらすぐさま挑戦する程だ。また自分を倒したノクタスとはライバル関係である。

タイプ：格闘／悪

特性：鉄の拳

技：アームハンマー、辻斬り、ローキック、ビルドアップ

ヒロイン設定

【名前】 シノン

【性別】 女

【年齢】 10歳

【身長】 150cm

【性格】 真面目で優しい。

シンオウチャンピオン・シロナの妹。幼い頃、木の実を取りに入つた森で野生ポケモンに襲われたところをカイトに助けられる。その時に一目惚れしてカイトを『兄様』と呼ぶくらい慕っている。

姉の影響でポケモン考古者になることを目指してカイトと一緒に旅をしている。カイト同様にポケモンに懐かれやすい。新しい単語や知らない事はメモを取って記録する。

容姿は長い金髪にシロナと同じ髪飾りを付け、服装は青のノースリーブ、黒のミニスカートでとても綺麗な美少女である。

【手持ちポケモン】

・キュウコン（♀）

シノンが一番最初に手に入れたロコンが炎の石で進化したポケモン。常にシノンと一緒にいて、グラエナとは恋人関係でラブラブである。こちらも同じ面倒見の良いお姉さんの存在である。とても優し

いが綺麗好きで、自分の体が汚れる事を嫌う。

タイプ：炎

特性：もらいび

技：火炎放射、思念の頭突き、エナジーボール、アイアンテール

・サーナイト(♀)

ホウエン地方を旅していた時にゲットしたラルトスが最終進化したポケモン。騎士みたいに冷静な性格で、シノンがピンチの時にはすぐサイコパワーでテレポートして身を守る。キュウコン同様にグラエナに恋をして、食事の時では彼に寄り添う行動までする。

タイプ：エスパー／フェアリー

特性：シンクロ

技：サイコキネシス、凍える風、癒しの波動、ムーンフォース

・ミミロップ(♀)

シンオウ地方を旅していた時にゲットしたミミロルが進化したポケモン。可愛いポケモンだが少し悪戯心があつて、様々な状況で他のポケモン達をからかったりする。キュウコン同様にグラエナに恋をしており、彼に愛されたい故にいろいろな誘惑な行動をする。

タイプ：ノーマル

特性：メロメロボディ

技：ピヨピヨパンチ、飛び跳ねる、冷凍ビーム、ハイパーボイス

・ウオーグル(♂)

イツシュ地方で旅していた時にゲットしたワシボンが進化したポケモン。メスポケモンが多いシノンのポケモン達の中で数少ないオスポケモンである。勇敢で優しい性格で、困っている者を見ると放っておけない。その為しばしば厄介事を引き起こしてしまう。バトルの時はタッグを組んで行う事が多い。

タイプ：ノーマル／飛行

特性：するどいめ

技：ブレイブバード、翼で撃つ、エアスラッシュ、思念の頭突き

・エーフィ(♀)

ホウエン地方を旅していた時に偶然ゲットしたイーブイが進化し

たポケモン。花が大好きで、よく花壇や自然の中で咲いている花を見つけるとすぐさま近寄って匂いを嗅いだりと乙女の性格をしている。彼女はグラエナとは別にカイトの手持ちにいるブラッキーに恋している。

タイプ：エスパー

特性：シンクロ

技：電光石火、サイケ光線、光の壁、アイアンテール
・ビビヨン（♀）

カロス地方で初めてゲットしたコフキムシが最終進化したポケモン。自分や仲間達助けてくれたシノンに恩を感じており、彼女の事が大好きである。自分の青紫色の翅を気に入っていて、毎日の手入れを必ずしている程だ。

タイプ：虫／飛行

特性：りんぷん

技：虫のさざめき、神秘の守り、痺れ粉、風起こし

ロケット団設定

【名前】 ロバル

【性別】 男

【年齢】 28歳

【身長】 180cm

【性格】 真面目。

元はとある地方で有名な大富豪に仕えていた超一流の若き執事だったが、ある日盗人に財産を全て奪われた事で解雇されてしまった。

その為“奪われる側”から“奪う側”になろうとしたところで彼の噂を聞いてやって来たロケット団にスカウトされる。

入団後はコツコツと手柄を上げてエリートクラスの特等作業員になった。またその際の任務でミスナと出会い、彼女からコンビを組む

ように誘われてそのまま組むようになった。

趣味は料理作りで、その腕は世界に通じる程である。また元執事だけに家事全般も優秀で、格闘術にも秀でている。現在はロケット団の食事係りを担当している。

容姿は肩まである茶色の髪と青い瞳が特徴で、穏やかな雰囲気を漂わせている。

【手持ちポケモン】

・エアームド(♂)

ロバルが執事の頃から一緒にいるポケモン。穏やかなロバルとは正反対の荒々しい性格で、バトルにおいても真正面から叩き潰そうとするのが好き。

また結構な力持ちであり、人間とポケモンで2体ずつ掴んだり、乗せたりしながら飛ぶ事が可能である。

タイプ：鋼／飛行

特性：がんじょう

技：ラスタールカノン、鋼の翼、翼で撃つ、メタルクロー

・カメテテ(♂)

カロス地方に着いた時にゲットしたポケモン。それぞれの仲は良く、滅多な事では喧嘩しない。ロバルにとっても忠実で、彼の命令には大抵の事は従う。最近ではエアームドの足を掴んでぶら下がった状態で移動する事が趣味である。

タイプ：岩／水

特性：かたいツメ

技：シエルブレード、水鉄砲、殻を破る、ロックブラスト

【名前】 ミズナ

【性別】 女

【年齢】 25歳

【身長】 175cm

【性格】 軽く少々不真面目。

どこにでもいる普通の家庭で育てられていたが、彼女の的にそれが大変退屈であつて、それから抜け出す為には刺激を求めてちよつとした悪事に手を出す。(不真面目なところもそれが原因)

その後も悪い事をしていたところまでロケット団からスカウトされて、更なる刺激を求めて入団した。

見た目の割には手先が器用で、運動も得意。それによつていろんな事で手柄を上げてエリートクラスの特等社員になった。またその際の任務でロバルと出会い、真面目な彼と一緒に刺戟を求められると思つて彼を誘い、以後コンビを組むようになった。炎タイプ好き。

容姿は短い紫色の髪が特徴で、何気にスタイル抜群である。

・イトマル(♀)

ロケット団へ入団した際に貰ったポケモン。小さい体の割には様々な技を持っていて、それによりこれまでミズナをサポートしてきた。意外と大食いな奴である。

タイプ：虫/毒

特性：むしのしらせ

技：毒針、糸を吐く、吸血、泥棒

・シシコ(♀)

カロス地方に着いた時にゲットしたポケモン。炎タイプだけに熱い性格で、バトルの際は密かに燃えてしまう。またマミーカとよくタックを組んでバトルする機会が多いので、彼の事を気に入っている。

タイプ：炎/ノーマル

特性：どうそうしん

技：頭突き、火炎放射、炎のキバ、ニトロチャージ

プロローグ

突然ですが皆さん、転生って知っていますか？いやなに変な事を言っているんだと思うけど、実は俺・・・死んでこの世界に来た者のさ。

元々いた世界では、普通に学校に行つてつまらない授業を受けて、普通に帰って飯を食べて風呂入って勉強して寝るといづく平凡な生活を送っていた。けどある日いつもなら絶対に車が通らない所から突然車が出てきて事故に遭つてしまった。

そのまま天国か地獄に行くかと思つていたら突然目の前にアイドルの天使様が現れて俺をこの世界・ポケットモンスターの世界に転生させてくれた。しかもアニメの方へ！

ポケモン好きな俺にとつては嬉しかった。あの天使様には本当に感謝しても感謝しきれないぜ。

そしてこの世界に転生されたのは良かったけど、最初はいい感じではなかった。

幼い時に親が亡くなるという悲しみに襲われた。そのため暫くの間、暗い感じになってしまったが、シンオウ地方に引越した際に出会ったチャンピオンとその妹のおかげで吹っ切ることができた。そして成長した俺はいろんな地方に行つて人やポケモンと出会ったり、ゲットしたり、バトルしたり等と様々な体験をしてきた。

「今思えば大変な経験をしたな・・・」

「ガウツ？」

「うん？ああ、何でもないよグラエナ」

俺の膝の上にいた相棒・グラエナが不思議そうに見つめてきたので、頭を撫でながら大丈夫だと言う。こいつは俺が旅に出た時からずっと付き合ってくれた奴だ。

『皆様、あと1時間後にカロス地方・ミアレシティにご到着します』

飛行機のアナウンスがなって目的地の到着時間を知らせる。

「ちようど夕暮れ時に着くようだ。着いたら最初にポケモンセンターの宿泊施設に行つて休んでから今後の予定を考えるか」

「ガウ！」

今俺達はカロス地方行きの飛行機に乗っている。目的地はこの地方のリーグに挑戦するためだ。此処でも必ず優勝してやる！

そして目的地に辿り着き、飛行機から降りて泊まれる場所を探すため街の広場に向かう。だが広場に近づくにつれて人々が慌ただしく動いている。

流星に気になったので近くに居た人に尋ねた。

「あの、何かあったのですか？」

「ああ、実はこの先でガブリアスが暴れているみたいなんだ」

「ガブリアスが？」

遠くの方を見るとあっちこちに煙が上がっていた。放っておけないと思い、様子を見に煙の上がつている方にグラエナと共に走る。途中でガブリアスの姿が見え、広場にあるプリズムタワーに降り立った。周りには大勢の人が心配そうに見ている。

「タワーの上だところからじゃ登れないな。どこかいい所は・・・」

「ガウガウ」

考えていた時にグラエナが足を突つついて人気の少ない場所を指差す。ガブリアスを助けるためにはあそこから忍び込むしかない。

そう考えたカイトはグラエナを落とさないように肩に乗せ、目的の場所に向かうとバックの中から先端に鉤爪が付いているロープを出し、タワーの端に引っかけて慣れた動きでタワーを登った。幸いにも

周りの人達はガブリアスに夢中になって彼らの存在に気づかなかった。

ようやくガブリアスが近くに居る所まで着き、接近しようとした時、途中で人の気配を感じた。警察かなと思いつつ覗いてみるとその人は赤い帽子を被って肩にピカチュウを乗せていた。アイツは：：間違いはない。

「サトシ！」

「えっ？カイト！お前、何で此処に!？」

「ピカピカ!？」

「話は後回しだ。それよりもガブリアスはこの近くだ。行くぞ！」

「分かった！」

サトシと共にガブリアスの所へ向かって接近する。

「ガブリアス!!」

サトシが呼びかけた瞬間、ガブリアスは俺達目掛けて『破壊光線』を放ってきた。それを避けて冷静にガブリアスを観察すると首元に変なリングが付いていた。

「あのリングが原因なのか・・・？」

他に異常の物はないから、やはりあのリングが原因なのだろう。なんとか外そうとするが、ガブリアスが暴れているために近づけない。何か方法はないかと考えていると隣でサトシが再び声を掛ける。ピカチュウとケロマツも必死に呼び掛ける。

「ガ、ガアアブ!!」

一瞬サトシの声にガブリアスは反応したが、リングのせいで再び正

気を失ってタワーの最上階へ飛んで行ってしまった。後を追うために上に行く階段を見つけて急いで登る。最上階に辿り着くとガブリアスが警戒しながらまた『破壊光線』を放ってきた。それを避け、ピカチュウとグラエナが反撃しようとするのを止め、呼び掛けながら俺達は近づく。

その時、リングが強く光ってガブリアスを苦しめる。それによりガブリアスは後ろへ大きく下がってしまう。このままだと確実に落ちる。

「ガブリアス!!」

サトシが叫んだのと同時にケロマツがジャンプして首元のケロムースを飛ばした。それはガブリアスの足に命中して動けないように固定した。

「今だサトシ！グラエナ行くぞ」

「ああ！ピカチュウもあのリングを壊すんだ！」

俺達は左右同時にガブリアスに抱きついて動きを止める。そしてピカチュウは『アイアンテール』を、グラエナは『噛み砕く』を繰り出してリングを壊した。壊れたことで苦しみから解放されたガブリアスは眼から涙を流しながら倒れる。

「大丈夫か？」

「待ってる。今すぐ応急処置をしてやるからな」

バックから傷薬やハンカチ、回復できる木の実等を取り出して処置をしようとした時、何かが崩れる音がした。振り向くとピカチュウが崩れた足場と一緒にタワーから落ちていた。

「ピカ!?!」

「ピカチュウ!!」

「えっ!? ちよ、ちよつと待て馬鹿!!」

サトシはタワーから落ちていくピカチュウ助けようと迷わず追いかけて飛び降りた。その行動にカイトを含めた全員が驚いた。慌てて助けようと手に持った薬を置いて、ロープを投げようとした時に突如炎を纏ったポケモンがサトシとピカチュウを抱きかかえて助け、静かに地面に下ろした。

そして月を背に建物の上に飛んだのはバシャーモがメガシンカした姿・メガバシャーモだった。メガバシャーモは元の姿に戻り、バシャーモに似た仮面を付けたトレーナーと共にその場から立ち去って行った。

その後、俺達は暴走したガブリアスを助けた事でタワー近くに集まっていた報道陣にインタビューを受け、プラターヌ博士の研究所で一夜を過ごした。

そして次の日の朝、旅の支度を整えて研究所の外に出ると既に博士とサトシ達が居て、ポケモン図鑑を貰っているところだった。

「おはようカイト!」

「おはよう。待たせたか?」

「いや、大丈夫だぜ。それよりカイト、お前の分のポケモン図鑑だ」

俺がやって来るのに気が付いたサトシが軽く挨拶して、俺の分のポケモン図鑑を渡す。

何故サトシ達が待っていたのかと言うと昨日話し合ってたシンオウと同じように一緒に旅をする事を決めたからだ。

図鑑を受け取ってポケットにしまい、いざ出発しようとして足を踏み出すとサトシの顔にケロムースが投げられた。前を見るとケロマツが居て、側にはモンスターボールがある。これを見て俺は瞬時に理解する。

「どうやらケロマツはお前と行きたいみたいだぜ、サトシ」

「えっ!? そうなのか?」

「・・・ケロ!」

力強く返事をするケロマツを見てサトシはモンスターボールを拾って一緒に行くか尋ねる。そしてケロマツの方からモンスターボールに入る。

こうしてサトシに新しい仲間ができ、博士に見送られながら俺達は出発した。

空の戦い！VSヤヤコマ!!

研究所を後にして俺達は今ポケモンセンターに向かっている。カロスリーグに出場するためにはポケモンセンターで登録をしなければいけないのだ。

目の前に居るシトロンとユリーカはミアレシティに詳しいとの事で道案内してもらっている。

「ありがとうな、シトロン。今日道案内してくれてさ」

「まったく。此処の街は広すぎてお前達が居なかつたらずっと迷っていたかもな」

「いえいえ、これくらいお安い御用ですよ。それよりも僕は感動しているんです」

「感動?」

「サトシとカイトがポケモン達の為に懸命になる姿を見て、なんだかこっちも勇気を貰った様な」

昨夜の事についてか。あんな事くらいで感動するものなのか? まあ、困っている者を助ける事を実行するのは勇気がいることだ。前の世界に居た時は、そんな事やれる度胸が俺にはなかったし。だが今は違う。

「大袈裟だなあ、もう」

「俺達は当たり前前の事をしたまでだよ」

今の俺はそれをすぐにできる度胸を持っている。そう話し合っている内にポケモンセンターに到着して、中に入って中央カウンターにいるジョーイの元に行く。カウンターで待つカロス地方のジョーイは丁寧にお辞儀をする。

「おはようございます! 此処ではポケモンの体力回復やトレーナーの

宿泊等、ポケモンに関わるあらゆるケアを致します！」

「俺達、カロスリーグ挑戦の登録に来ました!!」

「分かりました。ではポケモン図鑑をここにタッチして下さい」

「はい！」

貰ったばかりのポケモン図鑑を取り出す。先にサトシをやらせた後、カウンターの液晶画面にタッチする。すると登録されたトレーナーの情報が表示された。

『カンナギタウンのカイト。カロスリーグ挑戦の登録完了。現在バッジの数・ゼロ。健闘を祈ります』

これで登録完了だ。図鑑をバックにしまつて助手のプクリンからバッジケースを貰う。その後サトシはオーキド博士に連絡しに行った。俺も育て屋の祖父母の元に連絡する。

「じいじ、ばあば。今回も応援頼むよ。絶対に優勝してくるから」

『うむ、カイトが優勝するようにワシらがしっかり神様に祈っておくからな』

『いつでも全力を出しなさいね。それとカイト、先程シノンちゃんがカロス行きの飛行機に乗ったとの連絡があったわ』

「何？アイツは暫くの間、遺跡ツアーの用事があるから来れないと聞いていたけど？」

『カイトちゃんに会いたくつてたまらなくなつたのよ。また何かあつたら連絡してね。すぐに出て上げるから。それじゃあ、頑張りなさい』

そう言つて電話が切れる。そうか、シノンもこっちに来るのか。これはまた楽しくなってきたなと思ひながら外の噴水の前で待つシトロン達の元へ戻つた。

そして最初に挑戦するジムをハクダンシティにあるハクダンジム

に決定して、シトロン達と一緒に旅をする事も決めて俺達は手を合わせて誓い合った後出発した。

ハクダンシティに行くためには4番道路を通る必要があつて、その道を歩いていると途中で先に進んでいたポケモン達が足を止めた。

どうしたのかと尋ねるとグラエナが辺りにポケモンが居ると言う。すると真上の木から小さな木の実が1つピカチュウの頭の上に落ちて、そのまま地面に転がった。拾おうとしたピカチュウの前に電撃が放たれ、その衝撃で木の実が跳ね飛んで前に居たユリーカの鼻に当たってしまった。

「大丈夫かいユリーカ!？」

「・・・びっくりしたあ」

心配するシトロンだがユリーカは気にしていない様子で傍にある木の実を拾い上げる。

「これが欲しかったのかな？」

「!!ピーカッ」

「デネネ！」

すると突然草むらが揺れて段々とユリーカに近づいてくるのを感じたピカチュウが出てきたポケモンの前に飛び出した。そのポケモンとピカチュウは互いに電気を流し合っている。それはまるで会話しているようだ。内容は流石に分からないが、その間に凶鑑で調べてみる。

「初めて見るポケモンだ！」

「わああ！可愛い!!」

「えっとこいつは・・・」

『デデンネ。アンテナポケモン。ヒゲがアンテナの役割をしている。電波を送受信して遠くの仲間と連絡を取り合う』

タイプは電気とフェアリーか。なかなか戦いに有力なポケモンだ。見た目も可愛いからゲットしたいと思う奴は多いだろうな。

「このデデンネ欲しい！キープね、お兄ちゃん!!」

「キープって?」

「ユリーカがトレーナーになった時にパートナーにするの!ねえ、いいでしょう?ちゃんと世話すからあ」

「うくん・・・そうだな・・・」

潤んだ眼で袖を引くユリーカにシトロンは困った顔で悩んだ。けどこう言う場合の結果はもう出ているよな。

「いいんじゃないか?ユリーカがパートナーにしたいと言っているし。将来の為にもさ」

「そうそう!俺も協力するからさ」

「本当!?ありがとうサトシ!カイトさん!」

「2人が言うなら、分かりました。ゲットしましょう!!」

ゲットする事が決まってユリーカは嬉しそうな表情をする。そして持っていた木の実を差し出した。それを見てデデンネが恐る恐る近づいて取ろうとした時、横から何かがもの凄いスピードで奪ってしまった。そいつは小さな鳥ポケモンだった。

「おい!何するんだ!あつ、アイツも見た事がない」

「ヤヤコマですよ」

「ヤヤコマ?」

鳥ポケモンの名前をシトロンが言う。図鑑によるとヤヤコマはノーマルと飛行タイプか・・・デデンネと同じカロス地方にしか居ないポケモンのような。

「ちよつとー！それデデンネのなんだからね!!」

ユリーカは怒って言うが、ヤヤコマは見せつけるように木の実を丸飲みにして食べてしまい、そして小馬鹿にしたように笑う。

「ガ、ガウウ・・・」

「ピカ!?」

「うん？お前らどうして・・・」

グラエナとピカチュウが気まずい声を出したので振り向いて見るとデデンネが眼に大粒の涙を浮かべていた。余程木の実を取られた事がショックだったみたいだ。

「デネエエエエ!!」

「あつー！デデンネ〜〜!」

ついに泣き出してしまったデデンネはそのまま草むらの中に入って姿を消してしまった。その様子を見てユリーカは涙ぐむ。それを見てケロマツがヤヤコマにケロムースを飛ばした。しかしヤヤコマは素早い動きで全て避けてしまう。

「ほお！アイツ中々素早いではないか」

「・・・決めた！アイツをゲットする!!」

「ヤコーー!!」

ヤヤコマの動きに感心していたら隣でサトシが宣言する。

ゲットするにはまずバトルして体力減らさなければならぬ。此処ではゲームと違って瀕死にならないのはいいけど、変わりに簡単にはゲットできない。飛行タイプのヤヤコマには電気タイプが有利だ。サトシはピカチュウでバトルをする事を決めた。

「よし、ピカチュウ行くぞー!」

「ピツカア！」

「ケロ！」

バトルしようとした時、ケロマツがピカチュウの前に立って再びケロムースで攻撃するが先程と同じで全て避けられてしまう。

「何やってるんだケロマツ！ 作戦も立てないで！ ピカチュウ、10万ボルトだ」

「ピイカア・・・!!」

「ケロケロ！」

「(ふくん。手を出すな・・・か。正義感の強い奴だ)」

あのケロマツがトレーナーの言う事を聞かない理由が分かった。その間にもケロマツは攻撃するが、ヤヤコマは『影分身』で避けて『つつく』攻撃でブツ飛ばされて木に叩き付けられて地面に向かって落ちる。

「ケロマツ！ 大丈夫か!？」

「ケロ・・・」

地面に激突寸前にサトシが駆け寄って受け止めた。

「無茶すんなよ。ここはピカチュウに任せるんだ」

「ピカピカ！」

「ケロオ・・・！」

ケロマツが強い意志を込めながらユリーカを見る。それを見てサトシも気が付いたようだ。そしてケロマツはサトシの制止を振り切ってヤヤコマを追って飛び出してしまった。

「これが例の、トレーナーの言う事を聞かずに勝手にバトルをすると

言うやつですか!？」

「ケロマツの奴・・・」

シトロンは焦って言うけど、サトシは少し笑みを浮かべながら落ちて着いている。

「気が付いたかサトシ?」

「ああ！何でアイツがそう言われてきたのかが分かった」

サトシも成長したな。前の時だったら分かっていたいなかっただろうな。そして俺達はケロマツの後を追いかける。ようやく追いつくとケロマツはヤヤコマとバトルを続けていて、また攻撃を受けて地面に叩き付けられながらも諦めずに飛び掛かろうとするのをサトシが止めた。

「ケロマツ、待て！」

「ケロオ!!」

「お前の気持ちは分かったから、俺の話聞いてくれ」
「サトシ!!」

ケロマツの説得を必死にやっているサトシにシトロンが叫んで言う。空の上でヤヤコマが『かまいたち』を放ってきた。今からでは避けられないと誰もが思ったが・・・。

「グラエナ！地面に氷のキバ！」

「グガアアア!!」

咄嗟に俺がグラエナに指示を出す。グラエナの牙が青く光って地面に突き刺さるとそこから氷の壁が出来上がって『かまいたち』を防いだ。

「大丈夫か？」

「サンキューカイト。助かったぜ。ケロマツ、お前ユリーカの悲しい顔を見てヤヤコマを懲らしめたかったんだろう？」

「ケロオ・・・」

「そうだったの!? ケロマツ、ありがとう!!」

理解して嬉しくなったユリーカはケロマツに抱き締めてお礼を言う。抱き締められたせいか、お礼を言われたせいかのどちらかによってケロマツは頬を赤くして照れたように眼を細める。

「でもその為には作戦が必要だ。相手は空を自由に飛べる。だからまずこつちに引き寄せないと・・・」

「フッフッフ・・・それなら僕にお任せ下さい！サイエンスが未来を切り開く時！シトロニックギア・オン!!」

そう言つてシトロンはメガネを眩しく光らせながら背負っていた鞆から蓄音機に似た機械を取り出した。つて言うかどうかやって入っていたその機械!? サイズがマジで合わないぞ!?

「名付けて、『鳥ポケモン引き寄せマシーン』です!」

「おお!!」

「何だかダサイ名前ね・・・」

「もつと良い名前を思いつかなかつたのかよ・・・」

「鳥ポケモンには帰巢本能があり、それを司る磁性体がある周波数の音波によって刺激する事で引き寄せたり遠ざけたりする事ができるのです!」

「簡単に言うと、その本能を利用した発明品で、それでヤヤコマをこつちに引き寄せる作戦って事か？」

「その通りです。では見て下さい! 回転スタート!!」

シトロンがゆっくりマシンの横にあるハンドルを回し始める。す

るとヤヤコマはマシンの方をじっと見つめている。

「効いているようです!」

「やったな! 科学の力ってスゲー!!」

まったくこいつらは単純だな。まあ、作戦が成功しているなら良しとすr・・・うん? 何だか周りの様子がおかしい?

怪しく光る赤い眼が木の間から大量に現れる。それに気が付いて俺がシトロンにマシンを止めるように言うとしたが遅かった。音波に引かれて沢山のスピアーが現れた。そして一斉に毒針を向けて襲い掛かって来た。

「うわあああ!! 追い掛けてきた!!」

「お兄ちゃん早くマシンを止めてえ!!」

「多分周波数が違っていたんです! 鳥ポケモンにはもつと高い周波数が有効と見ました。これでどうでしょう!?!」

シトロンは周波数を上げる為に先程より早くハンドルを回す。しかしそれが逆にスピアー達を刺激して更に数を増やし、スピードを上げて追い掛けてくる。

「全然ダメじゃないかお前!?! もういい! 俺が足止めするからその間に安全な場所に隠れている!!」

「分かった!」

サトシ達を先に行かせて俺はスピアー達の方を向いて立ち止まる。そしてグラエナに指示を出そうとしたが、スピアー達は無視して通り過ぎて行った。これには少し呆然としてしまい、ゆっくりと後ろの方を向く。それと同時に大きな爆発音が響いた。

「これは・・・マシンが壊れたみたいだな」

「ガウツ」

急いで後を追い掛けて森を抜けると案の定、岩場で真っ黒焦げになってアフロ状態になっているサトシ達を見つけた。

「おーい！生きているか？」

「ああ、全員無事だぜ。それより凄いでシトロン！スピアーをあんなに呼べるんだからー！」

「そ、そうですか？」

「そうだな、今度からあのマシンは虫ポケモン用に改造するんだな」

そう言った後、空を見上げるとヤヤコマが飛びながらこちらを見て笑っていた。しかしサトシは周りの岩場を見て良い事を思いついて言う。

「ケロマツ、いい作戦を思い付いた。此処でアイツと決着をつける」

「決着って？」

ユリーカの疑問をシトロンがゲットする事だと教える。俺も周りの岩場を見てすぐにサトシの作戦が分かった。

「一緒にやろうぜ。俺はお前のトレーナーだ。力を合わせるんだ！」

「ケロー！」

「よし！此処全部がバトルフィールドだ。高い所低い所、お前のジャンプ力なら必ず飛び上がれるー！」

「ユリーカ全然分らない」

「つまり地形を利用するって事だ」

「??」

「まあ、見てれば分かるよ」

ユリーカに優しく言いながらサトシ達を見守る。そしてケロマツ

とヤヤコマのバトルが始まった。サトシの作戦通りにケロマツは岩場を利用して高くジャンプしてヤヤコマに近づき、『水の波動』やケロムースで攻撃する。しかしヤヤコマは素早い動きで全て避ける。空高く飛んだ後、岩場に潜むケロマツ目掛けて攻撃する。だがそれはケロムースで作った罠で、正面から飛び込んだ事で顔面にケロムースが付いてヤヤコマはバランスを崩してしまう。

「よーし！泡だ!!」

ケロマツが放った『泡』はヤヤコマに命中して、地面に落ちたところをサトシはモンスターボールを投げる。少し揺れたがヤヤコマはボールから出て失敗してしまった。

出て来たヤヤコマは『かまいたち』を放って反撃する。それでもサトシは諦めずにケロマツに上に行くように指示する。

そしてケロマツは再び高く飛び上がって上を取り、『水の波動』を放つ。正面からまともに受けてしまったヤヤコマは力なく落ちていく。

「決めるぞ・・・いけ！モンスターボール!!」

もう一度投げたボールはヤヤコマに当たって数回揺れて音を鳴らしながら止まる。

「やったあ！ヤヤコマ、ゲットだぜ！」

「ピッピカチュー!!」

「ケロオー!!」

ゲットできた事にサトシとピカチュウ、ケロマツは喜ぶがバトルの疲れでケロマツは倒れ込む。

「ケロマツ、大丈夫か？お前のおかげでゲットできたぜ」

「ケロオ・・・」

「ピカピカ！」

「すごかったね、お兄ちゃん！」

「どんだんジャンプ力が上がって驚きました。2人の息がバツチリでしたー！」

「良いコンビプレイだった。お前らはこれから先、いい関係になるぞ」「ガウツ！」

「ああ。俺、ケロマツのいろんな事が分かってきたよ」「ピカチュウ！」

サトシの言葉にピカチュウは「僕もそうだよ」と答える。そしてゲットしたばかりのヤヤコマをボールから出す。

「さあ、ヤヤコマ。今日から皆、仲間だ。仲良くな！」

「今度からお腹が空いたら私に言うのよ？人から取るのは悪い事なんだからね！」

「ヤッコ・・・」

先程の気迫は何処に行ったのかね々々？とても反省しているよこの子。その後シトロンが仲直りの印にポケモン達にオレンの実を渡し、全員が食べ終えた後ハクダンシティに向かって俺達は出発した。

だがこの時、後ろでこっそり付いて来ているポケモンがいる事にまだ気が付いていなかった。

その頃、少し時間を戻してとあるカフェの隅である3人・・・正確には男女2人とポケモンがコソコソと何かをしていた。

「ご報告しますサカキ様。カロス地方に到着しましたニャ」

「これより、強いポケモンや珍しいポケモンのゲットに」

「全力を注いでいきます」

上から順にニャース、コジロウ、ムサシがそう告げる。彼らの正体

はロケット団と言う秘密組織の隊員で、今報告している相手は組織のボス・サカキである。

『うむ。．．．それとお前達に1つ伝えておく事がある』

「何ででしょうか？」

『お前達とは別のチームもカロス地方に潜入している。そいつらと合流して共にロケット団の為に励め。資料は今送る』

サカキの映像が消えて後、2人の男女の映像が映った。

男性は執事に似た感じの肩まである茶色の髪と青い瞳が特徴の者。

女性はどこか軽い雰囲気を感じている感じの短い紫色の髪が特徴の者。

3人は彼を確認した後、食事を済ませて目的を果たすために行動を開始するのであった。そして少しして素敵なポケモンと出会う事を知る。

ピカチュウとデデンネ。電気の絆！

ハクダンシティ目指して4番道路を進んでいた俺達は途中で休憩を取る事にした。水筒の中の水を飲みながら目の前でユリーカが取り出したハンカチでピカチュウの顔を拭いているのを見つめる。

「はい！綺麗になったよピカチュウ」

「ピカア！」

「ありがとうユリーカ」

「お礼なんていらないよ。あたしはポケモンが大好きだからやっているんだもん！」

全く良い子だ、と思っていたら突然ユリーカが俺の方をじーつと見つめてきた。

「どうしたユリーカ？」

「カイトさんはグラエナ以外に何を持っているの？ユリーカ、見てみたいし、お世話もしたい！」

「そう言う事か。ならこいつがいいよ。出てこい、ゾロア」

腰にあるモンスターボールを1つ取ってボールを開ける。すると中からゾロアが出てくる。出てきた途端にゾロアは俺の腹目掛けて飛び込む。

「マー!!」

「おつとと、相変わらず元気がいいなゾロア」

「うん！マー、オイラ一緒に遊びたいゾ」

「悪いな。遊びはまた今度だ」

「えー、オイラ今遊びたいゾ・・・」

「ガウツ！ガウガウ」

「うう・・・ニーがそう言うならオイラ我慢するゾ」

俺とグラエナの言葉に渋々言う事を聞くゾロアをあやす為、頭を撫でていると暫く呆然と見ていた3人が口を揃えて言った。

「ゾロアが喋ったあー！？」

「へへ、凄いだらう。オイラ喋れるんだゾ」

「すごい！あつ、私ユリーカって言うの！ねえねえゾロア、触ってもいい？」

「構わないゾ」

「ほんと!? やったー！！」

嬉しさをたっぷりの満面な笑顔になって、ゾロアを自分の膝の上に置いて優しく撫でる。撫でられて気持ちがいいのか、ゾロアは目を細める。それを見て羨ましく思ったピカチュウがユリーカの傍に近づくともう片方の空いている手で撫でてもらい、偶然尻尾に触れると更に気持ち良さそうな鳴き声を出した。

「チャア~~~~♪」

「ねえ！ピカチュウって尻尾をなでなでされると嬉しいの!？」

「ああ、そうだよ」

「可愛い！もつとなでなでして上げる!!」

「どれどれ、僕も」

「チャア~~~~♪」

2人に尻尾を撫でられてピカチュウは嬉しそうだ。撫で終わったゾロアは俺のところに戻って膝の上で寛いでいる。そしてユリーカはサトシにお願いしてヤヤコマも出してもらい、ハンカチで羽のお手入れをする。沢山のポケモン達のお世話ができてユリーカは始終嬉しそうであった。

お手入れを終えてポケモンフーズを皆に分け与えていると、突然ユリーカの手にあったのを横から誰かに奪い取られてしまった。ポケ

モンフーズを奪った犯人はデデンネで、両手に持って嬉しそうに食べている。

「あれは・・・この前のデデンネ？」

「キープ出来なかつた子？」

「ずっと俺達の後を付いてきたのかな？」

「あの感じじゃ多分そうだろう」

「あつ、お兄ちゃん！キープキープ!!」

「よし・・・!」

ゲットしようとした時、ポケモンフーズを食べ終えたデデンネは「バイバイ」と言いながら森の中に逃げ去ってしまった。サトシはヤコマに追跡させ、俺達は荷物を纏めて急いで追いかけたがあつという間に見失ってしまった。

デデンネの名を呼びながら周りを探すユリーカだが、足元をよく見ているいないせいで地面の窪みに足を引っかけて後ろ向きに転んでしまった。見事なまでの直撃だ。

「あれは痛そうだな」

「ユリーカ!？」

「イタタ・・・あつ!!」

ユリーカが前を見ると目の前にある穴から顔を出しているデデンネを見つけた。

「デネ〜」

「待って!」

捕まえようとするのと穴に潜ってしまい、また別の穴から顔を出す。よく見ると所々にデデンネが掘ったと思う小さな穴があった。

「ホルビー、デデンネを穴から追い出してください！」

「ピカチュウも頼む！」

「グラエナ、ゾロア。お前達も頼んだぞ！」

頼まれた4匹は一斉に穴の中に入る。まあ、グラエナとホルビーは入るのに少し苦労したけどな。

俺達も穴の近くに待機して捕まえようと乗り掛かるが、相手がネズミなだけに素早い動きで中々捕まえられない。

「すばしっこい奴だぜ」

「もおく!!絶対キープしてやる!!」

一度と外に出ていたピカチュウとゾロアは再び穴に入ってデデンネを探しに行った。穴の中に入ったゾロアは通路を走り回ってようやくデデンネを見つけて追い掛ける。

「待てー！ー！」

『やだねくく！』

そう言つて逃げるデデンネの前にピカチュウが立ちはだかつて、逃げ道を塞いだ。

『見つけた！』

『ふくんだ』

捕まえようとピカチュウがデデンネに飛び掛かるが、勢いをつけすぎてゾロアを巻き込みながら穴の中を滑っていく。そのまま転がって崖にある穴から出てどこかの原っぱに落ちてしまった。

『うくくん、ニニはどんん・・・?』

起き上がったピカチュウが見上げた先には先程落ちた穴があった。それを見たゾロアが登ろうとするが、岩が崩れて上まで行けそうになかった。

『どうやって帰る?』

「分からないゾ・・・」

2匹が話し合っているとデデンネがピカチュウに電気を送って走って行ってしまった。

『待ってデデンネ!』

慌ててピカチュウが追い掛けて電気を送るとデデンネが立ち止まって、そのまま電気で会話し出した。何を話しているのか気になりながらもゾロアは静かに見つめていた。

その後話し終わってピカチュウ達は元の場所に戻ろうと一本道を歩き出した。その途中、ぐぐぐくと不思議な音がした。音のした方を見るとそれはゾロアとデデンネのお腹からだった。

『どうしたの?』

『お腹が空いた・・・』

「オイラも・・・」

『何かあるかな・・・? あっ!』

ピカチュウが見つめる先には美味しそうな木の実が沢山なっていた。それを10万ボルトで落として拾うとゾロアとデデンネに差し出した。

『はい。どうぞ』

「ワーイ! ありがとうだゾ」

『あ、ありがとう・・・』

木の実を受け取るとゾロアとデデンネは嬉しそうに食べ始めた。だがその時、突然空からレーザーネットがピカチュウ達目掛けて降ってきた。捕まる寸前に察知したピカチュウとゾロアがデデンネを抱えて素早い動きで避けた。

「危なかったゾ・・・」

『こんな事をするのは！』

3匹が上を見上げればお馴染みのあの3人組が立っていた。

「ピカチュウ！つと聞かれたら！」

「答えて上げるが世の情け！」

「世界の破壊を防ぐため！」

「世界の平和を守るため！」

「アイと真実の悪を貫く！」

「ラブリーチャーミーな敵役！」

「ムサシ！」

「コジロウ！」

「銀河を駆けるロケット団の2人には！」

「ホワイトホール、白い明日が待っているぜ！」

「にやんてニャー！」

「ソオーナンス！」

長い口上を言い終えるとロケット団は3匹の前に立った。

「さあピカチュウ、大人しく我々にゲットされちゃいなさい！」

「おまけにそこにいるデデンネとゾロアもな！」

『2人とも、逃げるよ！』

左右にいる2匹に言つて、3匹はピカチュウを先頭に逃げ出す。だ

がロケット団もレーザーネットを投げながらしつこく追い掛けてくる。途中ピカチュウが『10万ボルト』で攻撃するが、ソーナンスの『ミラーコート』で跳ね返されてしまい、その爆風で吹き飛ばされながらも必死に逃げる。

その時、突然横から大量の糸が迫ってきた。間一髪避けたが、今度は空から1匹の鳥ポケモンが襲い掛かって来た。それは鎧鳥ポケモンのエアームドであった。

『くらえ!!』

「うわーっ!?」

『ゾロア!!』

エアームドの『鋼の翼』を喰らったゾロアはブツ飛ばされて崖にぶつかってしまった。ピカチュウが慌てて近づいた時、崖の上に誰かがいるのに気が付いた。

「そのゾロア・・・間違いなく彼のポケモンですね。我々と一緒に付いて来てもらいますよ!」

「抵抗したら更に痛めつけてやるじゃーん」

そう言うとその者達は崖から飛び降りて華麗に着地した。現れたのは男女2人組で、男性の肩にはエアームド、女性の肩には糸吐きポケモンのイトマルが乗っていた。先程の糸はこいつの仕業だったのだ。さらに2人の服には“R”と言う文字が刻まれていた。それを見たピカチュウは瞬時に2人がロケット団であると察知して警戒する。だがそれよりも早くムサシが少し怒った感じで尋ねた。

「ちよつとーいきなり何なのよあんたら!」

「待ったムサシ。もしかしてお前らがボスの言っていた別のチームか?」

「その通りです。私はロケット団特殊工作員のロバルと申します」

「私も同じ特殊工作員のミズナ。これからは宜しくじゃ〜ん」

そう言つてロバルは礼儀正しくお辞儀をし、ミズナは軽く手を振つて挨拶をする。それにつられてムサシとコジロウも自己紹介をする。

「……つて何呑気に自己紹介しているニャー！ピカチュウ達が逃げたニャ。早く追ひ掛けるニャー！！」

ニャースの声で4人は我に返つて振り向くとピカチュウ達は必死に逃げていた。傷付いたゾロアもなんとか走っていた。それを見てロケット団も慌てて追ひ掛けて行つた。

その頃、穴の側で待機していたカイト達はいつまで経つても姿を現さないピカチュウ達を心配していた。ホルビーに穴の中を潜つて探すよう頼んでから数十分待機しているとホルビーが残念そうに首を振りながら出てきた。もしかすると穴の中で何処かに迷い込んでしまったのか？

「ヤヤコマ、空から探してきてくれ！」

「ヤコー！」

「それならこいつにも協力してもらおう。プテラ、出陣！」

「プラーー！！」

モンスターボールから出て来たのは化石ポケモンのプテラで、翼を強く羽搏かせて突風を起こしながら俺の前に降り立つ。

「プテラ！ゾロア、ピカチュウ、デデンネをヤヤコマと一緒に探してきてくれないか？」

「プラー！」

俺の頼みを聞くとプテラはすぐに頷いて空に飛び、ヤヤコマとは反

対方向に向かって行った。

再び戻って、ピカチュウ達は岩場の方まで逃げてきたが、それでもなおロケット団は追い掛けて来ている。

ムサシがデデンネに向けてレーザーネットを投げるとデデンネは避けた勢いで落ちそうになってしまう。

『うわあああああ』

『デデンネ!』

落ちそうになる寸前にピカチュウが尻尾を銜えて何とか引き上げた。

「2人とも、大丈夫かだゾ!」

『大丈夫!それより早く行こう!』

そう言って走って行くピカチュウをデデンネはキラキラと眼を輝かせて見つめる。

「マズイ。このままじゃ逃げられちゃうわ!」

「ならばもう一度エアームドで足止めを・・・」

「いや!此処は俺に任せてくれ!カモン、マミーカ!!」

コジロウが空高くボールを投げると中から回転ポケモンのマミーカが出てきた。そしてマミーカはデデンネに『体当たり』して崖の近くまでブツ飛ばした。ピカチュウとゾロアがデデンネに近づいた時・・・。

「マミーカ、サイケ光線!」

「マミーカーー!!」

追い打ちをかけるようにマリーカは攻撃した。それを受けてピカチュウ達は川の下流に流されてしまった。強い流れの中を必死に泳いで何とか岸に上がる事ができたが、3匹とも体力の限界だった。一息つきながら全員の安否を確かめようとした時、とうとうデデンネが倒れてしまった。

『デデンネ、大丈夫!?!』

「しっかりするんだゾ！」

必死に体を揺らしたりしてデデンネを起こそうとするが反応がなかった。その時、空からヤヤコマとプテラの声がした。

『ヤヤコマー! サトシ達に知らせてー!』

「プテラもマーとニーを呼んで来てほしいゾ！」

『分かった!』

『すぐに連れて来る!』

2匹が飛び去って暫くするとカイト達が駆け付ける。

「ピカチュウ！」

「ピカピ！」

「心配したんだぞ、ピカチュウ！」

「ピカピカ! ピーカチュウ！」

「マー、デデンネが大変なんだゾ！」

焦った表情でゾロアとピカチュウが指を差した先には倒れているデデンネがいた。かなり衰弱しているようでユリーカの呼び声に応しなかった。

「どうすればいいの・・・? お兄ちゃん！」

「ポケモンセンターは!?!」

「いや、取りあえず応急処置を！電気を足してあげましょう！」
「成程。電気タイプに電気を足すのは最高な治療方法だ」

そしてシトロンは前と同じように自分が開発したマシンを出した。
その名も『電気発生マシン』と言う。

「おお!!」

「名前そのまんまじゃん・・・」

「もつとセンスのある名前を付けろよ・・・」

このマシンは下敷きを擦って静電気を発生する原理を応用して、更に大きな電気エネルギーを生み出す物だと説明する。

デデンネをマシンの下にある球体に寄り掛からせ、起動させるレバーを大きく引いた。すると電球に挟まれた下敷きが高速で左右に運動して電気を作っていく。

充分に電気を蓄えて体力が回復したデデンネの眼がパツチリ開いて元気に鳴いたので俺達は安堵の色を浮かべた。

「なあ、もういいんじゃないか？」

「それじゃ、レバーを元に戻すか・・・ってアレ？」

マシンに近づいて横にあるレバーを引こうとしたが、肝心のレバーがどこにもなかった。するとシトロンが申し訳なさそうに言う。

「・・・それが、ですな」

彼の手に持っていた物は根元から完全に折れていたマシンのレバーだった。嫌な予感を感じて俺達は絶叫しながらマシンを見ると先程よりも激しく揺れ動き始めていた。

「デデンネ、早く離れてえ!!」

「シトロン！マシンを止めるんだ！」
「でもこれはどうやれば・・・？」

そう言い合っている瞬間、爆発が起きた。辺りの鳥ポケモン達が一齐に木から飛び去り、黒い煙を辺り一面に上げて無残な鉄の塊と成り果てた『電気発生マシン』の傍では全員がアフロ状態に変化していた。

「ゴホゴホツ・・・また失敗かよ・・・」

「面目ありません」

「もうお兄ちゃんつたら・・・」

「デネー！デネデネ」

回復したデデンネがシトロンやユリーカの周りを元気に駆け巡る。

「だけど、デデンネは元気になったみたいだな」

「結果良ければ全て良し！」

「良かった、デデンネが元気になって」

「デーネー！デネデネ」

「電気を貰ったお礼を言っているんじゃないか？」

「ああ、その通りだ。『ありがとう』だとき」

「お礼なんていいんですよ」

「・・・あっ！お兄ちゃんお兄ちゃん！キープよキープ！」

「そうでした！当初の目的を忘れるところでした！」

「ちよつと待ちな！」

「何だ!？」

俺達の頭上に大きな影が差し掛かって上を見るとそこにはニャー
ス型の気球があった。

「〃何だ!？」かんだと訊かれたら」

「以下略ニャー！」

「略すのかい!?」

確かにアニメのあの長い口上を聞くのは疲れるけどな、と思いながら突っ込む。気球に乗っているロケット団はいつもの3人組と俺がシンオウ地方で戦った事のある2人組が加わって合計5人だ。彼らは標的のピカチュウ、グラエナ、ゾロアを渡すように言う。

「成程、ゾロア達が衰弱していた原因はアイツらのせいか!」

「なんでポケモンばつかに酷い事をすんのよ!」

「あーそうですか!カモーン!マリーイーカ!!」

「行くじゃん!シシコ!」

「行きなさい!カメテテ!」

「マイツカ!」

「シシー!」

「メ〜テ!」

「お!あのポケモン達は・・・」

コジロウ、ミズナ、ロバルの3人はそれぞれボールを投げてポケモンを出す。俺は出てきたポケモン達を凶鑑で調べる。最初はマリーカで、エスパー・悪タイプ。次はシシコで、炎・ノーマルタイプ。最後はカメテテで、岩・水タイプか。どれも中々いいポケモンだ。特にマリーカはゲットしたいな!そう思っていた時、デデンネが勇ましく前に出た。

「デネネ!」

「デデンネ、任せろと言うのですね!やられっぱなしは悔しいですものね」

「デネ!」

「ならばグラエナ、ゾロア。俺達も行くぞ」

「ガウツ!」

「マー!任せてだゾ!!」

そしてグラエナとゾロアも前に出て攻撃態勢をとる。

「デデンネ！体当たりです！」

「グラエナはカメテテに噛み砕く！ゾロアはシシコに引つ掻く！」

「マリーカ、イカサマだ！」

「カメテテ、シエルブレードです！」

「シシコ、頭突きじゃん！」

マリーカは伸縮自在な白い手で『体当たり』してきたデデンネを絡め取り、その威力を利用して地面に投げ飛ばした。カメテテは左右が同時に爪を水色のブレードにしてグラエナの牙を防ぐ。シシコは真正面からゾロア目掛けて走って行き、『引つ掻く』とぶつかり合う。

「マリーカ、サイケ光線！」

「カメテテ、水鉄砲！」

マリーカは『サイケ光線』でデデンネを追撃し、カメテテもグラエナの攻撃を防いだ後、大きくジャンプして距離を取り、『水鉄砲』を放つ。だが2体とも素早い動きでかわして再び『体当たり』と『噛み砕く』を繰り返して決める。

ゾロアとシシコの方では暫く押し合っていたが、ゾロアがもう片足で『引つ掻く』をして攻撃し、シシコを押し倒した。そして怯んだ隙を狙って『ナイトバースト』を放ってさらにダメージを与えた。

「いいですよ！次はほっぺすりすりです！」

「ネエエ！」

デデンネはほっぺを手で擦って電気を溜め、そのままマリーカにすりすりと擦りつけた。それを見たユリーカははしやぐ。

「なんて可愛い技なの！ますます気に入っちゃった！」

「あの技には相手を痺れさせる追加効果があります！」

「やるなあ！デデンネ！」

「呼び名に反して痛そうな技だ」

「デネデネ！」

「ピーカチュウ！」

デデンネがアンテナの様な髭からピカチュウに電気信号を送る。それを受け取ったピカチュウが「分かった」と返事をした。

「よし！ピカチュウ、10万ボルトだ！」

「デデンネ、電気ショックです！」

「グラエナ、ゾロア！悪の波動！」

3人の息ピッタリの指示に4匹は同時に攻撃を放ち、強力な電撃はマリーカに、2匹の『悪の波動』はカメテテとシシコに直撃する。飛ばされた3匹はロケット団の気球にぶつかって穴を開けて中で爆発を起こす。それによって彼らは遠い空の彼方へ飛んで行った。

ロケット団とのバトルを終えた4匹が戻って来て俺達が褒め称えようとデデンネが嬉しそうに皆の周りを走り回る。そしてピカチュウの前に立って再び電気を送って伝える。

「デネネ！」

「ピカピーカ！」

「ほお、どうやらデデンネは俺達と一緒に行きたいみたいだ」

そう教えてやるとユリーカが大喜びで近寄り、一緒に行くように言う。デデンネの瞳は期待の籠った輝きを放つ。

「お兄ちゃん！」

「うん！行きますよ。モンスターボール！」

シトロロンがデデンネに向けてモンスターボールを投げる。それはデデンネの頭に当たって数回揺れて音を鳴らして止まった。

ゲットできたのを確認した後、デデンネをボールから出してユリーカに渡す。優しく抱えてお世話をした後、ユリーカは途中で眠ってしまったデデンネを自分のポシェットに入れて寝かせる。そして起こさぬように注意しながら俺達はハクダンシティに向けて歩き出そうとしたが……。

「そう言えば前から思っていました……カイトはまるでポケモンの言葉が分かるみたいですね」

「ああ、そうだよ」

「えっ?」

「カイトはポケモンの言葉が分かるんだよ」

「そうなんですか!?!」

シトロロンの質問をサトシが変わりに答える。言葉が分かる事に驚いたシトロロンがさらに俺に尋ねてきた。

「ど、どうしてカイトはポケモンの言葉が分かるのですか!?!」

「ある友人にお願いしたんだ。そしたらポケモンの言葉が分かるようになったんだ」

「ねえねえ、その友人って誰なの!?!」

「それは今言う事は出来ないな。いずれ教えて上げるから、それまで内緒だ」

そうやって俺は走って道を進んだ。その後をサトシ達が慌てて追い掛けて行くのであった。

数時間後、とある山道にて――

「はあ〜最悪。こんな山の奥で日が暮れてきちやうなんて・・・」
「フオツコ」

1人の少女・新人トレーナーのセレナと彼女が抱えている狐ポケモンのフオツコが夕焼けを背に山道を歩いていていた。

どうやら彼女はこの先にあるポケモンセンターを目指しているみたいだが、道に迷ってしまったらしい。もし行けなかったら今夜は野宿になると言う事に彼女は焦る。すると少し離れた木の陰に誰かがいる事に気が付いた。

「すみませーん！この辺にポケモンセンターが何処にあるか知りませんか？」

「ビィイ？」

駆け寄って話しかけてみたらそれは人じゃなくてビークインと言う名のポケモンだった。突然の事にどちらも驚いて、セレナは悲鳴を上げて尻餅をついてしまい、ビークインは混乱して襲い掛かる。だがセレナの腕の中にいたフオツコが『火の粉』で対抗する。火を見てビークインは一瞬怯むが、それでもなお攻撃しようとした時、2人の後ろからさらに強力な『火炎放射』が迫ってきた。これには堪らずにビークインは逃げ出した。

「大丈夫ですか？」

「え、ええ」

ビークインが去った後、後ろからやってきた女性トレーナーとポケモンが駆け寄って怪我がないかと話しかけてきた。

「あの、ありがとうございました」

「いえいえ、礼には及びませんよ。どこか怪我しましたか？」

「だ、大丈夫です！あ、私、セレナと言います」

「私はシノン、こちらが私の最愛のパートナーのキュウコンです」
「コーン！」

それから少しして爆発音に気が付き、近くにいたジョーイさんと助手のプクリンが慌てて走って来た。そしてポケモンセンターの場所を聞いて彼女達はそこに一泊していった。彼女達が目的の人に会えるのはもう少しである。

ハクダンジム戦！VSビビヨン！！

ここはハクダンシティから少し離れた場所にあるポケモンセンター。その一角のテーブルで2人の少女、セレナとシノンがパートナーポケモンと一緒に朝食を食べながら楽しく話し合っていた。

「へえ〜毎日サイホンレースの朝練を！」

「ええ、とてもキツかったの！だからこんな静かな朝は最高にいい気分〜！」

「あらあら♪」

昨日の件もあつてか、お互いに敬語を外すくらいに仲が良くなつていい感じで話し合う。テーブルの下でもフォッコとキュウコンが仲良く食事をしていた。そして全員が食事を終えてジョーイさんにお礼を言ったあとベランダから出る。

「もうすぐハクダンシティ！やつと会えるわ！あの子・・・サトシに！」

「ふふ、セレナはだいぶサトシに夢中ね♪」

「えっ!?い、いや・・・その・・・／／／」

シノンの言葉にセレナは顔を赤くして動揺して、それを見てシノンはくすくすと笑う。

「そ、そう言うシノンだつてお兄さんに対して同じじゃない／／／」

「!!そ、それは／／／う〜」

反撃とばかりに言い返されたセレナの言葉にシノンも同じように顔を赤くする。互いに想いを見抜かれて言われてしまい、暫く睨み合うが途中から笑顔になつて笑い出す。

「ふふふ、それじゃ一緒にお互いの想う人の所に行きましょう！」

「ええ！」

そうやって2人は胸をドキドキしながらハクダンシティを目指して行った。

その頃、カイト達もハクダンシティに到着して、ジムに向かって走り出したサトシを追いかけていた。

「待ってるよハクダンジム！1個目のバッジ必ずゲットだぜ！」

「ピカピーカ！」

「ハア、ハア！ま、待ってくださいーい！」

最後尾を走っていたシトロロンが息も切れ切れに叫んだ後に真正面から豪快に転んでしまった。

「おい、大丈夫かシトロロン？」

「あ、はい。ありがとうございます！」

転んだシトロロンを見て俺は引き返して手を貸してやって立ち上がらせた後、先に進もうとするサトシの後を追うとするがシトロロンがそれを止める。

「サトシ、1つ質問があるんですが、サトシはハクダンジムが何処にあるか知ってるんですか？」

「勿論知らないぜ！」

自信満々の答えを聞いて2人はきよとんとするが、俺とグラエナは予想していたので苦笑する。

「相変わらずだな。シンオウ地方で会った時もそんな感じだったぜ」

「ああ、走れば道は見えてくる！進めば必ず辿り着く！それが俺達だ

!!

「ピーカチュウ」

傍の噴水に足をかけて、ビシッ！と指先まで力を入れて遠くを差すサトシ達の背景でタイミング良く水が美しく噴き上がった。まるで彼らの気合いを表しているみたいだ。そして互いに顔を見合わせて微笑んだ時に不意にシャッターの切る音が聞こえた。

「素敵な写真をありがとう！」

そう言っただけカメラを構えていた女性が綺麗な笑みを浮かべて歩み寄って来る。

「貴方達、中々良いコンビのようね」

「はい！ピーカチュウは俺の相棒です！」

「ピーカチュウ！」

「フフ、そうそう、ハクダンジムならこの先を右に曲がった所よ」

「本当ですか!?ありがとうございます！ほら、道は見えたぜ！行くぞ、ピーカチュウ！」

「ピカッ！」

「サ、サトシ！」

「待ってよー！」

俺達を待たずにサトシ達は再び走り出した。ユリーカは慌てて追い掛けて、シトロンと俺は女性にきちんとお礼を言ってから後を追いかけた。走っている途中で俺は女性の正体にうすうす気が付いた。穏やかで優しい目をしていたが、体中から溢れる闘志を感じた。あの人はジムリーダーだ。

どんなポケモンを使うのか楽しみだな。そう考えている間にハクダンジムの前に到着した。

「とうとう来たぞ！」

「僕の記憶が正しければ、此処のジムリーダーは虫ポケモンの使い手の筈です！」

「虫ポケモンか・・・」

シトロンの情報を聞いて俺は足元にいるグラエナを見つめる。悪タイプに虫タイプは相性最悪だ。対するグラエナも俺をじっと見つめて短く鳴く。

「たとえ苦手なタイプでもお前には関係ないか。何度同じ経験をしてきたし！」

「ガウツ！」

それに虫タイプ対策はきちんと考えてある。そう判断した時、サトシの驚く声が聞こえたので前を向くと何かがサトシに飛び掛かっていた。

「エリリ！」

「エリキテル!？」

「ピーカ!？」

「いらっしやい。サトシ君、元気そうね」

ジムから出てきた人物の元へエリキテルは早足で戻って身軽な動きで肩まで登りつく。

「お久しぶりです！パンジーさんも来てたんですね！」

「ええ！取材も終わったし、サトシ君も来る頃かなって思っで・・・あらか？新しいお友達？」

「はい。シンオウ地方で一緒に旅をした仲間とミアレシティで知り合った仲間です」

「はじめまして！ユリーカです！この子はデデンネ」

「デネデネー！」

「カイトです。サトシと同じようにジム戦に挑戦しにやって来ました。そして相棒のグラエナです」

「ガウガウッ！」

「それからお兄ちゃんの・・・」

「シトロンです！どうぞよろしく！」

全員があいさつし終わった後、シトロンがサトシに訊いた。

「知っていたんですね、ここのジムリーダーを」

「違う違う。パンジーさんはポケモンルポライターなんだよ」

「そう。ここは妹のビオラのジムなの」

「び、おら？」

「私よ！」

突然背後から声を掛けられて振り向くが、逆光ですぐに姿が見えなかった。少しして目が慣れてきて見てみると先程道を教えてくれた女性がいた。やはりこの人がジムリーダーだったか。

「さつきはどうも」

「えっ!? 貴方がパンジーさんの妹?」

「あら、もう妹と会ってたんだけ」

「1枚撮らせてもらったの。姉さんから聞いてるわ。暫く留守にしているごめんなさい」

「いえ、楽しみにしてました！」

そう言うとビオラさんは微笑みながら俺達をジムの中に誘導した。中に入ってみると奥に大きな扉があり、壁一面には沢山の虫ポケモンの写真が展示されていた。

「これは凄い。どの写真もポケモン達の美しさ等が伝わってくる

な・・・」

「これ全部ビオラさんが撮ったんですか？」

「ええ。ここにあるのは作品のほんの一部だけだ」

「妹は優秀な虫ポケモンカメラマンでね。時々私の取材も手伝ってもらっているのよ」

「良い写真ですね！被写体への愛情が溢れていますよ」

「本当！虫ポケモン大好きって感じだね！・・・決めた！ビオラさん、キープ！お願い！お兄ちゃんをシルブプレ！」

「ネネー！」

キラキラと輝かせた大きな眼を灯しながらユリーカがビオラさんの前に片膝をつき、右手を勢いよく目一杯前に出して言った。

「は？」

「シルブ、プレ？」

「んん？」

「シトロンをよろしくって意味か・・・？」

全員が突然の事に困惑していた時にシトロロンが真っ赤な顔でユリーカに注意する。しかしユリーカは悪びれた様子はなく、逆にお嫁さんが必要だと言う。これはまた随分と変わった兄想いの妹だ。だが恥ずかしい思いが最高潮に達したシトロロンがリュックからエイパムの手が付いたアーム『エイパムアーム』を起動させて強制退場させて行く。

「小さな親切大きなお世話だ！」

「ビオラさん！考えておいてねー！」

シトロロンに引き摺られながらも笑顔で念を押し退場していくユリーカ。抜け目がないなど内心そう思った。

「・・・ユニークな妹さんね」

「それじゃサトシ君！始めましょうか！カイト君はその後でいいかしら？」

「はい！」

「ピッカ！」

「ええ、大丈夫ですよ」

「ガウツ！」

そう言った後、奥の扉からバトルフィールドに移動してサトシはフィールドに立ち、俺達は観戦するための外野に移動した。ちなみに並び順だが、左からパンジーさん、シトロロン兄妹、グラエナ、俺である。どんなバトルをするのか楽しみだ！

「これより、チャレンジャー！サトシ対ジムリーダー！ビオラのハクダンジム、ジム戦を始めます！使用ポケモンは2体！どちらかのポケモンが全て戦闘不能となった時点でバトル終了となります！ポケモンの交代はチャレンジャーのみ認められます！」

「シャッターチャンスを狙うように勝利を狙う！行くわよ、アメタマ！」

「アーマー！」

「へえ、アメタマか」

バックからポケモン図鑑を取り出してアメタマに向けて調べる。

『アメタマ。あめんぼポケモン。水面を滑るように歩く。頭の前から甘い匂いを出して獲物を誘う』

虫・水タイプのポケモンにより相性でも有利でもあって、カロス地方最初のジム戦と言う理由からサトシはピカチュウを出した。そして審判の合図と共にバトルが始まった。

最初は両者ともに互角のバトルを繰り広げていたが、途中アメタマ

が放った『冷凍ビーム』でフィールド一面が凍ってしまう。慣れない場所によってピカチュウは動きが鈍くなって本来の力が出せなくなってしまう。逆にアメタマは先程よりも素早い動きで攪乱させて攻撃する。そして技同士のぶつかり合いで起きた爆発でピカチュウは大きく吹き飛ばされて、その隙について放たれた『シグナルビーム』で戦闘不能になってしまった。

「ピカチュウ！大丈夫か!?しっかりしろ！」

「……ピ、ピカピカチュウ……」

「よく頑張ったな」

そう言つてピカチュウを後ろの端に移動させてゆっくり下ろした。

「しっかりは育てられているけど、まだまだ私のアメタマには勝てないわね」

「勝つてみせますよ！こいつで！頼むぞヤヤコマ！」

「ヤッコー！」

次にサトシが出したのはヤヤコマだった。飛行タイプで、空も飛んでいるから氷のフィールドも相性も大丈夫だとシトロシ達は言う。甘いなこいつら。

「……ジム戦は相性が有利なら勝てる訳じゃない。この勝負、サトシには分が悪いな」

そう言った時、突如横から強い衝撃とともに誰かに抱き付かれた。それによって倒れそうになるが慌てて態勢を整えて踏ん張り、抱き付いて来た者を見た。

「お久しぶりです！兄様!!」

「シノン!？」

満面な笑顔とキラキラとした目で俺を見つめながらシノンはまだ抱き付く。それを見て俺は内心焦り出す。だってシノンが来た通路に女の子が1人居て、その子が顔を真っ赤にさせながら見つめているんだもん！グラエナに助けを求めようと見るが、グラエナも同じ感じだった。キュウコンの尻尾に体を巻き付かれて顔をスリスリされていた。お前も大変だな〜！

「お、お前な〜場所を考えろよな（汗）。．．．まあ、俺も会えて嬉しいよ」

「!!兄様〜〜♪」

嬉しさのあまりシノンはさらに力を込めて抱きつこうとするが、突然何かを思い出したようにハッと顔を上げて俺から離れていき、後ろにいた女の子を連れてきた。

「ごめんなさいセレナ、貴方の事を忘れてしまって．．．」

「い、いえ大丈夫よシノン。あ、すみません。ちよつと見学したいんですけど、いいですか?」

「ええ。大歓迎よ!」

「バトル中なので、こちらへ」

「今、良いところなの!!」

「ありがとうございます!」

皆から笑顔で迎えられて少女・セレナはシノンと共に俺の隣に立つのを確認した後、再び目の前のバトルの方へ集中して見る。ヤヤコマは『影分身』と自慢のスピードでアメタマの『冷凍ビーム』と『粘々ネット』をかわして、それにより隙ができたアメタマに止めの『かまいたち』を加えた。これに驚くビオラさんが見た先には戦闘不能になったアメタマが居た。

ヤヤコマの勝利にサトシやシトロン達が喜んで歓喜した。俺も喜

び合うが、内心ではまだサトシの分が悪い事に変わりはないと悟る。そんな中でビオラさんが次に出したポケモンは美しい桃色で模様がある翅を持った初めて見るポケモンだった。

「綺麗なポケモンですね兄様！」

「ああ、あのポケモンは・・・」

『ビビヨン。鱗粉ポケモン。水源を捜し出す能力に優れ、ビビヨンの後を付いて行けば湧水に辿り着けると言われている』

タイプは虫と飛行か。どんな技を使うのかと思いつながらバトルの方に集中した。サトシが先制とばかりにヤヤコマに『つく』を命じるが、ビオラはビビヨンに『サイコキネシス』で動きを止めさせ、氷のフィールドに叩き落とした。落とされながらもヤヤコマはもう一度飛び上がるが、ビビヨンの『風起こし』で天井まで吹き飛ばされてしまい、さらに先程アメタマが放った『粘々ネット』に捕らわれて動きができなくなってしまった。そして動けないヤヤコマに『ソーラービーム』を放って止めをさした。流石だな。これを破るにはどうするか・・・？

「・・・！兄様!!」

「うん？なんだシノン？」

「サトシ君達行っちゃいましたよ」

「なに・・・？」

目の前を見るとフィールドにサトシの姿はなく、出口の方を見ればピカチュウ達を抱えて急いでポケモンセンターに向かって走っていた。見送った後、先程サトシがいた場所の木の後ろにバックがある事に気が付いた。それを見て俺は隣で戸惑っているセレナに声を掛ける。

「セレナ、あそこにあるバックはサトシの物だ」

「え？は、はい・・・」

「届けてあげな」

「えっ?」

「そうよセレナ!届けてあげれば良いきっかけになるよ。ほら!」

置いてあつたバックをシノンが持つて来てセレナに渡した。セレナは「うん」と答えて後を追いつけて出て行った。

「2人は行かなくていいの?」

「俺のポケモンは元気ですから」

「私も同じです」

パンジーさんの質問に答えて、階段を下りて俺はサトシが居た場所に立つ。

「では・・・ビオラさん。少し休んでから俺とジム戦をしてくださいませか?」

「あら、今からじゃなくていいの?」

「ええ、アメタマもビビヨンも連戦ではキツイですし、大変ですから」
「分かったわ。じゃ、こっちにいらっしやい」

そう言われて俺達はビオラさんに案内された部屋のソファアーに座る。その隣にビオラさんが座り、ソファアの腕かけの所にパンジーさんが腰を下ろす。全員が座ったところでビオラは先程撮った写真を見せてくれた。

「良い笑顔ですね。それにサトシ君とピカチュウの絆も強いみたいですし」

「本当ね」

「絆は強いけど、ポケモンバトルはいまひとつだったかな」

おやおや、随分と厳しい評価だ。初めてのジム戦だから仕方がない

と思うのに。隣でシノンも苦笑いしている。

「あら、油断は禁物。次に対戦する時は、貴方もビックリするわよ。そうでしょうカイト君・・・」

「はい。サトシは本当に面白い奴です」

「え？」

俺達の話にビオラさんは不思議そうにしていたが、パンジーさんは立ち上がってそのままどこかに行ってしまった。まあ、予想をつくけどね。サトシの元へ行っただろう。

「それじゃ、もう回復も終わったからさっそくジム戦に挑戦する？」

「はい！よろしくお願いします」

「ガウツ!!」

俺とグラエナは気合いの入った声で返事をする。そして腰についているモンスターボールもカタカタと揺れる。こいつらも早く戦いたいようだ。待っている・・・ちゃんとバトルさせてやるよ！

そして再びバトルフィールドに行くと同様のバトルの跡は何処にもなかった。まさかあの短時間で直したのか!? 凄いなと思いながら審判の説明とシノンの応援を聞いて構える。

「サトシと同じだけど・・・カロス地方最初のジム戦なら、1番手は前だ。グラエナ！」

「グガアアツ!!」

隣で待機していたグラエナは大きく鳴き声を上げながらフィールドに飛び出す。

「あら？相性で不利な悪タイプでいいの？」

「構いません。俺のグラエナにとって相性と言うのはあまり意味ない

し、それに俺達にはとつても高い絆がありますから。その理由を見せ
てあげますよー！」

「兄様！グラエナ！頑張ってください！」

「コーン！コンコーン！」

シノンとキュウコンが祈りながら応援した後、審判の合図でバトル
が始まった。

「まず手始めにこの技からだ。グラエナ！悪の波動！」

「アメタマ！守る！」

グラエナが放った『悪の波動』は『守る』によって防がれた。

「グラエナ！アメタマの足に氷のキバ!!」

「ガウウツ!!」

グラエナはアメタマが『守る』を解く前に背後に回り、そしてかわ
す隙も与えずに『氷のキバ』で噛み付いて足を凍らせながら勢いよく
投げ飛ばした。

「アメタマ!!」

地面に落ちるアメタマだが、水タイプであるから氷タイプの技の威
力はさほど高くなかったので持ちこたえた。流石ジムリーダーのポ
ケモンだ。しかし、追加効果で4足のうち2足が先端から凍ってい
た。

「なるほどね。技の威力だけじゃなく、追加効果も考えている。そし
て2人の強い絆……いいわ、ここからが本番よ！アメタマ！フィー
ルドに冷凍ビーム!!」

先程のようにアメタマはグラエナを狙いながら『冷凍ビーム』を放つ。グラエナは無駄のない動きでよける。するとフィールドはあつという間に氷のスタジオになった。

「足を凍らせたからって油断しない事ね。アメタマそのまま滑るのよ！」

「アーメー！」

足が凍っているのにもかかわらず、アメタマは素早い動きで滑ってグラエナを翻弄しようとする。だが俺はグラエナに爪で体を固定するように指示をして、この状況の対抗策を伝える。

「グラエナ！氷のフィールドに向かって焼き尽くすだ!!」

放たれた強力な火炎によって氷のフィールドは全て消えた。ついでにアメタマに付いた氷も溶けてしまったが、かわりにダメージをくらった。

「頑張つてアメタマ！シグナルビーム!!」

「グラエナ！かわしながらもう一度氷のキバ!!」

アメタマの放った『シグナルビーム』をかわして素早く近づいて、また『氷のキバ』で噛み付いた。今度はすぐに離さず、ずっと噛み付いた事によってアメタマは完全に凍り付いて、グラエナは勢いよく空に向かってアメタマを放り投げた。

「止めだグラエナ！悪の波動!!」

「グウウガアアアッ!!」

氷状態で動けないアメタマはそのまま『悪の波動』をくらって、氷を砕かれながら地面に落ちて動けなくなつた。

「アメタマ戦闘不能、グラエナの勝ち!!」

「流石です兄様!!」

「コッソソ／＼／＼」

アメタマを倒したのを見てシノン嬉しく思いながらカイトを褒め称える。特にキュウコンはグラエナの戦う姿を見て、顔を赤くしてうっとりとした表情であった。

「アメタマ、ご苦労様。ゆっくり休んでね・・・そのグラエナ、かなり強いわね！けどまだ負けないわ。お願い！ビビヨン」

「よくやったなグラエナ、戻って休んでくれ。ビビヨンの相手はお前に頼んだ！第2陣、プテラ!!」

グラエナにお礼を言って俺の隣の位置まで戻し、ビビヨンが出たのを見て腰にあるボールを1つ取って、次に出したポケモンはプテラである。

「あら、グラエナの出番はここまでなの？」

「ええ・・・俺のポケモン達はどの子もバトルが好きなんです。早く交換しろと煩いんですよ」

「プテラ！頑張ってるー！」

「プラーラー！プラプラー!!」

ビオラさんに交代の説明をして、シノンの応援を聞いてプテラは大きく鳴き声を上げる。そして早くバトルさせろと言う・・・まったく、我慢できない奴だ。

「それではいきますよ！プテラ！岩なだれ!!」

「ビビヨン、かわしながら風起こし！」

上空からたくさんの岩が降って来る中をビビオンは素早くかわし、
翅を大きく羽搏かせて強い風を起こす。

「プテラ！風の動きに逆らわずに乗ってバランスをとれ。そしてその
まま翼で撃つだ!!」

「プラー・プラーー!!」

風の動きにうまく乗ってダメージを最小限に受け流し、逆に風を利
用してプテラは素早く動いてビビオンに『翼で撃つ』を命中させた。

「ビビオン！」

「ビ、ビヨーン！」

効果抜群の技をくらって少しフラつき、不安定になりながらもビビ
オンは翅を動かして空を飛び続けた。

「ビビオン！サイコキネシスでプテラをフィールドに叩き落とすのよ
!!」

「ビヨーン！」

ビビオンの眼が青く光るとプテラの動きが封じられる。必死にプ
テラが体を動かそうとすることができず、そのままフィールドに叩き付け
られた。

「プテラ、まだ行けるか？」

「テラ！プテラ!!」

「ふ、そうだったな。お前がこの程度の攻撃で倒される訳ないか！竜
の息吹!!」

落ちたプテラを心配して声を掛けるが、プテラはダメージを受けて
ないと言うかのように翼を大きく広げた。そして再び空高く飛んで

『竜の息吹』をビビヨンに放った。攻撃は命中し、ビビヨンは落下しそうになるが何とか持ちこたえる。

「頑張つてビビヨン、眠り粉！」

「プテラ、翼で風を起こして防げ！そしてもう一度竜の息吹!!」

「ビ、ビヨくく！」

「プラー！テラー!!」

眠り粉を翼で羽ばたかせて起こした突風で吹き飛ばし、また『竜の息吹』を放つて命中させる。するとビビヨンの動きが先程よりも鈍くなった。『竜の息吹』の追加効果で麻痺状態になったのだ。

「止めだプテラ！ギガインパクト!!」

「プラーアアアアアア!!」

最大の力を込めて体当たりをする。爆発とともにビビヨンは大きくブツ飛ばされて壁に激突した。そして少しするとビビヨンは地面に落下して、目を回しながら動かなくなった。

「ビビヨン戦闘不能、プテラの勝ち!!よって勝者、チャレンジジャーカイト!!」

「やった！俺達の勝ちだ!!」

「ガウガウツ！」

「プラーーーー!!」

審判の勝利宣言を聞いて、明るい顔でグラエナと一緒にプテラの元へ駆け寄る。シノンとキュウコンも観客席からやって来る。

「やりましたね！兄様!!」

「コーン!!」

「ああ、応援ありがとうシノン！」

「ガウウツ！」

応援してくれたお礼としてやって来たシノンの頭を優しく撫でる。撫でられたシノンは恥ずかしさで顔を赤くするが、拒もうとはせず嬉しい感じだ。そして皆と一緒にビオラさんの所に向かう。

「見事なバトルだったわカイト君。そして貴方とポケモン達の絆もね。はい、これが勝利者の証、バグバッチよ」

「ありがとうございますー！ビオラさん」

バッジを貰ってケースに入れて、ビオラさんと握手して別れの挨拶を済ませてからハクダンジムを後にした。そしてポケモンセンターに辿り着くと近くのポケモンバトルフィールドで、サトシがパンジーさんを相手に特訓をしていた。見に行こうと思ったが、先にジョーイさんの所に行ってグラエナとモンスターボールに入れたプテラを預けて、それから外に出て向かった。フィールドを見るとピカチュウとヤヤコマが背中に風船を付けて強力な風から必死に耐えていた。アレは風起こし対策だとすぐに分かった。

「調子はどうだサトシ？」

「あつ、カイト!!」

俺とシノンがやって来るのに気が付くとその場にいた全員が驚きながら俺の方を見つめる。

「ねえねえ！カイトさんは今まで何処に行ってたの？」

「うん？ジム戦に挑戦してたんだよ」

「それで結果はどうでしたか!？」

「勿論兄様の勝利でしたよ！」

ジム戦の結果を聞くシトロンにシノンが代わりに答える。そして

シノンが皆に軽く紹介した後、サトシがお願いして来た。

「なあカイト、ちょっと俺の特訓に付き合ってくれないか？」

「構わないよ。だが、やるからには手加減するつもりはないぞ」

「だったら私もお手伝いしますよ。私のポケモンでサイコキネシスを
使える子が居ますから」

そう言ってシノンがモンスターボールを1つ取り出すと中から
サーナイトが出て来た。

「サーナー！」

「これがサーナイトなんだ！綺麗なポケモンね」

セレナがポケモン図鑑で調べながら見つめる。そしてユリーカも
眼を輝かせながら見つめて、触ったりする。サーナイトは嫌がらずに
微笑みながらユリーカの相手をする。

「どうかしら？」

「ありがとう。よし！必ずバッジをゲットするぜ！！」

「ピカ！ピーカチュウ！！」

こうしてメンバー全員で特訓の手伝いをして、サトシ達も気合を込
めながら特訓に精を出した。よって次の日サトシは見事ジム戦に勝
利してバッジを手に入れたのであった。

激走！サイホーンレース！！

最初のジム戦を終え、ビオラとパンジーに見送られてハクダンジムを後にしたカイト達はショウヨウシテイ目指して街道を歩き出した。その街にもジムがあるとパンジーから教えられたからである。

「それで、セレナはこれからどうするんだ？」

「えっ……私？」

歩いていた時に突然のサトシの問いを聞いて俺達は足を止める。その間にもセレナは考え込んでいて、そんなセレナにサトシは言った。

「俺達と一緒に行かないか？」

「ピーカ！」

そう言うとユリーカとシトロンも賛成してセレナを誘う。対してセレナは俺を見つめる。

それに気が付いたシノンが腕に抱きつきながら言う。

「兄様、セレナはとっても頼りになる子なんですよ！ここまでやって来られたのもセレナのおかげなんです」

「そうなのか！まあ、俺はそんな事がなくても反対するつもりはないけどな。一緒に来たいなら来るか？」

それを聞いてセレナは明るい表情になり、皆に言った。

「うん！一緒に行っても良いかな？」

その答えに全員が喜ぶ。そして再びショウヨウシテイに向けて歩き出そうとした時、セレナが話しかける。

「あつ、そうだ！サトシ達はシヨウヨウジムに行くのよね？」

そう言うときセレナは鞆から小型のパソコンのような電子機器を出して、全員にワールドマップを見せる。

「此処が今いるハクダンシティ。そして、ミアレシティを挟んでこっちがシヨウヨウシティよ。だから1回、ミアレシティに戻る必要があるわ」

「そうだったのか」

「丁度良かったわ！ミアレシティに行きたいお店があったの。凄く可愛い服を売っている所とか、美味しいスイーツのお店とか！」

セレナの話聞いてユリーカは目を輝かせる。最初興味がなかったシノンもたくさんの本を売っている店の事を聞くと行く気になった。

「そうと決まれば早速出発よ！」

そう言うとき走り出したセレナの後を俺達も続いて走り、追い掛けた。

ミアレシティに向かって歩いていたら、シトロンがセレナに旅に出た理由を聞いた。するとセレナはポケットからハンカチを取り出した。そしてそれをサトシに渡しながら話し出した。

かつてセレナは幼い時にマサラタウンのポケモンサマーキャンプに参加して、そこで怪我をしていた時にサトシと会って、先程のハンカチで手当をしてもらったとの事だった。始めは忘れていたサトシだったが、話を聞くうちに思い出した。

「あの時の麦わら帽子の女の子がセレナだったのか！わざわざ返しに

来てくれてありがとうな」

「ううん、私も久しぶりにサトシに会えて嬉しいわ。…けどサトシつたら、全然思い出してくれないんだもん！」

「ごめんごめん」

「ピカピカチュウ！」

ピカチュウに呆れられるサトシを見て苦笑した時、突然どこからか地鳴りのような音がした。

「何の音？」

音がする方に振り向くとこちらに向かって何かがやって来る。

それを見て急いで道の端に寄ると沢山のポケモンが走り抜けて行った。

「サイホーンよ！」

「なに？サイホーンだと？」

『サイホーン。とげとげポケモン。何でも体当たりで壊せる。自分の進む方向に何があろうと気にしない』

ポケモン図鑑で調べながら横を走り過ぎて行くサイホーンを眺めていると少しして今度はバイクに乗ったジュンサーさんがやって来た。

「君達、ここで何しているの!?一般人は立ち入り禁止よ。ここはサイホーンレースのコース場なんだから！」

「えっ!?コース！」

どうやらいつの間にかコースの中に迷い込んでしまったらしい。通りで先程のサイホーン達にはゼッケンを付けた人が乗っていて、道に人気を感じないはずだ。

その後、ジュンサーさんの案内でレースのスタート地点であるスミル村に着いた。村には巨大なモニターがあつて、村人達はレースの様子を見て盛り上がっていた。

「へえ、これがサイホーンレースか・・・」

「ガウウツ」

「初めて見たぜ！それに凄く迫力があるな」

「ピーカ！」

「カロス地方だとサイホーンレースはポピュラーですよ」

「サイホーン可愛いー!!」

「もつと大きな街だと専用のコース場があるのよ。此処のコースは簡易コースなのね」

「なるほど・・・セレナ、詳しいね」

「コーン」

シトロンとセレナの解説を聞いたシノンが几帳面にメモを取りながら尋ねる。

「う・・・うん。まあね。サイホーンレースは6体のサイホーンで争うのよ」

「明日は特別に飛び入り参加のレースがあるそうよ。サトシ君達も興味があるなら出てみたらどうかしら?」

「本当ですか!?!俺、出たいです!!」

ジュンサーさんの薦めでレースに出場する事を決意したサトシの為にサイホーンのレンタル&練習場にやって来た。仕事があるジュンサーさんにお礼を言つて別れた後、サトシがどのサイホーンにするか選び悩んで後ろを歩くとセレナが注意した。

「駄目よサトシ!サイホーンは後ろから近付いたら、驚いて突然走り出す事があるの。だから・・・前に回つてゆっくり近付くのよ」

そう言って説明しながらセレナは近くにいたサイホーンの前に
ゆっくり近付く。サイホーンは驚かず、大人しく頭を撫でられる。

「ほらね！この子は大人しくて賢そう。この子が良いんじゃない？」

「そうか・・・じゃあ、君に決めた。宜しくなサイホーン」

「サーイー！」

随分とサイホーンについて詳しい、と俺は内心そう思った。すると
同じ思いだったのか、シトロンがセレナに聞くとお母さんがサイホー
ンレースのレーサーをやっていて、小さい頃からいろいろと教育を受
けていたとの事だ。

「それじゃあ、セレナもサイホーンレーサーを目指しているのか？」

「ううん、サイホーンレースが嫌いな訳じゃないんだけど・・・もっと、
好きな事が見つかるかもしれないから・・・まだ、決めたくないの」

「自分の目標は自分で決めたい！・・・そう言う事だよねセレナ」

「・・・うん！シノンの言う通りよ」

2人は笑顔で見つめながら言う。本当に仲が良いな。その後、サト
シの頼みで経験があるセレナにコーチをお願いして教えてもらおう事
となった。そして2人はレース服に着替えて準備を整えた。

セレナは、髪をポニーテールに纏めてハートのワツペンが目立つピ
ンク色のレース服。

サトシは、シンプルに青いレース服だ。サトシが準備運動して、体
を動かしている間にシノンがゆっくりセレナの側に寄って小声で話
しかける。

「(ほらセレナ！サトシにも貴方の姿をよく見せないと)」

「(う、うん／＼) どうかサトシ？似合っている？」

「うん？・・・ああ！とても似合っているぜー！」

「!!／／／」

動くの止めてじつと見つめてそう言った瞬間、セレナの顔は真っ赤になった。ああ／／／そう言う事か。セレナはサトシの事が好きなのか。先程からのシノンの手助けをする行動を見て俺は納得した。まあ、他にも気づいている奴はいるみたいけどな。

それからサトシはセレナにアドバイスをもらいながら何度も失敗しつつ、一生懸命練習して上手く乗れるようになった。また、しっかりとサイホーンを操れて、飲み場まで辿り着けた。

水を飲み始めたサイホーンの邪魔をしないようにゆっくり降りるサトシに俺は言う。

「これなら明日のレース、何とか行けそうだな」

「ああ！絶対に優勝してみせるぜ。明日のレースも宜しく頼むな」

「サイー！」

水を飲んだサイホーンの元気のいい返事を聞いてつい笑ってしまった。やっぱりこう言う互いに心が通じ合った声が一番好きだ。だけどサトシは僅か半日で心が通じ合った・・・本当に面白い奴だ。それも加えてさらに笑い出した。

また、セレナはサトシの一生懸命な姿を見て今までの事を思い直していた。

「(サトシって、何にでも一生懸命なんだ。ジム戦でもそうだった。私、サイホーンレースを少し勘違いしていたかも・・・)」

サイホーンレースに対するイメージが心の中で変わっていくのを感じていた。

そして次の日、飛び入り参加可能のサイホーンレースが始まろうとしていた。サトシを含めた6体のレーサーがスタート地点についた時、観客席にいるユリーカが大きな声で応援する。

「サトシ絶対優勝だよー!!」

「おう！頑張るぜ」

「ピカピカチュウ！」

ユリーカの応援にサトシと肩に乗っているピカチュウが笑顔で答えた。また、サトシの乗るサイホーンも張り切って鳴き声を出す。

「さあ、今……スタートです！」

アナウンスの声と旗の合図により、サイホーン達は一斉に走り出した。しかし、サトシのサイホーンだけが少し出遅れてしまった。

「もう……何してるの〜」

「大丈夫かな、サトシ……」

「どうでしょう……」

「最初のスタートが肝心ですからね……」

「最初がダメでも途中から巻き返せばいい。サトシは何があっても諦めない奴だからさ」

心配する4人に俺が落ち着くように言う。

そしてスタートしてから巨大モニターで様子を見ていた時、突然4つのモニターが次々と黒く塗り潰された様に見えなくなった。この事に観客達から動揺と混乱の声上がる。

「どうしたの？」

「トラブルでもあったのでしょうか？」

「いや、これは……」

じつくりとモニターを見ていたら最後の方で一瞬ポケモンが映ったのに気が付いた。シンオウ地方にいた頃、シロナ姉さん……略し

てシロ姉の計らいでよく四天王の方に会って、バトル以外にもいろいろと教えられたからすぐに映ったポケモンが何か分かった。

「(今映ったのはマリーイーカだった。もしかしてアイツらか・・・?)」

この先で起こっている事を予想し、今のサトシの手持ちとレベルなども考える。その結果から俺はすぐに席から立ち上がる。

「グラエナ、行くぞ」

「ガウツ！」

「兄様、どうかしたのですか?」

「コンコーン?」

「僕達も行ってみましょう!」

他の人の邪魔にならないようにしながらコース場に向かうカイトの後をシノン達は後を追い掛けた。

一方サトシは、走っても走っても他のレーサーの姿が見えない事に不審に思っていた。自分との距離はそんなに長く離れてはいないはずなのに・・・。同じように感じたピカチュウがサイホーンの鼻先の角に移動して遠くの方を見ようとした時、突然前から飛んできた四角い機械によってサトシは縛られてサイホーンから落ちてしまった。

さらにピカチュウとサイホーンも同じ機械によって檻に閉じ込められてしまった。

「どうなってるんだコレ!?!」

「こういう事じゃーん」

「誰だ!?!」

混乱していたサトシに誰かが答える。声がした方を見ると木の陰からロケット団が姿を現した。

「誰だ！つと聞かれたら！」
「黙っているのが常だけどさ！」
「それでも答えて上げるが世の情け！」
「世界の破壊と混乱を防ぐため！」
「世界の平和と秩序を守るため！」
「愛と真実の悪と！」
「力と純情の悪を貫く！」
「クールでエクセレントであり！」
「ラブリーチャーミーな敵役！」
「ムサシ！」
「コジロウ！」
「ミズナ！」
「ロバル！」
「宇宙と銀河を駆けるロケット団の4人には！」
「ホワイトホールとブラックホール、2つの明日が待っているぜ！」
「にやーんてニヤ！」
「ソォーナンス！」
「イートマ！」
「エアァー！」

いつもよりパワーアップした長い口上を言い終えたロケット団。彼らを見てサトシは怒り、ロープを解こうとするがなかなか外れなかった。

「よーし、そろそろミッションコンプリートだ」
「そうしましょう。．．．ところで、あのセリフは毎回やらないといけないのですか？」

手に持った機械を操作するコジロウにロバルが呆れたように先程の口上の事を言う。それを聞いてムサシが何言っているのかと言う

感じに詰め寄る。

「あれは私達にとって重要なものなのよ。やるのは当たり前じゃない！」

「しかし……(汗)」

「まあまあ、いいじゃないロバル。なかなか面白いし……私は結構気に入っているじゃーん♪」

2人の言葉にロバルは渋い顔になるが、仕方ないと諦めた。その間にピカチュウとサイホーン達が入った檻は少し先にある車に繋がられ、ロケット団が乗ると車は走り出した。

「待てロケット団！ピカチュウ達を返せ!!」

「返す訳ないでしょう？」

「このポケモン達は俺達が有効に使わせてもらうぜ」

「あんたは係りの人が来るまでそこで寝てるがいいじゃーん」

「では失礼致します」

そして逃げようとした時、車が突然穴に落ちて、さらに空から大量の岩が落ちてきて車は動きを止める。その衝撃でロケット団は車から転げ落ちた。

「よくやりましたホルビー！」

「プテラ、ご苦労だった！」

「ホッビ！」

「プラーー！」

「シトロン、カイト！」

森から現れた2人とホルビー、プテラにサトシとロケット団は驚く。

「サトシー！」

「大丈夫ー？」

「何かあったのー!？」

「セレナ、ユリーカ、シノン！皆来てくれたのか？」

セレナとユリーカとシノンも合流して、シノンはキュウコンにサトシを縛るロープを尻尾で体を傷つけないようにしながら噛み付きで解くように指示する。その間、手が空いている者でロケット団と対峙する。彼らは苛立ちながら態勢を立て直そうとする。それを見たフォッコがセレナの足を軽く叩き、自分の意思を伝える。

「フォッコフォッコ」

「え？・・・うん。ピカチュウ達を助けるの、手伝ってくれる？」

「フォッコー！」

「フォッコ、火の粉！」

一歩前に出たフォッコにセレナが指示を出す。フォッコはロケット団に向けて口から火を出す。あまりの熱さにコジロウは手に持っていた機械を落としてしまう。落ちた機械を見てどんなものなのか、瞬時に理解した。

「グラエナ、噛み砕く！」

「ガウウツ！」

ロケット団が拾う前に素早く近づいたグラエナが機械を口に銜えて文字通り噛み砕いた。機械が破壊されるとサイホン達を閉じ込めていた檻が次々と消えていった。外に出たサイホン達は怒りの目でロケット団を睨み付けて崖の端に囲む。囲まれたロケット団は真っ青になり、ロバルがエアームドで空に逃げようとするが人数が多いため逃げられず、そして強烈な『突進』を受けて遠くまで飛ばされたのだった。

「よっしゃー!やったな皆!」

「ピカピ!」

飛び込んで来たピカチュウを抱きかかえながらサトシは喜びの声を上げる。全員が返事をして安心した時、バイクに乗ったジュンサーさんがやって来た。

「皆、大丈夫でしたか!?!」

「ジュンサーさん!」

「はい、皆無事です!」

その後、他のレーサー達も助けてサイホンレースは終わった。そんな中、セレナは抱えたフォッコを穏やかな目で見つめて……。

「(私にも……バトルができるんだ)」

心の中でそう思った。そして彼女の目は自然とサトシの方を見つめていた。

サイホンレースが終わった夕方、スミレ村を出発する前にセレナが母親に連絡したいと言って来たので、自己紹介もするために俺達も一緒に付いて行った。軽く挨拶を済ませて母親のサキさんからセレナを頼むように頼まれた後、親子との話を邪魔しないために先にポケモンセンターから出た。暫くしてセレナが軽い足取りでやって来た。

「お待ちせ!……と言う事で、これからはよろしくね!」

「こちらこそよろしく!」

「ピーカー!」

今日の旅からセレナが加わり、これからもっと賑やかになって楽し

くなると思った。特にシノンは凄く喜んでいた。何故か俺に抱きつきながら（汗）
そしてセレナから貰ったお菓子を食べながら俺達は出発した。

ポケモントリマーとトリミアンの絆！

シヨウヨウシティに行くためにミアレシティへ向かっている途中、カイト達はとある街で多くのオシヤレをして礼儀正しく歩いているポケモンを見つけた。

そのポケモンを連れられた人の中には凄いオシヤレをしていたが・・・
(汗)

「あのポケモンは何だ？」

「アレはトリミアンよ！」

「トリミアン？どれどれ・・・」

『トリミアン。プードルポケモン。大昔のカロス地方では、王様を護衛する役目を与えられていた』

セレナから名前を聞いて図鑑で調べてみる。

ほお、王様を護衛していたのか。道理で礼儀正しい筈だ。だが今まで見たトリミアンの姿は図鑑で表示された姿と違っていた。それについて不思議に思っているとセレナがポケモントリマーにトリミングしてもらったのと電子ノートに写っているお洒落なお店を見せながら教えてくれた。

「ポケモントリマーって何なの？」

初めて聞く単語にシノンが手帳を持ってセレナに尋ねる。

「まあ、ポケモンの美容師さんみたいなものよ。そしてこの人はカリスマトリマーなの！会ってみたいなく〜」

「フムフム、ポケモンの美容師さん・・・つとね」

セレナの説明とガイドブックに載っている写真の人を見ながらシノンは素早くメモを取る。

少し離れた所で話を聞いていたユリーカも会ってみたいと言いい、俺達の元に走り出した時、近くの茂みから1体のトリミアンが飛び出てきた。

「ユリーカ、危ない。伏せろ！」

ぶつかると寸前に気配に気が付いた俺は走ってユリーカを庇う。背中にトリミアンの後ろ脚が当たるが、それほど衝撃と痛みがなかった。膝をついただけで倒れずに済んだ。

「カイトさん大丈夫!？」

「うん?これくらい平気だよ」

そう言っ立ち上がるとすぐにシノン達が駆け寄ってくる。大丈夫?と尋ねられると安心させるように笑顔で答える。だがシノンはまだ心配していて、ぶつかったところを優しく擦る。グラエナは足元に寄り添って心配そうに見つめる。するとそこへ慌てて走り寄る足音と女性の声があった。

「すみません!その子は私のトリミアンなんです!」

女性は背中を擦ってもらっている俺を見て状況を理解したのか、深く頭を下げる。

「ごめんなさい!あなたに怪我をさせてしまって・・・!」

「ああ、大丈夫ですよ!こんなのギガイアスやボスゴドラに踏み付けられたり、頭突きをされたり、抱き締められた時のに比べれば軽いものです」

「「「「えっ!?!」」」」

さらっととんでもない事を言う俺に女性だけでなく、サトシ達も驚

きの顔をする。シノンだけは知っていたので苦笑していた。どちら
も岩と鋼タイプでとても重いポケモンだ。いかに愛情表現だからと
いって頭突きや踏み付けられて平気とは・・・サトシ並みのスーパ
ーマンだ。

その後、近くのベンチに移動して休憩して、それぞれ自己紹介する。
サトシはジェシカと名乗った彼女の隣にいるトリミアンの姿を見て、
図鑑に載っていた本来の姿とトリミングの事について納得する。そ
んな中でユリーカはジェシカをじっくり見つめた後、ハッと何か思い
ついたように明るいう表情になってあのセリフを言い出す。

「ジェシカさん、キープ！お願い、お兄ちゃんをシルブプレ！」

突然のキープに全員が沈黙する中、シトロンは無言でいつものよう
にエイパムアームを起動して引っ張って行った。戸惑うジェシカと
初めての事に驚くセレナとシノンが俺達に尋ねる。

「どういう意味なの？」

「ユリーカがシトロンの為にしっかりした女性を探して、お嫁さんにな
ってくる人を捜しているのさ」

「おお、お嫁さん!!／／／」

説明すると2人は同時に顔を赤くする。お嫁さんと言う言葉がだ
いぶ効いたみたいだ。そして彼女達は気付かれないようにそれぞれ
恋している異性を見つめたのだった。

その後、それぞれが落ち着いて俺達はトリミアンの散歩途中であつ
たジェシカに付き添い、話をしていく内に彼女が見習いのポケモント
リマーだと分かった。元々ポケモントリマーに興味を持っていたセ
レナがトリミアンを見て質問する。

「この子には何もしないんですね」

「実はこの子・・・カットやブローしたいのにやらせてくれないの。」

さつきもクシを入れようとしたんだけど、すぐに逃げ出して・・・」

なるほど・・・茂みから飛び出してきた理由はそれか。凶鑑によればトリミアンは知能が高く、トレーナーの人間性を見抜く観察眼を持っていて。よって認められなければ決して言う事を聞かないポケモンなのだ。王様の護衛する役目を与えられた理由も納得する。

「じゃあ、ジェシカさんはまだこの子に認められていないってこと？」

「こら、ユリーカ！」

「ごめんなさい・・・」

何気なく言った言葉にシトロロンが慌てて怒りながら注意して、理由に気が付いたユリーカはジェシカに頭を下げて謝る。

「いいのよユリーカちゃん。だって、その通りなんだもん」

笑顔で言うが、やっぱり悲しい事だと見ていてはつきり分かる。重くなった空気を変えさせようとシノンが別の話をジェシカに言う。

「あの、私トリミアンにトリミングするところを見てみたいのですが・・・いいでしょうか？」

「私も見たいです！前から興味があったの！」

「あたしもあたしもー！」

セレナとユリーカもお願いしてきて、ジェシカは小さく笑んで自分の働いているお店に招いてくれた。辿り着くとそこは先程セレナが見せてくれたガイドブックに載っていたお店だった。中に入るとちょうどカリスマトリマーで、ジェシカの師匠であるバリーさんがトリミアンのブローをしていた。会ってみたかった人物に会えてサトシ達のテンションは上がる。その後バリーさんが俺達に気が付いて奥の部屋から出てきて、ジェシカが俺達の事を紹介する。そしてポケ

モントリマーに興味があると話すとすぐに見学させてくれた。

「それじゃあジェシカ、どんな仕事なのか貴方が教えてあげて」

「はいー」

仕事場に入るとそこには木の実やシャンプー、ハサミなどがたくさん置いてあった。

その種類の多さに驚く中で、ジェシカは分かりやすく丁寧に説明してくれた。話を聞く内に彼女の知識力は高く、もう見習いではなくてプロと同じかと思った。その後バリーさんがトリミングを終えたトリミアン達を見せて上げると言い、ジェシカに連れて来るように言う。その時に説明を素早く手帳にまとめていたシノンが隣にやって来てこっそり話しかける。

「兄様、ジェシカさんがこんなにもすごいのにトリミアンに認められないと言う事は……まだ何か彼女に足りないものでもあるのでしょうか？」

「……おそらく彼女の経験か自信だろうな。まあ、これはあくまで俺の推測さ」

2人で話しているとドアが開いて中から2体のトリミアンが出てきた。その姿はまるで別の種類のポケモンだと全員が思った。カットした名前も違って青色の方がクイーンカット、オレンジ色の方がカブキカットと言うらしい。

「いつかうちの子も、こんなふうに素敵なトリミングしてみたいの」「ジェシカさんなら絶対に出来るわよ！とても素敵だなく」

セレナの力強い声援を聞いてもジェシカは隣にいるトリミアンを元気のない表情で見る。そしてバリーさんがこっそりと教えてくれた事で彼女が自分の腕に自信が持てないのが理由だと分かった。そ

の後バリーさんがジェシカの為にも思つて俺達に街案内をしたらどうかと提案した。

それを引き受けてくれたジェシカと共に俺達も街の中を歩き出した。トリミアンも後ろから付いて来たのを見て、信頼がない訳ではない。あとはジェシカ次第だと感じた。いろんなお店を見せてもらつてしばらく歩いていた時、突然ゾロアがボールから出てきた。

「どうしたゾロア？」

「マー！アイスだゾ！オイラ、アイスが食べたゾ!!」

「ガウツ!?ガウウウウ!!」

そう言つてゾロアは小さな男の子の姿に化けて、遠く離れた場所にあるアイス屋に走り出してしまった。それを見たグラエナが慌てて追い掛ける。

「待てお前達!・・・仕方ない。サトシ、悪いが先に行つてくれ。俺はゾロアとグラエナを見つけたらすぐに戻る!」

「ああ、分かった。気を付けろよ」

「兄様、私も行きます!」

「コーン!」

シノンとキュウコンと一緒にグラエナ達の後を追い掛ける。暫く走つた後ようやく追いつき、グラエナがお店の前で子供に化けたゾロアの尻尾を軽く噛んで元の姿に戻して、親猫が子猫を持ち上げるように首元を銜えて待つていた。

「グラエナ、ご苦労だった」

「グルル・・・」

「駄目でしょうゾロア!勝手にいなくなると皆が心配するでしょう」

「コンコン!」

「はーい、ごめんなさいゾ・・・」

シノン達の説教を聞いてゾロアはしよぼんとする。だがすぐに優しい表情になったシノンとキュウコンが頭を撫でつつ、もう勝手にいなくならないように言う。

それが終わった後グラエナに下ろすように言つて、ゾロアを抱える。

「分かればいいさ。それじゃあゾロア、アイスを食べようぜ」

「ワイー！マーありがとぅ!!」

アイスが食べられると分かる先程とは打って変わって幸せな表情になる。まったくシロ姉さんじゃあるまいし。そう内心苦笑しながら自分達の分のアイスも買ってみんなで一緒に食べながらサトシ達の元に歩き出そうとした時、突然グラエナとキュウコンが何かに気が付いて周りをキョロキョロし始めた。

「どうしたグラエナ？」

「キュウコン何か感じたの？」

「ガルル・・・」

「コーン・・・コーン！」

2体が言うにセレナのフォッコの臭いがするとの事だ。こんな所にフォッコがいるはずはないと思つた時、近くの広場から声が聞こえてきた。

「やったのニャー！フォッコをゲットしたのニャー！」

「結構ポケモンも集まつたじゃーん」

声を聞いた瞬間、アイスを素早く食べ終えて姿勢を低くして近くの木の陰にシノンと共に隠れる。そつと顔を出して見てみると派手な格好をした5人組と大きな白い袋があつた。

「ガウガウツ」

「コーン」

「そうか。あの中にフォッコがいるのか」

「兄様、あの人達ですが・・・絶対にロケット団ですよね」

「ああ、あいつらの声と特徴を合わせると間違いない。奴らの隙を見てフォッコを助け出すぞ!」

そう言つて喜んでいるロケット団の隙を伺つて一気に茂みから出ようとした時、ニヤースの後ろからトリミアンが走つてやって来た。さらに後ろからサトシ達とジェシカ、ジュンサーさんも走つて来た。それを見て俺達も合流する。

「あつ、カイト! シノン! 此処にいたのか!」

「ゾロアを追っていたらフォッコの臭いがするとグラエナ達が言つてな。そして近くで不審な連中を見つけたのさ」

理由を説明したあと、隣に立ったサトシが5人組にフォッコを返すように言う。奴らの正体はやっぱりロケット団で、いつものセリフを名乗つて正体を明かした。

ポケモン達を取り戻そうとジュンサーさんは相棒のライボルトを繰り出す。それに対してロケット団側もコジロウとミズナがマリーカとシシコを出してバトルする。

「10万ボルト!」

「かわして体当たり!」

「こちらは頭突きじゃーん!」

鬘に溜めて放ったライボルトの『10万ボルト』の電撃をマリーカとシシコはかわしてお互いに技を当てた。特にシシコの『頭突き』でライボルトはひるんで隙ができてしまう。そこを狙ってマリー

カが放った『サイケ光線』が直撃し、ライボルトは自分の周りに電撃を放つ。混乱の追加効果を受けてしまったようだ。

「ジュンサーさん、追加効果で混乱しています！」

「戻ってライボルト！」

ジュンサーさんは苦い顔でライボルトをボールに戻す。すると代わるようにサトシが前に出る。

「ここは任せてください！ピカチュウ、行くぞ！マリーカに電光石火！」

「ピツカ！」

ピカチュウは猛スピードで2体に向かってまずはマリーカに攻撃を仕掛けた。だが空中に浮かんでいるマリーカはふわりとかわしてピカチュウの顔目掛けてスミを吐いて視界を封じた。

それによりピカチュウは目が開けられなくなってしまった。姿が見えないとバトルは不利だ。

「ピカピカ〜」

「今ですエアームド！鋼の翼！」

「エアア！」

顔に付いたスミを取ろうと動きを止めたピカチュウにチャンスと思つたロバルがエアームドに命じて攻撃する。しかし当たる寸前、横からグラエナが間に入ってエアームドの首に噛み付いて動きを止めた。

「グルル！ガウウツ！」

「よくやったグラエナ。そのまま地面に叩きつけろ」

グラエナは必死に逃れようと暴れるエアームドを地面に叩きつけた。砂煙が晴れるとエアームドは頭から首元まで地面に埋まっていた。その光景を見てロケット団は全員驚く。ロバルが早く脱出するようにエアームドに言うが、なかなか抜けられない。暫くあの状態が続くだろうと思い、その隙に俺とシノンは前に出てサトシの隣に並ぶ。

「サンキューカイト！助かったぜ」

「気にするな。それよりサトシ、久しぶりに一緒にバトルするか！」

「私も協力するわ」

「分かった。行けるな？ピカチュウ！」

「ピカ！」

グラエナとキュウコンは目が見えないピカチュウを守るように隣にやって来てロケット団を睨み付ける。それを見てロケット団達もソーナンスとカメテテを援護に送り出す。

互いに対峙しつつ、加勢しようとしたシトロンを止めた後、トリプルバトルが始まった。

サトシがピカチュウの目となって息ピッタリに的確に指示を出し、カイトの高い戦術でグラエナは上手にピカチュウを守りながら相手の技も利用して攻め、シノンもキュウコンと上手くサポートして強力な技を繰り出す。

3人の信頼と絆の高いバトルを見てシトロン達はただ驚くばかりだ。

「凄い……！サトシ君がピカチュウの目となって、バトルを続けて……カイト君もシノンちゃんもなんてあんな凄いバトルをするなんて」

「僕も最初は本当にビックリしました。でも、彼らだからこそできるんです」

「とても信じ合っているのよ」

「信じる……」

ユリーカの言葉を聞いて、目の前のバトルを見つめながらジエシカは考え込む。その隙を狙ってロケット団がこっそり動く。

「そういうしている内に、他のポケモンゲット！」

いつの間にか木陰まで隠れながらやって来たムサシが小さな箱の機械をジエシカの隣にいるトリミアンに向けて投げる。それに気が付いたトリミアンがジエシカを突き飛ばした瞬間、機械が空中で電気状の檻となつてトリミアンを捕らえた。

「トリミアン!!」

「アンアン！」

檻の電撃が放たれてトリミアンの動きを完全に押さええて脱出できないようにした。ジエシカに向かって逃げろとトリミアンは鳴き続ける。その場で震えながら見ていたジエシカだったが、決心したように手を握り、目に浮かべていた涙を振り払って走り出した。

「私の・・・トリミアンを返して！」

ジエシカはトリミアンを助けようと檻を掴むが、電撃によって弾かれて地面に倒れてしまう。それを見てセレナは叫び、シトロンはホルビーを出して『マッドショット』で檻を壊そうとするが、ムサシがソーナンスに指示して『ミラーコート』で反射させて立ち塞がる。

さらに加勢しにやって来たミズナがもう1体の手持ちであるイトマルを出して、シシコと一緒に攻撃する。

「シシコは火炎放射！イトマルは毒針じゃーん！」

「シーシー！」

「トマー！」

「させません！出てきてサーナイト。サイコキネシス！」

「サーナー！」

毒針がセレナ達に迫った時、シノンが素早くサーナイトを出して『サイコキネシス』で動きを止める。そしてそのまま『火炎放射』と『毒針』を跳ね返す。攻撃が跳ね返ってきてムサシ達は慌ててかわす。その隙にサーナイトはホルビーの隣に移動した。

「シトロン、サーナイトが奴らの注意を引くからその隙に攻撃して！」「分かりました！」

シトロンにそう伝えた後、シノンはサーナイトに『凍える風』で攻撃する。それを見てミズナがシシコの『火炎放射』で技を相殺させる。だが相殺した時の爆発と砂煙で視界が悪くなり、それを利用してホルビーが『穴を掘る』で3体を攻撃した。その間にジェシカは足元にあった木の棒を拾って機械の箱の部分を破壊し、檻を消してトリミアンを救出する。

また、カイト達の方もマリーイーカ達に攻撃して怯ませ、その隙にユリーカがピカチュウの顔のスミを拭き取ってもらった。完全にこちらが有利になり、ロケット団を追い詰める。

その時トリミアンが勇ましく前に出る。

「トリミアン、バトルするの？」

「アン！」

「分かったわ。チャージビーム！」

トリミアンはジェシカの指示を聞いて、『チャージビーム』でロケット団をブツ飛ばした。奴らが飛んで行った後、持っていた袋の中から捕まっていたフォッコが出てきた。

「フ〜ン。フォッコフォッコ！」

「良かった！フォッコ、貴方が無事で・・・！」

セレナの元に一目散に向かったフォッコを優しく抱き締める。互いに怖かった思いを消すように笑顔になる。盗まれたモンスターボールはジュンサーさんが袋ごと拾ってトレーナー達の元に返すと告げて、俺達にお礼を言う。するとユリーカが言い出す。

「ねえねえ！トリミアンはジェシカさんの言う事を聞いたよね？」

「確かに！」

「ああ、見事なチャージビームだったし、良い声で返事していたよ」

「トリミアンがジェシカさんを自分のトレーナーとして認めたのでは？」

「きつとそうよ！」

「おめでとうございます！ジェシカさん」

皆の言葉を聞いてジェシカは嬉しく思いながらトリミアンの前に屈んで尋ねる。

「・・・トリミアン、私にトリミングさせてくれる？」

「ワン！」

「トリミアン・・・！」

すぐに首を縦に振ってくれたトリミアンにジェシカは抱き締めて喜んだ。

それから俺達はジェシカと共にお店に戻って、トリミアンのトリミングを見守った。真剣な表情で落ち着いた感じで作業をして、暫くして彼女達は部屋から出てきた。

「どう、かしら？」

出てきたトリミアンは、桃色のハート模様に可愛くカットされていた。

それを見てセレナとユリーカは目をキラキラと輝かせる。

「すごいー！」

「お洒落ー！」

「うん、完璧だ」

「ありがとうございます！皆、ありがとう！これも全て皆のお陰よ」

「ううん、ジェシカさんの気持ちが通じたからよ」

バリーに褒められて喜んだ後、カイト達にお礼を言う。今回の件で絆が深まり、不安が消えて自信が付いたようだ。

「私も・・・これからもつとつとこの子を信じて、いっぱいいっぱい経験を積んで、いつかカリスマトリマーになるわ！」

「その時は私のフォッコもお願いね！」

「勿論！」

「なら私もキュウコンをお願いするわ。この子は綺麗好きだから大変だと思うけどね」

「コーンコン！」

「ええ！任せて下さいね」

約束をした後、バリーとジェシカに別れを告げて見送られながら再び旅を再開した。

歩いている途中でセレナは小さく呟く。

「何かに夢中になれるものがある人って、素敵だな・・・」

「セレナ、何か言ったか？」

「ううん、何でもないよ。次はいよいよ、ミアレシテイね！」

隣で歩いていたサトシが尋ねるがセレナは何でもないと答え、もうすぐミアレシテイに着ける事に嬉しそうに言う。だがその後ろでシトロンとユリーカが何かに焦っている事に気付く者はまだいなかった

た。

ミアレジム！シトロンの秘密

旅を続けるカイト達は、再びミアレシティに訪れた。

大都会と言う事もあつて様々な店がたくさん並んでおり、今はプリズムタワーから少し離れた街道を歩いていた。前回来た時にはじっくり見ていなかったセレナは、シノンと一緒にショーケースに飾つてある沢山のスイーツやお菓子や洋服などを楽しそうに見ていた。

「この服どうかなシノン？」

「そうね・・・色もセレナに合っているし、良いと思うよ」

「ありがとう！・・・あつ、この服はシノンにピッタリだと思うよ！」
「本当？でもちよつと派手過ぎる様な・・・」

2人は楽しく互いに良いと思った服の事を見ながら会話する。そしてセレナは少し離れた所に見えるプリズムタワーを眺めて素敵と言う。タワーを見上げたサトシがセレナに言う。

「あのプリズムタワーには、ミアレジムがあるんだぜ」

「なに？ならサトシ、もうバッジをゲットしたのか？」

「いや・・・バッジはゲットしていないんだ。実は・・・」

前にジムにチャレンジしようと思ったが、ジムバッジが4個無いと挑戦できない条件だったために電撃を浴びせられて追い出されたとの事だった。

「バッジが4つ無いとチャレンジできないジムもあるんだ」

「そうか・・・チャレンジしようと思っていたんだがな」

「ガウ・・・」

これまでいろんなジムや施設に行つて挑戦してきたが、このような条件があるジムは初めてだなと内思いながら少し残念な気持ちに

なる。そんな俺を見てシノンが仕方ないと笑顔で慰める。

「そんな訳で、とりあえずこの街は素通りしませんか？」

「そうそう！」

「えっ!? 私、じっくり見てみたいんだけど・・・」

「私もまだ本を選んでいないし・・・」

「そんなに焦らなくてもいいじゃないか？」

「ピーカチュ」

「コンコーン」

セレナとシノンがまだいたいと言うがシトロンはセレナとシノンの背中を押して、ユリーカは俺とサトシの手を掴んで引つ張り進もうとする。これは確実に早くミアレステイから立ち去りたいと言っているような行動だ。それに気が付いて尋ねてみる。

「シトロン、ユリーカ。お前達はこの街に居たくない理由でもあるのか？」

「(ギクツ!!) そ、そう言う訳では・・・(汗)」

俺の言葉を聞いてシトロンとユリーカは肩をビクツと震わせて一瞬固まるが、すぐに笑って誤魔化そうとした時、後ろから誰かに呼び掛けられた。

「シトロンとユリーカじゃねえか！」

「!!?」

声が出た方を見るとそこにはバイクに乗った男性とポケモンが居る。その男性を見てシトロンとユリーカは驚きの声を上げる。

「パパ！」

「デンリュウ！」

「えっ！パパ？」

どうやらバイクに乗っていた男性はシトロンとユリーカの父親らしい。その人はデンリュウと一緒にバイクから降りてこっちにやって来た。

「えっと・・・紹介しますね」

「あたし達のパパで・・・」

「リモーネだ。俺はこの街でデンリュウと一緒に電気屋を営んでいるんだ」

「リュウ！」

「ピカピカ！」

「ガウガウツ！」

「コンコン！」

デンリュウの挨拶にピカチュウ、グラエナ、キュウコンも挨拶する。このデンリュウは穏やかな性格だったので友好的な感じである。そしてユリーカが俺達を紹介すると突然リモーネが泣き出す。どうやら自分の子に友達ができた事が余程嬉しかったらしい。

少し驚いたが、すぐに我に戻ってサトシから自己紹介を始める。

「俺はサトシと言います。で、こっちは相棒のピカチュウ」

「ピカチュウ！」

「俺はカイトです。そして相棒のグラエナです」

「グガウツ！」

「おお、ピカチュウか！良い電気袋だ！そのグラエナも良く育てられているな」

電気屋を営んでいるためか元から電気タイプが好きなのか、リモーネはピカチュウを優しく撫でながら褒める。そして俺達の隣にいるセレナとシノンに目を向ける。

「こちらのお嬢さん達は？」

「セレナです！」

「シノンと申します。こっちはパートナーのキュウコンです」

「コーン！」

「ほほお、こんな別嬪さん達がシトロンの友達とはな！隅に置けないな、このこのー！」

「そんなんじゃないよ・・・」

にやけた表情でシトロンの肘を突つつくりモーネを見て、セレナとシノンは苦笑いする。

「こっちはデデンネ、あたしのキープポケモン！可愛いでしょ！」

「デネデネー！」

「おう！お前も電気タイプだな。・・・ああ、そうだシトロン。偶には家にも顔出せよ」

「えっ？いや・・・その・・・」

リモーネの言葉を聞いてシトロンは黙り込んでしまう。それを見てユリーカが焦りながらリモーネに用事があると言ってシトロンの手を引っ張って歩き出そうとした時、リモーネが真剣な表情でシトロンにある事を言う。

「何度も言うようだが・・・チャレンジャーに厳しくするのはいいが、厳しいだけでは良いトレーナーは育たない。頼むぞ、街が誇るミアレジムのジムリーダー！」

今なんて言った・・・ジムリーダーだど!?その言葉を聞いて俺はシトロンを見つめる。サトシ達も驚いて見つめ合う。

「じゃあ、サトシ君、カイト君、セレナちゃん、シノンちゃん。その2

人を宜しくな。後で家の店にも寄ってくれ！」

そう言ったりリモーネとデンリユウはバイクに乗って自分の店に戻って行った。2人の背が遠くなった頃、シトロンとユリーカが恐る恐る俺達の方へ振り向くと……。

「シトロン！」

「どういう事だよ!？」

「説明をお願いしてもいいですか？」

「やはり理由があったか。相談に乗ってやるから話してみろ」

4人から説明するように問い詰められると2人は観念して、場所を変えて全てを話すと言って広場の噴水の所まで移動して座ると話し出した。

「正直に言いますね。実は僕、ミアレジムのジムリーダーなんです」

「何で黙ってたんだよ……」

「黙っているつもりはなかったんです!ごめんなさい……」

「まあ待てサトシ。シトロン、お前がジムリーダーと言う事は……ジムで何かが起こったんだな?」

「はい……実は色々あって……ジムリーダーって忙しくて、大好きな発明の時間とかが殆ど作れないんです。そこで僕と一緒にジム戦のお手伝いをしてくれる優秀なジムリーダーロボットを作ろうと考えました」

理由を聞いていくうちにその作ったロボット・シトロイドに組み込んだプログラムの設定が手違いな方向に行ってしまった、思い通りに動かないと言う異変が起きてしまったのだ。プログラムを直そうと『ご主人様認識バトルモード』を起動させようと音声コードを入力したが、自分の設定したコードでは認証できず、どうすることもできなくなって追い出されてしまったらしい。

「そして今ではシトロイドがミアレジムを支配している・・・と言う訳か」
「はい。何度かトライしてみたのですが、シトロイドはバトルフィールドに引つ込んだまま、行けるのはジムのエントランスまでなんです・・・」

シトロンの様子から見てとても深刻な事であると分かる。

「なあ、取り合えずジムの様子を見に行ってみないか？」

「そうね、行ってみましょうよ！」

「状況を確認しておくのは大切な事だからな。早いうちに行こうぜ」

「私達も一緒に行きますから！」

「・・・はい」

俺達の提案を受けてシトロンは頷いてジムまで案内する。そしてプリズムタワーまでやって来ると3人のトレーナーが居て文句を言っていた。それを見たシトロンが急いでトレーナー達の元に向かって問い掛ける。

「あ、あの・・・何か？」

「このジム、超乱暴だよ！」

「もしかして、バッジ4個持つてなくて・・・」

「いや、バッジ4個持つていたからジム戦はできたんだけど、変なロボットが相手でめっちゃめっちゃ強くてよ。おまけに負けたらいきなり電撃されて、床がバーンって抜けて放り出されたんだ！」

「ええっ!？」

トレーナーの説明を聞いてシトロンの表情は青くなって、トレーナー達は悪態を吐いて怒りながら立ち去って行った。シトロンとユリーカは先程リモーネが言った言葉の意味を知ってその場に立ち尽

くす。そしてセレナがこれからどうするかの問題に困っていると隣でサトシが容易に答えた。

「決まってるだろう！その変なロボットを止めようぜ！」

まったくサトシの言う通りだ。早く止めないとますます大変な事になってしまう。

俺だけでなくシノンもサトシの言葉に同意して頷く。しかしシトロンは、『音声コードが分からない事』と『ご主人様認識バトルモードに勝てる自信がない事』の2つの事を心配して賛成しない。

「そんなのやってみなきゃ分からないだろう！」

「いいえ、シトロイドが使っているのは僕のパートナーポケモンです。

まだ未熟なホルビーだけでは勝てないのは明白……！」

「勝てなくても思いつきりに相手にぶつかってみようぜ！」

その言葉を聞いてハツとしたようにシトロンは何か気に気が付いて黙り込む。さらにシトロンがジムリーダーになった話などが続いている中で俺は静かにその光景を見続ける。こういう時のサトシは本当に良い影響を及ぼすんだよな。そしてミアレジムがシトロン自信を成長する為の大切な場所だと分かった。それならやる事はただ一つ！

「じゃあ、その大切なジムを取り返さなきゃ！」

「そうさ！シトロンの成長させてくれる大切なジムを取り戻すんだ！」

「決まった以上早く行こうぜ！これ以上仲間の困っているところを見たくないしな」

「どんな時でも諦めなければ道が見えて来ますから心配ありませんよ。私達も一緒に行きますから！」

全員が協力してくれると言うとシトロンも元気が出て、迷いを消してジムに行く決意をした。

そして先にミアレジムの中に入ったカイト達の後に続こうとした時にユリーカがこっそり小声で言う。

「お兄ちゃん・・・サトシとセレナ、カイトさんとシノンが居て良かったね」

「ああ・・・！」

皆が居てくれたおかげで勇気を出せた。シトロンは心の中で4人に深い感謝を込めながらジムに入って行った。

シトロイドの居るバトルフィールドまで行けばチャレンジャーとして認識してもらえると言う事で、シトロンの案内で近道となる狭い通気口から向かう事になった。シトロンを先頭にサトシ、ピカチュウ、グラエナと順に入って次に俺が行くのだが、此処を抜けるのはとても苦労した。

見た時から狭いと思っていたが、予想よりも狭い通気口で慎重に行かないと体中をぶつけてしまう。前を先に行くグラエナの尻尾を掴み、後ろからシノンに押されながら暫く経ってようやく通り抜けられて、薄暗い廊下に辿り着いた。

「ふう〜。シトロン、今度通気口を作る時はもう少し広くしてくれないか？」

「アツハハ・・・わ、分かりました・・・」

もう通気口に入る事はないと思うシトロンはカイトの頼みに苦笑しつつ承諾する。その後、あとからやって来たシノン、セレナ、ユリーカも次々と通り抜けられて、バトルフィールドに行こうとした時に廊下の奥から磁石ポケモンのコイルがやって来た。

「アイツは僕のポケモンです！コイル、僕です！」

「ピリリッ！ピュリリリ〜!!」

自分のトレーナーだと分かったコイルだが、一瞬動きを止めて次の瞬間には電撃を放って来た。

これを見て俺達は急いで逃げ出す。

「コイル！止めて下さい！」

「何で攻撃してくるんだ!?!」

「あのコイル・・・侵入者は排除する、と言っているぞ！」

「そうか！今はシトロイドが此処の主だから侵入者を排除するように言われているんだと思います！」

「そんなあ！」

「シトローン！反撃していいか!?!」

「止むを得ません！」

このまま全員やられる訳にはいかないため、サトシだけ立ち止まってモンスターボールを投げてケロマツを出す。

「ケロマツ！ケロムースでアイツを動けなくさせるんだ！」

「ケツロ！」

コイルが電撃を放つ前にケロマツはケロムースを投げ飛ばす。それに当たったコイルは落下して床に張り付いて目を回して気絶する。少し離れた所で見えていた時に別のポケモンがやって来た。

コイルの進化形ポケモンのレアコイルだった。

そしてレアコイルも同じことを言って『嫌な音』を出して攻撃してきた。耳を塞ぎながらセレナはボールを投げてフォッコを出す。

「フォッコお願い！火の粉！」

「フォーク！」

炎タイプの技である『火の粉』をくれば効果は抜群だが、レアコイルは空中で3方向に分裂してかわす。そしてセレナに『10万ボルト』を放って攻撃するが、当たる直前にキュウコンが『火炎放射』を放って相殺した。

「グラエナ、床に氷のキバ！レアコイルの動きを封じろ」

「グガアアア！」

直接噛みに行かないで追加効果だけを狙って床に牙を突き刺してそこからできる氷でレアコイルを凍らせて動けなくした。今回はただ凍らせただけでダメージはないが、分厚い氷の為にレアコイルは動けなくなった。

「これでよし！」

「怪我はないセレナ？」

「うん！ありがとうカイト、シノン、グラエナ、キュウコン！」

「ガウガウツ」

「コンコン」

お礼を言うセレナの足元でフォッコもグラエナとキュウコンにお礼を言っていた。特に同じ狐ポケモンであるキュウコンには尊敬の眼差しで見つめていた。

それから廊下を歩き続けて、ようやく目的地のバトルフィールドに辿り着いた。そしてフィールドに足をついた瞬間、中央にスポットライトが当てられ、そこに1体のロボットが立っていた。

「ヨウコソ、ミアレジムへ」

「シトロイド・・・！」

どうやらアレが問題のロボットであった。なるほど・・・姿はあまりカッコイイとは言えないが、あのように高精密な2足歩行ロボット

は初めて見た。俺も転生前はロボットが好きだったから興奮している。勿論状況があれなので顔には出さない。

「シトロイドー!」主人様認識バトルモード起動!

「起動二ハ音声コードが必要デス」

シトロイドの前に立ったシトロロンがそう言うときシトロイドは音声コードを求めてくる。シトロロンは必死に自分を落ち着かせて冷静に思い出そうとするが、思い出せずに焦り出す。その様子を後ろで見ていたユリーカやセレナは心配する。

「シトロロン!分からない時はよく相手や周りの状況を観察する事が大切だ。そうすれば答えが分かってくる。ここでは相手の“頭”をよく観ろ」

「頭・・・?」

俺の言葉を聞いてシトロロンはシトロイドの頭を観察する。そして頭にあるヘッコンでいる部分を見て音声コードが変わってしまった原因とその時言った言葉を思い出す。

「今日からよろしくお願いします!僕はジムリーダー・シトロロンです!」

「コードOK。ゴ主人様認識バトルモード起動シマス」

音声コードを認識したシトロイドは目を大きく開けてバトルモードを起動する。起動できたことに皆が喜ぶ。

「カイト、ありがとうございます!」

「どういたしまして。では次に一緒に戦うパートナーをしっかりと信じてバトルに勝つんだ!いいな?」

「はい!」

シトロンは自信の籠った声で答えてバトルフィールドに立ち、俺達はフィールドの横の観客席に移動した。

「行け！ホルビー！」

「ホッビー！」

「私ハ、コノポケモンデ行キマス」

「レザー！」

シトロンが出したポケモンは唯一手持ちにいるホルビーで、対してシトロイドは繰り出したのは大きなエリマキが特徴で体が黄色い蜥蜴のポケモンだった。そのポケモンもシトロンのパートナーでエレザードと言う。エレザードは久しぶりにシトロンに会えた事に喜びの声を上げていた。

「余程懐かれているようだな」

「エレザードか・・・」

『エレザード。発電ポケモン。エリキテルの進化形。エリマキを広げて充電し発電する。その発電力は高速ビルの必要な電気を作れるほど』

タイプは電気とノーマルか。ホルビーも同じノーマルだが、効果抜群である地面タイプの『マッドショット』や『穴を掘る』を覚えている。それに相手のエレザードの技をシトロンは知っている。普通に考えればホルビーが有利だから大丈夫だと思うが、シトロイドは見た感じに人工知能を備えたロボットだから学習しているはずだ。簡単にはいかなないこのバトル。だが俺はそこで考えるのを止めた。これ以上考えると左右にいるサトシ達を不安にさせてしまう。

シトロンの勝利を信じようと思った時にバトルは始まった。

「行キマスヨ！10万ボルト！」

「レッザー！」

まずはシトロイド側からの先制で、エレザードは『10万ボルト』を放つ。しかしそれはシトロロンがプログラミングした挨拶代わりの手順で、予想していたシトロロンは冷静にホルビーに指示を与える。

「ホルビー！耳を使って防御です！」

「ホッバイ！」

ホルビーは長い耳を地面に突き刺すと砂が巻き上がって電撃を完璧に防いだ。それを見てサトシが以前バトルした時に見せた防御技だと言う。まだ未熟と言う割にはしっかりと対策しているな。

「往復ビンタ！」

「ドラゴンテール！」

互いに接近技を出して攻撃する。エレザードはジャンプして上空から『ドラゴンテール』で攻撃してくるが、ホルビーは上手く片耳で防いだ後素早く背後に回って『往復ビンタ』を決めた。そして一気に勝負を決めようとホルビーが『穴を掘る』で地中に潜ってエレザードに迫る。

「地ならし！」

「えっ・・・!?!」

エレザードの右脚が地面に叩き付けられると地中に大きな振動が起こり揺れて、ホルビーは穴から陸上に放り出されてしまった。

「あんな技、僕は覚えさせていないのに！」

予想していなかった技にシトロロンは混乱して隙ができてしまう。

その隙をつかれてエレザードの『ドラゴンテール』を受けてしまう。しかしホルビーはダメージを受けながら態勢を立て直した。

「兄様、さっきの技・・・此処に挑戦しにやって来たチャレンジャーのポケモン達の技を見てシトロイドが覚えさせたのでしようか？」

「そうとしか考えられないな。まったく・・・シトロロンが作った物の中で最高傑作のロボットだな」

あんなロボット・・・俺も作つてみたいなとつい考えてしまう。今度シトロロンに教えてもらうかなと思っている間にもバトルは続き、シトロロンはホルビーに『影分身』を指示する。高くジャンプしたホルビーが空中でたくさん分身を作る。その光景を見てエレザードは動きを止める。

「マッドショット！」

「パラボラチャージ！」

エレザードの動きが止まった隙をついて放とうとしたホルビーの『マッドショット』よりも早くエレザードはエリマキを大きく広げて全身から電撃を分身全てに放つ、そして分身の中に紛れていた本体も攻撃を受けて地面に落ちる。さらに攻撃した後のエレザードが体力を回復していた。

「何なのあの技!?!」

「シノン、分かるか?」

「はい。あの技は『パラボラチャージ』と言って、周りにいる全ての相手に攻撃すると同時に自分の体力も回復させる事ができる技です！」

なるほど・・・厄介だが良い技だな。そう思いながらバトルの状況をよく見る。先程攻撃を受けて倒れたホルビーだが、またすぐに起き上がる。シトロロンもまだ闘志が尽きていないから反撃のチャンスは

ある。

「10万ボルト！」

「レザア！」

シトロイドの指示を聞いてエレザードは容赦なく攻撃をする。それを見てサトシ達は焦り、ユリーカとデデンネは泣き言を言うがシノンがユリーカの肩に手を置いて落ち着くように優しく言う。

そしてシトロンは何か思いついた表情でホルビーに『穴を掘る』を指示する。再び穴を掘って地面に潜ったホルビーを見てシトロイドは再びエレザードに『地ならし』を指示する。

それを聞いてユリーカとセレナは驚きの声を上げる。

「ええっ!？」

「これじゃ、また同じだわ！」

「もうお終いだよおー！」

「大丈夫だよユリーカちゃん！シトロンを信じなさい！」

「2度も同じ手にやられるシトロンではないさ」

「その通りだ！シトロン！最後まで諦めるな！」

「はい！僕がサトシとカイトから学んだことの1つ、自由な発想と隙がなく先を読んだ高い戦術！ホルビー、地面の中で影分身です！」

地ならしで地面が揺れて当たる前に穴から分身したホルビーがたくさん飛び出してきたこれを見てシトロイドとエレザードは驚く。だがすぐ本体を見つけ出そうと指示して『パラボラチャージ』で攻撃する。そして空中に居たホルビーは全て消えてしまった。

「消えちゃった・・・」

「消えたと言う事は、あれは全て分身で本物は居なかったと言う事だよ」

不安の声で言うセレナに俺は本物は無事だと教える。そしてサトシの肩に乗るピカチュウと俺の隣で見ていたグラエナがいち早く気が付いた。

「なかなか面白い戦術だ・・・サトシ、地面を見てみる」

「えっ・・・そうか!」

サトシも地面を見てすぐに気が付く。するとエレザードの足元からホルビーが飛び出してエレザードを攻撃した。最初からホルビーは地中に隠れていて、相手が空中にいる分身を見ている隙に接近して攻撃したのだ。このトリッキーな戦術と行動にシトロイドは「理解不能」と言っつてハテナを浮かべて首元から煙を出す。

「決めますよ!ホルビー、マッドショット!」

「ホルウツビイイ!」

ホルビーは無防備状態のエレザードに止めの『マッドショット』を放ち当てた。電気タイプのエレザードには効果抜群で、地面に落ちて戦闘不能になった。

「エレザード、戦闘不能だ!」

「ピーカ!」

「やったわ!」

「お兄ちゃんの勝ちよ!良かったね!」

「ネネネ!」

サトシ達3人はシトロンの勝利に喜びの声を上げ、シノン俺に抱きついて笑顔になって喜ぶ。

俺も何も言わずシトロンの見て頷く。そしてシトロンは倒れたエレザードの元へ駆け寄る。

「エレザード。大丈夫ですか!?!」

「エレザア……」

「そうか……でもごめんね。エレザード」

大丈夫だと弱々しくも笑って答えるエレザードにシトロンは安心してつつも謝る。そこへシトロイドもやって来る。

「ゴ主人様ト認識シマシタ。シトロン、オ帰りナサイ」

「ただいま、シトロイド。僕がプログラミングを間違えたせいで君にも迷惑をかけてしまいました。全て僕の責任です……ごめんなさい」

最初会った時とは違って丁寧に挨拶したシトロイドにシトロンは深くお辞儀をして謝る。だがシトロイドはシトロンの言葉の意味が分からないのかハテナを浮かべてカクンと音を鳴らして首を曲げた。そしてシトロンは笑顔で再プログラムに取り組むのであった。

謙虚な姿勢、厳しさの中に優しさ、思いやりの3つの大切な事を新たにプログラミングする。そのやり方を一部始終見てシノンにお願いしてメモを取らせる。

そして新たにプログラミングされ直されたシトロイドとその前に立つシトロンを俺達はコイル達も含めて見つめる。

「僕も皆に教わってばかりです。共に成長していきましょう、シトロイドー！」

「了解シマシタ」

言い終わると照れてしまい、シトロンは手を頭において顔を赤くする。

「何だか照れ臭いですね。すみません……(汗)」

「別に良いじゃんか！俺も一緒に成長するからよー！」

「ええ！」

「あたしもー！」

「俺も同じさー!」

「皆で一緒に成長しましょうね!」

サトシがシトロンの肩を豪快に組んだのを機に全員が周りに集まって、シトロイドに挨拶等をして楽しく言い合った。

それから夕方、俺達はシトロイドを連れてシترون兄妹の家であるリモーネの店に行って今回の事とこれからの事を話しに行った。

ジムを乗っ取られた事を聞いたリモーネは驚き、険しい表情になってさらにシترون達が旅を出たいと言う事も聞いて腕を組んで顔を下に向ける。怒っていると思つて全員で説得しようとしたが余計な事だった。リモーネは感動の涙を流しながら旅を許してくれた。それからシترون達の旅立ちを祝うパーティーをして楽しく食事を済ませて、寝る時間になると男子と女子に別れてそれぞれの部屋で寝る事になった。

女子の部屋では、ユリーカはガチゴラスと言うポケモンのパジャマに着替えて、セレナとシノンもパジャマに着替えてユリーカを真ん中に左右にシノンとセレナが寝るようになった。

「えへへ、こうして皆と寝られるのもいいね〜」

「うん。そうだね」

「私も〜こうして誰かと一緒に寝るのは兄様以外に初めてなの」

「えっ!?!」

突然のシノンの言葉にセレナは強く反応する。ユリーカはすでに寝ていたので起きているのは2人だけである。起こさないように小声で話し合う。

「シ、シ・・・シノン。本当なの／＼」

「ええ、本当よ。あの時は兄様に抱きついてその温もりはとっても温かくて安心できたわ。セレナもいずれサトシと2人きりで寝たら分かるわよ♪」

「!!／／／」

サトシと2人きりと言う言葉を聞いてセレナは顔を真っ赤にして、妄想が大きくなって遂に気絶してしまった。

「あらあら。しっかりと掛け布団を掛けないと風邪ひいちゃうよ」

その様子を面白く見て薄く笑っていて優しく掛け布団を掛けた後、シノンもゆつくり目を閉じて眠りについた。

そして男子の部屋ではサトシはソファアーの上で掛け布団掛けて寝ていて、シトロンは下で布団を敷いて寝ていて、俺は机の上に毛布を掛けて下を柔らかくして寝ている。そんな時にシトロンが訊ねた。

「サトシとカイトはミアレジムに挑戦しなくてよかったですか？」

「あんな感動的などころで挑戦するわけないだろう」

「そうだよ。それにシトロンはチャレンジャーにバッジ4個を持つくらしいの實力が欲しい奴と勝負したかったんだろう?」

「えっ? まあ・・・」

「だったら俺も、その實力をつけてからチャレンジするよ」

「俺も同じだ・・・ところでシトロン、何故あの時俺から先を読んだ高い戦術を学んだと言ったんだ?」

シトロイドとのバトルの時に言った言葉を思い出して訊ねると、どうやらいつの間にかビオラさんから聞いていたらしい。意外と抜け目のない奴だ。

「だからこそ僕ももつと實力を付けて、2人とバトルをしたいんですよ!」

「そうか、なら俺の相手はシトロイドではなくシトロン、お前だ!面白いバトルを期待しているよ」

「俺も！約束だぜシトロン！」

「はい！約束です！」

いずれ遠くない未来でバッジを賭けて正々堂々とバトルをする事を俺達は誓い合って、同時に笑い合った明日に備えて眠りについた。

メガメガニヤース登場！

ミアレジムの一件を解決した翌日、カイト達はシヨウヨウシティに行く為ミアレシティの出入り口に向かって歩いていった。そしてこのままミアレシティを立ち去ろうとした時に突然シノンとセレナが手を上げて言う。

「ちよつとプラターヌ博士に会いに行ってもいいでしょうか？私聞きたいことがあるので・・・」

「そうよ。せっかくミアレシティに戻ってきたんだし、博士に挨拶しに行こうよ」

「それは良いですね！」

「うん！そうしようぜ」

「ああー！」

2人の提案に誰も反対する者はいなく、予定を変更してプラターヌ博士の研究所に向かうことになった。さらに2人は鞆から小さなバスケットを出して中身を見せる。セレナの方は中にピンクや緑、黄色などのカラフルなマカロンが入っていて、シノンの方は中に様々なポケモンの形をしたクッキーが入っていた。

「ジャジャーン！タベマカロン焼いたんだ！どれも自信作なの」

「私もセレナと一緒に作ったの。皆で食べましょう」

たくさんあるお菓子を見てユリーカは目をキラキラさせる。シノンの作る料理はどれも美味しい物ばかりだからグラエナとキュウコン、そして匂い釣られてボールから出てきたゾロアも嬉しそうにしていた。

その頃、とある森の奥にある廃棄された倉庫の中でロケット団の5人・・・正確には4人とポケモン4匹がパソコンである映像を見てい

た。

「これが？」

「そう！俺が独自に調べ上げた結果、これがバシャーモのメガシンカした姿だ」

「なかなか勇ましい姿ですね」

「しかも炎タイプだから最高じゃーん。私ゲットしたい！」

彼らはメガシンカしたバシャーモの姿を見て、メガシンカに対して強い興味を持った。

特に炎タイプが好きで手持ちにしているミズナはバシャーモを手に入れたと言う。

「まあまあ、今回のミッションが完了したらこいつを見つけてやるよ」

「今回のミッション・・・ニヤースをメガシンカさせる事でしたね」

「ニヤースを？そんな事できるのニヤ〜？」

「ソソ、ソー？」

「エエーア？」

「トマトーマ？」

メガシンカできる方法についてまだ分からない4匹は首を傾けてどうやってするかを尋ねる。

コジロウはプラターヌ博士からメガシンカのデータを盗んで新たに作ったメカに組み込ませると説明する。それを聞いて全員が納得し、薄く笑い出す。

「メガシンカより凄くて強い『メガメガシンカ』に・・・『メガメガメガメカ』にニヤースが乗り込んでピカチュウ達をゲットするのだ！」

「えっ？何・・・メ、メガメガ・・・？」

「舌を噛んでしまいそうな名前ですね（汗）」

「ハア・・・名前はとにかくさっそくプラターヌ博士の所に行く

じやーん」

若干名前に対して呆れつつもロケット団は外に用意してあったトラックに乗って作戦を開始するのであった。

一方プラターヌ博士の元に向かったカイト達は暫くすると研究所に辿り着いて、中に入って博士に挨拶をして6人で旅をする事になったと伝える。

「皆一緒に旅する事になったんだね。素敵なアイデアだよ」

「はいー」

「博士、皆さんに食べてもらおうとマカロンを作ってきたんです！」

「こちらはクッキーです。どうぞ召し上がってください！」

そう言ってセレナとシノンはそれぞれバスケットに入ったお菓子を見せる。それを見て博士と助手のソフィーは美味しそうと言い、ソフィーはお茶の準備をしようとキッチンに向かう。それを見て博士は先に用事を済ませようと後から頂くと伝えた。

「博士、仕事終わった後お話をさせてもらえませんか？私、ポケモン考古学者を目指していて、いろんな事を聞きたいのです！」

「私も後で見学させてもらってもいいですか!？」

「勿論だよ2人とも。ではゆっくりしていきなれ」

2人のお願いに博士はすぐに許しを出して温室へと向かった。許可をもらえた2人は互いに手を取り合って喜び合った。

それから少し経つとキッチンから紅茶の甘い香りが漂ってきて、ソフィーが人数分のティーカップをテーブルに並べて準備ができたお知らせしてくれた。そして全員がソファアに座ってマカロンとクッキーを食べようとしたが……。

「・・・って、どこにあるんだ？」

「あれ!？」

「さっきまで確かにテーブルの上に置いてあった筈ですが・・・？」

不思議そうに首を捻るサトシの言葉通りに先程まであったはずのマカロンとクッキーが消えていたのだ。全員が辺りを見渡して探していた時、グラエナとキュウコンが鼻をクンクンと動かす。

お菓子の匂いを嗅ぎ付けたみたいだ。ピカチュウとゾロアも連れて匂いに誘われるまま部屋の隅にある立派な植木を植えてあるプラントアの所に向かう。その裏で何かがコソコソと動いていて、それを見て犯人が分かったソファアが静かに近づいた。

「やっぱり貴方だったのね、ハリマロン。また勝手に抜け出して」

「リマ〜・・・」

突然話しかけられたハリマロンは驚きのあまりお菓子を喉に詰まらせ、胸を叩きながら飲み込んだ後に苦笑いしながら振り返った。ハリマロンの両手にはマカロンとクッキーがあり、足元にはセレナとシノンのバスケットが置いてあった。

「へえ、ハリマロンか」

『ハリマロン。毬栗ポケモン。普段柔らかい頭の棘は、力を込めると鋭く尖って岩でも貫く事ができる』

図鑑で調べている時にハリマロンは皆の視線を感じて説明通りに頭の棘に力を込めて固くする。

またケロマツやフォッコと同じカロス地方の初心者トレーナーに渡される最初の3匹である事も知った。意外と可愛いと思った事は余談だ。

「ピカピカチュウ」

「リ、リマー！」

ピカチュウが困った表情でお菓子を返してと言うが、ハリマロンは首を横に振って後ろに下がる。さらに2つのバスケットからお菓子を両手一杯に持ってギュツと抱きしめる。余程の食いしん坊だな。だがユリーカにはその行動が可愛く思い頬を緩ませながら横からの覗き、反対側でシトロンが四つん這い姿勢で近づいて手を差し出そうとした。その瞬間、どこからかグググ、とお腹の鳴る音がした。全員が音のした方に振り向くと元気の無い表情で口から涎が垂れ掛けているゾロアがいた。ゾロアは自分の隣にいるグラエナとキュウコンに甘えるように自身の体を擦り合わせながら言う。

「ニー、ネー。オイラお腹が空いたゾ」

「ガウウ。ガウガウツ！」

「コン。キュウコン！」

「リ、リマー!?!」

ゾロアの言葉を聞いてグラエナは前足でゾロアの頭を優しく撫でて、キュウコンを見つめて頷きながら指示を出した。するとキュウコンは9つの尾のうち7つの尾を動かしてハリマロンの体に巻き付けた。無論ハリマロンは抵抗するが数に押されて持ち上げられてしまう。

そしてキュウコンは残り2つの尾でバスケットを掴んでセレナとシノンの元に渡した。

「ありがとうキュウコン！」

「いい子ねキュウコン。よしよし。それじゃ、そろそろハリマロンを降ろしてあげてね」

「コーン」

2人からお礼を言われて嬉しい表情のままキュウコンはハリマロ

ンをゆつくり降ろす。

その途端ハリマロンは両手にお菓子を抱えたまま一目散に走り去って行った。

「御免なさいね。あの子、悪戯好きなのよ」

「いえいえ、無事戻ってきたんですから。はい、ゾロア。美味しいクツキーだよ」

「私のマカロンも！味には自信があるから」

「ワーイ！ありがとうだゾー！」

お菓子を受け取って幸せそうに食べるゾロアによりその場の雰囲気は和んだ。可愛い正義だとはよく言ったものだ。その後俺達もお菓子を貰い、お茶を飲みながら食べ始める。けどシノンはバスケットと鞆を持ってセレナとユリーカと一緒に温室にいる博士の元に向かった。

話を聞くのが待ちきれないだろうなと内心そう思いながらお菓子を食べ続けた。

ガシヤアアアアアアアアン!!!

その時、突然何かがぶつかり破壊される大きな音が響いた。

その音はプラターヌ博士がいる温室からで、突如大型トラックが突っ込んできたのだ。

そしてトラックからムサシ、ニヤース、ミズナ、イトマルが出てきた。

「久しぶりね、プラターヌ博士」

「君達は・・・」

「我らロケット団の為にちよつと付き合ってもらおうニヤ」

「あの時の喋るニヤース！」

「ふふ、喰らえじゃーん！」

驚くプラターヌ博士にミズナが手に持っていた小型メカを投げる。それは電子ロープになって博士の体に縛りついて動きを封じた。さらにイトマルが近くにいたポケモン達を口から吐いた糸でグルグル巻きにした。

「何をする!?!ポケモン達に手荒な真似はするな!」

温室にいるポケモン達を捕まえる目的かと思つてそう言ったが、ロケット団はポケモン達じゃなくプラターヌ博士に近づいて抱え上げる。

「安心するじゃーん」

「今回は博士をゲットするのが目的よ」

そう言つて博士を荷台に積み込み引き上げの準備をする。それを幸か不幸か偶然やつて来たシノン達が見ていた。

「アイツら・・・!」

「ロケット団! 追い掛けなきゃ!」

「えっ!?! ちよ、ちよつと・・・セレナ! ユリーカ! 待って!」

トラックが発券する前に博士を助けようと走り出したセレナとユリーカを見てシノンは慌てる。

その場に少し戸惑った末にカイトを呼んでくるようにキュウコンをお願いして、自身も助けに向かった。荷台の鍵を開けて中に入り博士のロープを解こうと近づいた時、トラックが動いた振動で荷台の扉が閉まって鍵が再びかかってしまった。急いで開けようとするがトラックは4人を乗せたまま走り出してしまった。

ピンチになって焦り出すセレナとユリーカをシノンは落ち着かせ、キュウコンが必ずカイト達を連れて助けに来てくれると信じながら

持っていたお菓子を見つめ、1つのモンスターボールを取り出した。

ところ変わって研究所の方では、キュウコンから事情を聞いたカイト達が出していたポケモン達を戻して急いで温室にやって来た。だが中には誰もいなく、次に外に出て行くと慌てているハリマロンを見つけた。

「リーマー！リーマー！」

「そうか、分かったハリマロン。サトシ、シトロン！博士やシノン達はあのトラックに連れ去られた！」

「何だって!?!」

ハリマロンの言葉を聞いて俺はすぐに2人に説明し、モンスターボールからプテラを出す。それに続いてサトシもヤヤコマを出す。2体に前方のトラックを追い掛けるように指示を出す。

ソフィーはジュンサーに連絡しに行くと言って研究所に戻った。

「コーン・・・」

「ガウツ！ガウガウ」

シノンの事を心配して不安な鳴き声を出すキュウコンをグラエナは優しく頬擦りして大丈夫だと安心させて、自分も後を追うために道路に鼻を近づけて臭いを嗅ぎ出す。

するとすぐに何かに気が付いて歩き出した。

「どうした、グラエナ？」

「何か見つけたのか？」

「ガウガウツ！」

前足で指差す所にいち早く気が付いたのはハリマロンで、すぐにそこに向かって何かを拾って見せてくれた。

「これは・・・マカロンとクッキーの欠片？」

「何で2つのお菓子が・・・」

「おそらくセレナとシノンが目印に撒いたんだろう。サーナイトの 에스パー能力を使えば簡単だ。これを辿って行けば連れて行かれた場所が分かり、シノン達を助けに行ける！」

そう分かった瞬間俺達はすぐにマカロンとクッキーの欠片を探し始めた。これにもつとも適していたのはハリマロンで、おいしいん坊の力を發揮して次々と欠片を食べながら見つける。その後が続いて俺達も走って追跡した。

欠片の後を追って続く道は街から離れて森の中へと変わり、段々人気の少ない道の方に出た。途中スクーターに乗ったりリモーネとデンリュウに擦れ違ったが挨拶や説明する時間もなく、シトロンが走りながら大事件だと叫んだ。それを聞いてリモーネはスクーターのスピードを上げて走り出し、街の方に急いで行った。

そうして追跡を開始してから少し時間が経ち、欠片を嗅覚で探しながら拾い食っていたハリマロンの足が止まった。それと同時にプテラとヤヤコマが空の上でずっと同じ所で旋回していた。

その下には例のトラックが廃棄された倉庫の近くで止まっていた。

「ヤーコヤコー！」

「プラー！プラー！」

「あの中に皆と犯人がいるようだ。慎重に近づいて中の様子を探るぞ」

「ああー！」

俺達は音を立てず、慎重に歩いて倉庫に近づいた。そして穴が開いている外壁から中の様子を窺うとロープとイトマルの糸で体を縛られて座らされているシノン達と彼らを見つめるロケット団がいた。彼らはシノン達に話をした後、パソコンに何かを差し込んで打ち込み

始めた。

「ロケット団の仕業だったのか……」

「何をしているのかは分からんが……あまり良い事ではないな」

遠くからでは良く見えないが、アイツらの事だからメカについての作業かもしれない。この時カイトを含めた全員がいつの間にか忍び込んでいたハリマロンに気付いていなかった。

「早く皆を助けないと……!」

「ピイカ!」

「落ち着けサトシ」

「ガウウ」

「いきなり突入しても捕まるだけですよ。何か作戦を考えないと……」

「うん? 待て……誰かいないか?」

「キュウ? ココーン!」

その時キュウコンが俺の足を突っついて慌てた表情で倉庫の中を差していた。それと同時に足元にいたはずの緑色のポケモンの姿がない事に気づいた。まさかと思いきユウコンの指差す方を見ようとした時、中から缶が倒れる音とロケット団やシンン達の驚く声が響いた。

全員の注目を浴びていたのはやっぱりハリマロンだった。

「ああっ! アイツ!」

「最悪だ。何をやっているんだ!」

「2人ともごめんなさい、作戦変更です。いきなりの突入だあ!!」

自ら先頭に立って突入したシトロンの後に続いて俺とサトシも頷いて倉庫の中へ突入した。俺達が現れた事にシンン達は安堵の表情になり、ロケット団は一瞬動揺するがすぐに冷静さを取り戻して獲物

のピカチュウとグラエナが来てくれた事に喜ぶ。

「あら、わざわざピカチュウの方から来てくれたわ」

「そして悪使いのグラエナもね」

「皆を返せ、ロケット団！」

「皆を返せ！つと言われたら！」

「黙っているのが常だけどさ！」

「それでも答えて上げるが世の情け！」

いつもの決め台詞を言い始めるロケット団を俺達は無視してシン達を縛るロープと糸を解いて救出し始める。

「セレナ、大丈夫か？」

「ピカピカ」

「ええ！大丈夫よサトシ」

「シノン、怪我はないか？」

「ガウガウ」

「コンコン」

「はい！大丈夫です兄様」

サトシとピカチュウはセレナ、カイトとキュウコンはシノン、グラエナはサーナイト、シトロンはユリーカとそれぞれ分担して助けた。ちなみにこの時、セレナとシノンは助けられる今の状況に心と頭の中が幸せで一杯だった。今自分の目の前にいる人が救いの王子様のように見えていた。その後3人を救出したカイト達は全員でプラターヌ博士のロープも解いて助け出した。

するとここで自分達が無視されて忘れられている事に気づいたロケット団が怒りの声を上げる。

「ちよつと！ちゃんと聞きなさいよね！」

「私達の決め台詞がー！」

「真面目に言っているんだから最後まで聞けよ！」

「やっぱり長すぎるのでは……」

「まだ言っているのかニヤ？それよりもメモリーのダウンロードが完了したニヤ」

「よーし。それじゃ行くぞニヤース！」

ロケット団の抗議の声も俺達は無視して脱出しようとするがそう簡単に事は進まない。

コジロウの声と共にニヤースは布で覆われた大きなメカの中に入る。そしてコジロウはパソコンを操作して最終プログラミングを行う。う。

「さあ、見るが良い！メガシンカ的能力をプログラム化して取り込んだメガシンカより更に進化した……メガメガシンカを！」

「その名も！メガメガメカニヤースよ！」

「……はい？」

今なんて言った？随分と長くて舌を噛みそうな感じの名前だな。まあ、ロケット団にいた永久に名前を覚えられない奴よりマシか。

そう思っている間にも姿を現した巨大なメカニヤースは鋭い鉄の3本爪が付いた両アームを前に出して、下半身のキャタピラーをゆっくり動かして前進する。このメカを見て科学者2名は感動の声を上げる。

「おお、マーベラス！なんて力強い！」

「敵ながらなかなかの発明品！ワクワクしますね！」

「もう！2人ともそんな感心している場合じゃないでしょう!?!とり合えず急いで逃げるのよー！」

「このままだと押し潰されちゃいますよ！」

叫びながら走るセレナとサーナイトをボールに戻して冷静に状況

を言うシノンの後を俺達も続いて倉庫の外に出る。しかしメカニヤースは倉庫の壁を破壊しながらさらに追い掛けてくる。

途中最後尾を走っていたハリマロンが石に躓いて転び、両脇に持っていたバスケットを落として中身のマカロンとクッキーを散らかしてしまう。慌てて掻き集めている間にも背後からメカニヤースが迫って来る。だが間一髪近くにいたシトロンが助け出して柱の陰に身を隠した。あれくらいならまず大きな怪我をしていないだろう。さて今度は俺達だ。

「ピカチュウ&グラエナ捕獲作戦、開始ニヤー！」

メカニヤースの左アームが真つ直ぐ俺達に向けて動いた瞬間、俺とサトシとシノンが先制攻撃を仕掛ける。

「ピカチュウ！10万ボルト！」

「グラエナ！悪の波動！」

「キュウコン！火炎放射！」

「ピカッチュウ！」

「グーラー！」

「コーン！」

3匹の放った攻撃はメカの額にある小判に全て吸収されて、そのまま跳ね返ってきた。そして自身の放った攻撃をまともに浴びてその場に倒れてしまう。

「残念。このメカにはお前達の攻撃なんて効かないのさ」

「今よニヤース。ピカチュウを捕まえちゃいなさい！」

「グラエナとキュウコンも忘れないように」

「分かったニヤー！待っていて下さいサカキ様ー！」

メカニヤースは最初とは違って素早い動きで3匹に迫り、アームを

勢いよく叩きつける。

「ピカチュウー！」

「グラエナー！」

「キュウコンー！」

俺達は動けない大切な相棒を抱えてそれぞれ左右に別れて逃げるが、左側に逃げたサトシが躓いて転んでしまう。それを見てチャンスと思ったメカニヤースのアームがサトシとピカチュウに向かう。助けようとするが間に合わず誰もが捕まると思った時、アームは2人に届く手前で突然止まって動かなくなった。ロケット団はそれを見て戸惑う。

そこにメカに繋いであったコンセントが抜いて持って来たシトロソとハリマロンが現れた。どうやら電力が断たれたせいでメカニヤースは動かなくなったようだ。

「コジロウ！どうなっているのニヤ!？」

「サブ電源を入れろ！」

「分かったニヤ！補助電源オン！」

ニヤースはすぐにメカの内部に備えてあった補助電源を入れるとメカは再び動き出した。シンオウ地方であった時より進歩しているな。それと同時にシトロソは俺達に合流する。

「敵ながら抜かりありませんね！」

「リマリマー！」

足元にいたハリマロンがシトロソに強く訴えるように鳴く。その瞳は熱い闘志を込めていた。

「僕も戦いたと言っているぞ、シトロソ」

「分かりました。ハリマロン、ミサイル針です！」
「リイマアアア!!」

シトロンの指示でハリマロンは頭の棘を固くさせて『ミサイル針』をメカニヤースに飛ばす。

しかしメカニヤースはまったく傷を受けていない。今度は『体当たり』で攻撃するが、ハリマロンは弾かれてビクともしなかった。

「だったら全員で同時攻撃だ。グラエナ、噛み砕く！」

「キュウコン、アイアンテールよ！」

「ピカチュウ、電光石火だ！」

4匹が横一列に並んで同時に同じ部分を攻撃するが、メカニヤースは少しぐらついただけで対して効かなかった。

「今のニヤーには4体でかかって来ても勝てないのニヤー！」

ニヤースの高笑いを聞いて4匹は悔しい表情になる。その時どこからか赤とオレンジが合わさった光り輝く炎を纏ったポケモンが上空から突撃してメカニヤースに強烈な一撃を与えた。ポケモンは近くの木の枝に着地する。

それはガブリアス事件の時にサトシを助けたメガバシャーモだった。そして隣にはバシャーモの仮面を付けたトレーナーがいた。

「あの時の・・・!?!」

「メガバシャーモ・・・何故此処に!?!」

彼らの登場にロケット団を含めた全員が驚いていた。

「火炎放射だ！」

「バシャーア！」

メガバシャーモの放った『火炎放射』はメカニヤースを1発で黒焦げにし、アームと外壁をボロボロに破壊した。

「どういう事よ!?!」

「同じメガシンカ同士のはずなのに・・・」

「たった1発でこれ程のダメージを受けるとは!?!」

「ま、マズインじゃないのかじゃーん」

メガバシャーモの圧倒的なパワーとメカニヤースの受けたダメージを見て、ロケット団は先程までとは変わって弱気になる。この隙を俺は見逃さなかった。

「全員、一気にあの内部を攻撃するぞ!」

そう言つてグラエナ達は一齐に攻撃する。『悪の波動』、『火炎放射』、『エレキボール』、『ミサイル針』が連続で内部にあつた動力源に命中する。そして動力源は嫌な音と一緒に大爆発した。

「!!!「やなカンジー!?!」!!!」

「ソォーナンス!!」

近くにいたロケット団は爆発に巻き込まれて、いつものように空の彼方へ飛んで消えていった。

ロケット団を追い払う事ができて喜ぶサトシとシトロンを笑つて見た後、静かに振り返る。メガバシャーモとトレーナーは用が済んだ事で何処かに姿を消してしまった。

「ありがとう、メガバシャーモ」

サトシは彼らの消えた方向に向かってお礼を言った。シトロンは

疲れて足元がふらついているハリマロンを褒めながら安全な場所に置いていたマカロンとクッキーが入ったバスケットを持って来て見せる。

「さあ、ハリマロン。大仕事をした後はこれでしょう？大好きなお菓子ですよ」

「リマア！」

シトロンが差し出したマカロンとクッキーをハリマロンは喜んで受け取り、食べようとした寸前で止める。そして受け取ったマカロンをシトロンに差し出した。食い意地が張ったハリマロンだけに全員が驚く。

「リマリマ、ハローン！」

それからハリマロンは俺達にもお菓子を配り始めた。友情の証か・・・美味しいお菓子だ。まあ、配り終えた時にシトロンがハリマロンの分がなくなると冗談を言っ慌てて自分の分を確保する光景は面白かった。そして全員が研究所に帰って来た時は夕方だった。

「今日は本当にありがとう。サトシ君達のおかげで助かったよ」

「いえ。でも・・・また研究所壊れちゃいましたね」

「大丈夫。今度君達が来る頃までには直しておくよ」

トラックにより壊された研究所の壁や温室を見てサトシは心配し
て言うが、プラターヌ博士は次来る時までには直すから大丈夫だと言っ
た。

それを聞いて安心した俺達はまたやって来ると言って出発しよう
とした時、ユリーカが何かに気付いてシトロンに言う。

「ねえ、お兄ちゃん」

「どうした？ユリーカ」

「さつきからあの子が、こっち見ているよ」

ユリーカが指差す近くの茂みには、隠れてじっとシトロンを見つめるハリマロンがいた。シトロンがお別れのお礼を言うとハリマロンはシトロンの前に出て鳴き声を出す。

ふくん……そう言う事か。

「博士、ハリマロンはやっぱり……」

「うん、シトロン君。ハリマロンは君と旅をしたがっているみたいだ。君といい、サトシ君やカイト君といい……不思議な子達だ」

うん？何故俺とサトシも引き出されたんだ？そう思っている間に博士の言葉を聞いて驚くシトロンの服をユリーカが引っ張って言った。

「お兄ちゃん！あたしもハリマロンと旅したい！ねっ？ねっ？」

「……プラターヌ博士、ハリマロンを連れて行ってもいいでしょうか？」

「勿論だよ。ハリマロンがそう望んでいるからね。これがハリマロンのモンスターボールだよ」

予想していた博士はすぐにシトロンにモンスターボールを渡した。そしてシトロンはハリマロンと一緒に行くかを尋ね、ハリマロンは嬉しそうに笑いながら『よろしく！』と言った。そしてシトロンはハリマロンをボールに戻し、手持ちに加えた。

「科学が輝くイツツ・ア・グレートサクセス！ハリマロン、ゲットです！」

「ハリマロン、キープです！」

新たな仲間にとろんとユリーカは喜んで歓迎したのだった。
そして俺達はシヨウヨウシティに向かって旅に出発した。

竹林でポケモン搜索&ゲットだぜ!

ミアレシティから旅立ってカイト達6人は竹林の中で昼食を取ろうとしていた。折り畳み式のテーブルの上に並べられている料理はスパゲッティとサンドイッチだ。

皆それぞれ飲み物や椅子を用意するなど役割を果たしている中、ユリーカは少し離れた所にポケモン達のポケモンフーズを用意する。必要な数の分を出した後、ユリーカはワクワクしながらカイトとシノンの元にやって来る。

「カイトさん！シノン姉ちゃん！用意できたよ」

「おう、ご苦労さんユリーカ」

「良い子ね。それじゃ、さっそく見せて上げるね」

そう言つて2人は腰に付いているモンスターボールを全て取り出した。

実はユリーカがカイト達の今いる手持ちのポケモン達を見たいと頼んできたのだ。2人で話し合つてちょうど昼食を食べるから良いと思つて承諾した。

カイトのモンスターボールからはゾロア、プテラ、ハブネーク、ジバコイルが出てきた。

シノンのモンスターボールからはサーナイト、ミミロップ、ウオーグル、エーファイが出てきた。

グラエナとキュウコンも入れてそれぞれ5体ずつ手持ちに加えている。残る枠は新しいポケモンをゲットするためにわざと空けているのだ。

「うわっすつっーいーー!!」

沢山のポケモン達を見て喜びの声を上げた後、ユリーカはポケモン達に挨拶したり撫でたりする。それと同時に昼食の準備が整い全員

が椅子に座って美味しく食べ始めた。少し離れた所でポケモン達も食べ始める。この時、グラエナの傍にメスポケモンが寄って来てそれぞれがグラエナにあくみをさせたりとラブラブなオーラが溢れていたのは余談である。

すると暫くしてポケモン達が何かの気配を感じて食べるのを止めて周りをキョロキョロと見渡した後、近くの茂みを見つめた。1体だけ食べ続けている者がいたが・・・(汗)

「どうした?」

「どうやらあそこから気配を感じる様だ」

「気配って、何かいるのかな?」

「ポケモンかも!」

「・・・グラツ!」

「ケロ!ケロ!」

正体を探るためにグラエナがケロマツに何か言うとケロマツは大きくジャンプして茂みに向かいケロムースを投げつけた。すると茂みから驚いた声が聞こえ、中から2体のポケモンが飛び出した。やっぱりポケモンだったか。そう思っている間にサトシとユリーカがそれぞれ2体のポケモンの顔に付いたケロムースをタオルで拭く。

「ビツクリさせてごめんな」

「今綺麗にしてあげるからね」

その様子を後ろで見ていたセレナが凶鑑を開いてポケモンを調べる。

『ヤンチャム。やんちゃポケモン。敵に舐められないように頑張つて睨み付けるが効果は薄い』

凶鑑を見た後セレナは首を捻る。目の前にいるヤンチャムと凶鑑

の絵と違う事に疑問を感じたようだ。シトロロンが理由を推測して言う。とセレナはさらに文句を言う。

「もっと凶鑑の絵を可愛くしてあげればいいのに」

「凶鑑にクレームつける人、初めて見ました・・・(汗)」

「そう？凶鑑があんなんじゃないや可哀そうよ。そうでしょシノン」

「そうね・・・セレナの意見にも一理あるかな。けど全部の凶鑑の絵がそう言う訳じゃないからね」

セレナの言葉にシトロロンは苦笑いし、途中傍に寄って凶鑑を覗いていたシノンが同意しつつ必ず違う事だと思わせないように返答した。そんな中ヤンチャム達は小走りで俺達から離れて行き、先日仲間になったハリマロンの前で止まり、目の前にあるポケモンフーズをじっと見つめる。

「ヤンチャー！」

「ヤンチャチャー！」

見つめられた事で驚いて食事の手を止めていたハリマロンにヤンチャム達は可愛さ満開の笑顔で話しかける。

「何て言ってるんだろう・・・？」

「ポケモンフーズを分けてくれって言ってるんじゃないかな？」

「兄様、この子達は何て言ったんですか・・・」

3人がそれぞれヤンチャムの言った言葉を考えるが分からず、シノンが俺に何て言ったか訊ねる。俺はヤンチャム達の言葉の意味を少し呆れながら言う。

「皆の食べ物頂戴！・・・だよ」

「皆の・・・？」

「つまり俺達が今食べている料理とポケモンフーズを全部欲しいと言う事だ」

「「「えっ!!」「」」」

驚愕の真実のあまりサトシ達は一瞬呆然としてしまう。その瞬間、ヤンチャム達は素早く走り出して料理を食べ始めた。

「ああ!おい、お前ら!?!」

「ピカピカ!?!」

「マズイ!全員でアイツらを止めろ!!」

「グオオオー!!」

グラエナを筆頭にカイトの手持ちポケモン達が慌てて止めようとしたが時すでに遅く、料理はヤンチャム達によって全部食べられてしまった。

「遅かったね・・・」

「リマリーマ!!」

セレナが啞然としながら言い、食いしん坊のハリマロンが空になったお皿を片手に持って憤慨するが、ヤンチャム達は満足な顔をしながら知らんぷりんしている。それを見て俺は度胸があるなと思いつつため息をつく。その間ピカチュウ、グラエナ、キュウコン、ゾロア、ケロマツ、フオツコが落ち込むハリマロンを慰めようと傍に近づく。

だがその時、空から突然大きな網が覆い被さり、そのまま上空に連れ去らわれてしまった。慌ててカイトとサトシが網を掴もうと走り出すが間に合わなかった。悔しい表情をしながら網が繋がっている先を見るとそこにはアニメを見た人ならお馴染みとも言えるニャース型の気球が空に浮かんでいた。そして乗っているのはあの5人組だ。

「二」「ピカチュウとグラエナ！ゲットだぜ!!」「二」

「ロケット団!？」

ロケット団は早々にこの場から立ち去ろうと気球を動かす。無論ポケモン達を盗られたまま黙っているカイト達ではない。

「逃がすか。ヤヤコマ、頼む!」

「プテラ、ジバコイル、行け!」

「ウォーグル、お願い!」

指示を受けた4体は飛び立って気球を攻撃しようとそれぞれ技を出そうとするが、コジロウのマリーカの墨とロバルのエアームドの『エアスラッシュ』によって妨害される。4体がダメージを受けて墜落している間に気球は遠くの方に去ってしまった。カイト達はダメージを負った4体をボールに戻してすぐ荷物を持つ。

「今ならまだ間に合う。急いで追いかけるぞ!」

「分かった。行くぞ皆!」

「ええ!」

「はい!」

「お兄ちゃん!」

「分かっています!必ず皆を助け出します!」

カイトとサトシを先頭に全員で走り出して、ロケット団の気球の後を追いつける。だがその途中、突然気球が爆発した。

「なんだ!？」

「突然爆発しました!」

「それじゃ、皆は!？」

「大丈夫だセレナ、微かだけど全員無事だった」

「本当ですか兄様!？」

爆発したのは上部分であつたし、ポケモンの体は丈夫だから大丈夫だと心配するセレナとシノンを安心させる。そして次にどうやって捜し出すかを考える。落ちた場所が深い竹林であつたから探すのが難しいと思つていた時、ユリーカの持つていたポシエツトを見て思い付いた。

「そうだ！ここはデデンネに協力してもらおう」

「えっ？デデンネに・・・？」

「そうか！最初にデデンネと会つた時、ピカチュウと電気エネルギーで会話していた。それを使えば捜し出せると言う訳ですね！」

カイトの言つた事を理解したシトロンが、デデンネの力を説明する。

「そつか！デデンネ、ピカチュウからの電気をキャッチしたら教えて！」

「デネッ！」

指示を聞いたデデンネはポシエツトから出て、ピカチュウの電気を探そうとヒゲを動かしながら走り出すそれを頼りにカイト達はポケモン達を探しに竹林の中に入つていった。

その頃、空の上から竹林へ落ちたケロマツは運良く川の中に落下していた。落下したショックで気を失つていたがすぐに気が付き、他の仲間を探そうと水辺から上がった時、突然草むらが動き出す。ケロムースで変装するが現れたのはピカチュウだった。変装を解くケロマツにピカチュウはどこか慌てた様子で付いて来てと言つて走り出す。

その後を追い掛けて向かつてみた先にはゾロアとハリマロンがい

たけど……。

「う〜ん！ 抜けないゾ〜ん!!」

『痛い！ 痛い！ もっと優しくやってー!!』

『……何をやっているでござるか』

今日の前で行われているのは、落下した時に頭から落ちて上半身が地面に埋まってしまったハリマロンの尻尾をゾロアが銜えて引っ張っていると言う状況だ。

呆れつつも理解したケロマツは、ピカチュウとゾロアと協力してハリマロンを地面から引っっこ抜いた。何がともあれこれで4体が合流する事ができた。

『さあ、グラエナ、キュウコン、フォッコを見つけに行こう』

『了解でござる!』

『うん!』

「分かったゾ!」

ピカチュウ達が残りの仲間を探しに行こうとした時、突然上から誰かの声がした。

顔を見上げてみるとそこには竹林の枝に引っかかって身動きできないニャースがいた。

『ニャース!』

『ピカチュウ、助けてくれニャー!』

『えー?』

今までの経験もあって嫌な表情になるピカチュウにニャースは懸命に説得する。悩むピカチュウにケロマツとハリマロンがそれぞれ意見を出す。

『ピカチュウ殿、信用してはいけなくてござる』

『別に良いじゃん。助けてあげ……ってああああー!?』

突然ハリマロンがある所に指を差しながら大声で叫ぶ。どうしたのかと思いつながらピカチュウもその先を見つめると、なんとゾロアがニヤースを助け出そうと竹をよじ登っていた。それを見てピカチュウ達は慌てて止めようとする。

『ダメだよゾロア!』

『危ないでござる!』

『早く降りてきて!』

しかしゾロアはどんどん登っていき、あと少しでニヤースに手が届く位置までいく。

「待ってる。今降ろしてあげるゾ」

そう言ってゾロアが前足を伸ばしてニヤースの尻尾を掴んだ時、2体の重さに耐えきれなくなった竹の先端がボキッと折れてしまった。一直線に落ちて行くゾロアとニヤースを受け止めようとするピカチュウ達の横を誰かが通り抜ける。

『よつと……大丈夫かゾロア?』

「えっ? あつ、ニー!」

通り抜ける者の正体はグラエナで、地面にぶつかる寸前のゾロアとニヤースを背中受けて止めたのだ。グラエナに優しく下ろされた後、ゾロアはグラエナに抱きついて甘えだし、ニヤースは深く頭を下げてお礼を言う。

「いや〜助かったのニヤ。ありがとうございますニヤ」

『別に構わん。ピカチュウ達も無事のような』
『グラエナも無事で良かったよ』

良い時に合流できたとピカチュウはホッと内心安心する。今いるこのメンバーの中でグラエナ程頼りになる者はいない。戦力は勿論だが、何より鼻が一番効く。

『グラエナ、キュウコンとフォッコが何処にいるか分かる?』

『ああ、アイツらの臭いは覚えている。すぐに見つけてやるよ』
『その前にこやつはどうするでござるか?』

ケロマツが見つめる先にいるのはニャースだ。するとニャースは仲間と合流するまで休戦だと言う。

『休戦?』

「そうニャ。ここは共に助け合う事が必要ニャ」

『良いだろう』

『なっ!? グラエナ殿、いいのでござるか』

ニャースの提案をすぐに受け入れたグラエナにケロマツが抗議する。

『あやつは敵でござる! 信用していいでござるか!?!』

『今のコイツは1人だ。もし不審な行動をした時には容赦なく攻撃すればいい』

グラエナの言葉に渋々ケロマツが納得した後、ピカチュウ達はグラエナを先頭に歩き出した。

それから暫く歩き続けた後、小川の傍にいるキュウコンとフォッコを発見した。

『キュウコン!』

『フォッコ!』

『グラエナ!皆も!』

ピカチュウ達に気が付いた2体は嬉しそうに駆け寄る。さらにキュウコンはグラエナの体に強く抱きついて喜ぶ。大胆な行動を目の前にしてピカチュウ達は顔を赤くして、自分の目やまだ子供であるゾロアの目を両手で隠す。グラエナも同じ感じになるかと思えば、彼も優しい表情で抱きついていて。暫し彼らだけの世界ができる・・・はずがなかった。

「コラー!ツ!!何明るい昼間からイチャイチャしているのニャー!」

ニャースのツッコミによって我に返ったグラエナはキュウコンから離れて行く。愛する者が離れていく事にキュウコンは寂しい表情をしていたのに気づかないままで。

兎に角全員合流できた。早くカイト達と合流しようとピカチュウ達は歩き出すが、キュウコンが待ったをかける。

『その前にフォッコの尻尾を綺麗にできないかしら?』

『お願い・・・』

「おみゃーはお洒落さんなのニャー」

今のフォッコの尻尾はボサボサで、所々が汚れていた。セレナと同じ綺麗好きなフォッコにとって大きな問題である。それを見てケロマツがケロムースを千切って丁寧にフォッコの尻尾に塗り込んだ。すると尻尾の毛は潤いを得てキラキラと輝きながら元通りになった。尻尾が今まで以上に綺麗になったのを見てフォッコは笑顔でお礼を言い、ケロマツは頬を赤く染めて照れた。

そしてピカチュウ達は今度こそカイト達を探しに歩き出すのであった。

ところ変わってこちらはロケット団。

気球が爆発した後彼らもいなくなったニャースを探して竹林の中を歩いていた。

ちなみに気球が爆発した原因だが、実はムサシ、コジロウ、ニャースのいつもの3人組が今回の作戦の手柄争いの為であった。さらに不幸は重なって探していた途中で遭遇したヤンチャム達をゲットしようとした時に彼らの仲間である進化形のごロンドの技によって吹き飛ばされて体中を痛められてしまったのだ。

「まったく！あんたらには呆れるじゃーん・・・」

「チームで行動している以上、手柄は全員平等に分けられると言うのに・・・」

「だから！さつきから謝っているじゃないのよ!!」

先程から文句を言う2人にムサシが反論した時、突然何かに躓いて転んでしまった。

「お、おい・・・大丈夫かムサシ？」

「イタタ・・・何よまったく!？」

ムサシがぶつかかったものを確認しようとして振り向くとそこから何か地面から出てきた。全員が驚きながら見るとそれは南瓜に似たポケモンだった。コジロウがすぐに機械で調べる。

「コイツはバケツチャと言うポケモンだ」

「ふくん、バケツチャね。こいつどうする?」

先程から胸の光る眼で辺りを照らしているバケツチャをどうするか、ミズナが尋ねたのと同時にムサシがモンスターボールを投げる。

ボールは数回コロコロと動いて点滅した後には止まった。
つまりこれは……。

「やだゲットしちゃった!!」

「ウツソ〜!?!」

「あり得ない。バトルをしていないのに……!?!」

普通なら絶対あり得ない事が目の前で起きた事にムサシ以外のロケット団は呆然とする。

しかしこれにてロケット団に新たな戦力が加わったのであった。

そして再び視点はポケモン達の方に戻る。

ピカチュウ達はグラエナの嗅覚を頼りにカイト達を探していた。暫く竹林の中を進んでいた時、突然ピカチュウの電気袋に小さな電気が発生し、ピカチュウは足を止めて周りを見渡す。左右にいたニャーヌやケロマツ、先頭にいたグラエナとキュウコンがそれに気が付いて足を止めて様子を見る中、後方にいた残りのポケモン達はマイペースに待っていた。

「そんな物、美味しいのニャ?」

『ええ!』

美味しそうに木の枝を食べているフォッコを見て興味を持ったハリマロンが足元に落ちていた木の枝を拾って食べてみる。けどやっぱり口に合わなかったようで、ぺっと吐き出す。そして不味い物を食べた苛立ちを木の枝にぶつけながら投げ捨てる。

コンコンコン・・・グサツ!

木から木へと跳ね返った木の枝はあるポケモンの額に突き刺さった。それはロケット団をブツ飛ばしたあのゴロンダであった。

「ゴツダアアアー！！」
「またアイツニヤアア！！」

恐ろしい表情で迫って来るゴロンダを見てニヤースは我先に逃げた。ピカチュウ達も慌てて逃げ出すが、ハリマロンだけ逃げ遅れてしまった。極限まで恐怖が高まってしまった為ハリマロンは目の前まで迫ったゴロンダの顔面目掛けて『ミスイル針』を放って当ててしまった。それを見た全員がさらに慌てる。怒っている相手に反撃するのは火に油を注ぐものだ。予想通りゴロンダは益々怖い顔になって両腕を振り上げたが、銜えていた笹の葉が黒焦げに散ってしまった途端に弱々しい顔になってその場に座り込んでしまった。

あまりの変わりようにピカチュウ達が疑問に思っていたら大食いコンビのヤンチャム達が大変な文句を言ってきた。激しく言う2体にグラエナが落ち着くように言うとした時、背後からカイト達の声が響いた。

「グラエナ!!ゾロア!!」
「ピカチュウ!!」
「ガウガツ!!」
「マー!!」
「ピカピ!」

ポケモン達はそれぞれ自分のトレーナーの元へ駆け寄り、胸に飛び込んだりして再会を喜ぶ。

「いや〜皆無事に再会できて良かったニヤ」
「ニヤース!!」
「何でアンタと一緒にいるの!?!」
「細かい事は気にするニヤ。それよりも問題はコイツニヤ」
「・・・このポケモンは?」

ニヤースがいた事に全員が驚くが、本人がさりげなく自分の事から後ろに座り込んでいるゴロンダを差す。見るからに元気がないゴロンダを見てカイトはすぐに凶鑑を開く。

『ゴロンダ。強面ポケモン。ヤンチャムの進化形。気性が荒く、喧嘩っ早い。口に銜えた笹の葉は感覚器官の役割を持ち、周囲の動きを読み取る』

「これまた凶鑑と違う・・・」

「だが悪タイプと言うなら今ゲットしてやる」

「待ってください兄様！今はゲットよりも何故ゴロンダが元気がない理由を調べるのが先です」

隣で凶鑑を覗いていたセレナが違和感を感じて首を捻る。だが俺は気にせずに空のモンスターボールを取り出してゲットしようとする。それをシノンが止めて、さらにヤンチャム達が目の前にやって来て訴え出す。

「ニチャムチャム！ヤーチャャ！」

「・・・何だど？」

「カイト、ヤンチャム達は何を言っているんだ？」

怒りを纏わせながら激しく言うヤンチャム達の声を聞いて驚く俺にサトシが尋ねてきたので通訳する。

ヤンチャム達の言った内容は、ゴロンダが元気ないのはハリマロンのせいである事、元氣を取り戻すにはこの先の岩に生えているお気に入りの笹の葉が要るとの事だった。理由を知ったサトシ達はすぐに取りに行くと言い出したので、最終的に全員で取りに行くこと決めた。ヤンチャム達は1体が案内役、もう1体が留守番役と決めた。この時、ニヤースが残ると言って少し一悶着が起きたが、ニヤースだけでは何もできないのと早く戻ってくれば大丈夫と話し合って、ヤンチャ

ムを先頭に竹林の奥へ向かって行った。暫く走った後、辿り着いた場所
所は崖に囲まれた岩場だった。目的の笹の葉は崖の上の端つこに生
えていた。

「あんな所に・・・」

「あのゴロンダがよく銜えようなんて思ったわね」

「拘りつて事でしようか」

「それよりどうするの？」

「俺が行く！」

「待つてください！危険ですよ！」

「大丈夫だよ。行ける！」

「いいえサトシ、いくらなんでも此処を登るのは無理よ」

「此処は俺に任せろ。ジバコイル、出陣！」

登ろうとするサトシを押さえ、カイトは出したジバコイルにグラエ
ナと一緒に乗っかって崖の上を上がって行く。そしてもう少しで笹
の葉に手が届くと思った時、突然何かが襲い掛かって来た。咄嗟に
しゃがみ、ジバコイルが大きく下がってかわす事ができた。

「うおっ！なんだ!?!」

「ヒートト！ツキキ！」

体勢を立て直して振り返るとそこには剣にそっくりなポケモンが
浮かんでいた。すぐにまた凶鑑を開いて調べる。

『ヒトツキ。 刀剣ポケモン。 死者の魂が古代の剣に宿って生まれたら
しい。 人の腕に青い布を巻き付けて、 命を吸う』

なるほど、ヒトツキと言ってゴースト・鋼タイプか。 見た目もカツ
コイイし、何より強者の雰囲気溢れている奴だ。 そう思っていた時
に下の方からヤンチャムが慌てながら声を出す。

「ヤチャヤチャ！チャムチャム！」

「・・・そうか、コイツはこの辺りを縄張りとしていて、笹の葉を取るには勝つしかないのか」

ヤンチャムの話の聞くとますますゲットしたくなった。下で心配するサトシ達に大丈夫だと伝えて、俺とグラエナはジバコイルから降りて崖の上に立つ。そしてヒトツキを指差して言う。

「ヒトツキ！今から俺のジバコイルと勝負だ。俺が勝ったらゲットさせてもらう。いいな？」

「ヒートト!!」

カイトの言葉を聞いたヒトツキは「受けて立つ」と言わんばかりの真剣な表情になって戦闘態勢をとる。だがこの時、隣にいたグラエナが少し不満そうな顔をしていたのは余談だ。

「よし！まずはジバコイル！ラスターカノン！」

「ジババツ！」

強力な『ラスターカノン』が一直線に放たれてヒトツキに命中するが、同じタイプの技であったので簡単には倒れず、すぐに体勢を立て直して『シャドークロー』を繰り返す。

「ジバコイル、金属音で動きを止めろ」

「ジバ！バルルルルー!!」

ジバコイルから放たれる『金属音』によってヒトツキは苦しみ出して動きを止める。その隙について止めの指示を出す。

「終わりだ。放電！」

「ジバババツ!!」

前に受けた『金属音』の効果もあつて『放電』が命中するとヒトツキは目を回しながら落下して地面に倒れた。

「よし！行け！モンスターボール！」

カイトの投げたモンスターボールはヒトツキに当たり、モンスターボールは数回揺れた後音を鳴らして止まった。

「よし、ヒトツキ、ゲット完了！」

「グガウウツ!!」

「ジバツ!!」

グラエナとジバコイルと共に喜び合いながら笹の葉を取つてすぐにサトシ達と合流し、急いでゴロンダの元へ引き返した。しかし戻つてみるとそこにはロケット団が仁王立ちで待ち構えていた。彼らの後ろにはヤンチャムとゴロンダがイトマルの糸で縛り上げられていた。

「ロケット団!?!」

「ニヤース！やっぱり貴方！」

「ニヤハハ！ニヤーも仲間と感動の再会を果たしたのニヤー！」

仲間と合流できて機嫌良いニヤースが笑った後、ロケット団はゴロンダ達を人質にしながらピカチュウとグラエナをこちらに渡すように脅す。無論そうはさせないとカイトとシノンがボールに入れていたポケモン達を出して数を増やす。しかしロケット団は余裕そうな雰囲気であつた。

「見なさい！本日ゲットしたてのホヤホヤ。ロケット団の新戦力！」

「チャツチャチャ！」

ムサシが投げたモンスターボールから出て来たのは先程ゲットしたバケツチャだ。凶鑑で調べて草・ゴーストタイプである事を知る。

「バケツチャ、宿り木の種！」

「チャバツ！」

バケツチャは口から無数の種をポケモン達の足元に飛ばす。すると地面から蔓が伸びてポケモン達の体に巻き付いた。そして動きを封じたのと同時に体力を奪い始めた。カイト達が何とか取ろうとするができなかった。

「どうすればいいの・・・？」

「サトシ、ポケモン達は俺に任せろ。お前は持って来た笹の葉をゴロンダに銜えさせるんだ。そうすれば何とかなる！」

「分かった！見ろ、ゴロンダ！お前の好きな笹の葉だ！」

ヤンチャムの傍に落ちていた笹の葉をサトシは拾ってゴロンダに見せた後、全速力で走り出した。それと同時にカイトはまだモンスターボールに入れたままであったヒトツキを出した。

「ヒトツキ、切り裂くでグラエナ達の蔓を切るんだ！」

「ヒートト！」

剣の部分を光らせてヒトツキは左右に振るう。ポケモン達の体に巻き付いていた蔓は次々と切れて解放された。迫って来るサトシとポケモン達が解放されていくのを見てロケット団は焦り出し、妨害しようとする。マリーカとシシコに攻撃を命じる。それを見てピカチュウは身動きが取れるポケモン達に援護してくれと指示を送る。

「ありがとうゴロンダ！ヒトツキ！」

「おかげで助かりました」

「笹の葉の効果って凄いのね・・・」

元気になったゴロンダとポケモン達を助けてくれたヒトツキにシノンとシトロンはお礼を言い、セレナは笹の葉の効果に驚いていた。その後ゴロンダにお礼と同時に改めて笹の葉の事を謝るが、ゴロンダは特に気にしていないと言うのであった。

そして夕方、ゴロンダとヤンチャム達に案内されて竹林の出口へやって来たカイト達は彼らに笑顔で見送られながら次の目的地へ出発した。だがその途中で・・・。

「そう言えば俺達、昼飯の途中だったんじゃ・・・」

「ピカ・・・！」

「そう言えばそうでしたね」

「思い出したら何か・・・お腹が急に・・・」

昼飯をヤンチャム達に食べられてから何も口に入れていなかった。その瞬間、皆のお腹が鳴る。

「やれやれ、もうすぐポケモンセンターに着くからこれで我慢しな」

「お、オレンの実か。サンキューカイト。よーし！それじゃ急いで行こうぜ！」

手持ちにあったオレンの実を皆に配って食べた後、ポケモンセンター目指して歩き出すのであった。

ポケモンバイヤーを捕まえろ！

次の目的地に向かって広々とした草原のような道を歩いていたカイト達、すると突然ピカチュウが耳を立ててキョロキョロと辺りを見渡し、サトシも足を止めて立ち止まる。

「何だ・・・今の音・・・？」

「えっ、何・・・？」

「音だと・・・？」

全員が立ち止まって耳を澄ませてみるが、特に変わった音はしなかった。

「何も聞こえませんが・・・」

「うん・・・」

「気のせいじゃない？」

「いや、確かに何か聞こえたんだって！」

ぐううううう・・・!!

そう言った時、サトシとピカチュウのお腹が大きな音を出しつつ鳴った。これを聞いてセレナ達は呆れつつも笑ってツツコミをいれた。サトシ達も恥ずかしそうに赤くなつて頭を掻く。だがカイトとシノンは険しく真剣な表情のまま前方を見つめていた。それに気が付いたサトシが問い掛ける。

「どうした2人とも？」

「静かにしろサトシ・・・何かがかつちに近づいてくる」

「この音は車・・・ッ!?危ない!!」

冷静に音の正体をシノンが言うのと周りに響くようなエンジン音を

噴かせつつ、前方から猛スピードでジープが走り抜けた。シノンが大
声で言ったおかげで全員避ける事ができた。そして通り過ぎたジ
ープに乗っていたのは丸い体型の男と一匹のポケモンだった。

「危ないなあ・・・」

「何なのよ、アイツ・・・!」

「退いて退いてー!!」

轢かれそうになってサトシとセレナが怒りを表しながらジープが
去った方向を睨んでいると今度はジュンサーの乗ったバイクが走り
抜けていった。

「ジュンサーさんが追い掛けていると言う事は・・・」

「あのジープに乗っている奴は悪者よ!」

「何か事件かも!」

「どうしますか?」

「俺達も行ってみよう!」

「まあ、見てしまった以上行くしかないな」

カイト達は来た道を走って戻って行き、ジュンサーの後を追い掛け
る。だが人の足ではバイクとジープに追いつけるわけがなかった。
距離はどんどん離れていき、さらにシトロンが限界を迎えて立ち止
まってしまう。

「もう・・・ダメ・・・」

「お兄ちゃん・・・しっかりしてよ」

「大丈夫? シトロン」

「大丈夫か?」

四つん這い姿勢のまま動けないシトロンをサトシ達は心配して駆
け寄る。カイトも駆け寄ろうとしたが、突然近くの茂みの方へ歩き出

すシノンに気が付く。

「どうしたシノン?」

「何が・・・そこに・・・」

警戒しつつゆっくり歩くシノンの傍でキュウコンが彼女を守りながら一緒に近寄る。

茂みに落ちていたのは紫色のケージで、その中から黒い小さな虫ポケモンが出てきた。初めて見るポケモンでサトシが凶鑑を開いて調べる。

『コフキムシ。粉吹きポケモン。鳥ポケモンに襲われると黒い粉をまき散らす。体を覆う粉は体温を調整する』

「・・・コーフ!」

凶鑑の説明を聞いて再び視線を戻すとコフキムシは体から黒い粉を飛び散らして警戒する。それを見て一番近くにいたシノンが優しく微笑んで、刺激を与えないようにしながら手を差し出す。

「大丈夫。私達は貴方の敵じゃないわ」

「コンコーン」

微笑みながら優しく語り掛けるシノンの今の姿はまるでシロ姉と同じ女神のような感じだとカイトは内心想った。しかしコフキムシは突然その場に倒れてしまった。

「大丈夫!?!」

シノンは慌ててコフキムシを両手で抱き抱える。よく様子を見てみるとかなり弱っていた。

このままでは危険と判断して急いで近くのポケモンセンターに向

かった。幸運な事にポケモンセンターとの距離はそう離れていなかったのですぐに辿り着けて、ジョーイにコフキムシを見せる。

「ジョーイさん、お願いします!」

「はい! プクリン、治療の準備をお願いね」

「プクウ!」

預かったコフキムシはプクリンにより治療室に運ばれた。早く元気になるように願いながらカイト達は見送った。

「ありがとうございます。ジョーイさん」

「どういたしまして。ところであのコフキムシは、この地方のコフキムシではありませんね」

「えっ? そんな事が分かるんですか?」

「ええ、これを見てください」

受付の頭上に設置されてある大きなモニターの画面にジョーイは沢山のビビヨンの画像を映し出した。画面に表示されたビビヨン達はそれぞれ羽の模様が違っていた。

「ビビオンは地方ごとに羽の模様が違うんです。この他にももっといろいろな模様があるんですよ」

「すごい!」

「だからコフキムシにもそれぞれ微妙な違いがあるんです」

「なるほど・・・」

ジョーイの説明を聞きながらカイトは前にハクダンジムのジムリーダー・ビオラが使っていたビビオンを思い出した。あれは確か花園の模様の羽だったと思い出していたら突然背後から縄で腕を捕まえられてしまった。何が起こったのか分からなかったが、とにかく縄を外そうとした時にジュンサーと相棒のライボルトが目の前に現れ

て睨み付ける。

「観念しなさい！逃げようとしたり抵抗したりすると逮捕するわよ！」

「ライボオル！」

「……それ、言うの遅くないですか？」

普通なら縄を掛ける前に台詞を言うのではないかと内心ため息つきながら思った。

だがジュンサーは気にせず、縄をさらに引っ張る。カイトが踏ん張ろうと足に力を込めた時、腰に付けてあるモンスターボールの1つが勝手に開いて1体のポケモンが飛び出てきた。

「ツキー・ヒート」

「サンキュー、ヒトツキー！」

出て来たのはこの前仲間にしたヒトツキで、体を一振りして縄を斬ってくれた。解放された腕を擦りながらお礼を言うとヒトツキはカイトに怪我がないのを確認してから姿勢を整えて頭を下げる。ゲットしたから分かったが、こいつは形だけでなく性格までもが騎士なのだ。ゲットした時から主（カイト）を守って忠誠を尽くそうとする家来のような行動にポケモン達も含めた全員が内心呆れているのは余談である。

「くっ！やるわね。けどポケモンバイヤー・ダズの仲間である貴方達は絶対に逃がさない。ライボルト、行くわよ！」

「ライボォー！」

「『ポケモンバイヤー!?!』」

ジュンサーの言った「『ポケモンバイヤー』」という言葉聞いてカイトとシノンは驚きの声を上げる。

「そうか。あの男はポケモンバイヤーだったのか」

「兄様、これは放っておく事はできません。あの男を捕まえなくては！」

「ああ、あのコフキムシが元気になったらすぐに出掛けるとするか」

「貴方達・・・ダズの仲間じゃないの？」

「違います！誤解してますよ！」

2人の真剣な話し合いを見て、ジュンサーは疑問に思いつつ仲間ではないのかと尋ねる。それをシトロンが否定して必死に状況を説明する。それを聞いてジュンサーは俺達に謝罪する。

誤解が解けた事でその場の雰囲気は穏やかになり、それと同時に治療が終わって元気になったコフキムシをプクリンが運んできた。

「元気になりましたよ！」

「フムウフムウ！」

すっかり元気になったコフキムシは良い声を出し、それを聞いて全員安心した。喜び合っている中でコフキムシはじつとシノンを見つめて、それに気付いたシノンがにっこりと笑顔で「良かったね」と言うコフキムシはさらに嬉しい表情になった。

その後カイト達とジュンサーは近くのテーブルに移動して椅子に座る。そしてサトシが代表してジュンサーにポケモンバイヤーについて問い掛け、ジュンサーが詳しく説明する。

ポケモンバイヤーとは、世界中のポケモンコレクターの為に各地でポケモンを捕獲し、ネットで売り捌く者達の事である。連中の中には他人のポケモンを奪って売る者、野生のポケモンを乱獲したりする者などがある。

「ジュンサーさんが追っているダズと言う男は後者のタイプなんです
ね」

「ええ、そうよ。アイツはビビオンを専門とするポケモンバイヤーで、各地のコフキムシやコフーライを大量に捕獲しているの!」

「じゃあ、そのダズって人のアジトにはその捕まったコフキムシやコフーライ達が・・・?」

「全て閉じ込められていて、ビビオンに進化したら売り捌かれるの」

「何て言う奴だ・・・許せないな!」

「ピツカチュウ!」

ジュンサーの説明を聞いて皆が怒りを表している中、カイトとシノンには嫌そうな顔をして怒りを抑えながら溜息をつく。

「良い所だと思っていたカロス地方にもポケモンバイヤーと言う害虫がいるなんて、悲しい事だ」

「本当ですね。シンオウ地方ではかなり捕まえましたが・・・」

「貴方達2人、さつきもそうだけど随分とバイヤーについて詳しいのね」

「ええ、カロス地方に来る前・・・シンオウ地方にいた頃に何度か遭遇して捕まえてきましたから」

「確か・・・兄様と姉さんと私の3人で合わせて30人以上捕まえましたね」

「!」「ええ!」「!」

シノンの言葉を聞いてサトシ達は驚く。多くのポケモンバイヤーを捕まえてきた事もあるが、特に驚いたのはシノンについてだ。これまで一緒に旅をしてきて、バトルや経験からカイトが強いと思っていた。だがまさかシノンも同じくらい力を持っていたとは・・・彼女の凄さをサトシ達は強く感じ取るのであった。皆がそう思っていると知らないシノンは、テーブル上のコフキムシが気になって視線を移すと驚きの表情になる。

「あれ?コフキムシ、どうしたの?」

その言葉に反応してカイト達もコフキムシに視線を移す。コフキムシは落ち着きがなくテーブルの上を何度もぐるぐると動き回っていた。

そして突然動きを止めると小さな体が青く輝き始め、姿形が変化していった。どうやら進化が始まったのだ。光が収まった後、そこにいたのはコフキムシの時より大きくなって、黒い体が白い毛で覆われたポケモンだ。図鑑で調べてみるとコフーライと言うようだ。

進化の瞬間を見られた事に全員が興奮する。特にセレナとユリーカは初めてだったので、瞳を輝かせて感動すらしていた。

「良かったね。コフーライ」

「コフー」

進化した事を喜びつつシノンにはコフーライの頭を優しく撫でる。コフーライも嬉しそうな表情して鳴く。その鳴き声はポケモンがトレーナーに懐いている声と同じだった。

「(もしかしたらコフーライはシノンに・・・)」

これから起きる未来図を想像したカイトは嬉しそうに誰にも気づかれずに薄く笑う。すると突然服が引っ張られた感触に気が付いて振り向くとユリーカがこちらを見つめていた。

「どうしたユリーカ？」

「ねえねえ、カイトさん！折角だから進化について詳しく教えて！」

期待の籠った眼で見つめているユリーカ。別に俺じゃなくてシトロンやシノンに聞いても良かった気がする。サトシはどうだと？アイツだと分かりにくい説明をすると思う。まあ、特に断る理由もないし、そう思っただけからいろいろな物を取り出してから説明する。

「ポケモンの中には、一定の条件を満たすと別の形になる個体がいる。その事を進化と呼ぶんだ。その条件の例として、さっきのコフキムシのようにある程度まで育つと進化してコフーライになる。他にも今此処にある炎の石や水の石、月の石と言った進化の石を含めた特殊な道具を使ったり、特定の場所・時間帯で進化するポケモンもいるんだ。今俺の手持ちにいるヒトツキを育ててニダンギルに進化させた後、闇の石を使えばさらに進化させる事ができるんだ。一応ここまでだな」

カイトの進化の説明はとても分かりやすく、初めて聞くユリーカやセレナだけでなく他の者達も真剣に聞く。手持ちポケモンや先程靴から取り出した進化の石を見せたりと工夫をして説明する。それが終わると皆から拍手が送られた。

「カイトさん凄い！説明もとても分かりやすかった！」

「進化したって何か神秘的！カイトのおかげでよく分かったわ」
「本当です。流星は兄様です！」

3人に、特にシノンから熱い気持ちで褒められて上手く言えて良かった嬉しく思う。

その時、隣にいたグラエナがコフーライの体に何かが付いていることに気が付いて、その部分に口を近づけて傷つけないようしながら銜えてカイトに見せる。よく見てみるとそれは赤い光を点滅している十字型の機械だった。

「これは・・・おそらく発信機だな」

「僕にも見せて下さい」

カイトから譲り受けたシトロロンが虫眼鏡で見てその機械が電波を発信するチップであると言う。

それを聞いたジュンサーが、その機械は逃げた獲物を追跡するため

にダズが付けた発信装置だと分かった。そして今も発信し続けていると言う事はダズが取り戻しにこつち向かっている筈だ。

「なら逆にこれを利用するか」

「えっ!? どういう意味だカイト?」

「ああ、今までの話からダズはかなり強欲な奴だ。逃がしたコフーライを必ず取り戻しに来る。だから奴に罠を回収させてチップを発信する電波をつけて行けば、奴のアジトを突き止められる。突き止めたら奴を捕まえ、他にいるかもしれないポケモン達を助け出す」
「なるほどー! なら奴を捕まえるのは俺に任せてくれ」

カイトの作戦を聞いてサトシ達はやる気を起こし、さらにシトロロンが作っておいた『全方位型電波探知マシン』で追跡も可能になった。あと残った問題は……。

「誰が罠になるかですよね」

「だったら罠は俺がやるぜ!」

「いやいや、サトシでは大きすぎる(汗)。コフーライと同じくらいの者でないダメだ」

それから暫く話し合った結果、罠役はハリマロンに決まった。セレナのおかげで変装は完璧に仕上がり、何処からどう見てもコフーライにしか見えなかった。鳴き声も完璧である。

「とても似ている。セレナ、貴方良い腕を持っているね」

「ああ、凄いぜセレナ!」

「う、うん／＼／ありがとう／＼／」

シノンとサトシに褒められて頬を赤く染めてセレナは嬉しそうになる。

そしてコフーライに変装したハリマロンをケージに入れて元の場

所に戻し、カイト達は少し離れた茂みの中に隠れてダズが来るのを待った。暫く経つと案の定ダズがやって来てケージを回収してジープを走らせる。その後カイト達はシトロンのマシンを頼りに追跡を始めた。しかし期待を外さないシトロンのメカは途中で壊れ、ジュンサーとは別行動となった。カイト達はプテラ、ジバコイル、ヤヤコマ、ウォーグルを出して空からジープを搜索させて森の中を進む事にした。

暫くすると4体は引き返して来て、ダズのアジトが森を越えた岩肌の山を登った所にある倉庫だと分かった。倉庫の傍には乗っていたジープが停まっていた。

カイト達はプテラ達に労いの言葉をかけてからモンスターボールに戻し、周りの状況を確認する。

「見張りはいないようだな。ジュンサーさんは来たか？」

「まだ来ていないわ。取り合えず待機ね」

「待っている間に逃げられたらマズイ。行こうぜ！」

「待てサトシ。正面から行ったら捕まっているポケモン達が人質になる」

「今最も優先すべき事は、捕まっているコフライ達の救出です！」

「じゃあ、どうすれないんだ？」

「まずは中の様子を探ってから行くかどうか決めよう」

「分かった」

カイトの意見を聞いてサトシはケロマツを出す。

「ケロマツ、あの建物の中に人がいないか確かめて来てくれ。もし誰もいなかったら両手で丸のポーズをしてくれ」

「ケロ。ケーロ！」

指示を聞いた後ケロマツは素早く忍者のように気配を消しながら建物に向かう。それを見守っているとケロマツが合図のポーズをす

る。どうやらダズはいないようだ。

「よし！それじゃ全員音を立てず慎重にポケモン達を助けに行くぞ」
「」「」「おおう〜」「」

サトシが先頭で、俺が後ろから皆を守りつつ慎重に進む。その時、シノンの両腕に抱えられていたコフーライが何かにかが付いて鳴き声を出す。

「コフイー！」

「どうしたの？」

「ッ!?シノン！避ける!!」

目の前にいたシノンをカイトは横に突き飛ばす。同時に足元から罾が発動し、シノンとコフーライ以外の全員が網によって吊るし上げられてしまった。

「ああ！兄様！皆！」

「ありやりや！一人と一体がこぼれてしまっただず」

「ダズ・・・！」

カイト達を心配するシノンの背後からダズが現れる。どうやらどこかに隠れていたようだ。ダズはシノンが自分の事を知っている事に驚きつつも睨み付け、対するシノンもダズを睨み付けて怒りを込めつつ言う。

「兄様達を今すぐ下ろしなさい！」

「喧しいわ！この儂を騙くらかしやがって！これはお前らの仕業だずな？」

そう言つてダズが見せてきた物はケージの中で変装が取れたハリ

マロンであった。

「ハリマロン！」

「リマ〜」

「ガタガタ道で変装が取れたんや。まあええ、こいつも儂がすっかり売り捌いたるだず」

「そんなことさせません。貴方は私がここで捕まえる！」

普段なら絶対あり得ない程シンノンは頭に血が上っている。しかしダズは余裕そうな表情のままである。

「煩い！ さあ、早うコフーライを渡すだず！」

「ホール！」

ダズが繰り出したのは最初にジープに乗っていたポケモンだった。サトシが網の中でポケモン図鑑を出して調べる。

『ホルード。穴掘りポケモン。ホルビーの進化形。大きな耳は1トンを超える岩を楽に持ち上げるパワーを持っている』

シンノンは雄叫びを上げるホルードを冷静に見つめた後、コフーライを後ろに置いて腰に付けてあるモンスターボールからミニロップを出した。ミニロップは華麗に着地して決めポーズを決めた。

「ミニロップ。このバトル、絶対負けられない。全力で行くわよ！」

「ミニロー！」

シンノンの期待に応えようとミニロップは気合いを込めて振り向きバトルに備える。しかしバトル相手のホルードは、ミニロップを見て目がハートマークになっていた。

「ホルホル〜〜！」

「ミミ？ミロ・・・ミロツプ〜」

「ホル〜〜！！」

相手が自分にメロメロである事が分かったミミロツプはワザとらしくポーズを決めながらウインクをする。それを受けてホルードは完全にメロメロ状態となって、その場に倒れて骨抜きになってしまった。

「ホルード何やっているだず！さっさとアイツを倒すだず！！」

「ホル〜〜」

ダズが怒りながら何度も言うがホルードは倒れたままだった。この光景を見てシノンだけでなく、サトシ達も呆れて苦笑した。

「どうなっているんだ？」

「見た通りホルードはミミロツプの可愛さと美しさにメロメロになってしまったんだよ」

説明し終えたのと同時にダズがホルードをモンスターボールに戻す。戦えるポケモンがいなくなったと思ってシノンが降伏するように言う。

「手持ちポケモンが戦えない以上、貴方に勝ち目はない。諦めて捕ま
りなさい！」

「喧しいわ！儂にはまだこいつがおる。出てこいニドキング！」
「ニード！！」

ダズが出してきたポケモンは毒・地面タイプを持つドリルポケモンのニドキングだ。ホルードとは違ってニドキングはミミロツプを睨み付ける。今度の敵は強敵だと感じたケロマツがシノン達の元に向

かうが、シノンにはケロマツにカイト達を助けるように言う。彼女の頼みとミミロップの気合十分な意志を受けてケロマツは素直に指示に従って、カイト達の元へと向かった。

これから本格的なバトルが行われると感じてサトシ達は不安定な体勢の中、シノンにエールを送る。

「シノン！負けるな！」

「相手は強敵です。気を付けて下さい！」

「シノンお姉ちゃん！頑張つてえ！」

「そんな奴に絶対に負けないで！」

「ピカチュウ！」

「ガウガウツ！」

「コンコーン！」

仲間や最愛のパートナーの言葉を聞いて心の底から勇気と力が湧いてくるシノンだが、まだ最愛の人からエールを送られていない。それに気が付いてシノンは自然に網の方を振り向く。するとその中で最愛の思い人・カイトと目が合う。

「シノン！俺はお前が勝つ事を絶対信じている！」

「!!・・・はい！兄様！」

その言葉を聞いてシノンは一番最高な力を貰った感じをしながらバトルに挑む。

「ミミロップ！ピヨピヨパンチよ！」

「ミミィ！」

「ニドキング！行つてもうたれ！へドロ爆弾や！」

走り出すミミロップにニドキングは口から『へドロ爆弾』を放つ。ミミロップは素早い動きで全ての弾をかわしてパンチを当てる。し

かしニドキングは両腕でガードしてダメージを軽減する。

「メガホーンだず！」

「ニドオー！」

額の角を大きくして光らせ、ニドキングは勢いよく突進する。ミミロップは再び素早い動きで避ける。それを見てダズは徐々イラつくと同時にある命令を出した。なんとミミロップではなく、後ろにいるシノンとコフーライに攻撃させたのだ。突然の事だったので2人は動けず、技が命中すると思った時、ミミロップが2人を守ろうと自ら飛び込んで『メガホーン』を受ける。それにより右足を痛めてしまった。

「ミミロップ！大丈夫？」

「ミ、ミミロ・・・」

「これでもうちよこまかと動き回る事はないだず。次は二度蹴りだず！」

足を痛めて動きにくくなったミミロップは『二度蹴り』を避けられず、腹と頭に直撃してしまう。効果抜群の技だが、ミミロップは戦闘不能にはならなかった。負けないと言っているかのようにダズ達を睨み付ける。

「そんな状態で随分粘るだずな。いい加減諦めたらどうだず？」

「いいえ、諦めません。私とミミロップは・・・どんな事が起きようと絶対やり遂げます！」

「ミミロ！」

「ヒユウ・・・」

2人の折れない心を見てコフーライは眼を輝かせる。対してダズは嫌そうな表情になり、一気に止めを刺そうとニドキングに指示を出

した。

「これで終わりだぞ！ニドキング、大地の力！」

「ニードオー！」

命令を聞いたニドキングが腕を地面に突き刺すとそこから強力なエネルギーが地震を起こしながらミミロップに迫った。それを見てサトシ達は焦燥に満ちた声を出す。カイトとグラエナだけは薄く笑っていた。シノンとミミロップの眼から闘志が消えていなかったからだ。

「ミミロップ！飛び跳ねるでかわして！」

「ミミロー！」

右足の痛みを我慢しつつミミロップは技が決まる寸前大きくジャンプする。動けないと思っていたダズはこれを見て驚きのあまり指示を出すのを忘れてしまう。その隙をシノンは見逃さなかった。

「ミミロップ！そのまま冷凍ビームよ！」

空中から放たれる『冷凍ビーム』を受けてニドキングは凍り付いてしまう。さらにそのままミミロップの『飛び跳ねる』を食らう。強力なキックで氷は砕けるが、ダメージによりその場で膝をつく。

「ええい！ニドキング、さっさと立てへドロ爆弾や！」

「ニ、ニードオー！ニード！」

必死に立ち上がってニドキングは技を放とうとする。しかしダメージにより動きが鈍い今絶好の攻撃のチャンスだがミミロップは攻撃しなかった。否、攻撃できなかった。先程の攻撃で右足の痛みが限界に達してしまっただけだ。放たれる『へドロ爆弾』から守ろうとシ

ノンは、動けないミニロップを庇うように前に立つ。

「シノン！ミニロップ！避ける!!」

流石のカイトも焦り、高い声を出して2人に逃げるように叫ぶ。だが『ヘドロ爆弾』は勢いよく2人目掛けて放たれた。その時、シノンの影からコフーライが飛び出して『守る』を発動して2人を守った

「コフーライ・・・」

驚くシノンの前でコフーライは、白い毛を逆立てて粉を飛ばして戦う意志を見せる。ダズはコフーライの回収を諦めてニドキングに攻撃をさせる。しかしコフーライは『守る』で攻撃を全て防いだ。そして次に『糸を吐く』でニドキングの体をグルグル巻きにするが、ニドキングは両腕に力を込めて強引に振り解いた。相手の攻撃に備えてシノンが2体に指示を出そうとした時、突然コフーライが激しく動き回り始める。それを見てシノンは察する。

「進化が始まる・・・!」

コフーライの体が光り出して形が徐々に変わっていく。触角と大きな羽が出て、優雅に羽ばたいて空へ飛ぶ。

「ビヨーン!」

「ビビオンに進化した。しかもあの羽の色と模様・・・ビオラさんのビビオンと違う」

このビビオンの羽の色と模様はポケモンセンターで見た種類の1つの雅の模様であって、青紫色で不思議な模様に誰もが美しいと思った。

「これやあーこの輝きがビビヨンの値段を吊り上げるんやあ！コフキムシとコフーライはまさに金の生るポケモンだずなあ！なははははh
「黙りなさい」・・・あん？」

ポケモンバイヤーのダズにとつてビビヨンの美しさは金儲けと言う自身の強欲を満たしてくれる材料しかない。それにシノンは腹の底から怒り出し、冷たい眼で睨みつつ言う。

「これ以上貴方の好きにさせないし、相手をする気もない。すぐに終わらせる」

「なんやとお!?やれるもんならやってみやがれ！ヘドロ爆弾や！」

ニドキングは口から再び毒の塊を撃ち出した。だがビビヨンが『神秘の守り』で防ぎ、素早く接近して羽を羽搏かせて『痺れ粉』をニドキングに浴びせる。麻痺状態になったニドキングは地面に倒れて動けなくなつた。

「ああ!?ニドキングが！ほんなら儂が捕まえたるだず！」

「ミミロップ！冷凍ビーム！」

懐から捕獲用ネットを取り出してビビオンを捕まえようとするとダズに容赦なく『冷凍ビーム』を放つ。それによりこの場に美しくないが見事な氷像ができた。それと同時にジュンサーがタイミング良く到着してダズは逮捕された。

その後夕陽が沈む時間帯になってカイト達を網から助けて、コフーライ達を全て檻から解放する事ができた。

仲間と嬉しそうに会話するビビヨンの声を聞いて、カイトは穏やかに気持ちになりながらサトシ達に翻訳する。全員自分の事のように嬉しく思う。

するとコフーライ達の体が一斉に光り出して進化した。様々な色

と模様が一気に目の前に広がって夕陽の彼方へ飛んでいく光景はまさに絶景だった。

「良い光景だな．．．」

「本当ですね兄様」

カイトの隣に立つシノンには両腕を彼の腕に組んで抱きつく。先程とは違い彼女のとても優しい表情を見てカイトはホツとする。ダズを氷像にした時の彼女を見てサトシ達が恐怖を感じて網の中で震えたのだ。彼らを落ち着かせるのは苦勞する。

「ところでシノン．．．さつきから上でビビオンが待っているぞ」「えっ?」

シノンが顔を上げるとそこにはあのビビオンが仲間を追わずその場にじっとしていて、彼女を見つめ続けていた。

「貴方は行かなくていいの?もう自由なのよ」

「ビヨオー!ビビヨ」

「あの様子．．．言わなくても分かるなシノン?」

ビビオンの眼差しとカイトの言葉の意味が分かったシノンは鞆から空のモンスターボールを取り出してビビオンに見せる。

「私と一緒にいこう。ビビオン」

「ビヨオー!」

嬉しそうに鳴き声を上げるビビオンの頭にシノンはそつとモンスターボールを当てる。そしてビビオンが入った後すぐにモンスターボールは動きを止めた。

「ビビヨン！ゲットです！」

「コーン！」

「おめでとうシノン」

「ガウガウウー！」

新しい仲間ができた事にカイト達から祝いの言葉を貰いつつ、シノンはビビヨンをボールから出して自身の頭に乗せながら友好を深めるのであった。

新タイプ・フェアリータイプ

シヨウヨウシティに向かっていたカイト達だったが、途中森の中で出会った朱色の髪を持つ女性にバトルを挑まれた。バトルと聞いてサトシがすぐに名乗り出る。

「目と目が合ったらポケモンバトル。それがトレーナーのルールよ」

「分かってます！俺はサトシ、こっちは相棒のピカチュウです！」

「ピツカチュウ！」

目と目が合ったらって……いつの間にこの世界はゲームの世界になったのだ？俺が不思議に思っている間も話は進む。初めて聞くルールに驚くセレナにシノンとシトロンが苦笑しつつ説明した。このルールは好戦的なトレーナーに多くて、2人にとっては馴染みのないルールだ。

「私はプルミエ！出てらっしゃい、ニンファイア！」

「ファイアア！」

出てきたポケモンは可愛らしい声とりボンの様な飾りから伸びる触角が揺れて、四足歩行であって優雅で水色の瞳が特徴のポケモンだった。この愛らしい姿を見て女子達は揃って頬を緩ませる。

「初めて見るポケモンだ！なんかエーフィに似てるな」

『ニンファイア。結び付きポケモン。イーブイの進化形。大好きなトレーナーにりボンの様な触角を巻き付けて一緒に歩く』

「やはりイーブイの進化形だったんだ」

「ちなみにニンファイアは『フェアリータイプ』のポケモンなんですよ」

「フェアリータイプ？」

「カロス地方で初めて発見されたタイプで、ポケモン学会によって新

たにフェアリータイプに分類されるポケモンが多くいるのです。ちなみに私のサーナイトとユリーカちゃんのデデンネもフェアリータイプなんですよ」

「そうなのか。フェアリータイプ、面白いぜ」

ポケモン図鑑の説明に加え、シトロンとシノンの分かりやすい説明を聞いてサトシはすぐに理解し、改めてバトルに集中する。

「初めてのタイプ、初めてのポケモン、この勝負望むところだ！ケロマツ、君に決めた！」

「ケロケロ！」

ボールから出てきたケロマツとニンフィアを見てカイトはどちらも技も相性も五分五分であると判断する。そして互いにポケモンを出して視線を交じり合わせた事でこの場の空気が変わり、バトルが開始……ではなく、プルミエがサトシに向かって人差し指を一本立てて見せる。

「1つ約束」

「ん？何ですか？」

「私がこのバトルに勝ったら、付き合ってもらおうよ！」

「えっ？サトシと付き合う!?」

その言葉に激しく反応して驚き動揺する少女がいた。サトシに恋するセレナだ。手で口を隠して胸を押さえつつ何度も身体を左右に振る。それを見てシノンはセレナに落ち着くように言い聞かせてバトルを観戦した。

「いいですよ！でも俺達は負けません！行くぞケロマツ！泡で攻撃だ！」

「ニンフィア！妖精の風よ！」

勢いよく空高く飛び上がったケロマツは大量の『泡』を繰り出すが、ニンフィアの『妖精の風』により全て弾き返された上にケロマツ自身も背後にあった木の幹に背中から叩きつけられた。

「ケロマツ！立てるか!?!」

「ケ、ケロ」

「ニンフィア！ムーンフォース！」

「フィアー！」

月のエネルギーを集めて球にしてケロマツ目掛けて放つ。サトシは冷静にケロマツに跳べと指示を出して回避させる。そして技が木の根元に当たった事で起きた衝撃で落ちてくる木の実を利用して攻撃する。いくつかの木の実を蹴ってニンフィアの方へ飛ばす。迫る木の実に対してニンフィアは触角を素早く動かして全て弾き飛ばすが、これは罠であった。攻撃を防いだ隙についてケロマツはニンフィアの頭上から落下のスピードも加えた『水の波動』を打ち込んでダメージを与えた。

「よし！一気にフィニッシュだ！」

「ケーロー！」

「ニンフィア！メロメロ！」

「フィアー！フィ・・・」

ダメージを負いつつも体に付いた水を払ったニンフィアにプルミエが薄く笑いながら指示を出す。真っ直ぐ走って迫って来るケロマツにニンフィアは可愛い表情でウインクをする。するとニンフィアから出たハート模様がケロマツを取り囲み、吸い込まれる様に体へ吸収されてケロマツの体が一瞬ピンク色になると・・・。

「ケロロー!!」

いつもクールな雰囲気纏って真面目なケロマツとは程遠い、浮かれた高い声に目がハートになってニンフィアに釘付けになって骨抜き状態であった。完全に『メロメロ』の効果を受けてしまったようだ。サトシが必死に呼び掛けるが、これを受けてしまったら相手を倒すか交代しない限り効果が解かれることはない。プルミエが薄く笑ったのは『メロメロ』と言う切り札があったからか。

「今よ、ドレインキッス！」

「フィアー！」

駆け寄って近づいたニンフィアに頬をキスされるとケロマツは全身真っ赤に染まりつつ倒れる。『ドレインキッス』は相手の体力を奪う技で、それによりエネルギーを奪われたケロマツは倒れて戦闘不能になってしまったのだ。それと同時に『メロメロ』の効果も消えた。

「ケロマツ！大丈夫か!？」

「ピカー！」

「ケロ・・・」

「体力を奪われて戦闘不能になったんだ。もうバトルは続けられないな」

そう言つてカイトは鞆から木の実を取り出そうとするが、その前にニンフィアと歩み寄ったプルミエがオレンの実を投げ渡してきたため使わずに済んだ。サトシはお礼を言つてオレンの実をケロマツに食べさせる。その後プルミエがニッコリと笑みを深くしつつサトシに先程の件について言う。

「私の勝ちよ。約束通り、付き合ってもらうわ。あ、それと貴方達にも付いて来てもらうわ」

「俺達も？」

プルミエはサトシだけでなく、カイト達にも「付いて来て」と言う。どうしてなのかと考えるが、カイトが「とにかく付いて行ってみよう」と言つて5人はそれに従つてプルミエの後に付いて行つた。

それからカイト達が連れて来られた所は森を抜けた先にある幼稚園だった。

「ただいまー！」

「プルミエ先生！」

「お帰りなさい！」

園内の外で遊んでいた子供達はプルミエの姿を見ると一目散に集まつて来た。どうやら彼女は此処の先生をやっているようだ。

「皆、良い子にしてた？」

「うん！仲良く遊んでたよ！」

「ねえねえ！今日はどんなポケモンを・・・あ！ピカチュウだ！」

「グラエナにキュウコンもいる！」

園児達はプルミエから離れてピカチュウとグラエナとキュウコンの周りに集まる。突然囲まれて驚いたピカチュウはサトシの体をよじ登つて頭の後ろに隠れるが、グラエナとキュウコンはこれまでの経験から慣れていて平気な様子だ。さらに子供達はケロマツにも気づくが、ケロマツは囲まれる前に避難していた。

そしてプルミエと物腰が柔らかい初老の女性・園長先生から此処に連れて来られた理由が、園児達に見せる為のポケモンを探していた時に偶然カイト達に出会つて連れてきたと教えてくれた。

「なるほどー！」

「そんな事なら最初から言ってくれば良かったのに。なあ、ピカ

「チュウ？」

「ピカー！」

全員が納得している中、セレナだけは内心ホツとしていた。

「付き合うって、そういう意味だったんだ……」

普通に考えてみれば当たり前の事だが、サトシの事が大好きで堪らないセレナだから勘違いしてしまうのは仕方のない事である。

それからシトロンの提案により、折角だから全員の手持ちポケモンを全て出して子供達と遊ばせる事になった。そして空高く投げたモンスタールールから出て来たポケモン達を見て子供達は目を輝かせて興味津々に近づいて行つた。

子供達の後ろから観察してみるとやはりグラエナを始めとするカツコイイポケモンには男の子から人気があり、キュウコンを始めとする可愛いポケモンには女の子から人気があつた。特に一番人気があつたのはゾロアで、可愛いだけでなく化ける能力と言葉を喋れる事もあつて大人気だ。本人も子供たちと遊べて嬉しそうだった。

子供達は気に入つたポケモンの頭や尻尾などを触り、ポケモン達も子供達を傷つけないようにしながら相手をしてあげる。

その様子を見て笑っていた時カイトは何処からか視線を感じた。周りを見渡して園舎の柱にニット帽を被っている男の子を見つけた。サトシも気づいたらしく声を掛けようとするが、その前に男の子は慌てた感じで逃げてしまった。

「あの子は？」

「ランディよ。呼んできましたよー！」

園長先生が呼びに向かった後、プルミエがカイトの隣にやって来てランディについて話す。

「本当はポケモン大好きなんだけど、ちょっと怖がりさんでね」
「そうですか・・・フム・・・」

あの子の様子を見て俺は過去に何かあったからポケモンが怖くなったんだと予想する。また、俺達以外にランディの事を見ていたポケモンが1体いた。そいつは静かにランディの元へ向かって行った。その頃、別の所でも問題が起きていた。ニンフィアとケロマツである。先程のバトルで『メロメロ』を受けた事にケロマツは不貞腐れて、ポケモンフーズを渡してくれるニンフィアの親切に対してそっぽを向く。

「そろそろ機嫌直せよ、ケロマツ」

「ケロオ」

「この様子ではまだまだ機嫌が悪そうだな」

サトシに慰められてもケロマツは不機嫌な表情のままだった。そこへ園長先生がランディを連れて戻って来た。

「ほら、ポケモンがいっぱいいるよ」

「う、うん・・・」

素直に頷くがランディは顔を俯いてニット帽を深く被ってポケモン達を見ている。あの様子から見てやはり怯えているな。サトシがケロマツを両手に抱えて「友達にならないか？」と優しく話しかけても怖がって断ってしまう。それを見てシノンが優しく笑い掛けながら理由を訊ねてみると以前、ハネッコに突然攻撃された事を教えてくれた。

「(それが原因でポケモンが怖くなったと言う訳か。だがハネッコは人懐っこいポケモンで、何の理由もなしに攻撃する筈がない・・・)」

カイトがそう考えている間にもサトシとシノンが、ポケモンが怖くない事を教えるがランディは全ての言葉を拒絶する。すると突然ランディの背後から鳴き声が聞こえた。

「ハブブー！」

「えっ?」

鳴き声を聞いたランディが恐る恐る後ろを向くとそこにはハブネークがいた。

ハブネークは優しい表情をしながらランディの体に自分の長い体を巻き付けようとする。

「うわああ!!」

それに驚いたランディは慌てて走り出し、目の前にいたサトシの後ろに隠れるが肩にいたピカチュウを見て離れて今度はカイトの後ろに隠れた。右側にグラエナがいたから左足に顔を埋める。

カイトは苦笑しつつ足に抱き付いているランディに謝りながら話しかけた。

「驚かせてごめんな。あのハブネークは俺のポケモンで、ランディみたいに1人で寂しくしている子を見るとすぐに近づいて友達になろうとする。自分と同じだと思って・・・」

「えっ・・・?」

顔を上げて見つめるランディの目線に合わせようとカイトはその場に座る。2人の話し合いを見てサトシ達も静かに見つめて聞く。

「ハブネークは俺がゲットするまでは、ずっと1人ぼっちだったんだ。他のポケモン達はハブネークの姿を見て怖がり、時には攻撃までした。また、人間からも見た目から凶暴なポケモンだと思われて近寄っ

て来なかった。その為に今のランディみたいに誰も信じられなくなってしまうた・・・」

「今は平気なの？」

「勿論だ。今は俺やグラエナ達と言う信じられる友達がいるからな」

話を聞いたランディはもう一度ハブネークを見つめる。ハブネークは優しい表情のままランディを見つめている。少し警戒心が薄いで、触ろうと恐る恐る手を伸ばそうとするが途中で止ってしまう。それを見てカイトはランディの頭を撫でながら言う。

「それじゃ、ランディ。ポケモンに必死に触れようと頑張る君に俺が勇気を与えよう」

「勇気を？」

不思議に思っているランディに俺はバツクから笛を取り出す。その笛は手作り製だが、よく手入れされていてとても綺麗な楽器だった。カイトがそれを優しく吹いて演奏を始める。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

その演奏は優しい音色ながらまるで一步前に進められそうな気持ちになる感じで、その場にいる全員がとても心地良い気分になった。演奏が終わって周りから拍手が上がり中、カイトがランディにもう一度触るように進めた。

先程の音色がまだ響いている状態でランディがハブネークに向けて手を伸ばした時、突然園内に1台のトラックが入って来た。トラックはカイト達の目の前で停車して、荷台が開くと中には赤い髪と紫色の髪の2人の女性とクマシユンの着ぐるみを着た人(?)がいた。

「はーいー！良い子の皆、こんにちはー！」

「うちら・・・いや、私達は旅のサーカス団です！」

「私達の素晴らしいパフォーマンスをどうぞご覧ください！」

楽しい音楽が流れるのと同時に彼女達は、持っていたカラーボールでパフォーマンスを始める。さらにトラックの前にツンベアーの着ぐるみを着た2人の男性がやって来て、カラフルなボールが入った籠を持って子供達を誘い出す。それにより子供達は興味を持ち、トラックの方に走り出す。その後をサトシ達やポケモン達も付いて（一部無理やり）行き、カイトとシノンも続こうとしたが首を捻って不思議に思っている園長先生とプルミエの様子を見て足を止める。

「どうかしましたか？」

「今日はイベントの予定なんて入れていなかった筈なんだけど・・・」  
「えっ!? それじゃあの人達は・・・?」

まさかと思いサーカス団の人達をよく観察してみて気づいた。アイツらはロケット団だ。慌ててサトシ達に降りるように言うとしたが遅かった。サーカス団の人達に渡されたカラフルボールを全員が上に投げた瞬間、ボールが破裂して黒煙が発生し、辺りを覆い尽くしてしまった。突然の事に驚いて子供達が騒ぎ出す中、トラックの外にいたカイト達がサトシに声を掛ける。

「サトシ！何が起きたか調べる前に子供達をトラックから降ろすんだ！」

「ああ、皆足元に気を付けて降りるんだ！」

カイト達の指示に従って子供達を順番にトラックから降ろさせる。そして最後まで荷台に残っていたサトシとピカチュウ、ニンフィアが安全を確認して降りようとした時、真上から網状の特殊なカプセルが飛んで来て2体を捕らえた。その衝撃でサトシがトラックの外へ吹っ飛ばされ地面に体を打ちつける。

「サトシ！大丈夫!?!」

「ニンファイアが!」

「今助けます。行け、グラエナ!」

「キュウコン！貴方もよ!」

ピカチュウ達を助けようとグラエナとキュウコンが技を放とうとした時、荷台の照明が一斉に光り出した。あまりの眩しさに2体が目を瞑った瞬間、同じカプセルが飛んで来て2体も捕らえてしまった。

「しまった、グラエナ!?!」

「キュウコン!?!」

「どうなっているんだ!?!」

助け出そうとするあまり周りの状況を見ていなかった事に自分を責めたが、それよりも4体を助ける事が先決だと言いついて聞かせて他のポケモン達に指示を出そうとするとトラックの荷台が閉まり始める。その上には先程のサーカス団の人達・・・に変装したロケット団が正体を現して立っていた。

「どうなっているんだと聞かれたら!」

「黙っているのが常だけどさ!」

「それでも答えて上げるが世の情け!」

「世界の破壊と混乱を防ぐため!」

「世界の平和と秩序を守るため!」

「愛と真実の悪と!」

「力と純情の悪を貫く!」

「クールでエクセレントであり!」

「ラブリーチャーミーな敵役!」

「ムサシ!」

「コジロウ!」

「ミズナ!」

「ロバル！」

「宇宙と銀河を駆けるロケット団の4人には！」

「ホワイトホールとブラックホール、2つの明日が待っているぜ！」

「にやーんてニャー！」

「ソオーナンス！」

「イートマ！」

「エアアー！」

お決まりの長い台詞を言うロケット団。初めて見るプルミエにサトシが奴らについて説明する。

「ロケット団！ピカチュウ達を返せ！」

「あらく、それは無理な相談ね」

「その通り！我らは人のポケモンを奪い取る悪い奴らだからな」

「皆さんのポケモンは有効に使わせてもらいますので、ご安心してください！」

そう言ってロケット団はトラックに乗り込んで発進した。

「逃がすか!!」

「待てえ!!」

走り出すトラックを見てカイトとサトシはすぐに追いかけて、荷台の取っ手にしがみつく。その後をヤヤコマ、プテラ、ジバコイル、ヒトツキ、ウオーグル、ビビヨンが必死について行く。2人の身を心配してシノン達が叫ぶ。

「サトシ!!」

「兄様!!」

不安な表情をする2人の後ろで園長先生がランデイの名前を言う。

それに気が付いて全員が探すが何処にもいなかった。そして全員が一斉にトラックの事を頭に浮かべ、プルミエが車で追い掛けると言う。とシノン達も一緒に付いて行くと行って車に乗り込むのであった。

その頃、カイトとサトシはスピードを上げるトラックの荷台にずつとしがみ付いていた。これ以上スピードが上がって落ちたりしたら大変だとプテラ達は早く追い付いて助け出そうとする。

だがそれを見逃すロケット団ではない。

「ちよつと、後ろに何かいるじゃーん」

「何？まったくしつこい奴め。これでも食らえ」

プテラ達に気が付いたミズナがゴジロウに言う。と彼はハンドルのすぐ横にあるボタンを押す。すると荷台の一角に取り付けてある左右のパイプから泥玉を何発も発射される。突然の事でしかも大量の泥玉に避ける事ができなかつた。プテラ達は顔面に命中されてしまい、飛行バランスが崩れて追跡不可能になってしまった。

「ヤヤコマ達が・・・！」

「こうなつたら俺達だけで助け出すしかない。サトシ、その扉から荷台に入るんだ」

「ああ、待ってるよ」

ロケット団にばれない内にと焦る気持ちを抑えてサトシは取っ手を握って扉を開け、中に忍び込む。それに続いてカイトも中に入る。荷台の中を見るとランデイ、ケロマツ、ハブネークがいた。

「ランデイ、ケロマツ、ハブネーク・・・何で此処に!？」

「まさか3人も逃げ遅れていたのか?！」

「サトシ！カイトさん！」

「ケロケ！」

「ハブブ！」

扉を閉めて彼らに怪我がない事を確認して安心させた後、2人はそれぞれのパートナーの元に寄る。

「ピカチュウ、ニンフィア。すぐに出してやるからな」

「グラエナ、キュウコン。安心しろ。俺達が必ず出す」

彼らの優しい声を聞いてピカチュウとグラエナ、キュウコン、さらに別のトレーナーのポケモンであるニンフィアまでも安心した表情になった。それを見てランディは自然と2人に尊敬の眼差しを送るのだった。そしてカイトはサトシとケロマツとハブネークに言う。

「いいか、合図をしたら全員で一斉にカプセルに体当たりするぞ」

「分かった！行くぞ、ケロマツ！ハブネーク！」

助走をつけて合図を出すと4人は同時にニンフィアを閉じ込めているカプセルに体当たりをした。しかしカプセルは思った以上に頑丈で壊れなかった。

「何て頑丈なんだ！頼む、ランディも手伝ってくれ」

「え、僕？」

サトシがそう言うと言ランディはとても驚いた表情でこちらを見る。

「・・・でも僕、怖がりだし、役に立つ「お前はもう怖がりではない」えっ？」

ニット帽を掴んで深く被ろうとするランディにカイトが優しく勇気を既に持っていると言う。そう言われて先程の笛の音を思い出したランディは少し震えながらもゆっくりと立ち上がる。

「本当に勇気を、持ったのかな・・・？僕、役に立つ事ができるかな？」  
「できるさ。ランディの心にニンフィアを助けたいという強い気持ちがあるなら絶対に力になる」

ランディはニンフィアを見つめる。今のニンフィアは捕まっている状況を不安に思っただけで怯えていた。

「プルミエ先生のポケモンは僕の、皆の友達だ・・・！助けたい！」  
「そうこなくっちゃ！」

決心を固めたランディの肩にサトシが手を置く。カイトも優しく頷いて同じように肩に手を置く。迷いが消えたランディはとても頼もしく見えるのであった。

そしてランディも加わった5人で体当たりするとカプセルが壊れてニンフィアを解放させる事ができた。解放されたニンフィアは、リボンの触手でランディの頭を撫でながら嬉しそうに鳴き声を出す。

「えっと・・・」

「ありがとう！と言っているんだよ」  
「フィア！」

ニンフィアの言葉の内容を伝えるとランディは笑顔になった。

それからグラエナ達も全員助け出し、彼らにもお礼を言われたランディは嬉しさのあまりか、自分からポケモン達に触りに行った。その様子を見てカイトはもうポケモンを怖がる事はないなど内心想った。

それから少し経つとトラックは森の中にある錆びれた倉庫の中に止まった。運転席から降りて来たロケット団の5人は顔を合わせて作戦の成功を喜んだ。



「ピカチュウ、グラエナ、キュウコン、ニンファイアのゲットを早速サカキ様に報告しないとね」

「だニャー!」

「そして無事にポケモン達を送って任務を終えたら本日は我々の悲願達成を祝すパーティーを開きませんかとね」

「最高じゃくん!ロバルの作り料理は美味しいから沢山食べたい!」  
「俺もだ!絶対にやろうぜ!」

気分良く話し合いながらポケモン達を運び出そうとニャースがトラックの荷台を開かせる。そして全員が荷台の中に視線を移すとそこには予想していなかった者達が居て、さらにポケモン達が解放されている事に驚く。

「あ・・・ああ!?ジャリボーイとダークボーイ!」

「ニャニャー!?!」

「どうして此処に!?!」

「どうやってカプセルを!?!」

カイト達は荷台から飛び降りて驚いているロケット団と向かい合った。

「ロケット団!ピカチュウ達は返してもらった」

「それと・・・いつから俺はそんな名前と呼ばれるようになったんだ?」

「ああ・・・あんたの呼び名はトラックの中で決めたのよ!」

「ミズナ達がいつも悪タイプのポケモンを使うって言ってたからな」

「なるほど・・・それなら納得だ。では答えが分かった以上俺達は帰らせてもらう」

「そうはいかないよ!ここでもう一度捕まえてやるじゃくん」

諦める気はないロケット団はそれぞれの手持ちポケモンであるバ

ケツチャ、マリーカ、シシコ、カメテテを出して『シャドーボール』、『サイケ光線』、『火炎放射』、『水鉄砲』を同時に放って攻撃してきた。

「ハブブ。ハープネー！」

「ファイア！」

攻撃が迫る中、ハブネークはニンファイアを見てランデイを守ってくれとお願いする。それを聞いてニンファイアはすぐに承諾し、触角でランデイを守るように包む。また同じようにカイトとサトシも2人を守るように前に立ち塞がる。

「ケロマツ、水の波動！ピカチュウ、10万ボルト！」

「グラエナ、悪の波動！ハブネーク、ヘドロウエーブ！キュウコン、火炎放射！」

グラエナ達の技で相手の技を相殺し、それによって発生した煙で何も見えなくなった隙についてカイトとサトシは同時に指示を出した。

「ピカチュウ、エレキボール！」

「グラエナ、バークアウト！」

強力な雷の玉と怒鳴り声と共に地面の上を猛スピードで放たれた紫色の玉が混ざり合って合体技となり、ロケット団に命中して倉庫の屋根を打ち破って飛ばされた。

「！！「やな感じー！！」！！」

「ソーナンス！」

お決まりのセリフが言い終えた後、倉庫の中にプテラ達がやって来た。ヤヤコマはサトシの腕に止まり、プテラとジバコイルとヒトツキはカイトの目の前に降りて来た。

そして後から車が2台入って来て、セレナとシノンがすぐに飛び出して2人の無事な姿を見て安心する。

「サトシ！無事だったのね」

「兄様！怪我はありませんか？」

「ああ、皆無事だ」

「よし！皆帰ろうぜ」

サトシの言葉に全員が元気よく返事をして幼稚園に戻る。この時、車の人数が定員オーバーの為にカイトがランディを誘って、一緒にプテラとジバコイルに乗った事はプルミエ達を驚かせたのは余談である。

そして幼稚園に戻った後、ランディがポケモンを怖くなくなった事に園長先生を始め園児達全員が喜んだ。それから別れの時間になって、見送りの際にランディはポケモントレーナーになると決意する。それに対してサトシが次に再会した時はバトルしようと約束して握手する。

すると今度はカイトの所へやって来る。

「カイトさん、今度会ったらまたポケモンに乗せてくれて、バトルしてくれる？」

「ああ、いいとも。俺は1歩先に進んでいる。お前が強くなるのを待っているからな」

「ガウ！」

「うん！」

別れの挨拶を終えてカイト達は次の目的地に向けて出発した。プルミエ達はカイト達の姿が見えなくなるまで手を振り続けた。

その後園児達はそれぞれに家に帰る為に園内に戻って支度を始める。すると1人の園児がある雑誌を見て声を上げた。

「ブルミエ先生！これを見て！」

「どれどれ・・・えっ!？」

園児から渡された雑誌を見てブルミエは驚いた。なんとその雑誌の一面にカイトが映っていたのだ。ランデイを始めとする園児達もそれを見て驚く。

そのカイトの写真の隣には『ダークマスター・カイト！カロスリーグに挑戦する！』と書かれていた。これを見たランデイはさらにカイトに憧れて、必ずトレーナーになって強くなる事を改めて決意するのであった。

## 対決！少年忍者&パルファム宮殿に響く笛の音

カロスリーグに出場する為に次のジムがあるシウウヨウシテイに向かってカイト達は旅を続けている。旅の途中でいろいろな事があつた。

ある日は古びた屋敷で雨宿りするとじせいポケモンのニヤスパーに出会い、その子の思い出話を聞いて新しい友達と心を繋げる思いに触れる事ができた。

次の日は食べ過ぎで太ったハリマロンをダイエットさせる為にグラエナ達の技特訓(?)の相手をさせて痩せさせる事に成功した。(だがハリマロンは暫くの間ずっと青い顔をしていた)

その次の日には、とあるトレーナーのピチューとユリーカのデデンネが入れ替わる騒動が起きた。必要品を買う為に1人別行動をしていたカイトがデデンネと一緒にいた女の子を見つけ保護し、スピアー達から守ってあげたら「お兄ちゃん」と呼ぶくらい懐いてしまった。それを見てシノンが不機嫌になって暫くご機嫌を直す破目になった。

それから2日後、近くに滝がある場所でカイトはサトシ達を鍛えながら特訓しているとケロマツの進化形のゲコガシラを連れた忍者サソパイと出会い、バトルする事になった。

サトシはケロマツで挑むが良いところまで行って負けてしまった。次にカイトがバトルする事になり、ヒトツキを出してバトルを開始した。

「今度もそつちから来るでござる」

「(舐められたものだ。ちよつと本気を出すか!)・・・では遠慮なく。ヒトツキ、切り裂く!」

「ヒートトートー!」

「なつ、速い!?煙幕で避けるでござる!」

「ゲロー!」

鋼タイプだからスピードが遅いと思っていたサンペイにとって、カイトのヒトツキが普通よりも素早い動きをするのを見て動揺するが、なんとか指示を出して攻撃を避ける。しかし、その安心した隙をカイトは見逃さない。

「ヒトツキ、相手が着地した瞬間に金属音！」

着地した瞬間で一瞬動きが止まったタイミングでヒトツキは『金属音』を放つ。それによりゲコガシラは膝について苦しむだけでなく、強烈な音でサンペイの指示が聞こえなくなってしまう。

「だいぶ効いたようだな。ヒトツキ、連続斬り！」  
「ヒート！」

ようやく『金属音』から解放されたゲコガシラだが、ヒトツキの『連続斬り』でダメージを受けてそのまま木に叩きつけられる。しかも何度も斬って攻撃が当たる度に威力が倍増する技なので、ゲコガシラのダメージは相当深いものだった。

「まだまだ負けないでござる。ゲコガシラ、泡から電光石火！」  
「ガ、ガラー!!」

フラフラしながらも立ち上がったゲコガシラは口から大量の『泡』を放った後、素早い動きでヒトツキに向かった。

だが先程のダメージのせいかゲコガシラの動きが最初より落ちてくるのに見て気がつく。

「(あの程度の速さなら俺のヒトツキは十分反撃できる)ヒトツキ、鞘を地面に突き刺して回転切りで泡を防げ！」

指示に従ってヒトツキは持っていた鞘を地面に突き刺してそのまま回り始めて『切り裂く』で『泡』を全て切つて攻撃を防いだ。このままゲコガシラにも攻撃するよう伝えようとした時、ヒトツキの体が僅かに光っていることに気がつく。あの光はもしかして・・・試してみるか！

「ヒトツキ、燕返しし！」

「ツーク！」

ゲコガシラの『電光石火』が当たる寸前で『燕返し』のカウンター。これを腹に受けたゲコガシラはゆっくりと倒れた。

「ゲコガシラ戦闘不能！よってこの勝負、ヒトツキの勝ちです！」

やはりさつききの技は『燕返し』だったか。何度も見てきた技だったからすぐにどんなものか分かった。新しい技を覚えた上に勝利できたのは久しぶりだ。

「ご苦労だったなヒトツキ。お前も順調に強くなっているから次のジム戦に出してやるよ」

「ヒト!? ツキキ！」

カイトに褒められた上にジム戦に出られると言われたヒトツキは普段ならあり得ない程に喜んだ。その様子を見て笑いながらサンペイ達の元に向かう。

木の実等でゲコガシラを回復させたサンペイは俺の先を読むのも含めた高い戦術で感服した様子で、またバトルをさせて欲しいと願ってきた。それを承諾した後サトシもケロマツと一緒に強くなりたいと言ってきたのでサンペイと協力して特訓を行い『影分身』と『電光石火』を覚えさせた。

それから次の日、カイト達はレンガで造られた伝統的な門を潜り抜けた先にある高台に建っている城と活気溢れている町にやって来た。この町はコボクタウンと言って、古い建造物が多く残っている歴史ある町だ。

貴族が使用していたマナーハウスが観光名所であって、『枯れた味わいのある町』と言う別名も持っている。その為にシノンのテンションがいつもより高かった。

「歴史が残っている町と言うのは、本当に心地良い感じですね兄様！」  
「そうだな」

シノンが感じている事に俺も賛同した時、突如凄まじい騒音が聞こえてきた。それは低い唸り声に似た音で、その酷い音に全員が必死に耳を塞いだ。

「うるさーい!!」

「一体何の音なの!?!」

「ココナー!」

「まるでハイパーボイスだな!」

「ガヴウーッ!」

「頭割れそう!」

「酷い騒音ですね!」

「何処から聞こえてくるんだ!?!」

「ピーカ!」

あまりの酷い音にその場から逃げようとした時に騒音はピタッと止まった。だが未だ耳の鼓膜の奥に残る音によって頭痛が続いたまままだ。

「何だったんだろう・・・?」

「あのすみません、今の騒音は何だったんですか?」



先程の騒音についてシトロンが近くで掃き掃除をしている女性に声を掛ける。だが何故かこちらの声が全く聞こえていないようだ。耳が悪いのかと思った時によくこちらに気が付いた女性と視線が合った。

「あつーごめんなさい、ちょっと待ってね」

謝りながら女性が耳から抜いたのは耳栓だった。道理で聞こえない筈だと納得したのと同時にあの騒音をいつも聞いていると理解した。

「今凄い音がしてたんですけど、何の音だったんですか？」

「ああ、あの音は・・・付いて来て」

苦笑しつつ案内する女性の後をカイト達は付いて行くと町の広場にやって来た。そして広場の中央にある4本の柱に支えられた三角屋根の下で巨大な体のポケモンがぐっすりと気持ち良く居眠りしているのに気が付いた。

「カビゴン!?!」

「ピカピカア!」

「初めて見た!」

「えーと、カビゴンは・・・」

『カビゴン。居眠りポケモン。満腹になると指すら動かすのが面倒になるので、お腹に乗っても大丈夫』

セレナがポケモン図鑑で調べた後、女性が騒音の原因がカビゴンである事、何故カビゴンがこの町の広場で眠っているのか教えてくれた。

「元々カビゴンとこの町は共生関係にあるの」

「共生？」

「助け合って生活していると言う事よ」

分からない言葉の意味に困っているサトシにシノンが分かりやすく教えてあげた。そして女性はカビゴンがこの季節になると山から下りてきて、収穫の終わった畑の作物の根を根こそぎ食べてしまつて、根を掘り返された畑が耕されて良い作物が育つと話した。それを聞いてカイトは辺りの市場を見て納得したように頷いた。

「なるほど。それでこの町の市場には新鮮で大きく育った野菜や木の実が沢山揃っている訳ですね」

「そう。それで毎年カビゴンが根っこを全部食べ終わった頃、お礼の意味を込めて豊作祈願のお祭りを開くの。祭りのクライマックスでシヨボン又城の城主が吹くポケモンの笛の音が広場に響くとカビゴンはお供え物を食べて、踊りながら山へ帰って行くのよ」

「それじゃ、今年の祭りはこれからですか？」

話を聞いて祭りに参加したくなつたサトシが訊ねると女性は曖昧な表情となつて口を濁す。その訳を聞くとお祭りの準備はしているがポケモンの笛を吹くシヨボン又城の城主が来てくれない為に今年はまだ始められず、それによりカビゴンも山に帰る切っ掛けをなくして眠つたままだという。説明が終わつた後再びカビゴンが大音量で軋を掻き始めてしまい、全員耳を塞いだ。

「これ・・・とても耐えられないわね」

「耳がどうにかなくなっちゃいそう!」

「フフフツ、どうやら僕の出番のようですね!こうなつたら科学の力でカビゴンを目覚めさせましょう!」

「!」「ええっ!?!」「!」

自慢の表情でシトロロンが何か言っているが、全員耳を塞いでいるので全く聞こえなかった。そしてシトロロンが鞆から取り出したのは目覚まし時計のような機械だった。

「サイエンスが未来を切り開く時！シトロニックギア・オン!!お寝坊さんのユリーカ用に開発しておいたナイスなマシン。名付けて、『ユリーカ強制目覚ましマシン』です！」

「何故!?!」

目覚まし時計に手足が付いたマシンを見てユリーカが困惑の声を上げるが、カビゴンの鼾の為に聞こえなかった。そしてシトロロンがマシンの音量を最大にして、ポケモン達を除いた全員が順番に縦に並んで前方に立つ相手の耳を押さええて実験が行われた。

両方から響く騒音を必死に我慢したのにも関わらず結果は失敗し、マシンは爆発して壊れてしまった。

「失敗したのか・・・?」

「でもこれだけの爆発音が響けばきつと目を覚ますでしょう!」

「あゝゝ悪いがシトロロン。どうやらダメだったみたいだぜ」

カイトが溜め息をつきながら指を差す。その指先にはカビゴンが未だ気持ち良く眠っていた。まあ、これで起きる筈がないと最初から思っていた。凶鑑の説明文だけでなく、実際にこれまでの経験から野生のカビゴンが食事以外に起きているところは見た事がなかった。するとシノンがカイトの傍に寄って提案して来た。

「ねえ、兄様。兄様の笛の音で起こせませんか?」

「俺の?フム・・・物は試しにやってみるか」

バックから笛を取り出してカビゴンの近くで演奏を始めた。

(BGM：ポルカ・オ・ドルカ)

テンポ良く楽しい曲が流れ出すと誰もが楽しい気分になり、人もポケモンも踊り出したくなった。近くで聞かされていたカビゴンも同様で、暫く曲を聞いた後カビゴンは目を大きく開いて勢いよく屋根の下から転がり出て踊り始めた。

それにつられてピカチュウやグラエナ、他のポケモン達も踊り出した。

♪♪♪♪♪♪♪♪

曲に合わせてポケモン達は踊り、人々はその踊りと楽しい曲に魅入られる。そして笛の音が止まると周りからカイトに向けて盛大な拍手が響いた。素晴らしい曲を聞いた事とカビゴンを起こしてくれた事に町の人々は喜んでいるのだ。

「素敵です兄様！」

「流石カイトだぜ！」

「本当に良い曲ね！」

「素晴らしかったです！」

「私、聞いていて踊りたくなっちゃった〜！」

「シヨボン又城の城主に負けない曲だったわ！」

シノン達からお褒めの言葉を貰いながら俺はカビゴンの方に振り向く。元気よく踊って眠りから覚めたから用意されている木の實を食べに・・・向かわなかった。踊り終えたカビゴンはその場に座り込み、少し寂しそうな表情で俺に訴えてきた。

「うんうん・・・そうか」

「兄様、カビゴンは何て言っているのですか？」

「食べる時はポケモンの笛の音を聞きながら食べたいつとき。余程好

きなんだなその笛の音が・・・」

一体どんな音がするのだろうか？俺も一度聞いてみたいと思いつつ、シノン達と相談してシヨボン又城の城主を此処へ連れて来る事になった。女性から城の生き方を教えてもらって早速行こうとするのだが、突然カビゴンがカイトの服をギュツと掴んで離さなくなった。急にどうした？と理由を聞いてみるとさっきの曲をもう一度吹いて欲しいと言ってきた。

「仕方ない。シノン、サトシ！悪いがお前達だけで頼みに行ってくれないか？俺は見ての通り動けん」

「分かりました。すぐに連れてきますね兄様！」

このまま放っておいたらカビゴンがまた眠って鼾をしてしまう可能性もある為、カイトは広場に残る事になった。そしてシヨボン又城へはシノン達だけ向かう事になり、5人は急いで城へ向かうのであった。

カイトが町に残った後、シノン達は走りながらシヨボン又城へ向かい少し経って辿り着いた。

「御免下さーい！」

「ピーカー！」

立派な門の前に立ったサトシが大声で叫ぶと跳ね橋がゆつくりと降りて来て、奥から初老の執事が迎え出て来た。

「いらっしやいませ。当方の城に何か御用でございますか？」

「麓の町から至急城主さんにお伝えしたい事があつて来ました！」

「これはわざわざ・・・どうぞ中へお入りくださいませ」

そう言つて執事は私達を城の中へ招き入れ、城主の元へ案内してくれた。女性の方から聞いた事からてつきり門前払いされると思っていたので、簡単に入れた事に少し不思議に思いながらも私達は付いて行つた。それから玉座の間に通されて、城主のシヨボンヌと対面した。

「シヨボンヌ。儂に何の用かね？」

「お願いです！今年もいつものように村祭りで笛を吹いてください！」

「ムム!?その事なら失礼するであります！」

笛の件を話した途端シヨボンヌは顔色を変えて玉座から立ち去ろうとした。サトシ達が慌てて呼び止めて必死に頼むけど、シヨボンヌはアレコレと理由を付けて言い訳をする。その様子を見て私はある可能性を推測した。

「失礼ながらシヨボンヌ様、もしかして此処にはポケモンの笛がないのでしょうか？」

「シヨボ!!?そ、そんな事はありませんぞ・・・」

そう言っているシヨボンヌだけど、明らかに動揺して気まずそうに目を泳がせている。どうやら推測が当たっているようね。さらに訊ねようとした時、執事が1歩前に出て来た。

「シヨボンヌ様。子供達にこれ以上嘘を重ねては、いくら当家の名誉の為とは言え必ずや後悔致します。それにこちらの娘さんはおよそ察しておりますし、ここは正直に仰るべきかと」

執事の言葉にシヨボンヌも納得してくれた。それに本人も罪悪感があつたようで、哀愁を漂わせながら本当の理由を話し始めた。

ポケモンの笛は確かにシヨボンヌ城にあったのだが、隣村のパルファム宮殿からやって来たアリー姫と言う少女に気に入れられて強引に持って行かれてしまったとの事。

アリー姫は一度言い出したら人の言う事を聞かない我儘な性格の上に彼女の父親にシヨボンヌは世話になっているからポケモンの笛を取り戻せないとの事だった。

「いくらお世話になっている人の娘だからと言って、家宝であるポケモンの笛を黙って渡してしまうなんて・・・!!」

「シ、シノン落ち着いて(汗)」

「カイトが加わっている件ですから仕方ありませんけど・・・落ち着いて下さい!」

滝のように涙を流しながら話すシヨボンヌを見て内心怒り出すシノンにセレナとシトロンが必死に宥める。

「そう言う事なら分かりました。俺が笛を取り返してきます!だから村祭りまでポケモンの笛を吹いて下さい!」

「おお! 勿論です! 喜んで吹かせてもらいます!」

笛を取り返してくれると聞いた途端にシヨボンヌは泣き止んだ。全く仕方がない人と思いつながら私達は隣村のパルファム宮殿へ向かう事になった。

けどこの時、誰もいなくなった玉座の間に置いてあった西洋甲冑の2つがよろよるとバランス悪く動いた事は誰も知らなかった。

それから再び走り出した後、ようやく深い草むらと林が広がる道を抜けた先にある煌びやかな門と立派な生垣に囲まれているパルファム宮殿に辿り着いた。

最初門番にお願いして中に入れてもらおうとしたけど1人もいなかった。どうしようか考えながら生垣の周りを歩いていたら、ユリイカが見つけた小さな抜け穴から入る事にした。悪い事だけど兄様の為だから分かって下さい！

中に入って体に付いた葉っぱを落としながら辺りを見渡すと目の前に広大な庭と庭の中央や池の間に掛かっている橋の近くに置いてあるゼクロムとレシラムの像だ。

「イツシュ地方で伝説のポケモンと言われるゼクロムとレシラムの像が何故此処に？もしかしてパルファム宮殿の王か、またはカロス地方の歴史と何か関係があるのかしら？」

此処へ着く前にセレナからパルファム宮殿とそれを造らせた王の事について教えてもらった為、ポケモン考古学者の血も騒いで私は瞳を輝かせつつ必死にメモを取る。

だがその時に庭の奥からやって来たポケモンの鳴き声を聞いて中断されてしまった。

「アン！アンアン」

「何だ、このポケモンは？」

「知ってるでしょ？これもトリミアンよ」

「えっ!?!これもトリミアン!?!」

サトシが驚いている中、私は前に取ったメモの内容を確認する。この姿の時は・・・マダムカットと言うのね。

「おやめー！トリミアン！」

突然どこからか発せられた幼くも高い声にトリミアンは威嚇を止めてその声の主の元に向かった。その方向へ私達も振り向いてみると数人のメイドに薔薇の花弁を舞わせながらトリミアンを撫でてい



るピンク色のドレスを着た少女がいた。

「よしよし、落ちてるゴミをかじっちゃダメよ。お腹壊しちゃうでしょう?」

「・・・俺達ゴミ扱い?」

少女の言葉にサトシは少し不機嫌になる。けどサトシだけでなく、私もセレナ達も嫌な気持ちになる。

「あのく、貴女がひよつとしてアリー姫?」

「オーツホホホ! パルフラム宮殿は私のお家。私こそアリー姫よ!」

「なんか取り戻すの難しいかも・・・」

「そうね。見た目やあの性格からきつとかなり我儘で自己中心的な考えの子でしょうね」

「コーン・・・」

高笑いして再び花卉を飛ばせながら自己紹介するアリー姫を見て私は瞬時にあの子の性格を理解し、そつと呟いたセレナに同じく呟いた。足元にいたキュウコンも同感で頷いた。

その後私が予想した通り、サトシ達がポケモンの笛を返してくれと必死にお願いしてもアリー姫は全く耳を貸さず、それどころかピカチュウを家宝にすると行って無理矢理奪うとした。

「ダメだよ! ピカチュウは誰にも渡すもんか!」

「ピカ!」

サトシはすぐにピカチュウを奪い返して抱き締める。するとアリー姫はメイドに沢山の金銀財宝を持って来させ、これと交換させようとする。けどサトシは首を横に振って誘惑に応じなかった。

「ダメに決まってるだろ!」

「チッ」

自分の思い通りにいかない事にアリー姫は舌打ちをし、メイドに財宝を撤去させた。でも彼女は簡単には諦めず、今度はバトルでピカチュウを自分の物にする作戦を出してきた。トリミアンとバトルして勝ったらポケモンの笛を返して上げると言う約束で。サトシとピカチュウのレベルなら負けるとは思えないが、大切なパートナーを賭けての勝負だと冷静な判断ができなくなる可能性がある。

「どうしますの？笛を取り戻すチャンスを与えるのはこれつきりですよ？」

「でも・・・」

「サトシ」

本来ならこんなバトル、絶対受けない筈なのだが笛を取り返すと約束しているから受けないといけない。頭で理解できても心が納得できずにいる。怒りで頬から電気をビリビリ出しているピカチュウを見つめつつもすぐに返事を出せずにいたサトシに私は冷静に声を掛けた。

「このバトル、私にやらせてくれない？」

「えっ？シノンが!? だけど・・・」

「そんな迷っている状態でバトルしても勝てないわ。大丈夫。私達を信じて」

そうやって私はアリー姫の前に立つ。この時私には分からなかったが、この場にいる全員が今のシノンを見て少し恐れを抱いていた。普段の彼女からは想像がつかない程怒りのオーラが溢れていたからだ。大切なパートナーを物扱いして賭けの対象にさせるなんて・・・絶対に許さない！

「はじめましてアリー姫。私はシノンと申します。先程の提案なんです。私のキュウコンで勝負してくれませんか？負けたらすぐにピカチュウをお渡ししますのです」

「コンコーン！」

「よ、よろしいですわ。貴女如きすぐに倒してあげますわ！」

高い声で言うアリー姫だが、後ろに控えているメイド達共々シノンの気迫に圧倒されていた。

その後全員パルファム宮殿の中央に設立されているバトルフィールドに向かい、サトシ達は外野に立って観戦し、シノンとアリー姫は階段を少し下った先にある場所に立った。

「バトルはキュウコンとトリミアンの1本勝負！どちらかが戦闘不能になった時点でバトル終了！いいですね？」

「ええ」

「よろしくてよ！」

負けられない条件の元で、シノンとアリー姫のバトルは審判のシロンの合図で始まった。

「行くよキュウコン！思念の頭突き！」

「コーン！」

「行きますわよトリミアン。オーツホホホ！」

勢いよく走り出して『思念の頭突き』を繰り出すキュウコンにトリミアンも走り出してほぼ同時に間合いを詰めて、擦れ違った時に後ろ足で蹴りを放つがキュウコンは9本の尻尾で防いだ。

「キュウコン！アイアンテール！」

「トリミアン！噛み付くですわ！」

シノンとアリー姫は同時に指示を出し、キュウコンとトリミアンは助走をつけて高くジャンプをしてそれぞれ技を出した。キュウコンの『アイアンテール』をトリミアンは『噛み付く』で防ぐが、この時トリミアンが噛み付いたのは9本の内たった1本だったので……。

「コーン！」

「ア!?アウウウー!!」

残った8本の尻尾に何度も攻撃された上にトリミアンはそのまま勢いよく地面に叩きつけられた。華麗に着地して余裕な表情のキュウコンとは対照的にトリミアンの体はダメージと汚れでボロボロになりつつあった。そんなトリミアンを見てアリー姫は狼狽えてしまうが、お姫様のプライドから何とか持ち堪える。

「な、中々良い攻撃ね。でも、ここまでよ！花は気高く咲いて、敵を美しく散らすのよ！トリミアン！チャージビーム！」

「アーン！」

トリミアンの口から強力な『チャージビーム』が一直線に放たれる。しかしシノンもキュウコンも慌てずに迎え撃つ。

「キュウコン！全力の火炎放射！」

「コーン!!」

尻尾を大きく広げた後キュウコンは全パワーを込めた『火炎放射』を放つ。その炎は『チャージビーム』をあっさり押し返し、そのままトリミアンも飲み込んでしまった。そして爆発で起きた黒煙が晴れた後、フィールドには真っ白で自慢の毛並みが無残な黒焦げになり、戦闘不能状態になっているトリミアンがいた。

「イヤーーーーッ!!私のトリミアンがーーーー!!」

アリー姫は絶叫し、サトシ達は小さく笑い声を出す。審判のシトロも吹き出しそうになるのを我慢しながら勝敗を高らかに告げる。

「トリミアン戦闘不能！キュウコンの勝ちです！」

「やったー！流石シノンだぜ！」

「ピカチュー！」

「素敵よシノン！」

「キュウコンもカツコイイ！」

「デネネー！」

喜ぶサトシ達にシノンは笑顔で手を振り、駆け寄って来たキュウコンを何度も優しく撫でて褒め称えた。一方アリー姫は半泣きになりながらもメイド達にトリミアンをトリマーの元に連れて行くよう命令する。そしてバトルに負けて不機嫌そうに頬を膨らませるアリー姫にシノンは近づいて話しかけた。

「バトルは私達の勝ちですねアリー姫。約束通りポケモンの笛を返してくださいませんか？」

「私が負けたのだからあげませんわ」

そう言って約束を反故にする少女にサトシ達は怒り出す。シノンもアリー姫のあまりの我儘ぶりにガツンと厳しい一言を言うとする前にシトロンが乗り出して説教し出した。

まるで妹を叱るように説教をするシトロンにアリー姫は涙目になって、持っていた扇で顔を隠す。だがすぐに扇を下ろした後彼女はとんでもない一言を発した。

「ポケモンの笛を返して差し上げます。けどその代わりに……シトロンを置いて行って！」

「ぼ、ぼ……僕を!!？」

あまりの衝撃の言葉にシトロンは驚いてその場に立ったままになり、シノンとサトシは呆然としてしまう。それはセレナとユリーカも一緒だったが、途中2人は耳打ちをしてこれまた予想外の言葉を言った。

「お兄ちゃんだったらどうぞどうぞ！」

「ちよつ、そんな無責任な！」

「ではよろしいですわね？」

話が勝手に進んでいく中、シノンは慌ててセレナ達の元に駆け寄る。

「セ、セレナ。どういうつもりなの？このままだとシトロンの・・・」  
「大丈夫よシノン。これは振りよ。せっかく良いチャンスが巡って来たんだから。シトロンはカビゴンを満足させた後、助けに行けばいいんだし」

「そうだよ。お兄ちゃんなら大丈夫だよ」

「そ、そう。凄い子ねユリーカは・・・」

大切な兄を簡単に差し出せるなんて・・・本当に凄い子だ。隣で聞いていたサトシも女の子の柔軟さに凄いと感心していた。

この時シノンは、ウインクしながらそう言う2人が少し小悪魔のように見えたのは余談である。

その後無事にポケモンの笛を取り戻したシノン達はアリー姫と残ったシトロンの別れ（？）の挨拶を済ませてパルファム宮殿を後にし、急いでコボクタウンに向かった。

シノン達が町に辿り着いた時にはすでに夕方だった。お祭りの準備

備も終わっているから早く届けないと思い、4人は休む暇もなく走り続けた。この時シノンには町の広場に向かっていた途中ある違和感を感じた。それは広場に近づくにつれてカイトが吹いている筈の笛の音が時々変な音で聞こえてくるのだ。一体どうしたんだろうと思いつつながら走り続けて広場に辿り着いた時、驚きの光景が目の前に映った。

「に、兄様!？」

「「カイト／さん!？」」

そこには未だ楽しそうに踊り続けているカビゴンとその傍に積み上げられている木の実の近くで、顔が真っ青で疲労感たっぷりな状態で寝ているカイトと彼を心配するグラエナとシヨボンヌ達がいた。

シノン達が出かけた後カイトはカビゴンを眠らせない為にずっと笛を吹き続けていた。途中シヨボンヌ達が来てポケモンの笛が吹けない事情を理解した後も吹いていたが、流星に疲れが出て休もうとするがその度にカビゴンをお願いしてしまった。そして気づけば長時間吹き続ける事になって体力が限界に達してしまい、カイトは完全にダウンしてしまったのだ。そんな彼を見てシノンはこれまでの疲れの事なんか忘れて、すぐさま駆け寄った。

「兄様!しっかりと下さい!？」

「あ?・・・ああ、シノンか。ポケモンの笛はどうした?」

「安心してください。サトシがシヨボンヌさんに渡しに行きましたから!」

涙目で自分の事を心配するシノンにカイトは内心嬉しく思いながらも彼女を安心させようと笑顔になって、ある程度回復したから起き上がろうとした時に突然隣から何かが落ちてきた。振り向いてみると木の実の中にシヨボンヌが埋もれていた。

「シヨボンヌさん!?!ど、どうしましたか?」

「あ、あの者達がポケモンの笛を！」

シヨボンヌが指差す方向には、アーム型の機械でポケモンの笛を奪い取って喜んでいるロケット団の5人組がいた。

「出たなロケット団！」

「出たなロケット団！と言われたら！」

「黙っているのが常だけどさ！」

「それでも答えて上げるが世の情け！」

「世界の破壊と混乱を防ぐため！」

「世界の平和と秩序を守るため！」

「愛と真実の悪と！」

「力と純情の悪を貫く！」

「クールでエクセレントであり！」

「ラブリーチャーミーな敵役！」

「ムサシ！」

「コジロウ！」

「ミズナ！」

「ロバル！」

「宇宙と銀河を駆けるロケット団の4人には！」

「ホワイトホールとブラックホール、2つの明日が待っているぜ！」

「にやーんてニャー！」

「ソオーナンス！」

「イートマ！」

「エアー！」

お決まりの長い台詞を言った後ロケット団は奪ったポケモンの笛を使ってカビゴンをコントロールすると言い出す。

「アイツら何を言っているんだ？」

「おそらくポケモンの笛がカビゴンをコントロールできる物と勘違い



しているのかと」

何とも単純な奴らと思っていた時、ムサシが試しにポケモンの笛を吹いてみた。すると笛から耳を塞ぎたくなるような酷い金切り声のような音が響いた。その音に踊っていたカビゴンは動きを止めて不機嫌な表情で Rocket 団を睨み、問答無用で『破壊光線』を発射して Rocket 団をブツ飛ばした。その後空から落ちてきたポケモンの笛を見事キャッチしたサトシがシヨボンヌに渡し、彼が吹く音が町に響いた。

「これは良い音だな」

「本当ですね」

「ガウ〜」

「ゴ〜ン」

美しい音にカイト達は耳を澄ませて楽しみ、カビゴンは木の実を美味しく食べ始めた。今年のカビゴンの踊りを2回も見られた町の人々はとても喜び、カイト達に何度もお礼を言うのであった。

いろいろなトラブルがあつて疲れたが祭りが無事開催でき、町の人々も山へ帰って行ったカビゴンも笑顔になつて良かったと全員が感じた。

しかし、サトシ達はカイトの一言でまだ終わっていない事を思い出した。

「どころでさつきからシトロンがいないが、何処に行つたんだ？」

「「「えっ?」「」」」

シトロンがいないとカイトが言った瞬間、サトシ達は表情が曇つて青くなる。

「あ〜〜!お兄ちゃんの事忘れてた!!」

「「「あつ!」「」」

「一体何があつたんだ・・・？」

お祭りが無事に開催できた事からサトシ達はすっかりシトロンを助ける事を忘れていたのだ。唯一事情を知らないカイトが詳しく聞こうとした時、何処からか自分達を呼ぶ声が聞こえてきた。

「ユリーカ！みんなさ〜！！」

「シトロン!?!」

「お兄ちゃん!?!」

フラフラと先程のカイトと同じように疲労感たつぷりのシトロンがこつちに向かつて走って来た。だが何故か下着姿だった。

何があつたのか知らないが、咄嗟にカイトはシノンの前に立って目に映らないようにする。またサトシにセレナにも同じ事をしてやれと言う。サトシはカイトの言葉に従ってすぐにセレナの前に立ってシトロンの姿を見えなくする。シノンとセレナは自分の前に立った愛する異性の背中に嬉しく思いながら顔を隠した。

「ハアハア・・・酷い目に遭いました」

「どうしたんだ？その格好は」

「取り合えずさっさと服を着ろ。そのままだと変態に思われるぞ」

そう言われてシトロンも慌てて備えてあつた自分の服を着る。そしてパルファム宮殿に自分そっくりのロボットを作って身代わりとして置いてきた事を説明した。

それと同時にパルファム宮殿の方から美しい花火が何度も上がり、カイト達はそれを見て今日の疲れを癒すのであつた。

## 悪の陰謀！恐怖のカラマネロ登場！！

とある人気のない洞窟内の奥にて、ロケット団の5人は四角いメカから映し出されているピカチュウとグラエナの技を見て研究していた。

「10万ボルトにエレキボール、電光石火。そしてアイアンテール……」

「こちらは悪の波動に噛み砕く、焼き尽くす、氷のキバ、バークアウト。凄まじい一級品の技ばかりですな」

自分達が狙っているポケモンを調査する度にレア度が上がっていき、何としてもゲットしようと全員が決意して作戦を考え始めるが……。

「ところで……いつまで盗み聞きしているつもりじゃくん？」

「……ほお、気が付いておったか」

ミズナが後ろに向かって声を掛けると背後から薄ボロの布で姿を隠している者と1体のポケモンが現れた。

「話は聞かせてもらった。確かに使えそうなピカチュウとグラエナだね。気に入ったよ」

「ハッ！盗み聞きなんて趣味悪いね！何者?!」

その者は声からして女性の様だ。だがもしかしたら変声機を使っているかもしれない。

また、今一番問題なのは隣にいるポケモンだ。見た事のないポケモンでどんな能力を秘めているのか分からない。全員が2人の動きに警戒しつつ手持ちポケモンを全て出し、ムサシが代表して問い掛ける。

「私はマダムX。そしてこの子はカラマネロ」  
「ネロネロ！カー！」

カラマネロと言うポケモンはニヤツと笑いながら胸の模様から光を放つ。

その光を見たロケット団は……。

一方その頃、カイト達はカロスリーグに出場する為に今日も次のジムがあるシヨウヨウシティに向かって旅をしていた。

森の中を歩いていた時、サトシが奥の方に建っている大きなパラポラアンテナを見つけた。

それを見たシトロンが、アレは宇宙から飛来する電波をキャッチして高性能な機器で全自動で瞬時に分析を行っている観測所であると説明した。と言ってもシトロンとカイトとシノン以外はあまり理解していない様子だった。

またシトロンが「今はもう使われていない」と言うからきつと野生ポケモン達の住処になっているなど俺は内心そう思った。

その後再び歩こうとした時、突然茂みが揺れて、中から顔に酷い怪我を負っているニヤースが出て来た。

「ヘルプミーだニヤア……」

必死に助けを求めながら倒れたニヤースを見てカイト達はすぐに駆け寄った。

「ニヤース！どうしたんだ!？」

「ピカピカ!？」

「酷い傷だな。これは何かに引つ掛かれた痕みたいだな。とにかく今は手当てをしよう。シノン、救急箱の用意だ」

「はい兄様！」

鞆から救急箱を取り出し、2人で手際よく回復薬や木の実で手当てしていく。

その手際の良さをセレナ達は後ろで見つめながら驚く。だがサトシだけはシンオウ地方で見ていたからそれ程驚かず、また2人のやり取りをイッシュ地方で自分が出会った伝説とも言えるポケモンを手当てしたチャンピオン・シロナと同じ姿に映ったのであった。

それから暫くして手当てが終わり、皆に大丈夫だと言つて傷がなくなったニャースの意識が戻るのを待つ。するとニャースの瞼がゆっくり上がり始めた。

「……………此処は…………？」

「気が付いたようだなニャース」

「ガウガウ」

「ダ、ダークボーイ!？」

自分達が追っている標的が目の前にいた事に驚いたニャースはその場で飛び起きる。だがまだ傷が癒えていない状態では満足に立つ事は不可能であり、フラフラとすぐに座り込んだ。

「ああ、ダメですよ!まだ大人しくしてなきや。さあ、コレを飲んでください」

シトロンから差し出されたコップをニャースは素早く受け取り、一気に水を飲み干した。飲んだ事で一息ついたニャースはコップをシトロンに返してからお礼を言う。

「生き返ったニャ……………おミャーらは命の恩人。感謝感激だニャー!」

「本当に……………どうせまた悪い事を企んでるんじゃないの?」

「デネネ？」

「ピクカ？」

「滅相もニヤい！今日はそんなつもりはないのニヤ！おミヤーらに危険を知らせに来たのニヤ」

「危険ですつて？」

「コン？」

「どういう事です？」

「詳しく話してくれよ」

「ピカピーカ」

「そ、それは・・・思い出すだけでも身震いするニヤ！」

表情を青くさせて冷や汗を掻きながらニヤースは何が起きたのかをカイト達に説明する。

読者の皆様にしかな詳しく分からない冒頭での出来事の後、カラマネロの光を見てロケット団とポケモン達は意識を奪われて操られてしまった。だがニヤースだけは一番後ろにいた事とコジロウとミズナの影にいた事で光をはつきり見ず、そして瞬時に自分の爪で顔を引っ掻いて痛みを与えたおかげで意識を保つ事に成功した。

しかしマダムXとカラマネロの支配下に落ちたニヤース以外のロケット団全員が捕まえようとしてきた為、ニヤースは必死に逃げ出してカイト達の元に辿り着いたらしい。

「成程、それであんなボロボロの状態だったんですね・・・」

「しかしニヤース、悪いけど今の話を完全に信じる事はできない。理由は貴方がロケット団でこれまで私達を何度も騙してきたんですもの！」

「そ、そんな！誤解だニヤ！さつきニヤーが話した事は事実ニヤ！こんなところでグズグズしているとマダムX達がやって来るニヤ。アイツはピカチュウとグラエナを狙っているのニヤー！」

「とか何とか言って、私達を騙してピカチュウとグラエナを奪う作戦なんじゃないの？」

「ネネー！」

「やっぱりね。その手には引つ掛からないわよ」

「本当に誤解だニャー！ニャーの言葉を信じて欲しいニャー！」

必死に弁明するニャースだが、シノンの言う通りこれまで何度も言葉巧みに自分達を騙してきた。シノン達だけでなく、ピカチュウ達も信じられないと頷く。

「・・・カイト、どうする?」

「そうだな・・・」

困った表情をしながら訊ねるサトシを見た後カイトはじつくり考える。

先程ニャースを手当てしたが、顔の傷は紛れもなく本物だった。だがこのようなケースはシンオウ地方で旅していた時度々行われていた。やっぱり嘘かなと思いついた時、ニャースの背後からロケット団4人とポケモン達が現れた。

「ニャース、何をやっている?」

「早くピカチュウとグラエナを捕まえるのよ」

「そして我々の一員にするのです」

「・・・じゃ〜ん」

現れたロケット団はゆっくりと近づいてくる。彼らとポケモン達の様子を見て俺はある事に気が付く。

「(何だアイツらの目は?全員光が灯っていない。それにポケモン達の声が全く聞こえない!?)」

どうやらニャースの言っていた事は正しい様だ。それに今の彼の表情は仲間に対して再会の喜びや様々な場所で披露していた時みた

いの演技ではなく、本当に怖がっており後退りする。

「・・・皆、急いで逃げるぞ。ニヤースの言った通りロケット団は操られている！」

カイトの声とロケット団から感じる只ならぬ迫力にサトシはピカチュウを肩に乗せてセレナの手を掴み、シトロンはユリーカを慌てて抱くようにして、カイトは隣にいたシノンの手を掴んで一斉に後ろを向いて走り出そうとするが、いつの間にか背後にはフードを被った女性とポケモンが立っていた。2人を見てニヤースが叫ぶ。

「出たー！マダムXとカラマネロだニヤー！」

「こいつがカラマネロ？」

『カラマネロ。逆転ポケモン。マリーイーカの進化形。ポケモンで一番強力な催眠術を使う。催眠術で相手を意のままに操る事ができる』

サトシがポケモン図鑑で調べた結果、とんでもない内容であった。いつもなら悪タイプだからすぐにゲット！と思う俺でも恐怖でゲットする事に戸惑った。

「そいつが噂のピカチュウとグラエナかい？成程、どちらも賢そうだね」

フードを深く被っているから表情がよく見えないが、とてつもなく嫌な視線を向けているに違いない。相手が何か仕掛ける前にこちらから攻撃しようとグラエナに指示を出そうとした時、突然グラエナが話し掛けてきた。

「どうしたグラエナ？」

「ガウガウ！グラガア！」

「何だど!?それは本当か？」



グラエナの話聞いてカイトが視線を逸らした時、マダムXがカラマネロに指示を出した。

「2体とも私の手下になつてもらおうか。カラマネロ！」

「カーアー！」

「あの光を見ちやダメニャー！奴に操られてしまうニャー！」

カラマネロの模様から放たれる光を見ないよう全員目を瞑ったり、背を向けたりする。そして光を止めようとカイトとサトシが同時に指示を出す。

「ピカチュウ！エレキボールで食い止める！」

「グラエナ！カラマネロの胸に悪の波動だ！」

「ピカ！ピカチュー！」

「ガウ！グーラ！」

高く飛び上がった2体が同時に『エレキボール』と『悪の波動』を放つ。2つの技は直撃しなかったが、マダムXとカラマネロは技を避ける為にその場から動いたから光を放つのを止める。また爆煙によつて視界が悪くなった隙について逃走を図るが、『サイコキネシス』で囲むように移動されたロケット団によつて逃げ道が塞がれてしまった。

「そうはさせないじゃくん」

「ピカチュウとグラエナにはポケモン軍団の一員になつてもらおう」

「何!?!」

「無敵のポケモン軍団が世界を征服する」

「そして我らの偉大なるマダムXがその頂点に君臨するのです」

「ヤダヤダ！世界征服なんて反対!!」

世界征服と言う目的を聞いたユリーカが、セレナの腰元に抱き着きながら大声で反対する。

「その通りニャー！そんな目的の為にピカチュウ達を利用するニャんとんでもない話だニャー！」

「それは貴方も同じです！」

「コンコーン！」

鋭い視線で睨みながらシノンとキュウコンがニャースに言う。ニャースも今までの自分達の行動を思い返して何も言えなくなり、ただ大量の汗を掻くしかできなかった。

目の前にいるロケット団の動きに警戒していた時、ふとサトシは違和感を感じた。先程に比べて自分の肩が軽くなったような、そう思っ  
て慌てて振り返ってみるといつの間にかピカチュウがカラマネロの『サイコキネシス』で捕まっていた。

「ピカ！ピカピーー！」

「ああ!?ピカチュウ!!」

「サトシ、此処は俺達に任せろ！グラエナ！もう一度カラマネロn」ゆ  
け、エアームド！」何!?!」

捕まったピカチュウを取り戻そうとグラエナに『悪の波動』を放つ  
よう指示を出そうとしたが、その前にマダムXが催眠術で操られてい  
るエアームドに攻撃するよう指示を出す。間一髪エアームドの攻撃  
を避けたグラエナだが、エアームドの体には同じく操られているイト  
マルが張り付いていて、グラエナとカイト目掛けて『毒針』を発射し  
た。

「しまっ！ぐっ!?!」

「グラッ!?!」

突然の攻撃に2人は完全には避けられず、カイトは右腕に、グラエナはお腹に1本ずつ当たってしまった。

「兄様！」

「コーン！」

1本しか当たらなかったとはいえ、毒の影響で動きが鈍くなってその場に膝を付くカイトとグラエナにシノンとキュウコンが駆け寄り、毒を消そうと慌てて毒消しとモモンの実を取り出す。だがその瞬間、動けなくなった獲物をマダムX達が見逃すはずがなかった。カラマネロは2本の長い触手を伸ばし、グラエナの体に巻き付けて持ち上げる。

「これでよい。ではさらばじゃ。オーホホホホ！」

目的を果たしたマダムXはロケット団も『サイコキネシス』で浮かせると高笑いしながら空の彼方へ消えて行こうとする。

「ピカチュウー！ピカチュウウウウウウ！！」

必死に追い掛けるサトシだが、マダムX達はどんどん離れて行き、やがて完全に姿を見失ってしまった。

「グ、グラエナ・・・くそっ!!」

大切な相棒を守る事ができなかった事にカイトとサトシは悔しさのあまり手から血が出るほど強く握り、拳を地面に叩き付けた。2人の気持ちを感じ取ったシノンとセレナはそつとそれぞれの肩に手を置いて「大丈夫だよ」と落ち着かせる。その時シトロンが提案を出した。

「きつとマダムXにはアジトがある筈です！こんな場合こそ、サイエンスが未来を切り開く時！シトロロニックギア・オン!!このような危機を想定し製作しておいたナイスなマシン。名付けて、『全自動ピカチュウ追跡マシーン』です！」

「おお！ロボピカチュウだ！」

「ピカチュウ追跡マシーン？」

「またそのまんまのネーミング」

「ネネ・・・」

「これはちよつと・・・」

「ゴーン・・・」

シノン達女の子は微妙な反応をしているが、男の子だったら絶対に憧れるロボットを見てサトシは目を輝かせる。そしてそれはカイトも同じであった。

「シトロ、ロボグラエナはないのか？」

「いや〜それは今設計中でして・・・」

「なら今度俺も製作に手を貸そう。最高のロボグラエナを頼むぜ！あと他にゾロアやアブソル、ヘルガーなど・・・」

「兄様！今はそんな事をしている場合ではありませんよ!？」

危機的状況で尚且つ、先程『毒針』を受けた筈なのに別の事に集中していく想い人にシノンは肩を強く握って揺らしながら堪らず声を上げた。そんなに激しく揺らしたらまだ残っているかもしれない毒が体に回ってしまう筈なのにカイトは無事である。一体どんな体をしているのやら。

その後ロボットの高評価を受けて満足したシトロロンがロボピカチュウの鼻のスイッチを押して起動させる。すると後頭部からパラポラアンテナが長く伸びてピカチュウの電気エネルギーを探し始める。そして少し経つとロボピカチュウは反応がある方向に向かって走り出した。

全員が追い掛けて走り続けた後、ロボピカチュウは森から抜けて目の前にあった金網にぶつかっていた。

その後の展開は・・・皆さんもうご存知だろう。ロボピカチュウは爆発して木端微塵となり、その爆発によってカイト達の頭はアフロヘアとなった。

「失敗は成功のマザー・・・そう信じたいものです・・・ね。ゴホッ！」

口から黒煙を吐き出しながらシトロンは崩れ落ちる。彼の発明が完璧になるのは・・・まだまだ先の事である。

その後シトロンが木端微塵となったロボピカチュウを修理している間、カイト達は爆発によって穴が開いた金網から中の様子を探る。

「此処って確か・・・電波の観測所だよね？」

「ええ・・・と言う事は此処がマダムXのアジト？」

「フム、どうやらアレを見る限りそうみたいだ」

そう言っただけカイトは観測所の端の部分を指差す。そこにはジュンサーのサイドカーが停まっていた。アレがあるとと言う事はやはり先程グラエナが言っていた通り、マダムXの正体はあの人なんだな。俺はその事を皆に話そうとするが・・・。

「よし、入ってみようぜ」

「うん！」

「兄様も早く！」

一刻も早くピカチュウ達を助けたいという気持ちが高まって冷静さを少し欠けているサトシが、躊躇なく金網を潜り抜ける。その後を続くようにシノン達も付いて行ってしまった。

「えっ!? あ、ま、待てお前ら！」

どんだん前に進んで行くサトシ達の後をカイトも慌てて追い掛ける。

だがこの時、カイト達は気付いていなかった。自分達の姿を金網の上に設置されている監視カメラによってマダムXにバレている事を。

## 示せ！強き絆の力

前回のあらすじ。

逆転ポケモンのカラマネロの催眠術によつて操られたロケット団を率いてカイト達の前に現れた謎の人物・マダムX！彼女の為に大切な相棒であるピカチュウとグラエナを連れ去られてしまったカイト達は、ロケット団で唯一生き残ったニャースと共にシトロンの作つたロボピカチュウの追跡でマダムXのアジトと思われる観測所に辿り着いた。

所々割れているガラス扉を開けて、中へ侵入したカイト達は暗い通路を慎重に歩いて左右に別れている所に出くわすと二手に別れて捜索する事にした。

左側の通路はシトロン、ユリーカ、デデンネで、右側の通路はカイト、サトシ、シノン、セレナ、キュウコン、ニャースで行く事になった。

長く続く通路を歩いて行くところある部屋に辿り着いた。そこは月やロケットなど宇宙関連の模型が飾られている展示室だった。

「誰もいないな」

「けどどこからか嫌な気配を感じるわ。もしかしたらシトロン達の方で何か・・・兄様？」

警戒しながら展示室の中を見渡していた時、シノンはカイトが一言も喋らず、黙り込んでいる事に気が付いた。

「どうかしたのですか兄様？」

「ああ、実はマダムXの正体について考えてな・・・」

マダムXが誰なのか言うとした時、誰かの気配を感じて警戒態勢をとる。すると巨大な月の模型の陰からシトロンとユリーカがゆつく

りと現れた。

「コチラノ方ハ手掛カリ、アリマセンデシタ」

「皆、一緒ニ探ソウ」

「デネ・・・」

こちらに向かつて歩いてくる2人だが、フラついた歩き方やポシエットにいるデデンネの声が聞こえないなど様子が可笑しかった。

「ニヤ〜こいつらも操られているニヤー！」

「と言う事はまさか・・・」

シトロン達が催眠術に掛かって操られている事をニヤースは大声で言う。

それと同時に背後に何かの気配を感じた。もしやと思い後ろを向くとそこには光を放ちながら薄く笑っているカラマネロがいた。

カイト達が振り向いた瞬間、カラマネロはまたもや模様から光を放つ。

「あの光を見ちやダメニヤー！」

「逃げるんだ！」

咄嗟に目を瞑って逃げようとするが、背後からシトロン達がゆつくりと近づいて捕まえようと迫ってくる。このままでは挟み撃ちだ！

「ど、どうしたらいいの!?!」

「バトルして突破口を開くしかないわ。キュウコン！カラマネロに火炎放射!!」

「コン！コー・・・」

突破口を開こうとシノンはキュウコンに『火炎放射』を指示する。



キュウコンがカラマネロに向けて『火炎放射』を放とうとした時、何処からか大量の糸が体に巻き付いた。

「キュウコン!!」

動けなくなったキュウコンは格好の獲物だ。そう思ったカラマネロがゆっくりと近づいていく。

それを見てシノンは光を見ないようにしながら慌てて糸を外そうとした時、糸が放たれた方向からエアームドが襲い掛かって来た。

「シノン！危ない!!」

「きゃあ!?!」

エアームドは『鋼の翼』を放ちながら迫る。そしてシノンに技が当たると誰もが思った時、間一髪カイトが素早くシノンを抱えて前に跳んだ事で回避する事ができた。

「大丈夫かシノン?」

「は、はい。けど兄様、キュウコンが!」

「安心しろ。今助け出す!出てこいハブネーク!」

シノンが怪我をしていないか確認し安心させた後、俺はこの状況を打開する為にモンスターボールからハブネークを出す。

「ハブネーク!カラマネロの胸にヘドロウエーブ!!」

「ハーブ!ブハツ!!」

「ネロ!?!」

指示を受けたハブネークはカラマネロの胸に『ヘドロウエーブ』を放つ。放たれた大量の毒液は見事カラマネロの胸に命中する。それによってカラマネロはダメージを負い、さらに光を放てなくなっ

まった。

「やったニヤ！あの光を封じたニヤ！」

「凄いでカイト！」

「助かったわ！」

「カア・・・!!」

サトシ達が喜ぶ中、毒で苦しむカラマネロは忌々しそうにカイトとハブネークを睨み付ける。そんなカラマネロを睨み返しながらカイトはハブネークに『ポイズンテール』でキュウコンの体に巻き付いている糸を切るように言う。そしてハブネークが糸を切り、動けるようになったキュウコンがシノンの元へ駆け寄ったのと同時に全員に言う。

「このまま逃げるぞ！全員あっちの方へ走れ！ハブネーク、今度は周りにヘドロウエーブ!!」

再び放った『ヘドロウエーブ』でカラマネロ達が怯んだ隙にカイトはハブネークをボールに戻し、皆と一緒に最初とは反対方向にある道へ向かう。

ちなみにこの時、カイトとサトシはそれぞれシノンとセレナの手を強く握りながら走り続けたので2人は内心激しく心地良さを感じていたのは余談である。

「このままじゃいずれ全滅するニヤ！だからその前にマダムXをやっつけて、世界征服の野望をぶっ潰し、皆を助けるニヤ！」

「ああ！」

「それしか手はないな」

必死に走り続けたカイト達は別の部屋に辿り着いた。暗くてよく見えないが、どうやら此処は観測室のようだ。

すると突然背後で一筋の明かりが灯った。そこには大量の機材が高く積み上げられていて、その頂上には膝にピカチュウを乗せて不敵な笑みを浮かべているマダムXがいた。さらに下にはロケット団が一行に並び立っていた。

「ピカチュウ！」

サトシが呼び掛けるもピカチュウは反応しなかった。声が聞こえない上に大人しくマダムXにいる事から催眠術に掛かっているのだろう。だがそれよりも先程からグラエナの姿が見当たらない。一体何処にいるんだと聞こうとする前にマダムXがピカチュウに命じた。

「フフフ、お前の力を見せておくれ」

命令を聞いたピカチュウは素早く機材から降りて無表情のまま電撃を放つ。迫る電流を見てサトシはセレナを突き飛ばしてその場から離れさせる。その瞬間ピカチュウの電撃がサトシを襲った。

「うああああああ!!」

「「サトシ!!」」

「しっかりするニャー！」

電撃によつてブツ飛ばされたサトシの元に全員が駆け寄る。

「サトシ、大丈夫!?!」

「ああ・・・それよりどうして俺を攻撃するんだ!?!」

「答えは簡単だ。ピカチュウもカラマネロの催眠術にかかって操られてるー！」

「そんな・・・!」

「フフ、今やこの子は私の忠実なる下僕なのさ。さあ、思う存分暴れるがいい!!」

「ピッカ・・・ピッ・・・!」

マダムXの指示に従ってピカチュウは再び攻撃してくる。今度は『電光石火』で素早い動きで迫ってくる。

「キュウコン！動きをよく見て尻尾でピカチュウを捕まえるのよ！」  
「コン！キューー！」

キュウコンは後ろを向きピカチュウが目前まで来た瞬間、9つの尻尾を伸ばして体に巻き付けた。相手はスピードの高くレベルの高いサトシのピカチュウだが、何度も見た技である上に本人の意思ではないから動きが単純だ。なにより指示するトレーナーが本来のトレーナーと違って普通だから容易だった。

「いいわよキュウコン。そのままピカチュウの動きを止めているのよ！」

「コン！」

「ほほう、そう来たか。ならこちらは・・・」

ピカチュウが捕まったと言うのにマダムXは不敵な笑みを浮かべ、ゆっくり右手を上げる。するとマダムXの横から何か飛び出してキュウコンにぶつかった。それにより尻尾が外れてしまう。

「キュウコン!!」

「クッ！今度は何が・・・!？」

ぶつかって来た奴は自由の身となって少し離れた所に移動したピカチュウの隣に立つ。妨害した者を見てカイトは言葉を失った。何故ならその正体が・・・。

「グ、グラエナ・・・!？」

「ガール・・・！」

ピカチュウを助け出したのはグラエナだった。だがいつものグラエナとは違い、ピカチュウと同時に無表情であった。

「グラエナ!? お前もアイツに・・・」

「そうだ。そのポケモンも今では私の忠実な下僕さー！」

「っ!! 貴様ー!!」

大切な相棒を下僕呼ばわりした事に俺は普段ならあり得ないくらいに怒り、マダムXに向かって一直線に走る。だがそれをグラエナが妨害した。

「グウウガアア〜!!」

「くっ!!」

マダムXの前に素早く立ったグラエナは『悪の波動』を放つ。それを必死にかわすが、体勢を立て直す暇もなく今度は『焼き尽くす』で攻撃してきた。それにより体中激しい炎に包まれてしまった。

「ぐああああああ!!」

「兄様!!」

「コーン! ココーン!!」

苦痛の声を上げてその場で炎を消そうと転げ回るカイトを見てシンノンは叫び、キュウコンはグラエナの元に駆け寄って抱きつきながら必死に止めてと言うが、グラエナは冷たい目でキュウコンを見つめ、そのまま噛み付いて無理矢理引き離して投げ飛ばした。

それと同じようにサトシもピカチュウの『アイアンテール』と『10万ボルト』で攻撃されてその場に蹲った。傷ついていく2人を見てシンノンとセレナは涙を流しながら叫ぶ。

「グラエナ！もう兄様を傷つけないで！」

「ピカチュウもお願いだから止めて！」

「何を言っても通じないニャー！ピカチュウとグラエナの耳には届かないニャー！」

「そんな事ない!!」

ニャースの言葉をカイトとサトシは大きな声で否定する。そして体中傷だらけになりフラフラしながら立ち上がり、各々の相棒を見つめて言う。

「グラエナは俺の大切な相棒で家族だ！俺の声は絶対に届いている筈だ!!」

「ピカチュウも同じだ。俺の相棒だ！友達だ!!きっと分かってくれる!!」

2人の絶対に諦めず思いと傷つけられている今の状況でも揺らぐ事のない固い信頼にシノン達は驚きの目で見つめる。不安で満ちた心が一変して勇気が湧いてくる感じがした。

「諦めて下さい、カイト、サトシ」

そこへ感情が籠っていない声で言いながらシトロン達とカラマネロが部屋に入ってきた。彼らはマダムXの元に移動しながら言う。

「どんなに頑張っても、マダムXには敵わない」

「世界はマダムXの物。ピカチュウ、グラエナ、ポケモン軍団によって……」

操られたシトロンが指差す先で突然鎧戸が上に上がり出す。その奥にはペンドラー、オンバーン、バクオング、スピアー、ゴロンダな

ど数多くのポケモン達が怪しく目を光らせて戦意剥き出して威嚇しながら出て来た。全員から声が聞こえず、無表情の顔からカラマネロに操られてマダムXの手下にされていると一目で分かった。

操られているポケモン達から主人や皆を守ろうと先程投げ飛ばされたキウコンがダメージを我慢しながら駆け付けて立ちほはだかる。そんな様子を見てマダムXが高笑いしながら命じた。

「オーホツホツホツ!!やるのじゃ、ピカチュウ!グラエナ!」

「ピツカ・・・!」

「グツガア・・・!」

再び攻撃してきたピカチュウとグラエナ。ピカチュウは『エレキボール』と『10万ボルト』で、グラエナは『悪の波動』と『噛み砕く』で襲い掛かる。

「うああああああ!!」

「ぐうううう!!」

サトシは再び電撃を浴びて倒れ、カイトは肩を噛み付かれてそこから血が流れた。だがカイトは時間が経ったおかげか冷静さを取り戻し、痛みに耐えながら周りの状況を見る。

「(グラエナ達を操っている元凶はカラマネロだ。だからカラマネロを倒せば催眠術が解ける!) ぐおお!!」

噛み付いているグラエナを両手で掴んでそのまま後ろを向く。そして俺の顔がマダムXとカラマネロに見えていない事を確認してからシノンを見つめて口パクで作戦を伝える。

「・・・・・・・・!」

「ッ!!」

カイトが自分を見つめて必死に口を動かしているのを見たシノンは、その意味を理解して誰にも悟られないようにしながら1つのモンスターボールを持つ。

そしてマダムXとカラマネロがカイトとサトシに気を取られているのを見てボールからあるポケモンを出した。

「サーナイト！カラマネロにムーンフォース!!」

出て来たのはサーナイトで、モンスターボールの中でもエスパー能力で外の状況を知っていたサーナイトは指示を聞いた後すぐカラマネロ目掛けて『ムーンフォース』を放つ。

「マロ!?ネロオオオオオー!!」

予想もしていなかったシノン達の行動にカラマネロは驚愕する。目の前のカイト達ばかりに気を取られていたから傍にいたシトロン達やロケット団、後ろにいたポケモン達に命令する暇がなく、凄まじく威力の『ムーンフォース』を食らって悲鳴を上げながら倒れた。

「ううっ・・・!ああ、あああああ!!」

カラマネロが倒れた事によりマダムXは悲鳴を上げながら座っていた機材の上から転がり落ちた。そして操られていた者達は次々と意識を取り戻した。

「・・・ピカピ?」

「ピカチュウ!?良かったー!!」

「・・・ガウ?グガツ!」

「グラエナ・・・元に戻ったんだな」



正気に戻ったピカチュウを見てサトシは目尻に1粒の涙を浮かべながら抱き締めた。カイトも優しく微笑んでグラエナの頭を撫でて抱き締めた。けどグラエナは肩から血を流すカイトを見てとても驚き、必死に血を止めようと舐め続けた。そこへセレナとシノンが駆け寄った。

「サトシ！大丈夫!?!」

「兄様！大丈夫ですか!?!」

「ココーン！コーン!」

「ああ、俺もピカチュウも大丈夫だぜ」

「俺もなんともないさ」

2人は心配かけないように大丈夫だと言うが……。

「大丈夫な訳ないでしょう!!」

「!?!」

突然セレナとシノンが大きく怒鳴って2人だけでなくその場にいた全員がビクツツとしてしまう。だが彼女達はそんな事気にせず、涙を浮かべながらそれぞれ愛する人を優しく抱き締める。

「サトシの傷つく姿なんて……私、もう二度と見たくない!」

「これ以上心配かけさせないでください。お願い……!」

彼女達の姿を見て2人は何も言えなくなってしまった。しかし彼女達の不安を取り除こうと同じようにそつと抱き締める。

するとその時マダムXが呻き声を出しながら起き上がろうとしていた。それを見て誰もが警戒するが、カイトとグラエナだけは何もしなかった。そして立ち上がった拍子に薄ボロの布が外れ落ちてその正体が明らかになった。

「やはり貴方だったか・・・ジュンサーさん！」  
「やはりって・・・分かっていたのかカイト!?!」

衝撃の言葉を聞いて全員がカイトを見つめる。

「最初に襲われた時グラエナが教えてくれたんだ。マダムXからジュンサーの臭いがするとな。アイツは一度嗅いだ臭いは絶対に忘れない」

「ガウ・・・」

カイトが全員に説明している間ジュンサーは今の状況に混乱していた。

「わ、私は一体・・・此処で異変が起きているとの通報を受けて急行し、そして・・・あのカラマネロに遭遇して・・・ハッ！」

「ネローー!!」

操られる前の記憶を辿っていた時に彼女の後ろでカラマネロが起き上がった。そして笑い声を出した後真実を語り出し、それをニャー스가通訳する。

「『私の為に働いてくれたジュンサーには大いに感謝する』だど!?!」

「何ですって!?!」

「そうか!ジュンサーさんはカラマネロによってマダムXにされ、操られていたんですね!」

「『そうだ。おかげで意義あるシステムの建設に着手できた』だど!?!」

「意義あるシステム!?!」

「それを使って何をする気だ!?!」

「ピーカー!」

「『この世界を改造する。その為にお前達にはもう一度働いてもらう!?!』」

「その手に乗ってたまるか！マリーカ！サイケ光線!!」

「ピカチュウ！10万ボルト!!」

「グラエナ！悪の波動!!」

カラマネロが光を放つ前にマリーカ、ピカチュウ、グラエナの3体が攻撃した。激しい爆発が起きるが、カラマネロは無傷のまま脱出し、ある通路に向かって逃亡した。

その後を全員が追い掛け、辿り着いた先の部屋は今までとは全く違ったものだった。黒い樹木の様な物に薄赤い光を出している何かが部屋全体を巣食うように張り巡らせていた。

「これが意義あるシステム・・・随分と不気味な物だな」

「メロメロー!」

『お前達には到底理解できないものだろう。だがこれで世界は変わる。その時我々の大いなる計画が始まるのだ。だが、人間に発見された以上此処は放棄せざるを得ない』

そう言った瞬間、天井が光り次に爆発が起こった。どうやら全てを木端微塵に爆発して証拠を何もかも消すつもりの様だ。

「カラカラカラ〜!」

カラマネロは怪しく笑い続けながら次々と起こる爆発の中に消えていった。

「危険だわ！避難するのよ!」

ジュンサーの指示に従って全員が必死に出口に向かって走り出す。背後で起きる爆発に怯えながら操られていたポケモン達を連れてなんとか施設の外へ出られた。

だがそれと同時に施設から今まで以上に大きい爆発音が響いた。

激しい爆風からゴロンダやバクオング、ペンドラー、オンバーンが大きな体でカイト達を守ってくれた。

ようやく爆風が収まったのを感じて頭を上げた時、カイトは煙の中から何かが飛び出したのに気が付いた。

「アレは・・・カラマネロ！待て！何処に行く?!」

「ネーロ！カラカラ〜！」

空の彼方へ飛んで行くカラマネロに大声で訊ねるが、カラマネロは『また会ったら教えてやる』と言って飛び去ってしまった。兎にも角にも事件から解放されて全員が肩の力を抜いた。

「大いなる計画が始まる・・・カラマネロはそう言っていましたね」

「何のかしら、その計画って？」

「さあ・・・いずれにせよ謎だらけの事件だったわ」

「カラマネロ・・・恐ろしいポケモンだ」

「ピイカ・・・」

「悪タイプのポケモンであんな事言っていたが・・・もう二度と会いたくない奴だ」

「ガウガウ・・・」

「本当にそうですね・・・」

「コンコン・・・」

カイト達は暫くの間カラマネロが飛び去って行った青空を見上げ続けた後、傷を癒す為にポケモンセンターへ向かうのであった。

ちなみにいつの間にか姿を眩ませていたロケット団だが、少し離れた所にある岩場で休憩していた。けれど途中ニヤースがカラマネロの進化前がマリーイーカであると言い、当人が照れたように笑った事で再び恐怖を感じて叫び声を上げるのであった。

## 騎士の挑戦・バトルシャトー！

シヨウヨウシティに向かっていたカイト達はカロス地方で最も長い道とも言われるリビエールラインのポケモンセンターで休んでいた時、セレナが愛用のナビ付き電子ノートを見せながらある提案を出した。

「ねえ、皆！この先にあるバトルシャトーに行ってみない？」

「バトルシャトー？」

初めて聞く単語に全員が首を傾げる。名前からにしてバトルをして何かを得られる所だと思うが、ジムとは違ってバツジが貰えると思えない。そう考えていた時、近くで話を聞いてニコラとテスラの兄弟がラップのような口調で爵位が貰えると教えてくれた。

「なあ、悪いが爵位についてもっと詳しく・・・」

「お、このポケモンは！」

『ピノヤコマ。火の粉ポケモン。ヤヤコマの進化形。お腹の炎袋の火力が強まるほど速く飛べるが、点火するまで時間がかかる』

「おいおい、サトシ・・・」

情報を聞き出そうとした時、新しく見るポケモンを調べようと図鑑を開くサトシのマイペースな行動に俺は苦笑しながら額に手を当てる。

その間にも2人の兄弟はラップ口調で話し続けるがいい加減ウザく感じたセレナとシノンがつい口に出してしまい、それにより2人が凍るように固まった事で静かになった。

「なあ、爵位って？」

「(パキッ！)・・・ハッ、ぶつちやけ説明面倒YO」

「俺達今から行くからYA！」

「一緒に来れば分かるのYO！」

「連れてつてくれよ、バトルシャトー！シヨウヨウジムにチャレンジする前に力の確認と勢いを付けたいんだ！カイトもそう思うだろう？」

「ピカチュー！」

「そうだな。せっかくだから付いて行くとしよう」

「ガウガウ！」

「ジム戦の前座になるかならないか！YO！YO！皆連れてつてやるYO！」

「行ったら絶対ビツクリYA！」

その後カイト達は自己紹介を済ませ、ニコラとテスラの兄弟の案内の元でバトルシャトーに向かった。それから暫く歩いて辿り着き、遠くからでも分かるくらい大きく綺麗に整えられている城の入口には『バトルシャトー、その強さ、爵位で示せ』と書いてあった。

自然と心の底から湧き上がってくる戦いたい欲求を抑えながら門を潜って中に入るとピカピカに磨かれた床に両脇にある白い甲冑と目の前に飾られている肖像画の部屋で、1人のメイドが頭を下げて出迎えてくれた。

「バロン・ニコラ様。バトルシャトーにお帰りなさいませ」

「バロン？」

「爵位階級の1つで1番下の位の呼び名よ」

初めて聞く単語にサトシ達は首を傾げる。そんな中で唯一意味を知っていたシノンが分かりやすく説明した。

そんな中ニコラはテスラのデビュー戦の申し込みをお願いする。それを見てサトシとカイトも申し込みをお願いする。

「俺もバトルをお願いします！」

「俺もお願いします」

「あなた方様は・・・」

「カントーのマサラタウンから来ました、サトシって言います！」

「ピカチュー！」

「俺はシンオウのカンナギタウンから来ました、カイトと言います！」  
「グツガウウ！」

それぞれ自己紹介を終えた時、奥の通路からダンディな男性が現れた。此処バトルシャトーの当主のイツコンであった。イツコンは優雅に一礼をし、カイト達を歓迎してバトルの申し込みを承諾した。

「初めまして。カントーとシンオウからお客様を迎えるとは大変に嬉しく思います。また、お会いできて光栄でございます。ダークマスター・カイト様」

「え、ええええええええええ!!?」

イツコンの言った言葉を聞いてニコラとテスラは驚愕する。自分達の傍にいるカイトの正体が今カロス中でその名が広まっているダークマスターであるのだから無理はない。だがカイトは少し困った表情でイツコンに言う。

「申し訳ありませんイツコンさん。あまりダークマスターとは言わなideくれると助かります。いろいろと大変な事になりますから」

「これは失礼致しました。ですがカイト様の名はこちらの地方でも広く知られており、その強さはグランデュークの称号に相応しい程であります。貴方様の強さを是非味わせてもらいたいのですが・・・今はその話を後にして、皆様方をバトル場にお連れいたします」

そう言っつてイツコンはカイト達を案内しながらバトルシャトーについて説明する。

バトルシャトーは紳士淑女のトレーナー達に極上の戦いを提供する社交場である。此処は元々過去に行われたれ歴史ある騎士の決闘

をお手本に始められたものだ。

ポケモンバトルを騎士道精神で高めると言う流儀で、自慢のポケモンをただ戦わせるのではなく、礼節や格式を重んじると言う風潮を生ませたのだ。

また此処ではトレーナーの事を「ナイト(騎士)」と呼ばれている。そしてバトルの結果によってナイト達は爵位と呼ばれる称号を得られ、その爵位の階級によって強さの順番を付けている。その為ナイト達は上位の爵位を目指して奮闘しているのだ。ジム戦が主流になっている現代でもカロス地方独特のバトルとして違った雰囲気味わえるから多くのトレーナーに利用されている場所だ。

そして説明が終わったのと同時にとある部屋の扉の前に辿り着いた。

「これからご案内するのはサロンでございます。バトルシャトーに来たら、こちらで対戦相手を選んで頂くのです」

メイドが扉を開けると部屋の中には多くのトレーナーならぬナイト達が待機していた。

此処にいる者達は全員爵位を持っている者ばかり・・・なかなか強そうな者だらけで楽しめそうだ。

静かに闘志を燃やしているナイト達を見てカイトは内心全力とまではないかないがそれなりに本気でバトルできる事に喜んだ。

そう思っている間にアイコンがニコラがやって来た事を伝え、ナイト達は揃って見つめる中でニコラは数歩前に出て右手を胸の前に構えて敬礼しながら対戦相手を求めた。

すると1人のナイトが白い手袋を軽く投げつけた。それを拾い上げれば戦いを受けた証となる。

これも歴史ある騎士の決闘の正しい作法だ。

「私がお受け致しましょう。私はバロンの称号を持つファルレ」

「宜しく願います」



「どうぞお手柔らかに」

対戦が決まるまでのやりとり見たサトシが「誰とでもバトルができる」と言うが、テスラが言うに同じ爵位の相手ではないと戦えない決まりらしい。それを聞いてナイト達を片っ端から潰せないと分かって少し残念に思った。

「ピカ？ピカピ！ピカピカ!？」

「うん？どうしたピカチュウ?」

突然ピカチュウが驚きの声を出してある方向を指差しながらサトシを呼ぶ。その声に反応して全員が指を差す方向を見ると1人の男が壁を登っていた。サトシ達の驚く声に気付いたのか男は片手で窓の縁を掴んでぶら下がりながらこちらを見下ろした。

「あの人は一体何を?」

「彼はザクロさんと言ってね。いつも登っているんだ」

「すごく強いんだよね」

「・・・そうだと思った」

何しろあの人の体中から感じた闘志はジムリーダーと同じものだ。きつとザクロさんはどこかのジムリーダーだろう。使用するポケモンとタイプを知りたいな！此処でバトルしてくれないかな！と願いながら再びメイドに案内されて外のテラスからバトルを観戦する。

水面に囲まれたバトルフィールドでニコラとファルレは白いマントを羽織って現れた。

テスラから話を聞くとバトルシャトーでバトルをするナイトは階級ごとに違う色のマントを身に着けるのがしきたりで、白いマントはバロンの証なのだ。

ちなみに階級は6つあって下から順にバロン(白)、ヴァイカウント(青)、アール(深緑)、マーキス(山吹色)、デューク(赤)、グランデュー

ク（紫）でバトルに勝つ事で昇格していく。説明を聞いた後サトシは最初にイツコンが言った事を思い出した。

「と言う事は・・・カイトは一番強い爵位って事か!？」

「当然ですよサトシ。先程イツコンさんがダークマスターの名はカロス地方でも広く知られていると言ってたじゃない」

シノンがそう言うのとサトシを始め全員がカイトを見つめる。だが当の本人は自分の事よりも目の前で始まろうとしているバトルを興味深そうに見ていた。

そんな中でニコラとファルレのバトルが始まった。ニコラのポケモンは先程見たヒノヤコマで、ファルレのポケモンゴーストタイプのヨノワールだ。

ヨノワールのトリツキーな戦法と効果抜群の『雷パンチ』に苦戦しながらもお腹の火袋が点火したヒノヤコマの『ニトロチャージ』によってニコラが優位に戦いを進めていた。

なかなか良い技を覚えさせているなと思っていた時、背後から何かの気配を感じた。振り返ってみるとそこには懐かしい人がいた。

「やっほー!」

「えっ? ビオラさん!？」

「久しぶり! まさか此処で再会するなんてね」

そこにいたのはハクダンジムのジムリーダーで、虫タイプの使い手であるビオラだった。ちなみに今の彼女はジム戦の時とは服装と髪型が違って、大人の女性の美しさが溢れているものだった。

カイトの驚きの声とビオラの返事を聞いてサトシ達も振り向いて同じように驚く。

「どうしてビオラさんが此処に?」

「こう見えて私、ダッチェスの称号を持つてるんだから!」

「ダッチェスと言うと・・・デュークの女性用で2番目に強い称号ですね」

「へえ、称号は男性用と女性用で呼び名が違うんだ」

称号について話をしている間にバトルの勝敗が決定した。

バトルに勝利したのはヒノヤコマで、これによりニコラはヴァイカウントに昇格して青いマントを羽織った。

熱いバトルを見られて満足したイツコンとナイト達が健闘した両者とポケモンに拍手を送る。その時大窓の近くでドスンと何かが落ちてきた。その正体はザクロで、彼は痛々しい呻き声を出しながら四つん這い姿勢でぶつけた部分を擦っていた。その様子を見てカイト達は心配して近寄り、ビオラは頭を抱え、イツコンは呆れながら言う。

「ザクロ様・・・またですか?」

「つい拍手しちゃうんですよね。素晴らしいバトルとポケモンに愛を！」

両手を広げながら言うザクロにビオラが呆れながら近寄って来る。

「ザクロ君ねえ、そう思っているなら降りてから拍手すれば?」

「壁が僕を離してくれないんですよ。此処の壁はいけない・・・滑らかで艶らかで僕を誘うんです。ビオラにはバトルシャツの壁のたおやかさが分からないかな?」

「どんなに力説されても・・・壁には燃えないのよね私・・・(汗)」

ビオラとザクロの会話を聞いて誰もが2人が知り合いだと分かった。そしてビオラからザクロが壁を見たら登らずにはいられないがデュークの称号を持っていてかなり強いと教えられる。

それを聞いてサトシ達はさらに驚くが、カイトだけは何の反応もしなかった。なぜならジムリーダーや四天王の大半が変な趣味を持っていると知っているからだ!(えっ!?)

話が終わった後メイドが次の対戦相手の名を呼ぶ。次はサトシとテスラのデビュウ戦だ。

呼ばれた2人はバトルフィールドに立ち、ボール同士を合わせて自陣に戻る。そしてサトシはピカチュウ、テスラはヤヤコマでバトルを開始した。結果はサトシの圧倒的な勝利だった。これまでのバトルで得た経験と戦術、さらにカイトに鍛えて貰った事で1つ1つの技の威力が高かくそれ程時間もかからなかった。

そしてサトシはバロンの称号を手に入れて白いマントを羽織ってピカチュウと一緒に誇らしげに胸を張って勝利を喜んだ。

それからテスラと共にバトルフィールドを後にするとメイドが再び次の対戦相手の名を呼んだが、その相手が……。

「続きまして我が当主・イツコン様対ダークマスター・カイト様のバトルを始めます！」

「何？」

ザワザワザワザワ

メイドの言葉を聞いてナイト達は驚いた。勿論カイトも同じで突然の事に驚いているとイツコンが近づいてくる。

「申し訳ありませんカイト様、ですが私はどうしても貴方様の強さを味わいたいのです。どうか私の我儘に付き合っただけないでしょうか？」

「良いですよ。実を言いますと俺もバトルを試してみたいと思っていますしたので」

「お聞き頂きありがとうございます。私に勝てばグランデュークの爵位を贈呈致します」

「分かりました」

話をまとめた後カイトとイツコンはバトルフィールドに向かう。

そんな2人を見てナイト達はさらに騒ぎ出す。

あまりバトルはしないが運良く見られた者からバトルシャトーの当主だけにその強さは絶大だと知られているイツコン。そんな彼がこれまた絶大な強さを誇るダークマスター・カイトとバトルをする。2人のバトルを見ようと全員がテラスに集まった。

「良きバトルを」

「良きバトルを」

バトルフィールドの中央でボール同士を合わせて自陣に戻った後、それぞれポケモンを出す。

「頼みましたぞシュバルゴ!」

「シュバーーーー!!」

イツコンが出したポケモンは騎兵ポケモンのシュバルゴで、タイプは虫・鋼タイプだ。バトルシャトーに相応しい感じのポケモンで、体から溢れるオーラは大きかった。これはなかなか楽しめそうだと思いつつカイトは、足元にいる己の最高の相棒であるグラエナを出した。

「グラエナ、今回は久しぶりに・・・手加減無しの本気で行くぞ!!」

「ガウ!」

カイトの指示を聞いたグラエナはどこか嬉しそうに頷き、ゆっくりバトルフィールドに立つ。そして激しく咆哮する。

「グラアアアアウウウツ!!」

「!?!」

グラエナの咆哮を聞いたシュバルゴは2、3歩後退する。また特

性：いかくの影響もあって攻撃力が下がる。だがそれは通常よりも下がったような気がした。

さらに影響を受けたのはシュバルゴだけでなく、イツコンやサトシ達、周りにいた野生ポケモン達も一瞬恐怖を感じた。

「これは・・・唯のいかくとは思えない程の威力ですな」

「ありがとうございます。ですが驚くのはまだまだ早いですよ」

イツコンは恐怖を感じつつも相手が自分が戦って来た者達の中で遥かに強い事に喜びを感じた。

そしてメイドの合図と共にバトルが開始した。

「先攻はそちらからどうぞ」

「承知しました。シュバルゴ、鉄壁です」

「まずは防御を高めてきたか。でも無駄だ・・・グラエナ、悪の波動!!」

全身を光らせて『鉄壁』で防御力を高めるシュバルゴだが、グラエナは構わず『悪の波動』を放つ。本来なら効果はいまひとつの技だが、攻撃を受けたシュバルゴはかなりのダメージを食らっていた。

「(相性はこちらが有利の筈なのにこれ程までダメージを受けるとは!?)やはりカイト様は強いですな。ですがこちらも負けません! 剣の舞から虫のさざめきです」

「シュツバ〜!」

シュバルゴは『剣の舞』で攻撃力を上げた後『虫のさざめき』を放つ。強烈な音にグラエナは苦痛の表情になって必死に耐える。相手が動かなくなった隙をイツコンは逃さない。

「シザークロスです」

「噛み砕くで受け止めろ!!」

シユバルゴは素早い動きで正面から『シザークロス』で切りかかる。誰もが決まったと思ったがグラエナは『噛み砕く』で受け止めてしまった。驚くシユバルゴにグラエナは「先程の攻撃なんて効いていない」と言わんばかりに鼻で笑った。そしてシユバルゴの腕に噛みついたまま勢いよく地面に叩きつけた。

「止めだ！焼き尽くす!!」

「グウウガアアアツ!!」

効果抜群の『焼き尽くす』を食らってシユバルゴは目を回しながら動かなくなった。それを見てグラエナは勝利の咆哮を上げた。

そしてバトルに勝利したカイトはグランデュークの称号を手に入れて紫のマントを羽織り、グラエナと一緒に喜び合った。

ちなみにカイトはよくリーグ戦などで専用の服とマントを着用していたからマントを羽織った姿はかなり似合っていて、その姿を見たシノン他女性達は見惚れた。

「あれがダークマスター・カイトの実力か・・・！」

「何て強さだ・・・」

「噂通りチャンピオンと変わらない強さだ・・・」

一方テラスでカイトの凄まじい力を見たナイト達は自分との力の差を知り、内心勝てないと悟る。

だが唯1人だけ・・・サトシだけは違った。彼はカイトの力を再確認して絶対に追い付いてみせると心に誓った。

そしてカイトがイツコンと共にバトルフィールドから去って戻ってくるまで多くのナイト達やメイド達から握手やサインを求められた。カイトは1人1人と丁寧に向き合って対応し、その姿を見てシノンはまるで自分の事のように誇りに思った。

そうしている間に最後のバトルが始まった。対戦相手はビオラと

ザクロで、ビオラはアメタマ、ザクロは岩タイプのイワークを出した。ザクロのイワークは『岩石封じ』の岩石を自由自在にコントロールでき、アメタマの氷のフィールドによるスピードを封じて勝利を収めた。それによってザクロもグランデユークの称号を手に入れた。

その後ザクロの帰り際にカイト達はザクロがシヨウウウシテイのジムリーダーだと知った。そして彼の使うタイプと戦術を見たカイトは今日此処に来て良かったと思いつながらサトシと一緒に『岩石封じ』の対策について特訓を始めるのであった。



ポケビジョン！セレナとフォッコの絆を撮影せよ！！

旅の途中で休憩の為に立ち寄ったポケモンセンターのロビーで、カイト達は大型のモニターであるものを見ていた。それは『ポケビジョンベスト10』と言う番組だ。

内容はポケモンやトレーナーの映像が10位からランキング順に発表されていくものだ。

「なあ、ポケビジョンって何だ？」

「サトシったらそんな事も知らないの？」

初めて見た映像についてサトシが訊ねるとセレナが少し呆れつつも説明する。

「ポケビジョンはトレーナーが自分で作るポケモンのプロモーションビデオの事で、ポケモンを紹介したり、トレーナーとポケモンの仲の良さをアピールしたりするのよ」

「そのビデオを動画サイトにアップして人気投票をランキングしたのが、このポケビジョンベスト10なんです！」

セレナに続きシトロロンが今やっている番組について説明してくれたのでサトシだけでなく、カイトとシノンも理解できた。

その間にもランキングは次々と発表され、遂に第1位が発表された。タイトルは『エルとフォッコのアイドルライフ！』と言うもので、赤い髪の女の子とフォッコが水色のリボンを付けている映像だった。それを見てユリーカが嬉しそうに騒ぎ出す。

「わあ〜！やっぱり1位はエルさんだ！」

「ネンネー！」

「エルさんか、有名な人なの？」

「ええ、ポケビジョンベスト10の常連だったエルさんとフォッコは、

アイドルポケモンユニットとしてデビューして今や大人気なんです！」

モニターに映っているエルについてシノンが訊ね、シトロロンが再び説明する。そして全員がモニターを見るとタイミング良くエルとフォッコが可愛らしくウインクしていた。

「本当に可愛いな。カイトもそう思うだろ？」

「ああ、確かに可愛いな」

「えっ？」

「フォッコが！」

画面を見ながらサトシとカイトはフォッコを「可愛い」と言う。セレナとシノンは思わず2人がエルの事を言っているのかと思つて一瞬不安な表情になるが、すぐに違ふと分かつて胸を撫で下ろした。

「サトシもカイトさんも分かつてるー！」

「可愛さなら私のフォッコも負けてないもんね！」

「フオ〜〜！」

「リマツ!？」

セレナが不機嫌な表情になっているフォッコを抱き上げながら言う。フォッコは自分の主人に可愛いと言われて嬉しそうに鳴き声を出し、そのまま隣で目がハートマークになってメロメロ状態になっているハリマロンを睨み付けた。

「それにセレナもエルさんに負けてないかも。そうだよね、シノンお姉ちゃん？」

「ええ、セレナもフォッコももつと自分の可愛さに自信持っていんだよー！」

「コンコーン」

「ありがとう2人とも！」

女子達は楽しく会話をして、キュウコンが尻尾でフォッコの頭を優しく撫でるなど彼女達の仲の良さがさらに強まった。その時シトロクンがポケビジョン撮影の機材がポケモンセンターに揃っていて、機材の貸し出しもしていると言う。

それを聞いたセレナがフォッコを抱えながら立ち上がる。

「よし！決めた！私もポケビジョンデビューよ！」

そう宣言した後のセレナの行動は早く、ジョーイにポケビジョン撮影について訊ね、機材一式を借りる許可を得た。

「私、ポケモン貰ったらポケビジョンデビューしようって思ってたんだ！」

「私もデデンネと撮ってポケビジョンデビューしたい！」

「ダメだよ。デデンネはユリーカのポケモンじゃないんだから」

「ブー……！じゃあ、お兄ちゃんのお嫁さん探しの為のビデオを作る！」

「ええっ!?!」

突然のユリーカの宣言にシトロクンは眼鏡が外れかけてしまう程驚き、必死に止めようとするがユリーカは話を聞かず強制的に流れを進めてしまった。

「ねえ、サトシ達もやろうよ！」

「ああ〜ごめんセレナ。俺はこれからカイトと一緒にザクロさんとのジム戦に備えて特訓がしたいんだ」

「特訓?」

「ああ！前に見たザクロさんのイワークの岩石封じに対抗できる技がないとバトルには勝てないからな！」

「俺も次のジム戦では別のメンバーで挑もうとさつき手持ちを変えたんだ。彼らの調整と有効的な戦術を考える必要がある。その為にもお互いに協力し合う事になったのさ」

「えっ！カイトさん手持ちポケモン変えたの!? ユリーカ見たい見たい！」

「ああ、いいよ。セレナとシトロンのポケビジョンの撮影が終わったら見せてやるよ。ちなみにユリーカがまだ旅で見た事のないポケモンだぞ」

まだ自分が見た事のないポケモンと聞いてユリーカはさらに明るい表情になり、目をキラキラ輝かせる。それを見て全員が微笑む中、セレナは次にシノンに訊ねた。

「シノンはポケビジョン撮影しない？」

「あ、いや、その・・・私はこういうのあまり興味がなくて。その代わりにセレナのポケビジョン撮影に協力するわ」

「ありがとう！それじゃ、さっそく始めましょう！」

話が纏まった後カイトとサトシはジム戦の特訓に、セレナとシノン、シトロンの、ユリーカはポケビジョン撮影に執りかかった。

ポケモンセンターから外に出てシノン達と別れたカイトとサトシは、特訓に最適な広い高原を見つけてそれぞれ手持ちポケモンを出した。

今回のジム戦でサトシは今いるメンバーのケロマツとヤヤコマ、そして最高の相棒であるピカチュウの3体で挑むようだ。

「カイトは今回どのポケモンで行くんのだ？」

「今見せてやるよ。ヒトツキ、ノクタス、ボスゴドラ、出陣！」

「ツーク！」

「ノーク！」

「ゴドラー！」

カイトのモンスターボールから出て来たのはヒトツキに、カカシ草ポケモンのノクタス、鉄ヨロイポケモンのボスゴドラだった。久しぶりにカイトと会えてノクタスは拳を前に突き出して打ち付け合い、ボスゴドラは両手で強く抱き締めた。

この時抱き締められたカイトは危なく背骨が折れそうになったのは余談である。

「おお、ノクタスにボスゴドラ！2体とも懐かしいな！」

「ピカピクカー！ピカチュウ！」

「ノクノク！」

「ゴドゴド！」

2体を見たサトシとピカチュウは再会できた事に喜び挨拶をする。実はノクタスとボスゴドラはシンオウ地方でサトシ達と会っており、サトシのポケモン達とは一緒にバトルをしたり特訓したりした事があったのだ。

2体もサトシとピカチュウと再会できて嬉しく思い、ケロマツ達だけでなく新しく仲間になったヒトツキも含めた全員に独自の挨拶をした。そして一同は横に整列する。

「いいか、あのイワークの岩石封じに対抗するにはスピードだ。ピカチュウは電光石火、ヤヤコマは相手をかく乱する影分身、ケロマツはその両方がある！それぞれの技を磨いて、岩石封じに打ち勝つんだ！」

「俺達も同じようにスピードを高めるが、メインはお前達の自慢である防御力による戦術だ。ヒトツキとボスゴドラは鋼の体、ノクタスは草の力を使ったあの技により対抗して勝利を掴むんだ！」

カイトとサトシの言葉を聞いてポケモン達は一斉に気合いの籠った声を上げる。

「良い返事だ。それじゃサトシ、まずは各自体力アップの為ランニングから始めるとしよう」

「分かった！皆行くぜ！」

元気よく走り出したカイトとサトシの後に続いてポケモン達も走ったり、空を滑空したりして付いて行った。

走り始めてからすぐに足の速いピカチュウやグラエナはそれぞれカイトとサトシの真後ろに付き、他のポケモン達はその1歩後ろに居て、そのさらに後ろではボスゴドラが地響きを起こしながら走っている。

順調にランニングを続けていると丘の下でシノン達が必死に走り回っている姿が見えた。一旦走るのを止めて眺めてみるとセレナとフォッコがカメラをモデルに作られたと思うロボットに追いかかれていた。

「おっ、シトロンの発明品で撮影してるんだな。やっぱり科学の力で凄いな！」

「ピカピカ！」

「だが撮影にしては可笑しくないか？もしかしてまた壊れたのか？」

「ガウツ」

カイトの言う通りで、シトロンの発明したロボットは最初上手く動いて撮影をしていたが少し経つと暴走してしまったのだ。

「いやー！助けてー！！」

「サトシ何とかしてー！！」

「兄様お願い！何とか止めて下さい！！」

セレナとユリーカの悲鳴とシノンの頼みを聞いてサトシも状況を悟り、急いで止めようとする。

「よしピカチュウ！あのロボットに向かってエレキボールだ！」

「ピカピカ・・・！」

「待てサトシ！今撃つとセレナとフォッコが危険だ。ここはケロマツで対応するんだ」

「ケロマツで？・・・そうか分かった！ケロマツ、ロボットの脚にケロムースだ！」

「ケロ！」

高くジャンプしたケロマツがケロムースを投げつける。ケロムースは一直線にロボットの脚に命中し、それによりロボットはその場から動かなくなる。その隙にカイト達はセレナ達の元に駆け寄る。

「大丈夫かセレナ？」

「うん。ありがとう・・・」

「ピカピカ？」

「ケロケロ？」

「フォッコ〜」

セレナの無事を確かめるサトシの傍で、ピカチュウとケロマツもフォッコに大丈夫かと訊ねる。

2人は息を整えて大丈夫と言い、サトシ達にお礼を言う。

「しかしこんなロボット、シノンなら何とかなったのではないか？」

「すみません兄様、実はモンスターボールを置いてきてしまって。それにキュウコンの技ではセレナとフォッコを巻き込んでしまうかと・・・」

「ああ、成程な」

確かにキュウコンの技だとロボットは木端微塵に爆発してセレナ達を巻き込んでしまうだろう。

それに走りながら尻尾を巻き付ける事は難しい。そう考えている間にシトロロンも合流し、セレナとフォッコに謝った。

「すみません。僕のメカがとんでもない事を・・・！」

「いいのよシトロロン。サトシ達が助けてくれたから」

「フォッコフォッコ！」

「ありがとうございます。次こそ完璧に仕上げますから少し待っていて下さい！」

「まだやるのか？まあいい、気合いを込めて頑張り・・・っておい、あのロボット、なんか様子可笑しくないか？」

「」「えっ？」「」

カイトがそう言って全員が見つめるとロボットが段々と激しく揺れ始める。それを見て全員が慌てて逃げようとするが間に合わず、その場で大爆発が発生した。

そして黒煙が消えた後、その場には全身真っ黒焦げになったカイト達が居た。

「何で・・・毎回・・・こうなる・・・のだ・・・」

「本当に・・・すみません・・・」

黒焦げになった全員の想いをカイトが代表で言い、それを聞いたシトロロンがその場で土下座をしながら謝るのであった。

その後カイト達は真っ黒焦げになった体を洗う為ポケモンセンターに戻り、再び高原に集まって撮影の準備を整えた。だけど先程とは一つ違う点があった。それはセレナとフォッコの服装である。

「ジャジャーン！」

「フォッコー！」

セレナ達はお揃いのピンク色の洋服を着て、可愛らしくポーズを決



めながら皆に見せる。さらにセレナにはフォッコ耳と尻尾が付いていた。

何故この服装かと言うと先程体を洗いに行く時、ユリーカがせっかくだからと提案したのだ。

「新しい衣装のチャームポイントはこのフォッコ耳と尻尾でくす！」

「可愛いー！」

「とても素敵だよセレナ」

セレナ達の服装を見てユリーカとシノンが似合っていると褒める。

「ねえねえ、サトシとカイトさんも撮影手伝ってよ！」

「でも俺達特訓の途中で・・・」

「偶には息抜きしないと能率がなんないわよ」

「セレナの言葉にも一理あるわね。それに兄様、特訓はいつでもできますから」

3人の誘いを聞いてどうしようか悩むサトシがカイトに訊ねる。訊ねられたカイトは薄く笑いながら首を縦に振る。それを見てサトシの答えは決まった。

「そうだな。皆でやるか」

「やったー!!」

「ありがとうございますー！」

こうしてカイトとサトシも参加する事になり、シトロンの撮影の元セレナのポケビジョン撮影が開始された。

最初は高原でフォッコとお揃いの服を着て可愛くポーズを決めて仲の良さをアピールするシーンで、これは何の問題もなく1回で撮影を終わらせる事ができた。

次はキッチンでセレナとフォッコが一緒にスイーツを作るシーン

だ。

撮影の準備が整ったのと同時にポニーテールに髪を纏め、お揃いのピンク色の花柄のエプロンを着たセレナとフォッコ、それに特別出演のピカチュウがやって来て撮影が始まった。

だがここでトラブルが発生した。ボール一杯のシュガーパウダーを持って来たピカチュウが途中転んでしまい、ボールを落としてしまった。それにより中に入っていたシュガーパウダーがピカチュウとフォッコに降り注ぎ、2体とも全身真っ白になってしまった。

綺麗好きなフォッコは今の状態にとても怒り、涙目でピカチュウを睨み付けて『火の粉』を放つ。だがそれはピカチュウではなく、後ろにいたサトシに命中し、持っていたレフ版に穴を開けて再び黒焦げになってしまった。

「何で俺なんだ……」

「とんだ災難だな……」

「は〜い、カット……」

嘆くサトシを見てカイトは苦笑し、シトロンは溜息を溢しながら撮影を中止した。

その後再び体を洗ってもらいセレナにブラッシングしてもらっているフォッコは、ようやく機嫌を直してくれた。

「機嫌を直してくれて良かったぜ」

「ピカ〜」

「フォッコってホント綺麗好きだよね」

「いつも綺麗にしているからか、汚れるのが嫌みたいなんだ」

「そうなの。私のキュウコンも結構な綺麗好きよ」

「コーン！」

「そうですね、そう言えばセレナもそう言うところがありますよね」

「うん！女の子はやっぱり身嗜みに気を遣って、いつも可愛くしてないよね」

「フオー！」

ブラッシングを終えたフォッコをセレナは優しく抱き上げて微笑む。フォッコも嬉しそうにセレナと同じ事を言う。今の彼女達は誰から見ても良いコンビである。

その後暫くして全てのシーンを撮り終え、残るは編集と音入れだけとなった。

そしてその音入れだが、ユリーカの提案でカイトの笛の音を使う事になった。さらに笛だけでなく、ポケモンセンターにあつた様々な楽器を特別に貸してもらい、その音も使う事になった。

その為カイトは一旦サトシ達と別れ、シノンと一緒に高原に戻って撮影したシーンに合った曲を様々な楽器で奏でてみた。そしてその中から良い曲をシノンがしっかりと録音した。

ちなみにその曲を偶然聞いたトレーナーがあまりの素晴らしさにカイトに必死に頼んで曲を録音させてもらい、それによりカロス中に曲が広まってカイトの名がさらに上がったのは余談である。

その後演奏を終えたカイト達は、サトシ達に録音した曲を選んでもらう為にポケモンセンターに戻るが……。

「えっ？ 此処にはいない？」

「ええ、先程ロケットティアと言うポケビジョン撮影のプロの人達と一緒に出て行きましたが……」

「そうですか。ありがとうございました」

ジョーイから詳しい話を聞いた後、カイト達はサトシ達が向かったと思われる場所に行く。少し経って辿り着くとちようど建物の外にサトシ達とロケットティアとか言う5人組がいた。だが何だか言い争っているような感じで様子が可笑しかった。

「サトシ、これは一体どう言った状況なんだ？」

「あつ！カイト、ちようどy」はいはい！その2人さん！「おわっ!？」

事情を説明しようとしたサトシを赤髪と紫髪の2人の女性が押し退け、目の前にやってきた途端に問答無用でグラエナとキュウコンをひよいと抱えて取ってしまった。

「えっ？な、何を!？」

「実は今新しくポケビジョン撮影を行う為、先程のピカチュウちゃん達同様この子達を預からせてもらいます！」

「ま、待つてください。キュウコンは別に撮る必要はないから・・・」  
「いえいえ、こんなに可愛いですから撮らないと損ですよーん」

「それでは皆様は暫くの間外でお待ちください。また、撮影中は絶対覗いてはいけませんよ」

そう言つて5人組はドアを閉めてしまった。突然の事に混乱しかけつつもサトシ達に事情を聞くとポケモンセンターの編集と音入れをする機械が壊れて、困っていたところにロケットティアが現れた。サトシ達は彼らに編集を頼もうとするが、彼らはプロだからと言う理由で先程撮影したシーンは使わず、自分達が新しく撮影するからと言つてさつきみたいにポケモン達を勝手に預かってしまったとの事だ。

「勝手に預かるなんて・・・アイツら本当にプロなのか？いくらなんでも怪し過ぎるぞ」

「やっぱりそう思うか。よし、皆追い掛けようぜ！」

サトシの言葉に全員が頷き、ドアを開けて部屋に入つてみるとそこはただの空き地だった。そこへフオッコの鳴き声がかから聞こえ、顔を見上げてみるとロケット団のニヤース気球が浮かんでいて、下の部分にあるガラスの檻にグラエナ達が捕らえられていた。

「ロケット団！またお前達か！」

「くっ！前の時よりも変装に磨きをかけやがって……だがどうやってグラエナの鼻を誤魔化した!？」

「フツフツフ、それならニャーの開発したこのどんなポケモンの鼻でも誤魔化せる特殊スプレーのおかげニャー！」

ニャースが自慢するかのようには開発したスプレーを見せ、カイトは悔しそうに唸る。その時シトロンが何かを思い出す。

「もしかして編集と音入れの機械を壊したのも！」

「さあ？どうかしら？」

「それより貴方達のポケモン達は先程言った通り私達が預からせてもらいました」

「ではバイニャー！」

ロケット団はニャース気球から煙幕を放出して姿を消すと逃げ出す。そうはさせないとカイトはプテラ、サトシはヤヤコマ、シノンとビビヨンとウォーグルを出して追い掛けるように言う。そして暫く経つとプテラ達が戻ってきてロケット団を見つけたと言い、カイト達はロケット団が逃げた方向……森の中に入って追跡するのであった。

その頃グラエナ達は、ロケット団によって洞窟の中に閉じ込められていた。けど彼らは諦めず薄暗い中で必死にガラスの檻から脱出しようとしていた。

目の前のガラスをグラエナが『氷のキバ』で冷やすとキュウコンが『火炎放射』で温める。それを何度か繰り返した後、ピカチュウとキュウコンが『アイアンテール』で叩く。すると檻にヒビが入り、次にフォッコが『目覚めるパワー』で破壊した。

そしてすぐさま走り出して洞窟を出る。外に出てみると晴れているのに雨が降っていて、入り口前には水溜りができていた。

実は今洞窟の上にて、ムサシが女優姿になって新たなポケビジョン撮影を行っていて、その為に用意した巨大扇風機とホースから出る水が原因なのだ。

『何で水溜りがあるの？』

『分からん。だが今はアイツらに見つかる前に逃げ出すのが先だ』

『うん！皆行くよ』

上でそんな事が起きているとは知らず、ピカチュウを先頭にグラエナとデデンネが水溜りの中を走る。だが途中でグラエナがキュウコンとフォッコが立ち止まっているのに気が付く。

『どうしたキュウコン？』

『ごめんなさいグラエナ。けど・・・その・・・』

2体の表情を見て暫く考えた後グラエナは思い出した。どちらも汚れるのが嫌いな性格であった事に！

『ピカチュウ、デデンネ。お前達は先に行け』

『グラエナはどうするの？』

『俺はキュウコン達を連れて来る』

そう言つてグラエナは戻つて2体の元に駆け寄ると体勢を低くする。

『キュウコン、フォッコ。俺の背中に乗れ』

『で、でも・・・』

『早くしないと奴らに見つかる。急げ！』

『・・・分かったわ。お願いねグラエナ』

お礼を言いながら2体はグラエナの背中に乗つて尻尾を巻き付け

て固定する。2体に乗ったのを確認したグラエナはゆっくり歩き出す。ピカチュウとデデンネが心配そうに見守り、少し体がふらつきながらも進んでいた時、遠くから自分達の名を呼ぶ声があった。

声が出た方を見るとカイト達がこちらに向かって走っていた。それに気が付いたピカチュウ達がそれぞれのトレーナーの元に駆け寄って飛びつく。

「無事だったかピカチュウ？」

「デデンネも大丈夫？」

「ピカピ！ピカピカ！」

「ネネー！」

サトシとユリーカがピカチュウ達に怪我がない事を確認して安心している間、セレナは未だ水溜りの所にいるフォッコの元に躊躇せず駆け込む。その後が続いてカイトとシノンが走る。グラエナも一生懸命歩いて彼らの元へ行こうとする。

だがそれを事態に気が付いたロケット団が見逃さなかった。

「させるか！マリーカ、アイツらにサイケ光線だ！」

「エアームドはラスターカノンです！」

「マリーカー！」

「エーア！」

2体の攻撃が足元に放たれ、セレナは悲鳴を上げながら転んでしまった。それを見たシノンが急いで駆け寄る前よりも早く、セレナは立ち上がって再びフォッコの元へ走り出した。

「出てらっしゃいバケツチャ！シャドーボール！」

「行くじゃーんイトマル！毒針！」

「マリーカ！もう一度サイケ光線だ！」

「エアームド！貴方もラスターカノンです！」

「ピカチュウ！10万ボルト！」

「プテラ！竜の息吹！」

「ビビオンはサイケ光線！ウォーグルはエアスラッシュ！」

再び放たれる攻撃をカイトとサトシとシノンが防ぐ。技同士がぶつかり合った事で爆発が起こり、それによりセレナはまた泥水がかかって汚れてしまう。だけど彼女は気にせず再び走り出した。

「（服が汚れたっていい・・・！フォッコはいつも私を守ってくれた！顔が汚れたって構わない！今度は、私が守る番!!）」

走っている途中、セレナの頭の中にはフォッコと過ごした日々の大切な記憶が思い浮かんだ。大切なものは誰かに守ってもらうんじゃない。自分で守らないとダメだと心の中で叫んだ。

「・・・クー、フォッコ！」

そんな彼女の強い想いを感じ取ったフォッコはグラエナの背中から降り、水溜りの中を勢いよく走った。足や体に泥水がついて汚れようと構わずセレナの元へ走る。

そしてセレナは走って来るフォッコを両手を広げて受け止めた。

「あくあ、泥だらけ・・・」

「フォッコ」

再会できた事に喜びつつもお互いに汚れている姿を見て苦笑する。だけどどちらとも笑顔は絶えなかった。

「俺達を無視しやがってーマァーカァー！」

コジロウの指示を受けたマァーカァーは再び『サイケ光線』を放とう



とするが、それよりも早くサトシとピカチュウが動いた。

「ピカチュウ！エレキボールだ！」

「ピカピカピカ・・・チューピー！」

素早くセレナとフォッコを庇うように前に立った2人は『サイケ光線』を『エレキボール』で防ぐ。それを見たミズナとロバルが指示を出し、イトマルが『吸血』を、エアームドが『鋼の翼』で攻撃しようとするが・・・。

「グラエナ！悪の波動！」

「キュウコン！火炎放射！」

今度はカイトとシノン、そしてグラエナと彼の背中から降りたキュウコンが『悪の波動』と『火炎放射』で2体を攻撃してブツ飛ばした。自分の目の前に立つ3人とポケモン達は足元が泥で汚れている。それと以前シノンからキュウコンは自分と同じ綺麗好きだと聞いた事があった。なのに自分達の為に汚れるのを気にせず、助けてくれた事にセレナは嬉しさで一杯だった。

「若い女優の芽を摘むのは大女優の役目よ。バケツチャ！フォッコとジャリガールに八つ当たり！」

「チャツチャチャ！」

体を真っ赤にさせて『八つ当たり』を繰り出したバケツチャが一直線にセレナとフォッコに迫る。それを見たフォッコがセレナを守るように飛び出して、口の中に炎を溜めて勢いよく放った。その炎について一番よく知っているシノンとキュウコンが驚きながら名を言う。

「あれは・・・火炎放射!？」

「コン!？」

フォッコの放った『火炎放射』はバケツチャを黒焦げにして倒した。突然の技にロケット団は動揺する。

「やった・・・凄いやフォッコ！火炎放射を覚えたのね！」

「フォッコオ！」

「よし！ピカチュウ！10万ボルト！」

「グラエナ！止めの悪の波動！」

「ピカ！ピカチュー！」

「グウウガアアアツ！！」

止めの『10万ボルト』と『悪の波動』が放たれたのを見てロケット団は逃げようとするが間に合わず、全員に命中する。

「ニニ「やなカンジ〜〜〜!!」ニニ」

「ソオーナンス!!」

ロケット団はいつものように今回も空の彼方へ飛んで消えていった。

カイト達が戦いが終わった事に安堵の息を吐く中、セレナとフォッコは前より強くなった絆を感じて抱きしめ合いながら微笑んだ。

それから数時間経った夕方、ポケモンセンターの宿泊室でお風呂を済ませたセレナはフォッコを丁寧にドライヤーとブラッシングして、綺麗に整えた。

そしてシアター室に集まっていたカイト達と合流し、全員で完成したポケビジョンを鑑賞した。それはどのシーンも素晴らしく、またカイトの楽器の曲も合っていて全員が高評価した。最もセレナにとってはサトシの評価が一番嬉しそうだった。

ちなみにシトロンのポケビジョンも公開されたのだが、内容は最後まで良いものとは言えず、皆からの評価は・・・ご察し頂いてください。

## 黄金のコイキングを釣り上げろ!!

シヨウヨウシティに向けて旅をしていたカイト達は、その一歩手前にある海辺の町・コウジンタウンに辿り着いた。

その名の通り広大な青い海があつて、他にも有名な水族館や博物館などがあり、なかなか興味惹かれる町であつた。

特に前者は多くの水ポケモン達がいて、それを見るために毎日大勢の観光客が入場しているのだ。セレナからその説明を聞いて浜辺に行くとサトシがケロマツを出した。

「どうだケロマツ。此処が海だ。せっかくだから楽しんできたらどうだ?」

「ケロ、ケロ!」

水ポケモンだけにケロマツは海を見て嬉しそうな表情となり、ピカチュウやデデンネ、ユリーカ、そしてまた勝手に飛び出したゾロアと一緒に元気良く遊び始めた。

「やっぱり水ポケモンにとって、海は嬉しいようですね」

「うん。此処でケロマツの特訓も良いかもな。カイト、また頼むぜ!」

「ああ、別に構わないぞ」

「ガウガウウ!」

「ええっ!? 私、行きたい所があるの!」

「それは何処なの?」

サトシに特訓を頼まれた俺は特に断る事もなく承諾する。まあ、本音を言うなら多くの化石がある博物館に行きたかったのだが、別に今日でなくても明日でいいかと判断した時にセレナの言葉を聞いて全員が見つめ、シノンが代表して訊ねる。

「ジャジャーン! コウジン水族館!!」

「水族館!？」

ニコニコ笑いながら電子ノートに映っている写真と情報をセレナは見せる。それをカイト達は勿論、海で遊んでいたユリーカ達も戻って来て見る。内容を読んでみてとても興味惹かれる所だ。

あのバトル好きなサトシも行ききたそうな表情をしている。

「ああ、いろんな地方の水ポケモンが居るので有名な所ですね」

「そうなの。前から此処に行きたかったんだ!」

「成程、水族館は滅多に行く機会がないから良いかもしれないね。どうします兄様?」

「そうだな・・・シノンの言う通りだし、俺も興味がある」

「ああ、俺もだ。面白そうだし・・・皆で行こうぜ!」

「うん!じゃあ、決まりね!」

その後カイト達はワクワクしながら水族館に行き、受付で入場料と手続きを済ませてゆっくりと奥へ進んで行く。

中は一面青い世界となっていて、タツツー、クラブ、メノクラゲ、ラブカス、バスラオ、ママンボウ、サクラビス、ジーランス、マツギヨ、ランターン、パールルなど様々な地方の水ポケモン達が大きな水槽の中で悠々と泳いでいた。また、水族館に居る事もあって水槽の中に居る水ポケモン達は人慣れしていて、愛想よく挨拶等をしてくれた。

皆が自由に観察していた時、どういう訳かいつの間にかカイトとシノン、サトシとセレナ、シトロンとユリーカとペアが別れていて、特に前者2組はまるでデートみたいであった。そして乙女2人はその状況に気付いて心の中で密かに喜んでいた。

次にカイト達は美しい海中の中に居るように思わせるトンネルの中を暫くずっと歩き続けた。此処は最初の所とは違って神秘的な空間を感じた。

「此処もまた面白いな。この水族館を造った人はかなり水ポケモンへ

の拘りを持つているみたいだな」

「そうですね」

「ガウツ」

「コーン」

その後トンネルを通り抜けたカイト達は中庭にやって来た。丁度この時間はポツチャマ達がお散歩をしていて、飼育員を先頭に一列に並んで歩いていた。

すると1番後ろに居た1匹のポツチャマが列を離れ、ユリーカの元へ駆け寄って来た。

「ポチャポチャポチャ！」

「わあ〜可愛い！」

両手を出して笑顔を向けるポツチャマを見て可愛いと思うが、来る場所を間違っているのでセレナが正しい所を指差す。それを聞いてポツチャマは「そうだった」と言うような仕草をした後素直に戻って行った。

「ポツチャマって人懐っこいのね」

「俺の知っているポツチャマはお調子者だったけどな」

「確かにな」

「ピーカチュ」

「ガーウ」

そうやって俺の脳裏に浮かぶのは彼が失敗して慌てふためく姿だ。アレは見ていて本当に面白かったなとクスクスと笑ってしまふ。

それを見てセレナ達は不思議に思い、サトシとシノンは苦笑した。

そして次にやって来たのは沢山のコイキングが泳いでいる所だ。

「コイキングだ！」

「ピーカ！」

「他のポケモン達に比べて結構居るな」

『コイキング。魚ポケモン。跳ねているだけで満足戦えない為弱いと思われるが、どんなに汚れた水でも暮らせるしぶといポケモン』

図鑑の説明を聞いて最後のところで失礼な事を言っているなと思ってしまうのは間違いだろうか？

まあ、目の前に居るコイキング達は恐らく聞こえていたと思われるが、そんな事なんて気にしないかのように勢いよく元気に飛び跳ねている。

「コイツら、よく跳ねるな」

「きつと此処の管理がしっかりしていて、皆健康状態がいいんだろうね」

「此処の湾にはコイキングが生息しているね」

それぞれコイキングの事について感想言っていた時、突然誰かの声があった。そちらに向かって振り向いて見るとそこには、肩にペラップを乗せた灰色の髭を携えた男性が居た。

「貴方は？」

「唯のお節介さ。そんな事より、ポケモンにはいろいろなタイプが居るけれど、意外な事に水タイプが2番目に多いんだよ」

「へえ〜！」

「初めて知りました！」

「確かに図鑑や本で見る限り多いな・・・(それにゲームでも同じだった)」

そして1番多いのは・・・確かノーマルタイプだったと思う。まあ、新しくフェアリータイプが出て来たから断言はできないけど。

そう思っていた時、男性から「アレを見たかい？」と訊ねられた。一体何の事なのか分からず、首を傾げるカイト達を男性は外のテラスへ案内した。

そこには太陽の光でキラキラと輝くコイキングの像があった。

「コイキングの像？」

「しかも黄金色！」

「でっかい！」

「これは一体何なんですか？」

「これは見た通り巨大な黄金のコイキングの像だね。この像には多くの夢が詰まってるんだ。詳しくは彼に聞くといい。此処の事なら何でも知ってるよ」

男性がテラスから海を見下ろしながら言う。カイト達も同じように見下ろすと海岸の平らな岩の上で釣りをしている老人がいた。その人は此処の水族館の館長との事だ。

せっかく勧められたから聞いてみようかと俺が言うと全員が賛成し、そのまま階段を降りて行った。

カイト達がいなくなつた後、建物の中から変装して以前使用した特殊スプレーをかけて臭いを消したロケット団が姿を現した。

彼らは静かに黄金のコイキングの像に近づいた。

「よし！今回はこの黄金のコイキングの像を資金源にいただくニヤ」

「何言ってるのよ。どうせこの像は金メッキしてあるだけよ」

「そうそう。もし本物の金ならこんな所に飾らず、警備が厳重な建物の中に飾ってある筈じゃーん」

「それにこんな昼間から盗むなんて・・・愚かな事ですよ」

「じゃあ、ニヤんでこの水族館にこんな像が飾ってあるのニヤ？」

「うくん・・・ひよつとしたら、本当に巨大な黄金のコイキングが居る為かもしれないな」

「それならば・・・放っておけませんね」



そう言つて眼を怪しく光らせたロケット団は、すぐさまカイト達の後を追いかけて行くのであつた。

その頃カイト達は、海岸で釣りをしていた館長と紹介された老人と話をしていた。彼は此処の水族館の館長・ルダンと言い、彼の足元には相棒のウデツポウと言うポケモンがいた。

初めて見るポケモンでサトシが図鑑で調べる。

『ウデツポウ。水鉄砲ポケモン。右腕のアームガンから圧縮した水を発射して、その衝撃で相手にダメージを与える』

「・・・ウポ。ウポ」

なかなかカツコイイポケモンだと思つていたが、ウデツポウは途中岩場から降りて何処かへ消えてしまった。それに声を聞いても分かつたが少し不愛想なポケモン・・・と言うよりそいつが気難しい性格のようだ。

まあ、その話は一旦置いといて、ルダンから昔からの伝説話や目撃情報などを聞かされて黄金のコイキングが存在する事を知つた。

余談だが、先程のペラップを連れた男性はお節介な町長である事が分かつた。

「儂の夢は本物の黄金のコイキングをこの水族館に連れて来て、全国の子供達に見せてあげる事なんじや。そうすればもつともつと水族館を好きになつてもらえるからな」

「そうなつたら最高でしょうね!」

「ピーカ・・・」

ルダンの夢を聞いてとても良い夢で叶えられたらいいなと思つた時、ピカチュウが岩場から姿を出したウデツポウに見つけてサトシの

肩から降りて駆け寄る。それに続いてグラエナとキュウコンも一緒に向かう。

「ピカ！ピーカピカ！」

「・・・ウポ！」

「ピくカ？」

「ガウツ！」

挨拶をするピカチュウだが、ウデツポウは素っ気なく顔を背ける。それを見たグラエナが前足で無理矢理自分達の方に向かせ、そのまま自己紹介する。

「ウポ！ウポ「ガウ・・・？」ウ・・・ウポポ」

当然怒り出すウデツポウだが、グラエナの少し低めな声と笑顔を見て恐怖し、少し間を開けながら自己紹介した。

それを見てピカチュウとキュウコンは苦笑しつつも自分達も自己紹介するのであった。

「やれやれ、グラエナの奴め・・・」

「アハハ・・・けどまあ、なんとか挨拶はできたようですから・・・」

4体のやり取りを見てカイトは溜息をつき、それをシノンがフォローする。その時ルダンの釣り竿が大きくしなりを見せた。

見た感じ的に手応えがありそうで今度こそ釣れるかと見守っていると釣り上がったのはコイキングであった。だが黄金ではなく普通のコイキングである。

「ああ、普通のコイキングじゃな。さあ、海にお帰り」

ルダンはそう言ってコイキングを海に戻し、見送ってあげた。

「普通のコイキングの時はゲットせずリリースしてやるんじゃないよ」

「あの……！俺も手伝います！」

「私も！」

「僕も良いですか？」

「俺もお願いします」

「私もです！」

「おお、君達も協力してくれるか。それならお願いしようか」

全員が協力してくれる事にルダンは喜び、水族館から5つの釣り竿を持って来て貸してくれた。それにルアーなど釣りに必要な物も一緒だ。

そして荷物を少し離れてすぐに見つけられる場所に置き、奥からカイト、シトロン、シノン、セレナ、サトシの順に並び立つ。

「釣りをやるのは久しぶりだな」

「本当ですね。この感じ、ちよつとワクワクしますね」

「よくし！巨大な黄金のコイキング！絶対釣り上げるぞ！」

「負けませんよ！」

「お兄ちゃん頑張つてー！！」

「ピカピ！」

「ガウガウ！」

「コンコーン！」

カイト達は次々とルアーを勢いよく遠くの海面に投げ入れる。けれどセレナだけは戸惑う表情で釣り竿を握ったままだ。

「あれ？どうしたのセレナ？」

「私……釣り初めてなの」

「そうか。じゃあ、俺が教えてやるよ」

「お願い！」

サトシは一度ルアーを引いて戻し、ゆっくりとした動作で分かりやすいように説明する。

「竿を思いっきり後ろに反らせて、遠くまで投げるんだよ」

「ルアーをね」

「こう?」

「もつと大きく」

「こう?」

「そして一気にルアーを飛ばすんです」

「えらい!!」

セレナのルアーは勢いよく遠くの海中に沈んで行った。初めてにしては良い所まで飛んで行ったのを見て俺はつい口笛を吹く。

「良い腕をしているなセレナ」

「とても上手よ」

「そうかな?」

2人に褒められてセレナは片手を頭に乘せて照れる。そして少し経つと彼女の竿が引つ張られ始めた。どうやらもう獲物がかかったようだ。

「何!?!」

「来た!リールを巻くんだ!」

「わ・・・分かった!」

必死にリールを巻くがそれよりも強く引つ張られていき、セレナは徐々に海の方へ行き始める。それを見たサトシとシノンがすぐさま横から竿を持った。

「大丈夫か？」

「一気に上げるよ。セーのっ!!」

シノンの合図と共に竿を勢いよく引いてみると飛び出してきたのはサニーゴだった。

「サニー!!」

「あれはサニーゴね」

「可愛い！」

「なあ、セレナ。バトルしてアイツをゲットしてみたらどうだ？」

「ポケモンを釣り上げたらまずバトルをして、それからゲットするの」

「そうなんだ。よし！フォッコ！出て来て！」

「フォッコ！」

2人に促されてゲットする気になったセレナがフォッコをモンスターボールから出す。初めてのゲットでやる気満々のセレナだったが、同じように戦う気満々のサニーゴが先制攻撃とばかりに『水鉄砲』を放ち、それを見てフォッコは戦わずにセレナの後ろに隠れてしまう。

その為『水鉄砲』は彼女の顔に直撃してしまい、サニーゴには逃げられてしまった。

「セレナ、顔大丈夫？」

「う、うん・・・」

びしょ濡れになってしまったセレナにシノンがタオルを差し出す。それを受け取って彼女が顔と服を拭いている間サトシはフォッコに「逃げないでバトルしないと」と言う。

だがフォッコは「いきなりの事だったからと仕方ないでしょう」と言う。

「まあまあ。フオッコ、次は頑張ろうね！」

「フオッコー！」

初ゲットに失敗してしまったけど、めげずにやる気を見せた後セレナは再び釣りを開始した。

すると少し離れた所からデデンネの悲鳴とユリーカの慌てる声が響いた。何事かと見てみるとちょうどデデンネがウデツポウに尻尾を銜で挟まれ、拳句の果てに投げ飛ばされた上に『水鉄砲』を食らって砂浜に顔からダイブしてしまう。

しかしそれほどダメージを受けていなく、ユリーカに助けられた後すぐに立ち上がる。

「こらウデツポウ。お客さんのポケモンを攻撃したらダメだろう」

「ウポ・・・」

「やれやれ、見た通りウデツポウは愛想がなくてな。元々この水族館でお客さんの相手をしてもらおうと思っていたんじゃないが・・・アイツは人に見られるのが大嫌いなようだな。ストレスが溜まって食欲がなくなり、日に日に元気がなくなってしまう・・・それで儂のポケモンにしたんじゃないよ。儂の元なら平気なようだな」

「成程、それでデデンネを攻撃したんですね」

説明を聞いた後、視線を再び戻すとまたデデンネがウデツポウにちよつかい出そうと近寄ろうとしていた。アレではまた攻撃されて、ウデツポウの機嫌も悪くなってしまうだろう。

「それならグラエナ、デデンネがこれ以上ウデツポウの機嫌を悪くしないように見ていてくれ」

「ガウ！」

「ピカチュウも頼む」

「キュウコンもお願い」

「ピカ！」

「コーン！」

頼まれたグラエナ達はすぐにデデンネの元に行って引き離し、言われた通り監視する。それを見た後カイト達は釣りを再開した。

だがセレナのヒット以降全く反応がない。時々ポイントを変えて釣りを行うが、それも意味がなかった。少し飽き始めたセレナが愚痴を溢し、ルダンが何もせずのにんびり過ごすのも良い事だと言う。確かにいつも皆で騒いでいるから偶にはいいだろう。

「できた!!」

「「「うん?」」」

突然シトロンの声が響き、全員が振り向くとシトロンの手にチョンチーの形をしたメカがあった。そして目を眩しく光らせながらメカの名を言う。

「サイエンスが未来を切り開く時!シトロニックギア・オン!!名付けて、『撒き餌いらずチョンチー型コイキングこっち来いマシーン』です!」

「もう、ネーミングそのまんまなんだから・・・」

まったくもってユリーカの言う通りだ。最初の時から本当にネーミングセンスがないなどこの場にいる全員が思うが、シトロンは気にせずに説明する。

「チョンチーのこの触角の部分から人間には聞こえない特殊な音波が海底に向けて発信されます。それはコイキングにとって、とっても心地良いものですから自然とこのチョンチーマシンの所に集まって来るのです!それを僕達が釣り上げると言う訳です!」

「へえ〜!科学の力ってすげーな!」

「天才じゃなあ」

「まあ、このまま何もしないよりはマシだからな。シトロン、早速始めてくれ」

「分かりました！それではスイッチオン!!」

褒められて照れつつシトロンはコントローラーを操作して海の上に置いたチョンチーマシンを沖の方に行かせ、ある程度の所で触角を海の中に垂らして特殊な音波を発生させる。

するとすぐに水ポケモンが集まり始め、海面から黒い鰭を覗かせた。

「あつーあれは・・・コイキングなの?」

「いえ、コイキングの鰭は薄黄色であんな形ではないわ。あの形はもしかして・・・」

シノンが顔を青ざめながら言うとその鰭の持ち主が海面から顔を出した。それを見てサトシが叫んだ。

「サメハダーだ!」

「シャー!!」

叫ぶサトシとセレナに向けてサメハダーは口から勢いよく『水鉄砲』を発射させる。2人は何とか避けて直撃を免れたが、集まったサメハダー達はチョンチーマシンに攻撃して破壊した。それに連動してシトロンの持つていたコントローラーも爆発してしまい、シトロンの顔は真っ黒焦げになってしまった。

その後カイト達は気を取り直して釣りを再開する。

だが今度はカイトが持っていたポケモンフーズをプテラに頼んで広範囲に撒いたおかげで、メノクラゲやシエルダー、タマンタ、バスラオなど様々な水ポケモン達が釣れた。無論コイキングも釣れたが、どれも普通のコイキングで目的のコイキングではなかった。



なかなか目的のものが釣れずに時間ばかりが過ぎていく事に少し焦り出した時、再びシトロンの声が響いた。

「完成ですす!!サイエンスが未来を切り開く時!」

「本日2回目!」

「シトロニックギア・オン!!名付けて、『今度こそ撒き餌いらずコイキングだけこっち来いマシーン』です!!」

「もう・・・またまたそのまんまのネーミングなんだから」

さつきと同じネーミングセンスにユリーカがやる気のない声を出す。だがシトロンは気にせず、自信満々にメカを見せる。今度の奴はチョンチーではなくランターンの形をしていた。

「進化していやがる」

「まあまあ兄様、おそらくシトロンも成長しているから進化したと思いますよ」

「それよりも、コイキングだけが寄って来るの?」

形が変わっている事にツツコミをいれるカイトにシノンがまたフォローする。また先程の失敗もある為、セレナがジト目でメカを見つめる。しかしシトロンは水族館のコイキングで実験して、彼らが好む特殊な音波にしたから大丈夫だと言う。

「このランターン形マシンから特殊な音波が海底に向けて発射されます。以下チョンチーマシンと同じです!」

「やっぱ科学の力ってすげーな!」

「それでは早速始めます!」

「大丈夫なの?」

「今度こそ成功してよね」

「黄金のコイキングよ来たれ!行けえええー!!」

ランターンマシンは勢いよく海に投げ込まれ、触角を海の中に垂らして特殊な音波を発生させる。暫く待つが反応がなく、また失敗かと思ひ始めた時、ルダンの釣り竿に獲物が掛かった。

「うわっ！来たぞ！」

「こつちもだ！」

「俺の所にも来た！」

「僕のものにも来ました！」

「あつ！私にも！」

「私の方にも！」

ルダンに続くように全員の釣り竿に獲物が掛かり、強い力で海中に引っ張られていく。

「うう、重い！」

「それに凄い力よ！」

「皆慌てずに足に力を込めて引っ張るんだ！」

「ガウガウツ！」

「ピカピカ！」

「コンコーン！」

グラエナ達がそれぞれ横に来て応援する。するとピカチュウが海面に何かが現れ出したと叫ぶ。全員がそれに気付いて「これはもしかして目的の奴か？」と期待を膨らませる。そして精一杯釣り竿を引くと巨大な黄金のコイキングが釣り上げられた。

「！！！！黄金のコイキング！！！！！！」

伝説と言われた黄金のコイキングが今目の前にいる。他のコイキングと違う色で、しかもこんなに大きい。そしてそれを自分の手で釣り上げた喜びと興奮が全身に駆け抜ける。

「凄い！本当に居たんだ！」

「ピカア！」

「これは見事だ！」

「ガウウ！」

「釣っちゃった！釣っちゃったー！」

「なんて綺麗な色・・・！」

「コーン！」

「僕のメカが役に立ちました！」

「やったねお兄ちゃん！」

「逃がすな！ピカチユウ、バトルの準備はいいか？」

「ピカピーカ！」

「グラエナ、お前も行け！出陣だ！」

「ガウガウ！」

「それなら私も！キユウコン、お願い！」

「コーン！」

3人がそれぞれの相棒に指示を出そうとした時、巨大な黄金のコイキングの鰭の部分が開いた。そしてその中からロケット団が出て来たのだ。

こっそり後を追いつけて黄金のコイキングの話聞いた彼らは、自分達が捕まえようと黄金のコイキング型の潜水艦を作り上げ、本物の黄金のコイキングを誘い出そうと今までずっと海の中を泳いでいたのだ。そんな彼らを見てサトシが驚きの声を上げる。

「なんだかんだだと言われたらー！」

「黙っているのが常だけどさー！」

「それでも答えて上げるが世の情け！」

「世界の破壊と混乱を防ぐため！」

「世界の平和と秩序を守るため！」

「愛と真実の悪とー！」

「力と純情の悪を貫く！」  
「クルルでエクセレントであり！」  
「ラブリーチャーミーな敵役！」  
「ムサシ！」  
「ゴジロウ！」  
「ミズナ！」  
「ロバル！」  
「宇宙と銀河を駆けるロケット団の4人には！」  
「ホワイトホールとブラックホール、2つの明日が待っているぜ！」  
「にやーんてニャー！」  
「ソォーナンス！」  
「イートマ！」  
「エアー！」

サトシの声に反応してお決まりの長い台詞を言うロケット団。だが今のカイト達はそんな台詞すら嫌がるほど怒っていた。そしてロケット団も同じだった。

「なんなのよお！せっかく黄金のコイキングを捕まえようとしていたのに！邪魔しないでー!!」  
「ソォーナンス！」  
「それはこっちのセリフだ！」  
「ああ！ホント紛らわしい事すんなよ」

カイトとサトシは怒鳴るムサシに向かってため息をつきながら言う。  
う。

「あの人達は？」  
「人のポケモンを強奪する悪い奴等です！」

ロケット団について訊ねるルダンにシトロロンが説明する。それを

聞いてニャースが怒りながらこの場にいるポケモン達を強奪してやると言う。

「今こそアームハンドの力を見せてやるじゃーん」

「おう！まずはあのウデッポウだ！」

「よし、ゲットよ！」

5人が素早く艦内に入るとコイキングの髭の部分がアームとなってウデッポウを捕まえようとする。しかしウデッポウは素早い動きで何度も避ける。

それを見てロケット団は標的を変更し、近くにいたデデンネを捕まえた。

「デネ、ネ〜」

「ああ、デデンネが!？」

「ピカチュウ、頼む！」

「ピカチュウ……！」

捕まったデデンネを助けようとピカチュウが飛び出そうとした時、横を何かが通り抜けた。それはウデッポウで、デデンネを掴んでいるアームを右腕の鋏・アームガンで挟み、そのまま回転も加わった力で切り落とした。そして解放されたデデンネを背中に乗せ、素早く上陸した。

「行くのよバケツチャ！」

「行け！マ〜イーカ！」

「行くじゃん！シシコ！」

「行きなさい！カメテテ！」

「チャチャチャ！」

「マイツカ！」

「シシー！」

「メ〜テ！」

デデンネを奪い返されたのを見て再び潜水艦から顔を出した4人は一斉に手持ちポケモンであるバケツチャ、マリーカ、シシコ、カメテテを出して『シヤドーボール』、『サイケ光線』、『火炎放射』、『水鉄砲』を同時に放って攻撃する。

しかしウデツポウは再び素早い動きで避ける。

「水鉄砲じゃ！」

「ウポー！」

ルダンの指示を受けてウデツポウは、アームガンから『水鉄砲』を撃ち出してマリーカとカメテテを攻撃し、次に『クラブハンマー』でバケツチャとシシコをブツ飛ばした。そして最後に『バブル光線』で4体同時に攻撃を与える。強烈な攻撃を受けた4体は真下にいたロケット団の上に落ちて、それにより全員が潜水艦の中に入った。

ちなみに余談だが、ウデツポウの連続攻撃にカイト達は驚きのあまり何も言えなかった。

「ガウ！ガウガウウ！」

「ピカ！ピカピカ！」

「あ、ああ・・・グラエナ！悪の波動！」

「ピカチュウ！10万ボルトだ！」

グラエナとピカチュウの声で正気に戻ったカイトとサトシは、それぞれ止めの『悪の波動』と『10万ボルト』を指示する。技は見事に潜水艦に命中し、大爆発を起こす。

「！！」やなカンジ〜！！！！！！

「ソォーナンス！！」

ロケット団はいつものように今回も空の彼方へ飛んで消えていった。

撃退したのを確認した後、ユリーカがデデンネを抱えてウデツポウの元に駆け寄る。

「ウデツポウ！デデンネを助けてくれてありがとう！」

「コイツは愛想はないが正義感強い奴なんじゃよ」

「ウポ〜！」

ユリーカに褒められ、ルダンに言われたウデツポウは青い顔にほんのりと赤くさせてそっぽを向いた。これまででない様子を見てカイト達は笑い声を響かせるのであった。

その後夕方になるまでずっと釣りを続けていたが、お目当ての黄金のコイキングは釣れなかった。

「今日はここまでじゃな」

「なんか変な邪魔が入っちゃってすみません」

「結局釣れなかったわね・・・」

「まあ、仕方がないさ。釣り竿、どうもありがとうございました」

苦笑しながらカイトが借りていた釣り竿を返そうと渡すが、ルダンは優しい表情で頭を横に振るう。

「それは持っていくといい。また使う事もあるだろう」

「いいんですか？」

「ありがとうございます！」

「とても嬉しいです！」

「大切にします！」

「ありがとうございます！」

思いもよらぬ所で釣り竿を手に入れる事ができたカイト達はお礼を言う。すると海上から何かが飛び跳ねた。全員が振り向いて見てみると、その正体は夕陽に照らされながら全身を黄金に輝かせる伝説の黄金のコイキングであった。

「い、今のって・・・」

「おおおおお〜！！伝説は本当だったー！！やった！やった！やったー！！」

猛烈に喜ぶルダンに感化され、カイト達もハイタッチをして喜び合った。

この時ハイタッチした相手が誰であったのかは言うまでもない。

その後カイト達はルダンとウデツポウに別れを告げ、気分良くシヨウヨウシテイに向けて出発するのであった。



古代より甦りしポケモン！チゴラスとアマルス!!

海辺の町・コウジンタウンにあるポケモンセンターのバトルフィールドにて、今日もカイトとサトシのシヨウヨウジム戦に向けての特訓が行われていた。

因みに近くにはシノン達とピカチュウ、グラエナ、キュウコン、今回ジム戦に出るポケモン達がボールから出て一緒に観戦していた。

「ノクタス！ミサイル針！」

「ノーククク！」

「ヤヤコマ！影分身！」

「ヤーコ！」

ノクタスが放つ大量の『ミサイル針』をヤヤコマは『影分身』で避ける。

最初の時に比べてスピードと精度がかなり上がっていたが、それでもノクタスの『ミサイル針』の方が速く、威力がある為に必死であった。

「くっ、このままだといつか当たってしまう。それなら・・・ヤヤコマ！電光石火だ！」

「ヤーコ！」

「良い動きだ。だけど甘い・・・ノクタス！ニードルガード！」

技を避けながら接近するヤヤコマの動きを褒めながらカイトはノクタスに指示を出す。ノクタスは一旦体を丸めて、ヤヤコマがある程度接近したところで大の字のポーズをする。するとノクタスの全身から鋭い草の棘が出て、それによりヤヤコマは大きく吹っ飛ばされる。これぞ今回のジム戦に対抗する戦術の要である『ニードルガード』だ。

「ヤコーツ!?!」

「ああ!ヤヤコマ!?!」

「良い技だろ?だが次はさらにとつておきの技を見せてやる。ノクタス!雷パンチ!」

思わぬ攻撃によって吹っ飛ばされたヤヤコマはダメージが大きかったのか、体勢を整えられずそのまま落下していく。そんなヤヤコマにノクタスはジャンプして接近し、追い撃ちの如く『雷パンチ』を食らわせて地面に叩きつけた。

砂煙が晴れてフィールドが見えるようになると、ヤヤコマは目を回して戦闘不能になっていた。

「大丈夫か、ヤヤコマ?」

「ヤコ〜・・・」

駆け寄ったサトシの問いにヤヤコマは翼を上げて答えるが、ダメージのせいで苦痛の表情になって翼を押さえた。

それを見てサトシは苦笑しつつ「頑張ったな」と褒めて、ヤヤコマをボールに戻した。それと同時にカイトが近づいた。

「バトルには負けたが、特訓の成果は順調に出ているな。ヤヤコマの技、スピード、前よりも上がっていたぞ」

「ああ、だけでもっと強くないとザクロさんに勝てない。さらに特訓をして経験を積んでいくぜ!カイト、次はケロマツで頼む」

「ならこちらはボスゴドラだ。ボスゴドラ、出陣だ!」

「ゴドー!!」

カイトの呼び掛けを聞いて、観戦していたボスゴドラはドスンドスンと足音を鳴らしながらバトルフィールドへ向かう。それと同時にケロマツもバトルフィールドへ向かった。そして次のバトルが行われようとした時、何処からか拍手が送られてきた。

「本当に良い動きだったわ！」

そう言って褒めながらこちらに向かって女性が1人歩み寄ってきた。その人を見て一番早く呼んだのはサトシだった。

「パンジーさん！」

「皆、久し振り！元気そうね」

「エリエリー！」

やって来たのはポケモンルポライターのパンジーさんと相棒のエリキテルだった。最初のジム戦後に別れてから数日ぶりの再会だ。

パンジーは全員に挨拶した後、出会ったばかりだったシノンとセレナと一緒にいるのを見て少し驚きながら話し掛けた。

「貴方達もサトシ君達と一緒に旅をしているのね」

「はい！色々あって、一緒に行く事にしたんです」

「私も同じです」

「そうだったの」

話し合っている最中、肩に乗っていたエリキテルが降りて足元でピカチュウと再会できた事を喜び合っていた。そこへグラエナ、キュウコン、デデンネも加わって楽しそうに話し合う光景を見た後、カイトは再びパンジーへ視線を移した。

「それでパンジーさん、どうして此処へ？」

「バトルシャトーでピオラに会ったでしょう？」

質問したつもりが逆に質問されてしまった。まあ、別に気にしていないのですぐに頷く。

「相変わらずビオラさんは強かったです。けどザクロさんに負けてしまいました」

「凄く悔しがっていたわ、ビオラ。本当に負けず嫌いなんだから」

その時の姿を思い出したのか、バンジーは肩を竦めて苦笑する。そこでようやくこちらの質問に答えてくれた。

「それでビオラが、サトシ君達が次はシヨウヨウジムを目指してるって言ってたの。丁度私も取材でこっちへ来る事になって、もしかしたら会えるかな〜と思って来てみたら、当たりだったわね」

「取材というと？」

「化石研究所の取材よ」

「化石研究所!?!」

化石研究所と言う言葉を聞いて、真っ先に飛びついたのはカイトとシノンである。姉の影響でポケモン考古学に大変興味を持っている2人、特にシノンはそれを目指しているから尚更だ。

それとは逆に普段常に落ち着いた態度をとっている2人がこんなにも激しく反応している姿を見てセレナ、シトロン、ユリーカ、パンジーは驚く。

ちなみにサトシはシンオウ地方で何度か見た事があったのでそれほど驚かなかった。

「あの化石研究所へ取材に行ける・・・とても素晴らしい事ではないですか!」

「本当です! ああ、一体どんな研究をしているのか知りたい!」

コウジンタウンの化石研究所はとても有名で、ポケモン考古学者やそれを目指す者にとってまさに聖地と言ってもいいくらいだ。興奮気味に話し合う2人を見てセレナとシトロンは少し呆け気味だ。そこへいち早く正気に戻ったユリーカが、シノンの服の袖を引っ張って

訊ねた。

「研究所って何をやる所?」

「大昔に生きていたポケモン達の化石を調べる事で、ポケモン達がどんな風に生きていたのか研究する所なの!ポケモン考古学を学ぶ人にとつて、誰もが喜んで行きたいと思う場所でもあるの!!」

「む、難しそう・・・」

シノンの説明を聞くユリーカだが、内容が理解できない為に苦い表情だ。しかしシノンは気づかず、化石研究所の歴史や実績等を事細かく話し続ける。このまま聞いていてもいいが、流石にこれ以上長引かせるのはマズイと判断したカイトが、一旦話を終わらせてパンジーの方を向かせた。

「その研究所で2つ大発見があつてね。それを記事にする為に来たのよ」

「大発見!?何なんですか?教えてください!!」

「フフフ・・・そうね。これから時間があるようなら一緒に来る?驚くわよー!」

「エリ!」

「いいんですか!?お願いします!どうしても行ってみたいんです。そうですよね兄様!」

「ああ、俺からもお願いします!!」

カイトとシノンは同時に頭を下げて必死にお願いする。それを見てパンジーは誘って良かったと内心思いつつ、サトシ達にも一緒に行くかを訊ねる。この時サトシとシトロロン、ユリーカは行きたいと言うが、セレナは骨とか石の化石に興味を持っていなかった為乗り気ではなかったが、シノンの強い説得によって行く事になった。

ポケモンセンターから少し遠い所に化石研究所があった。前に行った水族館と同じくらい大きな建物だ。一体どんな化石があるんだろうとワクワクしながらパンジーの後を付いて行くと研究所の中から研究員のタケダが現れた。今回の件で色々とお世話してくれるとの事で全員が挨拶をした後、早速中へ案内してもらった。

研究所の中はカイトとシノンにとって、まさに夢の世界とも言える所だった。カイリユートとプテラの全体の骨が吊るされていて、そこら中に古代に生きていたポケモンの化石や植物の化石等が展示されていた。

「凄い！凄すぎる！ポケモンの化石だけでなく、植物やそれに関する化石もある！」

「カロス地方にはこんなにも多くの化石が発見されているのか！シノン、次はあっちだ！」

「はい！」

2人は化石の良さを口に出しながらじつくり観察してメモを取り、研究所の中を見回る。その熱意の凄さにサトシ達はただ見つめる事しかできず、早く大発見を見に行きたい気持ちを抑えて待つ事にした。

そして暫く経った後2人は満足そうに微笑みながら待っていてくれたサトシ達と合流し、再び移動した。タケダが言うに、次に向かう部屋に例の大発見の1つがあるらしい。

「さて、次の部屋を案内する前にこの防寒服を着て下さい」

ロッカーから取り出した黄色の防寒服を渡されたカイト達は当然首をかしげるが、言われた通りに服を着る。そして案内された別棟の部屋に入った瞬間理由が分かった。

その部屋の中は一面雪で覆われていて、凍てつく冷気によって川の一部が凍っている等、まるで寒冷地みたいだ。

「これは堪らない寒さだな・・・」

「ガウツツ」

防寒服を着ても寒さを感じて震える俺の足元で、グラエナが体を温める為に何度も足に擦り付けてくる。シンロン達も同じく寒さを感じて震えている。まあ、キユウコンだけは平気だった。

「すみません。此処にいるポケモンに合わせて室温を低く設定しているんです」

「此処にいるポケモン？もしかしてそのポケモンは氷タイプですか？」

「その通りです。ほら、あそこに・・・」

タケダが指差す方向を見つめると、木の陰から水色で首が長いのと頭の虹色の鰭が特徴のポケモンが2体現れた。

「ルース！」

「ルース！」

そのポケモン達は何の警戒心も持たずにこちらに向かって来て、目の前にいたサトシとシンロンにゆっくりと顔を近づけてきた。

「冷てえ!？」

「ピカピ！」

「このポケモンは一体・・・?」

「コーン？」

「アマルス!?あのアマルスですか!!」

初めて見るポケモンにサトシとシノンが疑問の声を上げると、後ろにいたシトロンが驚きの声を背後から出しつつ2人に説明した。

「このカロス地方のずっと北の寒冷地帯に生息していたと思われる古代のポケモンですよ!」

「よくご存じですね!そう、これが古代に絶滅してしまったと言われるアマルスです!」

古代ポケモン・・・成程、これが大発見なのかとカイトが思った時、突然地響きが起こった。それは段々こちらに近づいて来て、全員が音のする方を見るとそこには大きなポケモンがいた。

「ルガーーー!!」

大きく鳴き声を上げるそのポケモンは、頭から首に薄黄色で輝く大きな鱗が特徴で、見た目はアマルスに似た姿をしていた。

「そしてこちらがアマルスの進化形、アマルルガ!」

「大きい!!」

「凄い!生きたアマルスとアマルルガだ!」

「これが大発見なんだ!化石じゃなくて生きてるポケモン!」

「ええ、そうよ、私は彼らを取材に来たの!」

「エリ!」

サトシ達が騒ぎ、タケダがアマルス達が復活した理由を説明する中、カイトとシノンはゆっくり3体に向けて手を伸ばす。すると前にいたアマルス達が、まるで撫でてと言っているかのように頭を出して来た。それを見て2人は嬉しい表情になりながら頭を撫でる。



このアマルス達だが、タケダが言うにカイトの撫でている方は通常サイズで、シノンが撫でている方は少し大きいサイズとの事だ。

説明を聞きながらカイトはじつくり彼らの感触を味わう。冷たい……だが、今生きているんだな。それを俺達は感じているんだな。

「兄様……私、今こうして彼らに触れているのがとても嬉しいです！」  
「俺もだよ、シノン」

シノンの喜びに俺は同意する。ポケモン考古学に興味を持ち、必死に学んできて本当に良かった。もし学ばなかったらこんな良い気持ちにはならなかっただろう。

シロ姉には本当に感謝するしかない。

そう思っている中、アマルス達は笑顔のままもつと撫でてと言わんばかりにさらに頭を擦り寄せて鳴き声を上げた。

「随分と人懐っこい子達だ。どちらも遊んでほしいと言っている」

「此処にいるから、人慣れしたんでしょうね」

「それもありませんが、元々彼らは敵の少ない地方に住んでいましたから、警戒心が薄くとても友好的なんですよ」

「そうなんですか！」

「それは化石だけでは分からない特徴ですね」

「ええ。こうして彼らを観察する事で、古代のポケモンの事がより分かるかもしれません」

話を聞いていて俺は内心納得する。確かにそれはこうやって実際に触れ合って観察しなければ分からない事だ。そんな時アマルス達は遊ぼうと言いながら再び頭を擦り寄せて来た。それを皆に伝えるとサトシが大声で言った。

「よーしー！それなら皆で遊ぼうぜー！」

駆け出したサトシの後をアマルス達は楽しそうに追い掛ける。俺達もそれに続くように追い掛けた。その様子をアマルルガは穏やかな表情で見つめる。そしてパンジーはタケダに目的である取材を行うのであった。

だがこの時、天井の方に静かに飛びながら部屋の中を監視する小型メカに誰も気付いていなかった。

遊び始めてから大分時間が経った。アマルス達は今もなお元気一杯でまだ遊び足りぬ様子だが、カイト達はすっかり体が冷えてしまった。

「うう、凄く冷えてきちゃった・・・」

「えっ？そうか？俺はすぐくポカポカしてきたけど！」

「ピーカ！」

「あれだけ遊び回ってればね・・・」

セレナが自分の身を抱いて体を震わせながら代表して言う。しかし、サトシとピカチュウだけは違った。遊び続けた事が逆に体を温めたようで、それを見てセレナは少し呆れてしまう。

「確かに体が冷えてきたかも。ずっとこの室温だもんね。一度外に出て温まりましょうか。それにもう1つの大発見も見たいしね」

何気なく重要な事を言いながらパンジーは出口に向かって歩いて

行く。そんな彼女の後をカイトとシノンが急いで追い掛けて訊ねた。

「えっ？大発見ってアマルスとアマルルガの事では・・・？」

「ううん！彼らとは別の・・・もう一つの大発見があるの」

「そうなんですか!?あ、でも・・・」

もう一つの大発見を見に行こうとするシノンだが、アマルス達の子の寂しそうに見つめる視線に気が付き、戸惑ってしまう。

そんな彼女を見て俺は少し苦笑しつつ、優しく肩に手を置く。

「体を温めて大発見を見たらすぐ此処に来ればいい。そしてまた彼らと一緒に遊ぼうぜシノン」

「兄様・・・はい。そうします」

カイトの言葉に理解して頷きつつもまだ心が納得していない為か、シノンは時々後ろをチラチラと振り向いた後、皆と一緒にゆっくり部屋から出て行った。

その後カイト達は温かいお茶を飲んで体を温めた後、タケダの案内によって先程とは別の部屋に着いていた。

「お待ちせしました。この部屋にもう一つの大発見があります」

そう言われてドキドキしながら中に入ると、沢山の研究員達が様々な化石を手に持ち、骨を組み立てたり、付着している土を小道具で綺麗にする等の作業を行っていた。

だけどそんな事よりもカイト達の目は、奥にある巨大なカプセル状の機械の方に向いていた。

「これが我が化石研究所が誇る、化石復活マシンであります。このマシンにより先程のアマルス達は復活できたのです」

「そうなのですか。ちなみにこの中にはもう何も入っていないのですか?」

「いいえ、実は今・・・この中にあるポケモンの化石が入っていて、まもなく復活するのです!」

「」「」「えっ!?!」「」

今何て言った?まもなく復活するだ?!驚くカイトの傍でサトシ達も再び歴史的瞬間が見られると興奮していた。するとマシンからピピツと音が鳴って、蒸気を出しながら扉が開いた。そして中から体が茶色で、見た目が恐竜に似たポケモンが出て来た。

「このポケモンは・・・」

『チゴラス。幼君ポケモン。大顎は自動車をバリバリかじって壊す破壊力を持つ。気に入らない事があると怒って大暴れする』

ポケモン図鑑で調べ終わった後、再び復活したポケモン・チゴラスを見る。

チゴラスはゆっくりマシンから出て周りをキョロキョロと見渡し、目の前にいるカイト達全員に見られていると分かった瞬間大泣きし始めた。

「凄いい鳴き声!!」

「きゅ、急にどうしたんだ!?!」

「怖がっているんだ。いきなり知らない場所において、知らない俺達に見られ恐怖を感じているんだ」

必死に耳を押さえながらサトシ達に説明をし、懐から笛を取り出して鳴き声を我慢しながら演奏を始める。すると泣いていたチゴラスは笛の音を聞くと徐々に泣き止み、じっとカイトの顔を見つめる。それを見てカイトは演奏を止めて、ゆっくり近付いて刺激しないように手を下から出してチゴラスの頬を撫でた。

「よしよし、大丈夫だよ。此処にはお前を虐める奴なんていないからな」

「・・・チゴ」

俺の言葉を理解したのか、チゴラスは甘えるように寄り添って来た。誰も一人だと不安になるし、寂しい筈だ。古代から現代に来たら尚更怖いよな。そんな不安を取り除いてあげるように優しく何度も撫でる。

それを見てサトシ達や研究員達から拍手が上がり、タケダが代表してお礼を言った。

「ありがとうございます！お陰様で助かりました」

「いえいえ、俺がただ放っておく事ができず、勝手にやっただけですから」

そう言いながらチゴラスを撫でていた時、突然大きな物音がした。さらにその後アマルルガの鳴き声が聞こえてきた。その声はとても混乱しているような感じだ。

アマルルガの鳴き声を聞いたカイト達は急いで彼らがいる部屋へ向かった。

ちなみにこの時、彼らの・・・否、正確にはカイトの後を何故かチゴラスが付いて行ったのは余談である。

一方アマルルガとアマルス達がいる部屋では、ある者達が騒ぎ慌て

ていた。

その者達はロケット団で、彼らは先程忍び込ませていた小型メカでアマルス達の事を知った。当然手に入れようと、一同は壁を破壊して中に侵入した。

「何してるのよ！さっさとアマルルガも捕まえなさい！」

「早くしないと誰かがやって来るじゃーん！」

「そうしたいんだけど・・・！」

「お、重すぎて動かないんですく〜！」

最初にアマルス2体を言葉巧みに騙して用意していたトラックの荷台の檻に捕らえる事に成功する。そして次にアマルルガも捕まえようとするが、あまりの重さに動かす事ができない上にアマルルガの鳴き声に気付いた職員が駆け付けて来た為、ロケット団はアマルス達のみ連れ去ろうと急いで荷台の扉を閉めてトラックを発進させてその場から逃走した。

それから少し経ってカイト達が現場に到着した。

「どうしたんですか!？」

「大変です！変な奴らがトラックでアマルス達を連れ去ったみたいなんです！」

「アマルス達を!？」

アマルス達を連れ去られたと言う事を聞いて全員が動揺する。特に1番可愛がっていたシノンは動揺のあまり倒れかけてしまうが、カイトが咄嗟に支えて倒れずに済んだ。

「いけない！早く捜し出さないとアマルス達が危険だ！」

「どういう事です?！」

突然タケダが大声で言い、パンジーが理由を訊ねてみるとアマルス

は暑さに弱く、長時間温かい所にいると最悪の場合死んでしまうと言  
う事だった。

それを聞いて全員が再び動揺し、急いで助けに行こうとカイトがま  
だ残っているかもしれないトラックとアマルス達の臭いを嗅がせよ  
うとした時、部屋の中にいたアマルルガが鱗を薄水色に変えて職員を  
振り切りながら外に出た。

そして大きな声で鳴き声を上げると空にオーロラが現れた。

「オーロラが現れた!？」

「あれは・・・アマルス達の影響です」

「えっ!？」

「アマルス達が鳴くと上空の地磁気に影響を及ぼし、オーロラが出現  
するんです!」

「つまりあのオーロラがある方向にアマルス達がいると言う事です  
ね」

シトロンが結論を言い終えた瞬間、アマルルガがオーロラの方  
向かって歩き出した。この暑い中でアマルス達を助けに行く気か。  
まあ当然の事だよな、とそう思った時シノンが俺の腕を掴んでじつと  
見つめながら静かに頷いた。それを見て俺は彼女の気持ちを察して  
行動を起こす。

「タケダさん、俺達もアマルルガと一緒にアマルス達を助けに行つて  
きます。その間見つけたらすぐに運べて治療を行えるよう手配をし  
ておいて下さい」

「分かりました」

「兄様、早く行きましょう!」

タケダに依頼した後、シノンと一緒にアマルルガの後を追いつけ  
る。その後が続いてサトシ達も走り出すのであった。

その後川で道が分かれていたり、オーロラが消えて居場所が分から

なくなる事態が発生するが、アマルルガの冷氣と仲間を想う絆によってカイト達はどんどん先へ進んだ。

周りが暗くなつて夜の中の森を抜けて少し広々した所でようやくトラックに追い付いた。何故追い付けたかと言うと途中トラックがパンクしてしまつて、犯人と思われる者達が修理していたからだ。

そんな奴らにサトシが怒りを含ませながら言う。

「お前達がアマルス達を連れ出したのか!?何者だ!?!」

「何者!?!と聞かされt「グラエナ、悪の波動!」・・・つてちよ、ぎやああああつ!?!」

いつものように長いセリフを言をうとするロケット団。だが今回は親切に聞く気なんてない。早くアマルス達を助けないといけないからだ!そう思つてカイトはグラエナに『悪の波動』を放つよう指示を出す。グラエナも状況を分かつているのか、ロケット団に容赦なく技を放つ。対するロケット団は、放たれた『悪の波動』を必死に避け、セリフを妨害したカイトとグラエナに激しく怒つた。

「ちよつとダークボーイ!あんた空気読みなさいよ!」

「そうニヤ!ニヤ!達のセリフは最後までしつかり聞くのが当然ニヤ!」

「そんな事はどうでも良い。グラエナ、このままアマルス達を助けるぞ!」

「ガウツ!!」

「俺達もやるぜ!行くぞピカチュウ!」

「ピカ!」

「僕も手伝います!行きますよ、ハリマロン!」

「ハロー!」

「そう簡単にいかせて堪るか!行け!マミーカ!」

「行くじゃん!シシコ!」



せつかく手に入れたアマルス達を取り返されて堪るかとかジロウとミズナはマリーイカとシシコを出す。そしてグラエナはシシコを、ピカチュウとハリマロンはマリーイカと対峙した。

「シシコ、頭突きじゃーん！」

「躲しながら噛み砕く！」

「シシー！」

「ガウウツ！」

勢いよく走りながらシシコは『頭突き』を繰り返すが、グラエナは素早く横に回って『噛み砕く』でシシコの背中に噛みつく。

「そのまま地面に叩きつけろ！」

「ガウ！グラアアアツ!!」

「シシツ!？」

グラエナは噛みついてシシコを左右に振って勢いをつけた後、思いつきり地面に叩きつけた。シシコは地面を2、3度バウンドした後ミズナの足元まで転がる。だが意外とタフだったようで、ダメージを負ってふらつきながらも立ち上がった。

また横では、サトシとシトロロンがピカチュウとハリマロンに的確な指示を出してマリーイカを相手に優勢に戦いを進めていた。

「チ〜ゴ・・・」

そのバトルの様子をチゴラスはじつと見つめ、自分も戦いたいと内心思い始めるのであった。

激しいバトルが行われている間、シノン達はカイトとサトシが戦っている間にトラックに近寄って救出しようとする。だがそれをニヤース、エアームド、イトマルが気付いて立ち塞がる。

「行かせないのニャー！」

「退きなさい！時間がないんだから！フォッコ、目覚めるパワー！」

「邪魔をするなら容赦しないわ！キュウコン、火炎放射！」

「フォーツコ！」

「コーン！」

セレナはボールから出したフォッコに『目覚めるパワー』を指示し、シノンにはキュウコンに『火炎放射』を指示する。

2体は同時に攻撃するが、ニヤースの『乱れ引つ掻き』で『目覚めるパワー』は切り裂かれ、イトマルの『毒針』とエアームドの『ラストーカノン』で『火炎放射』は相殺されてしまった。

「そう簡単にはいかないのニャー！」

「くっ！」

何故か今回においてバトルをするニヤースやイトマル達の反撃にシノンはさらに焦り出す。一刻も早く決着を付けなければならぬ。こうなったら他の子達にも協力してもらおうと腰にあるモンスターボールに手を伸ばそうとした時、背後から大きな足音が響いた。振り向くとアマルルガが鋭い眼でニヤース達を睨んでいた。

「アマルルガ!!」

「セレナ、早くこっちに！」

シノンがセレナの手を引いて離れたのと同時にアマルルガが口から『凍える風』を放つ。それによりニヤースとイトマルは氷漬けになった。エアームドだけは空高く飛んで躲し、翼を大きく広げて『鋼の翼』で攻撃しようとするが、アマルルガが次に放った『吹雪』で氷漬けになって落ちていった。

邪魔する者がいなくなった後、シノン達はトラックの荷台の扉を開ける。中ではアマルス達が互いに寄り添いながら体を丸めていた。

「っ！アマルス!!」

2体の様子を見てシノンは急いで中に入り、檻の間から手を伸ばして触れてみる。

「体の気温が最初の時よりも高い。それに鱭の輝きが失っている。このままでは本当に危ない！キュウコン、アイアンテールでこの檻を壊して」

「コン！コーン!!」

シノンは一度アマルス達から離れてキュウコンに『アイアンテール』で檻を壊すよう指示を出す。キュウコンは9つの尻尾全てに力を込めて檻の鉄格子を破壊した。そして全ての鉄格子が壊れた後、シノン再びアマルス達の元に行き、一緒に入ったユリーカとパンジーと協力してアマルス達を外に誘導した。

「サトシー！カイト！シトロン！アマルス達は助け出したわ！」

「よし！それならこっちも終わらせるぜ！」

「ああ！」

「はい！」

セレナからアマルス達を助け出す事に成功した事を聞いてカイト達はいくらか気持ちが悪くなった。このまま一気に片付けようとロケット団と向き合う。

対するロケット団は、再びアマルス達を捕まえる為自分達の残りの手持ちを出そうとするが、それよりも先に怒りに燃えるアマルルガが先に氷漬けにしたニャース達を彼らの元に投げ飛ばし、続けざまに『凍える風』を放って全員を1つの氷の塊にした。

「ありがとうアマルルガ！よしグラエナ、悪の波動！」

「ピカチュウ、10万ボルト！」

「グウウガアアアツ!!」

「ピカ!ピカチュー!」

2体が同時に放った技は、途中で交じり合っただけでさらに強力な技となって迫る。しかしロケット団は氷漬けの為逃げられず命中する。

「二「やなカンジ〜〜!!」三」

「しもやけになる〜」

「ソォーナンス!!」

ロケット団は今回氷漬けと言うおまけを加えながら空の彼方へ飛んで消えていった。

それを見送った後、カイト達はアマルス達の元へ行く。アマルス達は弱々しく荷台から降りるが、とうとう限界に達してその場に崩れ落ちた。

「アマルス!!」

「いけない!どっちも体温が上がり過ぎて危険だわ!」

「そんな!」

「しっかりしろアマルス!」

「ピカピカ・・・」

「早く研究所に戻さないと・・・」

「どうしましょう兄様!?!」

「落ち着けシノン!兎に角アマルス達を冷やすんだ。グラエナ、氷の・・・」

涙目になりながら焦るシノンを必死に落ち着かせてグラエナに指示を出そうとした時、背後からアマルルガ近づいてきた。

「アマルルガ!!」

「何をやる気でしよう?」

近づいて来るアマルルガを見てカイト達は疑問に思いながら少し離れる。するとアマルルガがアマルス達を囲むように座り、体から冷気を出して2体を冷やし始めた。それを見てカイトはアマルルガの行動の意味が分かった。

「成程、アマルルガは冷気でアマルス達を冷やし、体温を元に戻しているんだ」

皆に説明してから少し経つとアマルス達の鰭が元の色に戻り、2体は頭を上げてこちらに向かって鳴き声を上げた。

「ルース」

「ルース」

「良かった。少し元気になったみたい」

「やったなアマルルガ!」

アマルス達が立ち上がる程元気になったのを見て全員が安堵する。あとは急いで研究所へ戻るだけだと思った時、丁度タイミング良く研究所から迎えの車が何台も到着した。

そして車から職員達が素早く出て来てアマルス達を保護して行った。

それから数時間後、研究所の彼らの部屋にカイト達が集まるとタケダがアマルス達を連れてやって来た。

「アマルス達は体温調節もできるようになりました。もう大丈夫です」

「そうですか」

「良かったわねアマルス」

「ルス！」

シノンが彼らに微笑みを浮かべながら近寄ると大きいサイズのアマルスが近寄り、彼女の頬に自分の頬を擦り付けて甘えた。

「ふふ、冷たいよ」

「ルス！ルス」

2人のやり取りを見つめながら俺は内心このままシノンの手持ちになったらいいかもなと思ってしまう。だがそれはきつと無理だ。この3体は家族同然で、きつと付いていく事なんてないだろうな。

そう思っているカイトだが、近々彼らが再び騒ぎを起こす事になるとは思っていなかった。しかもその中にあるポケモンも加わっている事も……。

「……………チ〜ゴ！」

そしてそれは、遠くない未来で起きるのであった。

海底の城！海の喧嘩者とギャング、ゲットだぜ！！

カロスリーグに挑戦する為、シヨウヨウジムがあるシヨウヨウシテイに向かつて旅をしていたカイト達は、コウジンタウンを出発して途中にあるミユライユ海岸でランチタイムを過ごしていた。

そして食事が終わると、サトシがカイトに特訓相手をお願いした。

「ご馳走様。今日もやるぞ！シヨウヨウジムのジムバッジをゲットする為、早くザクロさんの岩石封じに対抗する技を身に付けるんだ。だからカイト、今日も相手を頼むぜ！」

「ケーロ」

「ヤッコヤコ」

「ピーカ！」

「ああ、俺達もまだ調整が必要だから構わないぞ。だがさつき食べ終わったばかりだ。少し休憩してからな」

「ガーウ！」

「ゴドゴド」

「ノーク」

「ヒート！」

「じゃあその間に、ちよつとこれ使ってみない？」

セレナが自分のバックから取り出したのは、つい先日コウジン水族館で貰った折り畳み式の釣竿だった。

「折角海に来ているんだし、トレーニングばかりじゃ息詰まっちゃうでしょ？」

「賛成！だってだって可愛い水ポケモンが釣れるかもしれないし！」

「ネネ〜」

「可愛い水ポケモンなら前にセレナが釣ったサニーゴやタツツー、ラブカス等があるね」

「それに此処で新しい水ポケモンをゲットできれば、ケロマツも加

わって岩タイプのザクロさんに対し、より戦力アップになるかもしれないよ」

「確かにそれは言ってるな」

「成程な。よし！ウォーミングアップ代わりにやるか！」

「ピカチュー！」

そしてカイト達は食器を片付け、各自釣竿を準備して近くの岩場に座り、一斉に釣り糸を海に投げ入れた。また脇にグラエナ達を控えさせて、いつでも戦闘できるようにした。

「どんなポケモンが釣れるかな？フフツ、楽しみ」

「素敵なポケモンだったら良いね」

雑談しながら釣り糸が動くのを待っていると最初に反応したのはサトシで、その次にカイトの釣竿だった。両者共に力の強いポケモンだろうか、引っ張る力が強くて2人とも苦戦している。

「うう・・・コイツ、結構力がある！」

「俺の方も・・・同じだ！」

「おおっくっ！」

「何だろう何だろう？サニーゴかな？それともパールル!?ひよつとしてホエルオーかも！」

「ホエルオーではないかもしれないけど・・・兄様！サトシ！頑張ってください！」

「ああ！任せろ!!」

「絶対に釣り上げてやる・・・！うりゃくっ!!」

リールを巻きながら2人は両腕に力を込めて釣竿を引く。そして先に釣り上げたのはサトシで、海から飛び出して来たのは海藻の塊みたいなものだった。

「なくんだ、唯の海藻じゃない」



「いえ・・・確かに何か釣れています！」

釣れた獲物をよく観察してみると、それは海藻に似たポケモンだった。サトシがもつとよく見ようと顔を近づけた時、その獲物はサトシの顔に飛びついて来た。

「うわあああ~~~~っ!?!」

「お、おいサトシ、大丈夫か!?!」

まだ引つ張り合いをしていたカイトは、早く何とかしようとして釣竿をカ一杯引いて、勢いよく釣り上げる。するとようやく獲物が海から飛び出して来たが、それはそのままカイトの頭に噛みついた。

「うおっ!?!何だ!?!急に真っ暗になったぞ! 明かりは何処だ!?!」

「兄様!?!」

「ガウツ!?!」

「コンコン!?!」

あまりの事にシノン達は一瞬呆然としてしまうが、すぐにハツと正気に戻ってカイトの頭に噛みついたポケモンを引き離そうとする。

必死に引つ張りつつ、何とか傷つけないように注意しながらようやくそれを引き離せてそれを海へ投げ入れた。それと同時にサトシの方も飛びついてきたポケモンを引き剥がした。

「大丈夫ですか兄様!?!」

「サトシも大丈夫!?!」

「ああ、大丈夫だよシノン」

「俺もだ・・・それよりもコイツ、ポケモンだったんだ」

「あつ、怪我しているよ。待ってて、絆創膏持ってるから付けてあげるね」

海藻に似たポケモンは、よくよく見ると額に怪我をしていた。

ユリーカが絆創膏を貼ろうとするが、シノンが一旦止めて先に傷薬を塗って手際よく手当てを済ませた。

しかし釣り上げたポケモンは必死に暴れ、サトシの腕から海へ逃れる。だがすぐに海から顔を出してこちらを睨み付ける。しかもその隣には先程カイトの頭に噛みついたポケモンもいた。カイトとサトシはすぐに凶鑑を取り出して調べる。

『クズモー。草擬きポケモン。腐った海藻に擬態する。敵の目を誤魔化しながら進化する力を蓄える』

「クズモーって言うのか。そして水・毒タイプか」

『サメハダー。凶暴ポケモン。鉄板も噛み千切る牙を持ち、泳ぐ速度は時速120キロ。海のギャングと呼ばれ恐れられている』

「もう1体はサメハダーか。しかしあのサメハダー・・・もの凄く大きいな」

凶鑑の絵や内容と比較してみても今日の前にいるサメハダーは、通常の約3倍は大きい個体だ。この辺りの主かなと思っているとクズモーとサメハダーが容赦なく攻撃を仕掛けてきた。連続で撃ち出される『ヘドロ爆弾』と『熱湯』からカイト達は慌てて岩陰に隠れて避難する。

「何なんだ!?!」

「敵だと思われたんじゃない?」

「ズモズモー!」

「シャチャシャチャ!」

「セレナの言う通りだ。クズモーとサメハダー、どちらも完全に俺達を敵だと思ってる」

「そんなあ〜!」

「何とか誤解を解かないと・・・」

「ピカ!」

「あつ！ピカチュウ！」

このままでは罅が明かないと、ピカチュウはクズモーとサメハダーを説得する為に岩陰から出る。サトシの制止も聞かずに必死に2体呼び掛けるピカチュウだが、クズモーとサメハダーは出て来たピカチュウに狙いを定めて、今度は同時に『毒々』を放つ。

ピカチュウに攻撃が当たるかと思われた時、突然誰かに持ち上げられて『毒々』を躲す事ができた。

「ピ、ピカ!？」

「ガウガウウツ・・・」

ピカチュウを助けたのはグラエナだった。グラエナは砂浜に着地すると優しくピカチュウを降ろし、クズモーとサメハダーに向けて力強く吠えた。

「グラアアアアウウウツ!!」

「ツツ!？」

グラエナの咆哮を聞いて、クズモーとサメハダーは攻撃を止めた。特性：いかくの効果とグラエナから放たれる強者のオーラもあって、2体は本能的に勝てないと悟って逃げるように海へ帰って行った。

「ピカピカ！」

「・・・グツガ」

危機が去った後ピカチュウはグラエナにお礼を言う。だがグラエナからの返事がなく、どうしたのかとピカチュウが隣に並んだ時、突如グラエナが倒れた。

その様子はカイト達も見ていて、急いでグラエナに駆け寄った。

「グラエナ、どうした？大丈夫か!？」

カイトが慌てて診てみると、息が荒く表情が青く染まっていた。もつとよく診てみると後ろ足に『毒々』の後が付いていた。さつきピカチュウを助けた時にかすついていたのか。

「くそ、今手元に毒消しやモモンの実がない」

「私も持っていない・・・」

「コンコーン!」

「そんな!」

「早く手当てしなくちゃ!」

「ポケモンセンターへ行きましょう!」

「カイト、急ごうぜ!」

「ああ!」

急いでポケモンセンターへ向かう為に砂浜を出ようとした時、車道の方で1台の車が止まった。そして車の窓が開いて、運転していた男性が問い掛けてきた。

「君達、どうかしたのかい?」

「ええ・・・俺のグラエナが・・・!」

「もしかして・・・猛毒状態なのか!？」

「まあ大変!急いで手当てしなくちゃ!えくと、確か救急箱に毒消しが・・・」

助手席にいた女性が男性を押し退けてグラエナの様子を見る。そしてすぐに後部座席から荷物を漁って救急箱を取り出す。

中に入っていた毒消しのお陰でグラエナは解毒され、すぐに回復して元気を取り戻した。

「これで大丈夫」

「グツ・・・ガウガール！」

「グラエナ！」

「コーン！」

元気になったグラエナをカイトは優しく頭を撫でて抱き締める。そんな彼らに寄り添う者が2体いた。1体は勿論キュウコンで、もう1体はピカチュウだ。だがピカチュウは何処か暗い顔をしていた。どうやら自分を庇って猛毒状態になってしまった事に責任を感じているんだと誰もが悟った。

「ピカピカ・・・」

「ガウガウ。グラール」

「ピカ・・・ピカチュウ！」

グラエナと少し話し合った後ピカチュウの顔に明るさが戻った。話を簡単に通訳すると最初にピカチュウが「御免なさい」と謝り、グラエナが「気にするな。もしまだ気になるならこの借りをどこかで返してくれ」と言ったのだ。

「良かったな・・・助けてくれてありがとうございます！」

「私からもありがとうございます！」

「コンコーン！」

場の雰囲気も良くなったのを見計らって、カイトは改めて男性と女性と向き合い、頭を下げてお礼を言った。

シンンとキュウコンも同じようにお礼を言った。特にキュウコンは愛するグラエナを救ってくれたから尚更だ。

「お役に立てて嬉しいよ」

「自己紹介がまだでしたね。俺はカイトと言います。そして相棒のグラエナです」

「グガウツ！」

「私はシノンと申します。こっちはパートナーのキュウコンです」

「コーン！」

「俺はサトシって言います。コイツは相棒のピカチュウ、そして仲間のケロマツです」

「ピカツチューー！」

「ケーロ」

「セレナです。宜しく」

「私はユリーカ。こっちはデデンネで、こっちはお兄ちゃん」

「シトロンと申します」

「僕はエデイ、こっちは僕の妻の・・・」

「リンジーよ。私達は水中考古学を研究しているの」

「水中・・・考古学？」

「海底や湖と言った水中に存在する遺跡や沈没船等の遺物を調査し、研究対象にしている考古学の事よ。考古学にもいろんな分野があるの」

「へえ・・・そんな分野があったのね」

「それで、お2人はこの海を調べているんですか？」

「ああ、今日はあの海域へ潜る予定なんだ」

エデイが指差す海には、3つの渦巻きがあった。あの辺りに何があるのかと聞いてみると、あの辺りに昔氷山にぶつかって沈没したカッスラー号と言う豪華客船があるとの事だ。

「でもカッスラー号が沈没したのは、もっと海の沖合の筈です。それがどうしてこのミュライユ海岸へ？」

「恐らく海流のせいだ」

「海流？」

「このミュライユ海岸では、幾つもの海流がぶつかっていてね。複雑な潮の流れを作っているんだよ」

「その影響であそこまで運ばれたと考えられているわ。カッスラー号

の正確な位置を確認し、船を運んだ海流の詳細を突き止める。それが今回の調査の目的よ」

「(成程な、確かにそれは水中考古学向けの内容だな。しかし海の調査か・・・まだそれほど経験した事がないから行ってみたいな)」

話を聞いていく内にカイトの心にはその思いが強くなっていった。勿論それはシノンも一緒だ。現に彼女の口元が緩んで笑みを浮かべているからだ。

「あの、その調査・・・私達も一緒にさせて頂けないでしょうか？私、ポケモン考古学を目指しています、水中考古学にも興味があるんです！」

「コーン！」

「俺も同じで、考古学に興味があります。是非お願いします」

「ガウ！」

「俺も一緒に行きたいです。ダメですか？」

「ピーカ！」

「何でもお手伝いします！」

「僕も・・・きつとお役に立てると思います」

「ユリーカも行きたい！」

「そうだな・・・お願いしようか。人でも欲しかったところだし」

「だけど、とても危険だから私達の指示には必ず従ってね。約束よ」

「」「」「はい!!」「」「」

こうしてカイト達は、水中考古学者のエディとリンジーと共にミュライユ海岸の調査に行く事になった。

だがその話のある者達が盗み聞きしていた事には気づかなかった。

それからカイト達は、必要な物資を船に運び入れて出港し、3つの渦潮が見える位置までやって来た。あの巨大な渦潮は海流による影響で発生し、一定間隔で変化するとの事だ。今の時間だと暫く発生しないとエディが言う。彼の言う通り、渦潮は徐々に小さくなって最後は消えてしまった。

その間にリンジーは甲板にある潜水艇で調査すると言い、乗る準備をする。

「わあ・・・これで海に潜るんですか？」

「その通りよ」

「是非乗せて下さい！」

「ピーカ！」

「えっ？」

「私も行きます！」

「ねえねえ、あたしもー！」

「デネネネ！」

「うくん・・・困ったわね。この潜水艇は私の他にはどんなに頑張っても3人しか乗れないの」

「それでは！誰が乗るか公平かつ厳正に決めましょう！フッフッフ、サイエンスが未来を切り開く時！シトロニックギア・オン!!名付けて、『恨みっこ無しよくじ引きマシン』です！」

自慢げに言うシトロンだが、どこをどう見ても唯のくじ引きだ。まあ、全員が潜水艇に乗れなし、公平に決めるにはこれがちょうど良い事だが・・・この場合手書きで作れば良いと思ったのはいけない事であろうか？

兎に角画面の表示された6つのルートからそれぞれ1つ選び、スタートさせた結果3つの当たりくじを引いたのは、サトシ、カイト、シ



ノンの3人だった。

選ばれた3人はセレナ達に見送られながら潜水艇に乗って、海の底へ出発した。

ちなみに潜水艇の中は正面の席にリンジー、左右の席にサトシとシンノン、その膝の上にピカチュウとキュウコンがいて、そして後ろの予備席にカイトとグラエナが座っている所だ。

潜水艇は順調に海の底へ潜っていく。その途中リンジーがエデイと連絡を取り合い、カイト達は窓から海中を泳ぐ水ポケモン達の群れ等の光景に目を奪われていた。ふとカイトは水深計を見てかなり潜った事に気がついた。

「随分潜ったな」

「ガーウ・・・」

「まもなく海底が見える筈よ」

「コン？コーン！」

「えっ・・・あれ？あのクスモーは・・・？」

キュウコンが窓の外を指差し、その所を見てみるとクスモーの群れが泳いでいた。

しかもその群れの中に、見覚えのある絆創膏を付けているクスモーがいた。

「あ、あの絆創膏。さっきのクスモーだ！」

「どうやら仲間の所に戻ったようだな」

「ああ、良かったな」

仲間の元へ戻れて喜ぶサトシ、カイト、シンノンと一緒にグラエナ達もホツとしていた。すると突然、潜水艇が激しく揺れ始めた。慌てたエデイの声が響く。

「リンジー、どうしたんだ!？」

「どうやら海流にぶつかったみたい」

「海流に・・・？やっぱり合っているんだ！」

「ええ！私達の仮説は正しかったのよ！」

自分達の仮説が証明された事にリンジーは喜びながら巧みに船を操作し、同じ海中に流されてきた難破船を避けて海流の流れから抜け出した。

ほう、と胸を撫で下ろすカイト達はクズモー達が難破船の後を付いて行くのを目にする。その行方を探る為に潜水艇は海流の外からクズモー達を追跡する。

やがて難破船とクズモー達が海流から抜け出し、さらに海の底へ行くとその先には沢山の難破船が積み重なっていた。

その中の中心に一番大きな難破船があった。ライトを点灯させて調べてみるとミロカロスのエンブレムが付いていた。この船こそ昔沈没したカッスラー号だった。

エディとリンジーの2人は水中考古学として大発見したのだ。

「凄いな・・・」

「全くだ・・・」

「まさに海の中の芸術品ね・・・」

遺跡の調査とそれを解き明かしていく・・・以前出会ったアマルスやチゴラスの時とは違った興奮と感覚が全身を駆け巡った。

そんな時、難破船から見慣れないポケモンが出て来た。

「あのポケモンは・・・？」

『ドラミドロ。草擬きポケモン。クズモーの進化形。潮の流れに乗って移動するその姿は、海藻が流されているようにも見える』

出て来たポケモンはドラミドロと言って、クズモーの進化形だった。そして毒・ドラゴンタイプか、なかなか珍しい奴かもしれないな。

そう思いながらドラミドロ達を観察していると彼らに近づく者がいた。それはあの巨大なサメハダーだった。サメハダーはドラミドロ達と何か話した後、難破船に近づいて突起がある部分を噛み千切ってしまった。そして平らになった所をドラミドロが『溶解液』を吹き掛け、カッスラー号にくっつけた。

「えっ？まさかあの子達・・・船を溶接しているの？」

驚いていたリンジーだが、その後さらに驚く光景が目映った。カッスラー号からラブカスやテツポウオ、チョンチーから出て来て、クズモー達と親し気に話し合い、仲良く泳いでいた。どうやら沈没した船が深海の海流に乗ってここまで運ばれ、サメハダーが余分な部分を取り除き、ドラミドロが『溶解液』を使い、巨大な建造物を作った。それが今ではポケモン達の住処となっているのだ。

「此処のポケモン達は種族関係なく仲良く暮らしているんだな」

「ガーウ」

「とても平和ですね」

「コーン」

「ああ、それに楽しそうだ」

「ピカチュウ」

「まるでポケモン達の楽園だね。素敵ね・・・ん？あれは・・・？」

カッスラー号の裏側の上の部分から人工的な光が漏れていた。沈没した事で船の電気類は全て壊れている筈だ。摩訶不思議な事に全員が首を捻った。

「どうした？リンジー」

「カッスラー号に謎の光源が！調べるわ」

「了解！気をつけて」

ちょうどその時、ドラミドロ達やサメハダーも謎の光源に気がついて向かって行く。その後を追い掛けてカツスラー号の裏側に回ってみると、そこにはロケット団の巨大なコイキング型の潜水艦が船体の壁をアームを使って壊していた。

「あつ！ロケット団の潜水艦だ！」

「ロケット団？」

「他人のポケモンを狙ってばかりいる悪い連中です！」

「そんな奴らがどうして・・・？」

何故ロケット団が此処にいるのか？その目的は不明だが、奴らが関わると思われる事がない。そう思っている間にロケット団のコイキング型の潜水艦は船の中へ入っていった。

ドラミドロ達とサメハダーもその後を追う。

「アイツら、中に入って行ったぞ」

「追い掛けましょうリンジーさん」

「ええー！」

カイト達もロケット団とドラミドロ達の後を追って船内に入って行った。

中を進んで行くところちょうど浮上できる位置を見つけた。近くにロケット団の潜水艦も止めてあった。サトシがハッチを開けてピカチュウと一緒に外を覗く。

「どうだサトシ？ロケット団はいたか？」

「いや、此処にアイツらはいない」

「と言う事は奴らはこの先に進んだな。ならさっさと後を追う・・・うん？」

潜水艇から降りてロケット団を追うとした時、目の前にいたドラミ

ドロ達とサメハダーが攻撃を仕掛けてきた。

「おつとと！待て待て！俺達は敵ではない！」

「そうだ！俺達はお前達の味方だよ！」

「ピカピーカ！」

「ガウガウ！」

「ズ？ズモズモ！」

「シャチャ。シャチャー！」

必死に声をかけて敵意はない事を示すとあの絆創膏を付けたクスモーとサメハダーがカイト達に気がついて仲間達に攻撃を止めるように伝えてくれた。

分かってくれた事に安堵しているとクスモーが単身奥へ進んで行く。その後をドラミドロ達とサメハダーが追い掛ける。それに続くようにカイト達も潜水艇から降りて追い掛けた。

その頃ロケット団は、奥の部屋にあつた大きな金庫に幾つもの爆弾とロケット噴射機を取り付けていた。

「設置完了！」

「こつちも終わったじゃーん」

「この扉の向こうには・・・」

「金銀財宝が沢山ある筈です」

「ソーナンス！」

彼らがそう言ってワクワクしていた時、突如足元に『ヘドロ爆弾』が放たれた。振り向くとそこにはあのクスモーがいた。

忠告するクスモーにロケット団は返り討ちにしようとした時、その後ろからカイト達がやって来た。

「そこまでだ！見つけたぞ、ロケット団！」

「ピカー！」

「貴方達、何をするつもり!?」

「貴方達、何をするつもり!?と聞かれたら!」

「黙っているのが常だけどさ!」

「それでも答えて上げるが世の情け!」

「世界の破壊と混乱を防ぐため!」

「世界の平和と秩序を守るため!」

「愛と真実の悪と!」

「力と純情の悪を貫く!」

「クールでエクセレントであり!」

「ラブリーチャーミーな敵役!」

「ムサシ!」

「ゴジロウ!」

「ミズナ!」

「ロバル!」

「宇宙と銀河を駆けるロケット団の4人には!」

「ホワイトホールとブラックホール、2つの明日が待っているぜ!」

「にやーんてニャ!」

「ソオーナンス!」

「イートマ!」

「エアァァァ!」

お決まりの長い台詞を言うロケット団。カイト達は彼らの台詞を聞きながら中の様子を窺い、金庫に設置されている爆弾に気がつく。もしかして・・・奴らの目的は金庫を盗む事か。だが今此処でそんな事をしたらかなり面倒くさい事になる。

「決まっているだろう!沈没船の財宝を頂くのさ!」

「根こそぎ回収して我がロケット団の活動資金にするのニャ!」

「ソゥナンス」

「何だって?」

「根こそぎ回収・・・そんな事はさせない。此処にある物は貴重な財産なのよ」

「それに此処はクズモー達の住処だ。荒せる訳にはいかない！」

「残念ながらそれを聞くことは難しいです」

「価値ある財産は、使つてこそ価値があるのよ！」

そう言つてムサシが手元のリモコンのスイッチを押す。すると金庫の周りに設置されていたロケットが作動し、勢いよく蒸気が噴射される。

それによつて部屋の中は白い煙で充満し、あまりの煙たさにカイト達は身動きできなくなつてしまふ。その隙にロケット団は逃げてしまつた。

「あ、貴方達・・・！」

「待て！」

「ズモズモ！」

「クズモー!?!」

僅かに明けた視界の隅を絆創膏を付けたクズモーが駆け抜けていく。余程ロケット団に住処を荒らされた事に怒つているのか、追いかけて行く時に放つた言葉に怒りが込められていた。

「ケロマツ！クズモーを追い掛けるんだ！」

「ケエロ！ケロー！」

「ピカピカ！」

「兄様、2体とも大丈夫でしょうか？」

「今はケロマツに任せるしかないな。今の俺達の手元に水ポケモンはいないからな」

ロケット団を追い掛けて行つた2体を心配するカイト達。だがリンジの焦燥を掻き立てる声が新たな危機を知らせた。

「逃げましょう！穴が開けば水圧で一気に海水が入って来るわ！」  
「分かりました。全員急いで脱出だ！」

先程よりロケット噴射の勢いが増している。このままでは本当に危険だと誰もが感じて、急いでカッスラー号から脱出する。

ちなみにクズモーとケロマツの2体はロケット団の逃走を必死に阻止していた。

そしてカイト達が潜水艇で海へ出ると、カッスラー号に海水が入った事で船全体のバランスが崩れ、徐々に傾きが大きくなって軋む音が響いた。

「沈没船同士のバランスが崩れた。このままではやがて崩壊するわ！」

「海のポケモンの住処を守らなきゃ！」

「ピーカチュウ！」

「ならまずこれ以上傾かないように浸水を止めよう。ドラミドロ、サメハダー、手を貸してくれ！」

カイトの呼び掛けにドラミドロ達とサメハダーは了承し、ラブカスやチョンチー等の他の水ポケモン達を呼び集める。そして全員の力を合わせてカッスラー号を支え、元の位置まで押し上げた。

「リンジーさん！あれで穴の開いた部分に蓋を！」

「了解！」

カイト達が乗っている潜水艇のアームを使って、浸水している穴の部分を塞げるくらいのサイズの鉄板を持ち上げて穴を塞ぐ。

「今だドラミドロ！溶解液発射！」

「ラミー！」



鉄板で塞いだ穴をドラミドロ達が素早く『溶解液』で固める。それによりカッスラー号の浸水が収まって、崩壊を免れる事ができた。全員が喜んでいるとエディから通信が入った。

「ご苦労様、大変だったね」

「エディ！」

「何よりも、君達が無事で本当に良かった。さあ時間だ！もうすぐ渦潮が発生する」

「了解！」

再び渦潮が発生する前に浮上し、海面を目指して出発するカイト達。

一方その頃、ロケット団はケロマツとクズモーの追撃を振り切っていち早く海面に浮上した。彼らは強奪した金庫を見て喜びの声を上げる。

「やった！作戦は大成功だぞ！」

「ソクナンス！」

「これでニャー達の活動資金に一生困らないばかりか、食糧の心配もなくなったニャ」

「ではさっそく陸を目指して移動しましょう。此処に長居は無用です」

「そうね・・・ん？ねえちよつと、アレって何？」

ムサシが見つめる先には渦潮が発生していた。しかもロケット団がいた位置はその中心点だったらしく、彼らの潜水艦は渦潮に囲まれてしまった。

「もしかしてアレ・・・渦潮!?!」

「ど、どうするじゃーん!?!このままじゃ巻き込まれるじゃーん！」

「急いで中に。そして緊急ジェットで空に脱出です！」  
「ラジャー!!」

5人が急いで潜水艦の中に入り、中のスイッチを押すとコイキングの鰭の部分と後ろのスクリュー部分からロケット噴射機が飛び出した。そして勢いよく噴射して空高く飛び上がってその場から脱出した。

「やったニャー！上手く脱出できたのニャー！」

「フウ、危機一髪じゃーん」

「どんな時にも備えあれば患いなし！」

「全くその通りです！」

「今回の私達って・・・」

「」「」「なんだかとても良いカンジくく!!」「」「」

「ソクナンス！」

こうしてロケット団は空の彼方へ消えて行った。

そして後に残ったのは、彼らを追い掛けていたケロマツとクズモーで、彼らは木の板に捕まって必死に耐えていた。

その様子をセレナ達や海面に浮上し、潜水艇から出たカイト達が目撃した。

「ケロマツ！クズモー！」

「ケロー！」

「ズモく・・・」

いくら水ポケモンでもあの渦潮の中を泳げ切るのは不可能で、もし飲み込まれたら唯では済まない。その為サトシは1つの望みに賭けて叫んだ。

「跳べ！跳ぶんだケロマツ！クズモーも一緒に！」

「ピーカー！」

「ケーロー！ケロツ、ケロケロー！」

「ズ、ズモー！」

サトシは両手を大きく広げてケロマツ達が来る事を信じて待つ。ケロマツはそれを見てクズモーに自分に捕まるように言って、沈没船から流れ出た家具の破片を足場にして跳んだ。最後の足場は若干遠い距離であったが、ケロマツが高く飛んでそのままサトシの腕に落ちていく。サトシはケロマツとクズモーをしつかり受け止めた。

「ケロマツ！クズモー！」

「ケロケロー！」

「ズモズモー！」

無事に2体が戻って来てサトシは勿論、カイト達全員が良かったとホッとした。

それから渦潮からある程度離れた所でサトシはクズモーを海に戻した。すると彼の傍に仲間のドラミドロ達とサメハダーが海面から顔を出した。話を聞くと見送りに来たそうだ。

「エディさん。リンジーさん。今日は貴重な体験をさせて頂き、本当にありがとうございます！ございました！」

「いやいや、こちらこそ。深海の海流は特定できたし、カッスラー号の正確な位置も把握した。良い調査ができた」

「ポケモン達が一緒に暮らしていたなんて、本当に驚きだったわ」

エディとリンジーがそう言う中、サトシは見送ってきたクズモーとドラミドロ達に別れの挨拶をしていた。

「じゃあな！クズモー！ドラミドロ！」

「これからも海の仲間達と仲良く暮らしてね！」

「ピカチュー！」

ドラミドロ達はサトシ達に見送られながら、海に潜って住処へ帰って行った。

1体のクズモーとサメハダーだけが残らなければ……。

「ズモ……！」

「シャチャ……！」

「ん？お前も元気でな」

「早く行かないと置いて行かれ……！」

カイトが早く仲間の元へ帰るように言うとした時、突如サメハダーがカイトに向かって飛び掛かり、そのまま頭から噛みついた。

「アイタタタツッ！い、一体どうしたんだ!？」

「シャチシャチ！」

「な、なんだと!？良いのかそれで?」

「兄様、サメハダーは何て言っているんですか?」

「どうやらコイツ……俺の事が気に入ったらしく、仲間になりたいとの事だ」

「えっ!？」

突然の事に驚いている中、サメハダーはさらに噛みつきながら「仲間にしろ」と言い続ける。あまりの痛みに流石のカイトも悲鳴を上げ、グラエナが噛みついて無理矢理引き離した。

「兄様！大丈夫ですか!？」

「コーン?」

「ハアハア……フウ……やれやれ、抜けた歯がまだ突き刺さっている。まあ放っておいても良い。それよりも助かったよグラエナ」

「放っておくのはちよつと……今抜きますね」

「ガウ……。グラアウ！」

「そう呆れるなよ。それよりこの後どうするかって？そんなの決まっているさー！」

首元部分に残ったサメハダーの歯をシノンに抜いてもらいながら問い掛けてくるグラエナに答える。そして海で待っているサメハダーに言った。

「サメハダー！俺もお前の事が気に入った。だが海のギャングと呼ばれ、他のポケモン達から恐れられているその実力……。俺は知りたい。だからお前にバトルを申し込む！俺が勝ったらゲットさせてもらう。いいか？」

「シャツチャーー!!」

カイトの問いにサメハダーは大きく鳴き声を上げて「望むところだ！」と言う。そんなやり取りを見ていたクズモーは、逆に自分がサトシにバトルを申し込んだ。

「サトシ、クズモーがお前にバトルを申し込んでいるぞ」

「ああ、アイツからそんな気がすると感じていたんだ！売られたバトルは買うのが礼儀！受けて立つぜ！」

「頑張つてねサトシ！」

「兄様もフアイトです！」

「では僕達も此処で観戦させてもらうよ。この位置なら渦潮も発生しないし、時間があるから待っていられるし」

「「ありがとうございます！」」

エディとリンジーにお礼を言った後、カイトとサトシのサメハダーとクズモーをゲットする為のバトルが始まった。

フィールドと今の手持ちポケモンから2人が出したのは……。

「ヒトツキ、出陣だ！」

「ケロマツ、君に決めた！」

「ヒート！」

「ケロ！」

「えっ？ヒトツキですか!？」

「ケロマツは水タイプだから分かりませんが、何故カイトはヒトツキを出したんでしょうか？」

「兄様の事です。何か考えがある筈です！」

シノン達が考えを言っている中、カイトとサトシは互いに少し距離を取ってバトルを開始した。

「ヒトツキ！燕返しだ！」

「ヒート！」

「サメエエー！！！」

先手必勝とばかりにヒトツキは『燕返し』で切り裂こうとする。対してサメハダーは『ロケット頭突き』で応戦する。

互いの技がぶつかり合った後、両者共に後退する。だがヒトツキは苦い表情を浮かべる。なぜならサメハダーの特性：さめはだにより、ダメージを受けているからだ。

その隙についてサメハダーが『アクアジェット』を仕掛けるが…。

「ヒトツキ！金属音で動きを止めろ！」

「ヒート!!！」

真正面から『金属音』を受けるサメハダー。最初は耐えていたが中間あたりで動きが鈍くなり、とうとう悲鳴を上げて動きを止めてしま

う。  
今度はカイトがその隙を見逃さない。

「今だヒトツキ！連続切りだ!!」

「ヒートト!!」

動きを止めたサメハダーにヒトツキは素早く接近し、海に落とさないうようにしながら『連続切り』で何度も斬りつける。効果抜群の上に攻撃が当たる度に受けるダメージが大きくなっていくので、サメハダーは戦闘不能寸前の状態になってしまう。

「シャ、シャチャャー!!」

しかしサメハダーは諦めず、何とか海の中に逃げ込んで再び攻撃を仕掛けようとするが……。

「逃がすか！最大パワーで連続切り！そして斬撃を飛ばせ！」

「ヒートトトト!!」

ヒトツキは勢いよく体を振って『連続切り』から斬撃を飛ばした。その斬撃は海ごとサメハダーは斬ってしまった。

そしてゆっくり海面に姿を現し、目を回して動かないサメハダーにカイトはモンスターボールを投げる。

「行け！モンスターボール！」

モンスターボールはサメハダーに当たり、モンスターボールは数回揺れた後音を鳴らして止まった。

「よし、サメハダー、ゲット完了！」

「グガウウツ!!」

「ヒート!!」

「おめでとうございます兄様！」

「コーン!!」

新たな悪タイプをゲットでき、喜ぶカイト達。また、その横でサトシもクズモーのゲットに成功し、セレナ達と喜びを分かち合っていた。

「カイト、クズモーをゲットしたぜ！」

「こちらもサメハダーをゲットしたところだ。出て来いサメハダー！」

「俺も・・・出て来いクズモー！」

ゲットしたサメハダーとクズモーをカイトとサトシは早速出す。

「これから宜しく頼むぞサメハダー」

「俺もだ。宜しくなクズモー」

「シャツチャー！」

「ズーモー！ズモ？」

元気よく挨拶するサメハダーとクズモー。そんな2体に先程海に帰ったドラミドロ達が見送りにやって来た。

「ラドラド！ドラード」

「カイト、ドラミドロは何て？」

「クズモーとサメハダーを宜しく頼む、とき。勿論！引き受けたぜ」

「ああ！俺もだ！大事にするよ」

「ガウガウ！」

「ピーカー！」

こうして新たにクズモーとサメハダーを仲間に加えたカイトとサトシ。

さらにサトシは今回のケロマツの跳ぶ姿を見て、シヨウヨウジム攻略の糸口を見つけてその特訓を開始するのであった。



次はいよいよ、シヨウヨウジムに挑戦だ。

シヨウヨウジム戦！VSガチゴラス&アマールガ！！

カロスリーグに挑戦する為、旅を続けていたカイト達は、遂にシヨウヨウジムがあるシヨウヨウシティに辿り着いた。

「シヨウヨウシティ！遂に着いたわ！」

「やった！着いたー！！」

「来たぜピカチュウ！」

「ピカチュー！」

「今度のジム戦も面白いといいなグラエナ」

「ガーウツ！！」

「頑張つて下さいね兄様！」

「コーン！」

この日の為に日々特訓してきた結果を出す為、必ずジム戦に勝つと意気込むサトシとジム戦で心躍るバトルを期待しつつ勝利を狙うカイト。思惑は少し違うが、彼らの戦意は最高潮まで達していた。そして彼らは山の上にあるシヨウヨウジムへ向かうのであった。

その頃、かつてカイト達が行った化石研究所で、再び騒ぎが起きていた。

「どうだ、居たか!？」

「いえ、此処には居ません！」

「そうか・・・一体何処に行ってしまったんだアマルスとチゴラスは!？」

仲間の報告を聞いてタケダは大声で叫んでしまう。実は数日前、彼らはいつものようにアマールガ達と復活したチゴラスの健康チェックを行うとしたが、部屋に居る筈の1体のアマルスとチゴラスの姿が何処にもなかったのだ。

その後研究所内をくまなく探したが見つからなかった。途方に暮れるタケダ達を他所に、アマルスとチゴラスは・・・。

「チ〜ゴ！」

「ル〜ス」

人々の視線を気にせず堂々と道を歩いていった。彼らはある者達の後を追っているのだ。それが誰なのかは、この先にある山の頂上で判明するのであった。

再び視点が変わり、カイト達はジムに入って受付を済ませて奥に進んで行く。進んだ先には大部屋があって、中はロッククライミング用の岩山があった。

「わぁ・・・！」

「ピーカ・・・！」

「これはまた・・・」

「ガウ・・・！」

「これがショウヨウジム・・・だと思う」

「ジムにしては・・・随分大きく、面白そうな感じね」

「それに何かカラフル！」

目の前のジムを観察していると、ある岩肌でロッククライミングしているザクロを見つけた。

「ザクロさ〜ん！ジム戦、チャレンジに来ました！お願いします！」  
「俺も同じです。宜しくお願いします！」



「その意気込みは素晴らしい。では私は一足先に上で待ってますよ！」

再びロッククライミングを開始して、バトルフィールドに向かうザクロ。その後をカイト達は追って登り続けた。

一方シノン達はエレベーターに乗って上を目指した。そして彼女達が到着したのと同時に、カイト達も登りきってバトルフィールドに辿り着いた。日頃ポケモン達と一緒に特訓をしていたおかげか、2人は全く息を切らしていなかった。

「ザクロさん、お待たせしました」

「無事に登りきりましたよ」

「ピカピカ！」

「ガーウ！」

「いや、2人とも素晴らしい。2人はポケモンだけでなく、自分自身も鍛えているようですね」

「えっ？どうして分かるんですか？」

「実はこの壁はチャレンジャーの皆様の為、初心者用に作ってあるんです。けど運動神経の良いトレーナーでも大抵の者は息を切らしてしまいます。ですが先程も言った通り、2人は息を切らしていない。以下に普段2人が努力しているのかが分かりますよ」

「そう言う事でしたか。けど俺達はただ皆と一緒に特訓しただけですよ」

「俺も同じです。皆と一緒にやってこそ、意味があると思っています！」

「ガウツ！」

「ピカ！」

「そうですか。ところで、2人は登っている時どんな気持ちでした？」

「えっと……何も考えていませんでした」

「おいおい……」

頭に手を置きながらサトシははつきり言う。それを聞いてカイトはつい溜息をついてしまう。しかしザクロは優しい表情で頷く。

「それで良いのです。カイト君はどうでしたか？」

「俺は・・・何処をどう行けばすぐ上に登れるか、その事だけを考えながら上を見つめていました」

「成程、君達はどちらも余計な事は考えず、一点の事に集中していました。それは曇りがない透き通った素晴らしい心です。この壁を制覇したその先には、今度は私と言う壁があります。私を制覇して下さい、2人のチャレンジャー！」

「はい!!」

「ピカピカチューー！」

「グツガアヴウ！」

「ザクロさん、どうしてチャレンジャーに壁登りを？」

「精神統一の為ですよ」

「精神・・・？」

「統一？」

「どういう意味でしょうか？」

「壁登り・・・それは最高の精神修養なのです。壁を登る時、私は無心になります。見つめているのはただひたすらに上、望む事は登り切った達成感、そこに壁がある限り私は挑戦を続けます。チャレンジャーにも上を見据えて無心に這い上がって来て欲しいのです！」

ザクロからロッククライミングの狙いを聞いて、カイト達は全員その意味を理解するのであった。そして遂にジム戦が始まった。

最初にバトルしたのはサトシだ。理由は単純に此処へ来るまでにジャンケンで決めていたからだ。サトシはイワークの『岩石封じ』とチゴラスの『流星群』に対し、特訓で得た連続ジャンプを活かした『岩石封じ封じ』と『流星群封じ』を用いて、激闘の末に見事ジム戦に勝利した。余談だが、勝利に喜ぶサトシを見て、セレナは涙目で愛す

る人を称えた。

そして時を移さずにカイトのジム戦が始める為、カイトは観客席からバトルフィールドに向かう。その途中で観客席へと向かうサトシからエールが送られる。

「頑張れよカイト！」

「勿論だ。お前ばかりに良い格好をさせる訳にはいかないからな」

そう言つてカイトはバトルフィールドに堂々と立つ。そして審判から説明を聞いた後ザクロに質問した。

「ザクロさん、イワークとチゴラスは先程のバトルで戦闘不能になっていますが・・・ポケモンはどうするのですか？」

「ご安心下さい。バトルシャトーでイツコンさんと戦った君の強さを知り、私の持つポケモン達の中で最も強い2体のポケモンを出させて頂きます！行け、ガチゴラス!!」

「ゴーラ!!」

「ほお、カツコイイポケモンだ。どれどれ・・・」

『ガチゴラス。暴君ポケモン。分厚い鉄板を紙の様に噛み千切る大顎で古代の世界では無敵を誇った』

成程、以前研究所で見たチゴラスの進化形で岩・ドラゴンタイプか。ポケモン図鑑で調べ終わった後、カイトは腰にあるボールを1つ取り出す。

「1番手はお前だ。ノクタス、出陣!!」

「ノーク！」

「ノクタスですか、草と悪タイプを持つポケモン。カイトも最初はセオリー通りですね」

「当然よシトロン、兄様はバトルをする前から戦略を考えているんだから。兄様！ノクタス！頑張つて下さい！」

シトロンの眩きにシノンには自慢するように答えて、カイトの勝利を祈りながら応援する。それに応えるようにカイトは手を上げて、ノクタスを見つめて頷いた後、審判の合図でバトルが始まった。

「行けノクタス！」

「ノーク！」

「まずはこの技からです。ガチゴラス！噛み砕くです！」

「ゴツラアア・・・ガアアアアツ!!」

「なっ!?!」

先制攻撃とばかりにガチゴラスが『噛み砕く』で攻撃しようとするが、それよりも先にノクタスが一瞬で接近していて、ガチゴラスの腹に攻撃を決まっていた。何が起きたのかザクロをはじめ、シترون達も分ならず呆然とするが、サトシとシノンだけは分かっていた。

「シノン、今のってあの技だよな？」

「ええ、今のは不意打ち。相手が攻撃技の時に先制する事ができる技よ。さつき兄様はノクタスとアイコンタクトしていたからきつとその時に指示を出していたんだわ」

シノンの言う通り、先程ノクタスが攻撃した技は『不意打ち』である。そしてバトルが開始する前にカイトがノクタスを見つめて頷いた時のものが合図だったのだ。彼女の話聞いて全員が驚く。特にアイコンタクトだけで指示が通った事に「凄い」と眩く。だがそんなやり取りが行われている間にもバトルは続いていた。

「どんどん行くぞノクタス！ミサイル針！」

「ノーククク！」

「ストーンエッジ！」

「ゴツラアアアアツ!!」



一旦距離を取ったノクタスが連続で『ミサイル針』を放つ。それに対してガチゴラスは『ストーンエッジ』を繰り出し防いでしまう。それどころか『ストーンエッジ』はそのままノクタスに迫った。

「ジャンプして躲せ！」

「ノーク！」

「逃がしません！飛んでドラゴンテール！」

ジャンプして躲すノクタスに向かって、ガチゴラスは先に戦ったチゴラス同様・・・否、それ以上の脚力で迫って『ドラゴンテール』を繰り出す。危機的状况に対してカイトは薄く笑っていた。

「今だノクタス、ニードルガード！」

「ノーク！」

「ゴラアアアアアッ!？」

「あの体勢からこんな!？」

ノクタスの『ニードルガード』によりガチゴラスは大きく吹っ飛ばされ、そのまま落下して地面に激突した。空中なら身動きが取れないはず・・・そう思つて上手く誘い込み、一気に勝負を決める技を繰り出したのにまさかそれが破られるとは!？

ザクロは、驚きと作戦を破られたショックで一瞬思考が停止してしまい、それによりカイトが次なる手にかかっている事に気づかなかつた。

「ノクタス！一気に接近しろ！」

「ノーク！」

地面に着地したノクタスは勢いよく走り出し、ガチゴラスへ接近する。しかしザクロもガチゴラスもまだ闘志は消えていなかった。

「ガチゴラス！流星群です！」  
「ゴオオラアアアアア!!」  
「ノクタス、ジム戦対策用のもう1つの技を使うぞ。ニードルアーム！」  
「ノーク！クータタタタ!!」

迫るノクタス目掛けて、ガチゴラスは『流星群』を大量に放つ。それを見てノクタスは走るのを一旦止めて、両腕を猛スピードで回して大量の『流星群』を『ニードルアーム』で次々と粉碎してしまった。そして最後の1つを破壊し、再びガチゴラス目掛けて走り出す。ザクロは次に『岩石封じ』を指示し、ガチゴラスは大量の『岩石封じ』を放つがそれも破壊されてしまい、ノクタスは遂にガチゴラスの目の前で接近した。

「ゴラア!?!」  
「なっ!?こんな事が・・・」  
「そのまま決めろ!」  
「ノークタアア!!」

ガチゴラスが防御する暇もなく、ノクタスの『ニードルアーム』が腹に決まった。しかも両腕であった為ダメージは大きく、ガチゴラスはゆっくりと倒れてそのまま目を回しながら動かなくなった。

「ガチゴラス戦闘不能、ノクタスの勝ち!!」  
「よし！よくやったぞノクタス！」  
「ガウガウツ！」  
「ノークタ！」  
「お見事です兄様！」  
「コーン!!」  
「やっぱりカイトは強いな」

「そうね！」

「ノクタス、カツコイイよ！」

「今までのバトルでもそうでしたが、カイトの2手、3手先を読んだ戦術には毎回驚かされます！」

戦闘不能になったガチゴラスをザクロは健闘を称えながらモンスターボールに戻した。

「お疲れ様でしたガチゴラス、戻って下さい。お見事でしたカイト君、サトシ君の時も驚かされましたが、君の先の先を読んだ戦術にも驚かされました。ビオラが君と戦う時は覚悟を決めなさいと言っていた理由、理解しましたよ」

「ありがとうございます。今までの旅の結果、今の戦術になったのです。そして俺が考えたバトルに皆が信じてくれた事もありますから。それではザクロさん、そろそろ次のバトルを始めましょうか。そしてもう1つの壁も乗り越えさせていただきます！」

「分かりました。では私の2体目はこの子です。行け、アマルルガ!」  
「ルガーーー!!」

ザクロが次に出したポケモンは岩・氷タイプの2つを持つアマルルガであった。だが化石研究所で見たアマルルガとは違って、ザクロのアマルルガから凄まじいオーラが溢れていた。カイトはアマルルガのタイプと自分の手持ちの事を考えた結果……。

「ご苦労だったノクタス、ゆっくり休め。そしていよいよ初陣だ。お前の力をたっぷり見せるがいい……第2陣、ヒトツキ!!」

「ヒートー！」

カイトはノクタスを戻した後、腰にあるボールを1つ取る。そして出したポケモンはヒトツキであった。

「ほお、ヒトツキですか。タイプの相性は勿論、私から見ても良い面構えをしていると分かりますね」

「ありがとうございます。こいつは今回初のジム戦なんですが、ザクロさんを越えたいと前から言っていたので・・・それにそろそろアレだしな」

ザクロの質問にカイトは丁寧に答える。けど最後のところは小声で言ったので聞こえる事はなかった。そして2戦目のバトルが始まった。

「まずこれからだ。ヒトツキ、金属音！」

「ヒートオオオ！」

「成程、防御力を下げて一気に勝負を付けようと言う考えですか・・・ならこちらはオーロラビームです！」

「ルウガアアアアア！」

ヒトツキの『金属音』を食らい、苦しい表情になるアマルルガ。しかしザクロの指示を聞いて、必死に耐えながら『オーロラビーム』を放つ。それを見てヒトツキは『金属音』を止めて、避けようとするが・・・。

「逃がしません。そのままオーロラビーム！続けて岩石封じです！」

「ツキ!?ヒトローロー!!?!」

「くっ！避けきれなかったか」

アマルルガが執拗に『オーロラビーム』を放ち続けた上に、『岩石封じ』まで出して来た為ヒトツキは攻撃を受けてしまった。しかも韃を持っていた手の部分に当たり、追加効果によってその部分が凍ってしまった。それによりバランスが悪くなってヒトツキはふらつく。

「どうやらこの勝負、私の方に流れが向いてきたようですね」

「いえ、勝負は最後まで分かりませんよ。ヒトツキ、行けるな？」  
「ヒートト！」

カイトの問いにヒトツキは体を震わせながら応える。そして鞘に力を込めて自力で氷状態を解いてしまった。それを見てザクロは驚きの表情になる。

俺も最初の時はあんな表情になったものだ。ゲームだけしかないと思っていた絆の力による奇跡……凄いものだ。まあ、今はそんな事は置いといて。

「そのままシャドークローだ！」

「そうはさせません。吹雪！」

『シャドークロー』で攻撃しようとするヒトツキをアマルルガは口から凄まじい威力を誇る『吹雪』を放つ。ヒトツキは回避しようとするが『吹雪』の攻撃範囲は広い。その為今度はヒトツキの下半身が凍り付いてしまった。さらにそのまま落下して岩に突き刺さり、身動きができなくなってしまった。

「ヒトツキが!？」

「カイト！早く抜けさせるんだ！」

「ピカチューー！」

「でもあれでは身動きがとれない。脱出するのは難しいです」

「そんな!？」

「兄様！ヒトツキ！」

「コーン！」

シノン達が騒ぐ中、カイトは心を落ち着かせつつ冷静に状況を確認する。

「(この状況を切り抜けるにはあれしかない。もうそろそろ良い頃合



ワーアップした上に先の『金属音』で防御力が下がっていた事もあってアマルルガはその場に膝を付く。

その様子を見てザクロは厳しい表情をする。対するカイトも同様の表情だ。お互いに自分のポケモンがそろそろ限界だと気付いているのだ。

「どうやら次が最後になりそうですね。なので私の最も好きな技で決めさせていただきます。岩石封じ！」

「ルガーラー!!」

「受けて立ちます！ニダンギル、両剣で瓦割りだ！」

「ギール！ニードダ!!」

今度は無数の岩石がニダンギルに向かって行く。しかしニダンギルはそれを次々と切り裂く。そして最後の岩石を切り裂いた後、2本の剣がアマルルガの首目掛けて振り落とされた。ニダンギルが剣を鞘に入れたのと同時にアマルルガはゆっくり倒れて、目を回しながら戦闘不能になった。

「アマルルガ戦闘不能、ニダンギルの勝ち!! よって勝者、チャレンジャーカイト!!」

「よし！見事だったぞニダンギル!!」

「ガウガウウ！」

「ギール!!」

審判の勝利宣言を聞いて、緊張が解けて褒め称えながらグラエナと一緒にニダンギルの元へ駆け寄る。シノン達も観客席で喜びの声を上げる。

「おめでとうございます兄様！」

「コーン!!」

「凄いでカイト！」

「ピカピカ！」

「カイトも勝った！」

「やったー！」

「ふう〜カイト達の力も凄いです」

「よく頑張ってくれました。おかげで良いバトルになりましたよ。ありがとうございますアマルルガ」

「ルガ〜」

ザクロは奮闘したアマルルガにお礼を言っつてモンスターボールに戻し、駆け寄って来たシノン達と話をしているカイトの元へ向かう。

「実に素晴らしいバトルでしたよカイト君。特にあの状況でヒトツキがニダンギルに進化した事が、まさにサプライズでした！」

「ありがとうございます。ノクタスとニダンギル、グラエナ、そして皆の力があってからこそです」

「本当に素晴らしい。サトシ君の時もそうでしたが、チームが一丸となって見事ショウヨウジムと言う壁を乗り越えました。これがその証、ウオールバッジです。受け取って下さい」

「ありがとうございます！見ろグラエナ、これが今回手に入れたウオールバッジだ」

「ガーウ！」

バッジを貰ってケースに入れた後、全員でショウヨウジムから外に出る。出ると外はもう日が暮れていた。

「ところでカイト君、サトシ君、3つ目のバッジは何処のジムで挑戦するか決めているんですか？」

「いえ、まだ決めていません」

「これから考えようと思っていました」

「提案ー！3つ目のジムは、此処が良いと思うの。シヤラジム！近くにマスタートワーがある所なの。一度行って見たかったのよね」



そう言つてセレナは皆にシヤラジムの画像を見せる。画像に映っているシヤラジムは、海に囲まれたジムであつた。それにマスタータワーか、歴史的な良さを感じるな。

「シヤラシテイですな。成程、良い街ですよ」

「シヤラシテイ・・・シヤラジムか」

「なかなか良さそうな所だ。それにマスタータワーと言う所が気になる」

「私もです！そこにしましょうよ兄様」

シノンもマスタータワーが歴史的な古風な場所だと思つてそこに行こうと勧める。さらにザクロからそのジムで一味違う体験ができると言う話も聞いて、次の目的地はシヤラシテイに決まつた。

「カイト君、サトシ君、次はバトルシャトーでリベンジをお願いします」

「俺は大丈夫ですよ」

「俺はグランデユークにならないといけないから・・・ジム戦をしつつ、必ずグランデユークになってバトルをします！」

ザクロがバトルシャトーでリベンジをお願いするとカイトはすぐに承諾し、サトシはジム戦をしつつ、必ずグランデユークになる事を決意する。

そしてザクロに別れの挨拶をした後、カイト達はポケモンセンターへ向かおうとした時・・・。

「チ〜ゴ〜ー！！」

「ル〜ス！！」

「何!?!うおっ!」

「きゃあ!?!」

突然カイトとシノンに何かが覆い被さってきた。2人が慌ててそれを退かして見てみるとそれはなんとアマルスとチゴラスであった。

2体は喜びの表情でカイトとシノンの体に顔を擦り寄せてくる。この2体、もしかして……。

「化石研究所にいたアマルスとチゴラスか!？」

「えっ!?!でもどうして此処に……」

「取り合えず化石研究所に連絡してみよう」

そう言つてポケモンセンターに向かい、化石研究所に連絡するカイト達。するとすぐにタケダが画面に現れて、事の状態を説明してくれた。

「成程、そう言う事でしたか」

『ええ、2体が何処に行ったのか分からず、とても心配していたのですが……見つかつて良かった』

「どうやらこの2体、俺達の後を追いつけていたみたいです」

『カイト君とシノンさんの?そう言う事か……』

「タケダさん?」

理由を知ったタケダは少しの間目を瞑り、再び目を開けると驚きの事を言い出した。

『カイト君、シノンさん。君達さえ良ければ、このまま2体をお願いできませんでしょうか?』

「えっ、良いんですか!？」

「しかしそれではタケダさん達が困るのでは?それにアマルスには仲間もいますし……」

『構いません。アマルスとチゴラスが選んだ事ですし……それにもう

1体のアマルスとアマールガも納得しているんですよ』

「どう言う事ですか?」

『実は2体がいなくなった後すぐアマルルガ達に話したところ、彼らは分かっているような雰囲気だったのです。きつとアマルスが事前に話を付けていたんだと思います』

「そうでしたか・・・」

『そう言う訳でカイト君、シノンさん。改めてアマルスとチゴラスの事をお願いします！』

「分かりました」

「必ず愛情を持って大切にします！」

タケダから許可を得たカイトとシノンは足元にいる2体を真剣な眼差しで見つめる。

「チゴラス、お前の気持ちは分かった。改めて俺と一緒に来るか？」

「チーゴ!!」

「アマルス、これからは貴方とずっと一緒だからね。宜しくお願いね」「ルゝス!!」

2人は同時にモンスターボールを取り出し、優しく2体に当てる。そしてモンスターボールは音を鳴らしてながら止まった。

「チゴラス、ゲット完了！」

「グガウウツ!!」

「アマルス！ゲットです！」

「コーン！」

2つ目のバッジをゲットし、新しい仲間もできた事にカイトとシノン。サトシ達から祝いの言葉を貰いつつ、次なる目的地・シヤラジムに向かって行く事を決めた。

カイト達の挑戦はまだまだ続く。

甘い戦い！甘くない想い!?

前回シヨウヨウジムで2個目のバッジをゲットしたカイト達。次なる目的地・シヤラジムがあるシヤラシテイに向かっていた時、とある街に辿り着いた。その街には緑豊かな自然に囲まれた公園があったので、一息つく事にした。各々好きな事をしながら休んでいた時、セレナがバスケットを手に持ちながらフォッコがいるベンチに座った。

「ジャジャーン、お待ちせフォッコ。出来たわよ」

「フォッコ！」

「おお！」

バスケットの蓋を開けると中には茶色とピンク色の2種類のお菓子が入っていた。

それは『ポフレ』と言って、カロス地方の伝統的なポケモンの為のお菓子であった。

「伝統的なお菓子か・・・ハウエンのポロツクやシンオウのポフィンに似た食べ物がカロス地方にもあるとは驚きだ」

「ガウツ！」

「ああ、それにこのポフレ、見るからに美味しそうだな」

「ピーカ！」

「本当ね。とても上手よセレナ」

「コーン」

「ありがとう！ピカチュウとグラエナ、キュウコンにもあげるね」

「ピカピカ！」

「ガーウ！」

「コーン！」

「はい」

セレナはピカチュウとグラエナに茶色のポフレを、フオッコとキウウコンにピンク色のポフレを渡す。4体はポフレを口にする表情が緩んだ。

「どうやらとても美味しいようだと思っていると、サトシが残っていたポフレに手を伸ばす。」

「人間も食べられるよな?」

「あっ!?!」

そう言つてサトシは両手に持った2つのポフレを一気に口に入れる。すると急に黙り込んでしまう。それを見てセレナは慌てながら訊ねる。

「サ、サトシ!?!」

「どうしたんですか?」

「美味しい!こんな美味しいお菓子食べたの初めて!」

「脅かさないでよ……」

周りに花が咲いているのが見える程の笑顔でサトシはセレナのポフレを褒める。それを見てセレナは、自分が作ったポフレが好評である事にホツとする。

そんなにも美味しいのなら1つ貰うかなと思つていたら勝手にボールから飛び出したゾロアとユリーカのポシエットに入つていたデデンネが自分も欲しいと騒ぎ出す。

「マー!オイラも食べたいゾ!」

「ネネ!ネネ!!」

「分かった分かった。セレナ、ゾロアとデデンネの分もくれないか?」

「ええ、良いわよ。まだいろいろあるから」

そう言つてセレナはポフレを2個取り出す。すると突然ポフレが

独りでに浮いて、そのまま移動してピンク色の体が特徴のポケモンの口の中へと消えてしまった。

「ペロ・・・ムイムイ」

「えっ？何？」

「初めて見るポケモンですね兄様」

「ああ、さっき使ったのはサイコキネシスだ。ひよつとするとエスパークタイプのポケモンかもしれないな」

そうしている間にピンク色のポケモンは再び『サイコキネシス』を使って、残っていたポフレを全て食べてしまった。

ポフレが無くなってしまった事にゾロアとデデンネは悲しい表情になる。カイトは2体を慰めながらポケモン図鑑を取り出して調べる。

『ペロリーム。ホイップポケモン。嗅覚が発達していて、特に甘い匂いには敏感である』

成程、ペロリームと言うポケモンか。それにエスパークタイプではなくフェアリータイプであったか。図鑑の説明を聞いて興味が湧き改めてペロリームを見ると、後ろからセレナの持つバスケットより大きなバスケットを持った薄青髪の女の子が現れた。

「ペロリームがそのポフレ、まあまあ、だって言ってる」

「っ!? まあまあだって・・・貴方は？」

「私はミルファイ、ペロリームは私のパートナーよ」

「ペロ〜ン」

「俺はサトシ。こっちは相棒のピカチュウ」

「ピカチュウ！」

「私はセレナ・・・」

「フオッコ！」

「僕はシトロロンです」

「ユリーカよ」

「ネネネ！」

「俺はカイトだ。こっちは相棒のグラエナとゾロアだ」

「グガウツ！」

「よろしくだゾ」

「シノンと申します。こっちはパートナーのキュウコンです」

「コーン！」

自己紹介が終わると同時にサトシとピカチュウ、デデンネ、ゾロアのお腹の音が響いた。見事に音がハモった事に全員が苦笑いする。

「ゾロアとデデンネは兎も角、サトシとピカチュウはさつき食べただろうが・・・」

「ガール」

「だってあれだけじゃ足りないぜ」

「ピカピーカ」

「この子が食べちゃったお詫びに最高のポフレをご馳走してあげましょうか？」

「食べたい！食べたいです！」

「ピカピカ！」

「私も食べたい！」

「デネデネ！」

「オイラもだゾ！」

「私は結構です！」

「まあまあセレナ・・・」

未だ不機嫌なセレナを見て、シノンが苦笑いしつつご機嫌良くしようとする。

そんな事は気にせずにミルファイがバスケットの蓋を開ける。中には綺麗にデコレーションされた様々なポフレが入っていた。それを

見てサトシ達は絶賛する。

「おお〜！スゲエゼ！」

「どれも見事ですな！」

「そうでしょうか？ピカチュウにはピリリと辛いマトマの実のトツピング付き。ゾロアとデデンネには甘いオレンの実のトツピング付きをどうぞ」

3体は美味しくポフレを食べ始め、その様子をセレナは横目で見つめる。

「ピカピーカ！」

「ネネネ〜！」

「とても美味しいゾ！」

どうやらミルフィのポフレはかなり高い好評のようだ。3体は笑顔で食べ続ける。それを見たサトシが続くようにポフレを1つ手に取って食べる。

だがそれをミルフィが慌てて止めようとするが……。

「あつ！それは……」

「辛ああああ〜〜〜っ!!」

「おお、これは凄い。まるで火炎放射みたいだぞサトシ」

口から猛烈な火炎を吐くサトシを見て、カイトは面白そうに言う。

しかし、当の本人からにしては大変な事で、慌ててバックから水筒を取り出して必死に水を飲む。

「ゴクゴク！プハッ！ヒィ〜……何だよコレ、全然美味しくないじゃん」

「それは炎ポケモン用よ。ポケモンには美味しくても人間にはそうでない物もあるわ」



「そうなんだ・・・」

「けど確かにあの辛きなら炎ポケモンは好きでしょうね。私もタイプに合わせしてお菓子を作る事があるから分かるわ」

「でしょう。ポケモンに合わせる、それは良いポフレよ」

「ツ！それぐらい私もやってるわよ!!」

「当然よ、ポフレの基本よ。出来て当たり前」

「何よその言い方!」

ミルフィの上からの言い方にセレナは怒り、お互いに火花を散らしながら睨み合う。そんな2人をカイト達は内心恐ろしく感じつつ宥める。

「ピカピカ」

「ペロ」

「ちよつとちよつと、2人とも落ち着いて・・・」

「フーン!」

「やれやれ・・・どうしたものか」

「ガウ・・・」

「なら勝負してみたら?」

「ユリーカ?」

「このポフレコンテストで!」

ユリーカが指差す先には掲示板に貼られている1枚のポスターがあった。それはこの街で開催されるポフレコンテストの参加者を呼び込む為のポスターであった。

「今日が予選で、明日が決勝大会よ!」

「それいいじゃん!」

「ピーカ!」

「そんなのあるんですね」

「私はそのコンテストに出る為にこの街に来たのよ」

「じゃあ勝負ね！」

再び火花を散らすセレナとミルフィ。2人の間にいたシトロンは素早くしゃがんで静かに避難した。その間サトシとカイト、シノンの3人はポフレコンテストのポスターを見ていた。

「コンテストは午後からやるみたいだな」

「そして参加者は自由で、予選で勝ち残った4組が決勝に進めるのか・・・シノン、お前も出てみたらどうだ？」

「私もですか兄様？」

「ああ、お前が作るお菓子はとても美味しいし、いい勝負になるんじゃないか？」

「・・・そうですね、分かりました。私も出ます！」

「コーン！」

「」「えっ!?!」「」

カイトの勧めもあつてシノンは自分もポフレコンテストに参加すると宣言する。それを聞いてサトシ達は驚きの声を上げる。

「ねえシノン、貴方ポフレ作れるの？」

「いいえ、さつき初めて知ったわ。けどこう見えて私、いろんなお菓子を作ってきた事があるから大丈夫よ。お互いにいい勝負をしましよ  
う」

ミルフィの問いにシノンは不敵に笑顔を浮かべながら言う。

その後カイト達はポフレコンテストが行われる会場に向かう。そして開催時間になると司会者がマイクを手に開催宣言をする。

「さあ、ポフレコンテストの予選が始まりました。参加者の皆さんにはオリジナルのポフレを作っていたいただきます。どんなポフレができるのか、楽しみです！」

参加者はそれぞれ優勝を目指し、気合いと共に自身の腕によりをかけてポフレを作り出す。

そんな中セレナはフォッコと一緒に作っていた。

「ジャジャーン！さあ、ポフレのベースが焼けたわ！」

セレナのポフレはピンク色のもので、ベースだけでも良い匂いが漂ってきた。観客席で応援していたカイトとサトシ、シトロン、ユリーカもその匂いに釘付けになる。

「うわ〜ふんわりしている！」

「デネ〜」

「これだけでも美味そうだぜ！」

「ピーカ！」

「この上にいろんな種類のペーストを乗せていくの」

「フォッコ〜」

「2種類のペーストの組み合わせで、オリジナルティーを出すのよ」

説明しながら順調に作っていくセレナ達。見た目からでもとても美味しそうだ。

「そして最後はトッピング！作る人のセンスが大事ね」

「フォッコ。フォッコフォッコ！」

「ジャジャーン！これはフォッコの為の小枝トッピングよ！」

「……………フン、負けないわよ！」

完成したセレナのポフレを見て、さらにやる気になるミルフィ。

一方シノンはキュウコンとサーナイトと一緒にポフレを作っていた。彼女達の作るポフレは薄緑色で、初めてとは思えない程の手際よくできて、とても美味しそうに仕上げていく。

「このポフレはラムの実を混ぜた生地で焼いてみたの。貴方の様に良い色になったわサーナイト」

「サーナ」

「キュウコン、そっちの方も良い感じに温まったかしら？」

「コーン」

「うん、良い感じ。それじゃ、この真っ赤なチェリーを乗せて・・・」

キュウコンとサーナイトと仲良く作るシノン。実は彼女達、何度も一緒にお菓子作りをした事があるので、お互いに自分がやるべき事が分かっており、その為作業が順調に進んでいるのだ。

だがもう1体シノンの手持ちの中で何度も一緒にお菓子作りをした事があるポケモンがいた。

「シノン達も良い感じにでき上がっているな。これなら何の問題もないだろう」

「ええ、唯こっちの方は問題ありますけど・・・(汗)」

そう言つてシトロンが苦笑いしながらカイトの隣を見る。そこにはグラエナの頭を自分の膝に乗せて・・・俗に言う膝枕をしているミミロップがいた。

「ミロ〜♪」

「グ、ガア・・・」

幸せな表情をしているミミロップとは対照的に、グラエナは少し顔を赤くしながら必死に理性を保っていた。そう先程言つたもう1体とはミミロップの事だったのだ。

最初はミミロップも参加しようとしたが、ポフレコンテストではポケモンは2体までと決まっていた。結果シノンのお願ひもあつて仕方なく応援する側に行つたのだが、此処である事に気づいた。今グラ

エナの傍に居るのは自分だけ、ならこの時を有効に使わなくては！そう思ってミミロップはグラエナを誘って膝枕をしているのだ。その様子は勿論キュウコンとサーナイトには見られていて、2体はシノンの手伝いをしつつ時々体から黒いオーラを出していた。

「これは後で問題になりそうだ。今日は覚悟しておけよグラエナ」  
「ガーウ・・・」

カイトの言葉にグラエナはため息をつきつつ頷いた。そうこうしている間にもポフレコンテストは進んで行った。

「さあ、勝負は後半戦に突入しました。参加者の皆さんも気合が入っております！素晴らしいポフレが次々と出来上がっております！今回のコンテストはレベルが高い！おお!？」

解説していた司会者であったが、ある参加者のポフレを見て驚きの声を上げる。その参加者は5人とポケモン1体のチーム（正確にはポケモン2体だが）で参加していて、作り上げたポフレは黄色をベースに7種類の木の実それぞれの色をしたクリームが均等にデコレーションされていた。

「これは凄い！他の参加者とは一段上を行くと思われる色鮮やかなポフレです！」

「最後に星形のトッピングとカラフルな甘いシュガーを少しかけて・・・完成です。名付けてスターレインボーポフレです」

「あんた本当に凄いわね」

「ああ、手伝った俺達も驚きだぜ」

「まさに芸術的なお菓子じゃーん」

「ニヤ々今すぐ食べてみたいニヤー！」

「ソーナンス！」

完成したポフレを見てカイト達を含む観客は勿論、見ていた参加者全員がその完成度に驚いていた。もう皆さん分かるところだが、彼らの正体はロケット団である。

今回彼らはポフレコンテストの優勝賞品と会場に集まったポケモンを狙って、パティシエに変装して参加したのだ。

素人当然の彼らがなぜこれ程までに凄いポフレを作れたかと言うと、ロバルの腕によるものである。何故なら彼は料理作りが趣味とも言えるほど得意で、その腕は世界に通じるとも言えるくらい凄いものだった。当然作る料理はどれもとても美味しい。

その為現在ロケット団の食事係りを担当している。

そしてその腕はこのポフレでも発揮されて、この通り素晴らしいポフレを作り上げたのだ。

それから少し経って参加者全員の完成したポフレが会場のテーブルに並べられる。

「これからポフレコンテストの予選の通過者を発表致します。審査委員長には世界的なポフレマスターのモナークさんをお迎えしました」

観客が拍手を送る中、モナークは会場に上がってマイクを手に取り、ポフレの歴史について説明する。

「ポフレと言うスイーツには人間とポケモンが仲良くなってほしいと言う願いが込められています。素晴らしいポフレはポケモンと人をもっと深く結び付けてくれる事でしょう」

「成程、そんな願いがポフレを生み出したのか」

「良い願いですよね兄様。勉強になります」

ポフレの歴史を聞いたシノンはその内容をしっかりとメモを取っていく。するとここでユリーカが恒例とも言えるシルプレをモナークに行う。そして恥ずかしさのあまり顔を真っ赤にしたシトロンのエイパムアームによって持ち上げられ、そのままシトロンと共に会場

を飛び出して行った。

そんなやり取りを見ていたミルファイが突如席を立ち、サトシの隣にやって来て座る。

「お嫁さんね・・・？将来サトシのお嫁さんになってくれる人はいるの？」

「っ!?!／／／」

「え・・・？そんなのいる訳ないじゃん」

「ふくん・・・」

ミルファイは薄い笑みを浮かべながらセレナを見る。それに気がついたセレナは目を閉じてそっぽを向く。

「やれやれ・・・小悪魔な事をするな」

「セレナ、こんな事でくじけちゃいけないよ」

カイトはミルファイの行動に呆れ、シノンにはセレナにエールを送った。それから暫く経って落ち着いたシトロンとユリーカが会場に戻ると、予選通過者が発表された。

「只今より、決勝に進出した4組を発表します」

「たった4組か・・・」

「ドキドキするね。セレナにシノンさん」

「うん・・・」

「大丈夫。精一杯頑張ったし、自分を信じているわ」

「最初の方は・・・ミルファイさん！」

「当然ね」

自信満々かつ不敵な笑みを浮かべながらセレナを見た後、ミルファイは会場に上がる。

「続いて・・・チームR！」

次に発表されたのはロケット団で、5人と1体は余裕な表情で会場に上がる。

「さらに続いて・・・シノンさん！」

「やった！やりましたよ兄様！」

「コーン！」

「サナサーナ！」

「よくやったぞシノン。キュウゴン。サーナイト。次は優勝だな！」

「ガーウ！」

「ミミロー！」

3番目に呼ばれたのはシノンであった。彼女達はカイト達の激励を受けながら会場に上がって行く。ライバル達が予選通過を見たのを見てセレナは不安な表情になる。そしていよいよ最後の予選通過者が発表される。

「そして・・・セレナさん！」

「はっ！」

「よっしゃ！やったなセレナ！」

「ピカ！」

「フォッコ！」

「来たー！」

「良かったですねセレナ」

「予選通過おめでとうセレナ」

「うん・・・いいえ、まだこれからよ。次が本番なんだから！」

シノンに続くように会場に上がるセレナ。揃った4組にモナークは微笑んだ後、明日行われる決勝戦の内容について説明する。



「この4組には、明日までに新作のポフレを作ってもらいます。早速材料集めから始めてもらいましょう」

「決勝、スタート!!」

司会者の言葉と同時にロケット団はすぐさま会場を降りて飛び出して行く。それを見てシノンも急いで材料集めをしようとセレナに呼び掛ける。

「セレナ、私達も急いでお店に行って材料を集めましょう?」

だが当のセレナはまたミルファイと火花を散らしながら睨み合っていた。それを見たシノンは苦笑しつつ2人に呼び掛けた。

「2人とも、そんな事をしている場合じゃないわ。早くお店に行かないと材料が売り切れちゃうよ!」

「コーンコーン」

「サナサナ」

「!?そうね・・・こんな事をしても意味ないわ」

「ペロロン」

「決着は決勝戦で着けるわよ!」

「フオコ!」

そう言つて3人も会場から降りて、カイト達と一緒に材料集めに走った。しかし……。

「すみません。木の実か、果物がありますか?」

「すまないな。木の実も果物も全部売り切れなんだ」

「そんな・・・」

「此処にも無いなんて・・・」

街の何処の店に行つても木の実や果物は売り切れていた。ポフレ

作りに必要な材料が無ければ明日の新作ポフレが作れない、シノンとセレナは徐々に焦り出す。

「どうしましょう兄様？」

「うくん……これはもうお店で手に入れるのは諦めた方がいいかもしれないな」

「そんな!? それじゃ、どうしたら……?」

シノンの問いにカイトが店で手に入れるのは止めた方がいいと言うと、セレナがどうしたらいいか訊ねる。それをカイトが答えようとした時、こちらに向かってミルフィとペロリームが走って来た。

「まさか此処も無いの!?! 街中の店から木の実と果物が消えてる」

「ペロペロ〜」

「何だって!?!」

「嘘!?!」

「誰かが妨害しているんでしょうか……?」

「貴方じゃないでしょうね!?!」

「そんな事する訳ないでしょ!?!」

「2人とも落ち着いて! 今は喧嘩している状況じゃないでしょ!」

「ゴーン」

「シノンの言う通りだ。今俺達がやるべき事は材料集めだ。このまま材料が手に入らなければポフレを作る事なんて不可能だ。だからこそ森に行くぞ」

「ガウガウ!」

「森に……?」

「そうだ。森に行けば木の実があるかもしれないからな」

「それだ! 皆で森へ行って探そうぜ!」

「ピカピカ!」

「うん、森ならある! はっ……フン!」

同じセリフを言うとは思わなかったセレナとミルフィは、再び火花を散らして睨み合う。そんな2人を落ち着かせながらカイト達は森へ入った。

しかし森の中にある筈の木の実は一つもなく、ただ無残に切り倒された木々しかなかった。

「全然ないじゃん……」

「ピーカ……」

「どういう事？」

「兄様、これってもしかして？」

「ああ、どうやら誰かが妨害工作をしていると見ていいな。どの木も自然に折れたものじゃない。何かで切られた感じだ」

そう言っただけカイトは全員に切られたと思う枝を見せる。一体何者が？と皆が考えようとした時、セレナがフォッコを連れて奥の方に行ってしまった。

「焦っても良い事無いのに……」

「ミルフィには何か考えがあるのか？」

「私にはこのペロリームが付いている。ペロリームは甘い匂いを嗅ぎ分ける事ができるから木の実を見つけたりするの得意なの」

「ペロ〜」

「確かに凶鑑でも嗅覚が発達しているって書いてあったわね。それじゃ、木の実がまだ何処かに残っているか分かる？」

「ええ、お願い、見つけて」

「ペロペ〜ロ〜。ペロ〜」

ペロリームは自慢の嗅覚ですぐさま木の実がある方を指差す。

「あつちにまだ木の実があると云っているわ」

「そうか、ありがとうなミルフィ」

「べ、別に大した事じゃないわ。それに見つけてくれたのはペロリームだし……」

「そんな事ないさ。ミルフィの頼みがなかったらペロリームも見つけてくれなかっただろう？だからミルフィのおかげでもあるさ」

「そ、そう。どういたしまして……／＼／＼」

「（ええ、サトシの奴……まさかこんな所でも女を落とすのかよ）」

サトシにお礼を言われたミルフィは顔を赤く染めてモジモジとする。まさかこんな所でサトシの天然女落としが見られるとは！目の前の光景にカイトは頭を押さえたくなる。それはシノン達やピカチュウ達でさえ同じ気持ちだ。

そんな事が思われているとは知らないサトシは、すぐにセレナの後を追いつけようとするが、突如セレナの悲鳴が聞こえた。

急いで悲鳴がした方へ走って行くと、セレナとフォッコが綿飴のようなポケモンに囲まれていた。

「な、何なの!? いや、来ないで!」

「フォッコ!」

「!!! ペロ〜!!!」

恐怖心から思わず後退してしまうセレナ。しかし木の根に足が引っかかってしまい転んでしまう。その隙についてポケモン達は一斉に襲いかかった。

「フォッコ、引っ掻く!」

「フォッコ!」

セレナを助けようとフォッコは接近するが、2体のポケモンが同時に口から『糸を吐く』を放って動きを封じてしまう。

「コー!?!」

「フオッコ！うわあ〜!!」

絶体絶命と思われた時、ようやくカイト達が到着する。

「セレナ！待ってる今助ける！ピカチュウ、10万ボルト！」

「ピカ！ピ〜カ〜チュウ〜!!」

ピカチュウの放った『10万ボルト』はポケモン達に命中しセレナから離れる。そしてその余波によりフオッコの体に絡み付いていた糸が切れて自由の身になった。

「セレナ、大丈夫か!？」

「うん」

「フオッコ」

「何だ？このポケモン達は？」

「どこかペロリームに似ているな」

『ペロツパフ。綿飴ポケモン。ペロリームの進化前。甘い物が大好物。甘い物が不足すると機嫌が悪くなる』

やはりペロリームの進化前であったか。凶鑑で調べ終わった後もう一度ペロツパフ達を見る。彼らはとても怒っている状態だ。

「何でセレナを襲うんだ!？」

「油断したから舐められたんじゃない？」

「そ、そんな事ないわよ!」

「フオッコフオッコ!」

「セレナの言う通りだぜミルフィ。セレナも今までの旅で経験を積んできたから舐められる事はないさ」

「サトシ・・・／＼」

「(まさかの2度目は・・・コイツ意外と天才かもしれないな)」

元々サトシの事が好きなセレナは、サトシが自分に同意してくれた事に嬉しい気持ちになって顔を赤く染める。

2度目の光景にカイトはまた頭を押さえたいくなる。だけどカイトさん、貴方も結構サトシ同様に女落としをしていますよ。まあ、それは次回分かるから置いて・・・。

「ぺろろ〜！」

「何だと？」

ペロツパフの怒りの籠った声を聞いてカイトは彼らの怒っている理由を知る。

「いきなり何すんのよアンタ達！フオツコ、火炎放射！」

「フオツコ・・・！」

「待てセレナ！グラエナ、フオツコを止めろ」

「ガーウ！」

怒りながらフオツコに攻撃を命じるセレナ。だがそれをカイトとグラエナが止めた。

「な、何するの!？」

「取り合えず落ち着け。このペロツパフ達は皆甘い物が不足しているせいで機嫌が悪いだけだ」

「それなら甘い物をあげれば落ち着かせる事ができるな」

「それなら私の作ったポフレがあるわ。さあペロツパフ達、甘い物よ」

そう言つてシノンは鞆からバスケットを取り出して蓋を開ける。中には沢山のポフレが入っていた。実はこれ先程のコンテストの予選で作ったポフレである。いつもの癖で沢山作ってしまった、後で皆に上げようと残していたのだ。

「「スンスン・・・ペロ〜!!」」

ポフレの甘い匂いを嗅いだペロツパフ達は大きな鳴き声を上げて、一斉にシノンのバスケットに顔を突っ込む。それはまさに飢えた狼の様な食べ方だ。

「おお、凄まじい食べっぷりだ（汗）」

「本当ですね。バスケットに入っていたポフレがあつという間に食べ尽くされましたよ」

「でもああやって美味しく食べてくれると嬉しいわ」

「それにペロツパフ達も落ち着いたみたいだよ」

凄まじい食べ方にカイト達は少し引いてしまうが、シノンのポフレのおかげでペロツパフ達は落ち着き、幸せな表情を浮かべたまま森の奥へ帰って行った。

「凄いわシノン。ペロツパフ達を落ち着かせるなんて」

「いいえ、これも兄様のおかげよ。兄様が気付いてくれなかったどうなっていたか・・・」

ようやく落ち着ける状況になり、カイト達はホッと一息をつく。そんな中、セレナが神谷服に付いたベトベトを濡れたハンカチで拭きながら文句を言う。

「全くもう！きつとペロツパフ達がこの森の木の実を全部食べちゃったんだわ！」

「ペロ、ペロンペロン」

「ペロリームが違うって」

「何で分かるの?」

「ペロリームはペロツパフの進化形だからあの子達の気持ちがよく分かるのよ」

「では怒っていたのには何か理由があると言う事ですか？」

「それはきつと森の木の実が無くなった事と関係があるだろう。ミル  
ファイ、ペロリームにもう一度まだ木の实がある所を探しだしてくれと  
頼んでくれないか？そこに行けば原因が分かるかもしれない」

「ええ、ペロリーム、お願い！」

「ペロ、ペロン。ペロン」

再び匂いを嗅いだペロリームが森の奥を指差し、カイト達はその方  
向に向かって走り出した。途中急な崖を登って上に行くと、目の前  
には沢山のいろんな種類の実が生った木々がそこら中に生えていた。

「これは・・・！」

「ピカア〜！」

「野生の木の実がこんなにも一杯あるなんて・・・！」

「ペロ〜！」

「凄〜い！」

「デネネ〜！」

「これなら最高のポフレは作れる！」

「本当ね！いろんな種類があるから様々なポフレができそう」

「凄く美味いぜ！」

「ピカピカチュ〜！」

「早っ!？」

各自木の実を手にとって熟した実の良さを見る。どれもとても新  
鮮な木の実ばかりで、サトシとピカチュウがいつの間にか食べていた  
から味も問題ない。

「・・・って、呑気に食べている場合か！こんなにも木の实があると言  
う事はまだ此処に原因となる事が起きていないか、来ていないかのど  
ちらかだ。油断するな」



カイトが全員に呼び掛けたのと同時にペロリームが何かに気が付いた。その方向を見てみると奥から先程のペロツパフ達が何かから逃げる様にやって来た。

そして彼らの後に続く様に奥からハサミが伸びて来て、木を次々と切り倒した。

その正体はオクタンの様なメカに乗ったロケット団だった。

「お前達は!?!」

「お前達は!?!と言われたら!」

「黙っているのが常だけどき!」

「それでも答えて上げるが世の情け!」

「世界の破壊と混乱を防ぐため!」

「世界の平和と秩序を守るため!」

「愛と真実の悪と!」

「力と純情の悪を貫く!」

「クールでエクセレントであり!」

「ラブリーチャーミーな敵役!」

「ムサシ!」

「コジロウ!」

「ミズナ!」

「ロバル!」

「宇宙と銀河を駆けるロケット団の4人には!」

「ホワイトホールとブラックホール、2つの明日が待っているぜ!」

「にやーんてニヤ!」

「ソォーナンス!」

「イートマ!」

「エアァァ!」

お決まりの長い台詞を言うロケット団を見て、ミルフィが何者なのか訊ねてきたので分かりやすく説明し、奴らに何を企んでいるか訊ねる。

「そのメカを見れば分かるが、森の実が生えている木々を切りまくっていたのはお前達だな」

「その通りよダークボーイ。森の木の実だけでなく、街の木の実も全部戴いちちゃったのは私達!」

「更に此処の木の実は全部戴く!」

「そして更にアンタ達のポケモン達も全部戴いてしまうじゃん!」

「それが済んだらゆつくりポフレ作りに掛かせて頂きます」

「えっ?ポフレ・・・?」

ロバルが言った言葉が少し引つかかるが、今は木の実の方が大切だ。しかし森の木の実は兎も角、街の木の実や果物をよく全部手に入る事ができたなアイツら。金に余裕があるのか?

カイトがそう思っている間にもロケット団は次の行動に移っていった。

「行くのよニャース!」

「任せるニャ!ニャーが作った木の実吸い込むマシン。名付けてスイスイスイーツスイコム!」

「つ!なかなか良いネーミングだ」

「そのまんまじゃない」

「本当ですね」

「コーン」

「あれ?」

ロケット団のメカの名を聞いてシトロンは褒めるが、セレナとシノンはそのままだと呆れながらツツコム。

「ピカチュウ、まずはおミャ〜から吸い込んでやるニャ!」

ニャースがレバーを操作するとマシンの触手の1つがこちらに向

けられ、もの凄い吸引力でピカチュウを吸い込もうとする。

必死に耐えようとするピカチュウだが、遂に力負けしてマシンの方へ吸い込まれていく。サトシが急いで捕まえようとするが間に合いそうにない。

「グラエナ、行けるか？」

「ガウツ！ガー！」

それを見たカイトがグラエナに助けられるか聞く。グラエナは軽く頷いて吸い込む力も利用して猛スピードで走り出し、飛び上がってピカチュウを銜える。

そのままのスピードでマシンの方に向かい、体を上手く動かしてギリギリで吸引口から抜けてカイト達の元へ向かうとする。

「ちよつと！ピカチュウに逃げられちゃうじゃない」

「やはりあのグラエナは素晴らしい身体能力を持っていますな」

「それならもつとパワーを上げるんだ！」

「了解。フルパワーニャー！」

フルパワーになった事でマシンの吸引力が先程よりも強くなり、グラエナは耐える為に爪を地面に突き刺した為、その場から動けなくなってしまう。そして森の木の实や浮かんでいたペロツパフ達が吸い込まれてしまった。

「ペロツパフ！」

「「「ペロ〜!?」」」

「ニヤハハ、調子良いのニャ。スイスイスイーツスイコーム、ニャー！」  
「すいませんと言えません」

「ニャー！」

「「「スイスイスイーツ吸い込みマッスル！」」」

「ソーナンスー！」

「イートー！」

「エーアー！」

「チツ！アイツら調子に乗って……」

「このままじや皆吸い込まれてしまう！どうしたら……」

「シトロン、あのマシンの弱点はないの？」

「マシンの弱点……」

「お兄ちゃん！」

「スイスイスイーツスイコームは吸い込むマシン。吸い込む力は空気の流れ……そうだ！空気の流れを止めるんです！あの吸入口を塞いで！」

「分かった、任せろ！」

「待てサトシ！俺も行く！」

カイトとサトシはスイスイスイーツスイコームに向かって走り出す。それを見てロケット団は慌てる。

それを見てロケット団は慌てる。

「ジャリボーイとダークボーイを止めて！」

「おミヤも吸い込んでやるニャー！」

「吸えるもんなら吸ってみろー！」

「俺達はそう簡単に吸い込めないけどなー！」

ニャースはもう一つ触手を動かして2人を吸いこもうとする。だがカイト達は同時に飛んでスイスイスイーツスイコームの吸入口を塞いだ。吸入口が塞がれた事で吸引力が弱まっていく。

「ニャニニニ！」

「もつとパワーを上げるんです！」

「これ以上は無理ニャー！」

「だけどこのままだとマズイじゃーん！」

「くっ皆、必ず助けてやるからな！」

「あともう少しだけ耐えるんだ！」

「サトシ！」

「兄様！」

「サトシ、カイト、貴方達って……」

「サトシ！カイト！」

「サトシ！カイトさん！頑張れ!!」

「ピカピカ！」

「ガウガウ！」

「ココーン！」

するとマシンのエンジン部分が爆発した。どうやらパワーを上げ過ぎた為にオーバーヒートを起こしてようだ。吸引は止まったが、ペロツパフ達はずっと回転されていた事もあって身動きができない様子だ。

「シノン、マシンの爆発した所を攻撃するんだ！」

「はい兄様！キュウコン、火炎放射！サーナイト、ムーンフォース！ミミロツプ、冷凍ビーム！」

3体の同時攻撃を受けたマシンは赤かったボディが更に赤くなる程加熱して、触手が勝手に動き出すなど暴走を始めた。

「これはヤバイ状態なのニヤ！」

「このままじゃ、爆発するぞ！」

「嘘?!」

「何やってんの！何とかしてよ！」

「逆噴射だニヤ！」

ニヤースがさつきとは別のレバーを操作すると今度は噴射する機能に切り替わって、カイト達は吹っ飛ばされる。それに続くようにペロツパフ達も外へ放り出された。

「「ペロッパフ！」」

「サトシ！ペロッパフ達を受け止めるんだ」

「ああ、分かった」

吹っ飛ばされたと言うのにカイトとサトシは素早く立ち上がり、落ちてくるペロッパフ達を受け止めた。まさに超人とも言える2人だ。

「ペロッパフ、しつかりしろ」

「目を回しているが特に傷ついていない。これならすぐに起きるだろう」

カイトがそう言った瞬間、ペロッパフ達は全員目を覚まし、助けにくれた2人にじゃれつくように体を擦り付ける。

「よしよし皆良い子だ。それじゃ、反撃開始と行くか」

「ああ、ペロッパフも手伝ってくれ！アイツを攻撃するんだ！」

2人の指示に従ってペロッパフ達は一斉にロケット団に攻撃する。口から『糸を吐く』を放ってマシンをグルグル巻きにする。ロケット団もハサミで抵抗するが多勢に無勢で身動きが取れなくなった。

「良いぞペロッパフ！」

「ペロリム、私達もやるわよ！」

「ペロッ！」

「フオッコ！火炎放射！」

「ピカチュウ！10万ボルト！」

「グラエナ！悪の波動！」

「キュウコン！火炎放射！サーナイト！ムーンフォース！ミミロップ！冷凍ビーム！」

「ペロリム！エナジーボール！」

「フオツコオオオオー!!」  
「ピカチュー!!」  
「グウウガアアアアツ!」  
「コオオーン!!」  
「サーナ!!」  
「ミミロー!!」  
「ペーロー!」

7体の合体技が勢いよくマシンに命中する、マシンは大爆発を起し、ロケット団はその衝撃で空へ吹っ飛ばされる。

「何でこうなるの!?!」  
「甘く見てた〜」  
「甘い嫌いニャ……」  
「私のポフレ作りが……」  
「暫く甘い物はみたくないじゃーん……」  
「二二糖分取り過ぎ要注意!」  
「ソ〜ナンス」  
「イ〜ト〜」  
「エア〜」  
「「やな……」」  
「「カン……」」  
「「ジ〜!」」  
「ソォーナンス!!」

ロケット団はいつものように今回も空の彼方へ飛んで消えていった。

カイト達は戦いに勝った喜びの声を上げる。その後それぞれ木の実を手に持ちペロツパフ達と別れて、それぞれ明日の決勝戦に出すポフレを作り出した。

そして次の日、コンテスト会場に皆が作った自信作のポフレが並べられる。どのポフレも美味しそうな物ばかりであった。

ちなみにチームRは、時間になっても現れなかった事で失格となった。

「ポフレコンテスト、いよいよ優勝者の発表です！審査委員長のモナークさん、お願いします！」

モナークは並べられたポフレを一つずつ審査し、それぞれ評価を言っていく。そして全員の審査を終えて再びマイクの前に来た。

「発表致します。優勝は・・・シノンさんです！」

「ええええっ!?」

「優勝？私達が・・・っ！やったよ皆！」

「コーン！」

「サーナ！」

「ミロー！」

まさかのシノンの優勝にセレナとミルフィは啞然とする中、ポフレコンテストは幕を閉じた。シノンは優勝賞品を手にカイトの元へ向かい、彼からいっぱい褒められてとても嬉しい様子であった。

「おめでとうシノン。よく頑張ったぞ」

「ガール！」

「ありがとうございます！兄様!!」

「コーン！」

「サーナ！」

「シノンさんが優勝、やったねデデンネ！」

「ネネ」

「セレナとミルフィは残念でしたけど、今回はシノンの優勝を称えましょう！」

「ああ！」

「ピーカ」



カイト達がそう言っている中、セレナとミルフィは片付けが行われている会場の傍で、お互いに向き合って話をしていた。

「これからどうするの?」

「ポフレ作りの修行の旅を続けるわ」

「今度会う時は私、もっと上手くなってるから!」

「私も同じよ!」

握手をしながら笑顔になるセレナとミルフィ。どうやらお互いに良いライバルを見つけて、次のコンテストで再戦を約束するのであった。

「これで良かったのかもしれない」

「みたいだな」

「ガウガウ」

「そうですね」

「コンコン」

「シノンさんが優勝で丸く収まったかも」

「おおいセレナ!」

そろそろ出発する為、大声でセレナを呼ぶサトシ。それに気が付いたセレナはミルフィに別れを告げる。

「じゃあまた・・・」

「それから・・・」

「ん?」

「貴方がボーっとしてたら、サトシは私が貰うわよ(本当はもう1人いたけど、あれじゃ諦めるしかないよね)」

「えっ!?!／／／」

「覚悟しなさい」

「うう・・・／＼／＼」

顔を真つ赤にしながらセレナはサトシ達の元へ戻って行った。

思わぬライバルが出現したセレナであったが、彼女に負けない気持ちを持って旅を続ける。

カイト達のシャラシティのシャラジムを目指す旅はまだまだ続く。

## 恋のライバル出現！もう1人のグラエナ使い

シヤラジムがあるシヤラシテイに向かって旅をしているカイト達。彼らは今とある森の中で昼食の準備をしていた。毎回使用している折り畳み式のテーブルを組み立て、その上に作った料理を並べていく。

そして全員分の椅子を用意し、ポケモン達のポケモンフーズも用意していざ食べようと皆が席に座ろうとした時、カイトがある事に気が付いた。

「あつ！しまった水がない。すまない皆、俺はちよつと水を汲みに行ってくるから先に食べていてくれ。すぐに戻る！」

「分かりました兄様、気を付けて下さいね」

「大丈夫だ。グラエナ、お前もいいか？」

「ガウツ！」

水筒の中身が空っぽであった為、カイトはグラエナを連れて先程来た道の傍にあった川で水を汲みに行く。

「よし！補給完了。戻るぞグラエナ」

「ガウツ・・・ガツ？」

「うん？どうしたグラエナ？」

「ガウガウウツ！」

「何？悲鳴が聞こえただと・・・」

そう言われて耳を澄ませてみるとグラエナの言う通り、何処からか微かに悲鳴が聞こえてきた。

これは・・・グラエナの声!?

「ガウツ！」

「あつ！ま、待てグラエナ！」

突然走り出したグラエナを追ったカイトが辿り着いた場所は川岸で、そこには通常とは違って眼の色が青いグラエナがいた。そのグラエナの足にはトラップ用のトラバサミに挟まれ、さらに網がかかって身動きが取れない状態だった。

「キヤ、キヤウ〜」

「これはまさか!?! 兎に角グラエナ、すぐに助けるぞ!」

「ガウツ!」

カイトとグラエナは青眼のグラエナの元に駆け寄り、グラエナが網を噛み千切り、カイトが足のトラバサミを外しにかかる。かなり固く強い力で挟もうとするが、カイトが力一杯左右に開いた事でトラップが解除された。そして青眼のグラエナの足を優しく引き抜いた。

「ふう〜外れたか。大丈夫か?」

「キヤウウ・・・」

弱っているが青眼のグラエナの「大丈夫」と答えるのを聞いて少しホツとする。あと話してみてもこのグラエナがメスである事も分かった。だが今はそんな事より一刻も早く足の治療をしなければならぬが、荷物は全部皆の所に置いてある。

ならば考える手は1つ! 青眼のグラエナを抱き抱えて皆の元へ全力疾走するしかないと決めて、すぐに実行しようとした時に背後から怒鳴り声が響いた。

「おい小僧! てめえ、何勝手な事をしていやがる!!」

「うん? 誰だ!?!」

「ガウ!?!」

振り向くとそこには如何にもガラの悪い黒服の男が立っていた。

「お前・・・もしかしてポケモンバイヤーか？」

「ほお、よく知っているじゃねえか。俺の名はビル！悪タイプ専門の凄腕バイヤーだ。小僧、痛い目を見たくなければそのグラエナと・・・てめえのグラエナを大人しく俺様によこしな！」

「キヤ、キヤウウ・・・！」

ビルの言葉を聞いて青眼のグラエナは恐怖で体が震えだす。そんな彼女の前にカイトとグラエナが飛び出す。特にカイトのグラエナは牙を出し、鋭い眼でビルを睨み付けている。

「お前みたいなの奴に俺のグラエナとこのグラエナを渡す訳ないだろう！寧ろ痛い目を見るのはお前の方だ。此処で倒して捕まえて罪を償わせてやる！」

「グルルル!!」

「ケツ！小僧が生意気な事を抜かしているんじゃないやねえ！やっちゃまえハリテヤマ!!」

「ハリーテ!!」

ビルが出してきたポケモンは格闘タイプを持つ、突っ張りポケモンのハリテヤマだ。ハリテヤマは大きな手を何度も叩き合わせて大きな音を鳴らしながら威嚇する。

悪タイプ専門だけに相性の良い格闘タイプを持っていたか。まあ、薄々そう思っていたけどな。

それにグラエナも相手の威嚇を受けても全く怯んでないし、そろそろバトルを始めるか！

「グラエナ！悪の波動！」

「グウウガアアアッ！」

「はっ！そんな攻撃、効く訳がない」「ハリーリー!!」なっ!!」

悪タイプのグラエナの攻撃はハリテヤマには大して効かないと高

を括るビルだが『悪の波動』を受けて悲鳴を上げ、大きなダメージを食らって膝を付くハリテヤマを見て驚く。だがそれは仕方ない事だ。何しろ目の前にいるグラエナはダークマスター・カイトの1番の相棒だからだ。

「この程度か、凄腕バイヤーの実力も大した事ないな」

「・・・ふ、ふざけるな！舐めやがって・・・起きろハリテヤマ。突っ張りだ！」

「ハリ・・・ハリテヤー！」

ビルの指示に従ってハリテヤマは少しフラフラしつつも立ち上がり、両手を交互に出しながら『突っ張り』を繰り返す。しかしグラエナは素早い動きで攻撃を躲し、逆に『焼き尽くす』や『噛み砕く』でダメージを与えていく。

攻撃が当たらない上に、効果はいまひとつの技なのにダメージを受けていく光景にビルは苛立って顔を歪め、両手を握りしめてその場で何度も地団駄を踏む。

「何をやっていやがる！だったらこの技で終わらせてやる。破壊光線だ!!」

「ハ〜リ〜テヤー!!」

ハリテヤマは両手を前に構え、その間から勢いよく『破壊光線』を放つ。

「グラエナ、地面に氷のキバ！」

「グガアアア!!」

一直線に向かって来る『破壊光線』をグラエナは『氷のキバ』で作った壁で防ぐ。それを見たビルとハリテヤマは驚く。



逃げるビルに向かってグラエナが怒りを込めた『氷のキバ』を放つ。背後から感じる冷気に気が付いたビルが慌てて避けようとするが間に合わず、そのまま見事な氷のオブジェになった。

「ジュンサーが来るまでそのまま凍っている」

冷たい視線で睨みつけながらそう言った後、俺とグラエナは青眼のグラエナの元に駆け寄る。

「遅くなってごめんな。もう大丈夫だよ」

「エナ・・・」

さっきのバトルで結構時間が経ってしまったって怪我が悪化していないかと見てみる。

ふむ、青眼のグラエナの足はそれほど酷くなっていないようだ。寧ろこっちの方が問題かな。

「ガウガウツ？」

「キャウウ／＼／＼」

グラエナが近づいて「大丈夫か？」と訊ねれば、青眼のグラエナは顔を赤くして「大丈夫」と答える。これは間違いなく落としてしまったな。グラエナも悟っているのか苦笑いしている。とまあ余計な事はここまです。さっさと皆の所に行って治療しなければ！

「グラエナはこの子を背負って連れて行ってくれ。俺はハリテヤマを連れて行く」

「ガウツ！」

「ウウ？ガウウーウ」

「何故戦った相手を助けるかって？アイツはさっき主人に見捨てられ



ちまった。そんなポケモンを・・・見捨てる事なんてできないよ」

そう言っただけでカイトは腰からモンスターボールを取り出してボスゴドラを出す。中から状況を見ていたボスゴドラはすぐさまハリテヤマに近づき、フルパワーで持ち上げて背負い歩き始めた。勿論カイトも一緒に背負っていく。

野生に戻ったからモンスターボールに入れても良かったのだが、本人の意思も関係なくゲットするのは何となく嫌だった。

「そう言えばまだ自己紹介していなかったな。俺はカイト。そして相棒のグラエナとボスゴドラだ」

「ガーウツ！」

「ゴードラ！」

「ギャーウ！」

自己紹介するカイト達に青眼のグラエナも笑顔で自己紹介する。それにしてもこのグラエナは野生のグラエナかな？もしそうだなゲットしたいなく！とカイトは軽く考える。

だがこの青眼のグラエナの事でこの後大変な騒ぎになるとは、流石のカイトも予想できなかった。

そしてそんな彼らの様子を遠くから見つめていた者達がいた。

「相変わらず強いわね、ダークボーイは！」

「ああ！相性の悪いハリテヤマを苦も無く倒してしまったぜ！」

「全くです。だからこそ我々が日々如何なる時も隙を見逃さず、狙っている獲物の1体なんです！」

「うんうん、今日こそピカチュウ共々捕まえてやるニヤ！」

「ついでにあの青眼のグラエナとハリテヤマも一緒にゲットしてやるじゃーん」

「ソーナンス！」

「イート！」

「エーア！」

その正体は皆様ご存知のロケット団で、先程の戦いを見た事もあつて今日もグラエナとピカチュウの捕獲に燃えていた。だが今回に限ってはカイト達が助けた青眼のグラエナとハリテヤマも目標に加えた様だ。

「……ところでさあ、あの氷漬けのバイヤーはどうするじゃーん？」

ミズナが氷漬けのビルを指差しながら4人に訊ねる。するとロバルが恐ろしい事を言い出す。

「あんな者を助ける必要なんてありませんよ。けど彼がこれまで溜めた資金には興味ありますね。丁重に氷から解放してじっくりと聞いてみましょうか」

それを聞いた全員が邪悪な笑みを浮かべて、未だ氷漬け状態であるビルにゆっくりと近づいたのであった。

一方ランチタイムを楽しんでいたシノン達だったが、いくら経つても戻って来ないカイト達の事を心配して、食べるのを止めて彼らが戻って来るのを待っていた。

「遅い。いくらなんでも遅すぎる……」

「コーン……」

「そうだな」

「ピーカ」

「何かあったのでしょうか？」

「探しに行った方がいいかしら？」

「うん・・・」

「デネ〜」

全員が席から立ち上がり、カイト達を探しに行こうとした時、こちらに向かつて何かがやって来る気配に気が付いた。

振り向くとそこにはカイト達が歩いていた。

「兄様！一体今まで何を・・・!?!」

問いただそうとするシノンだったが、抱えられていた青眼のグラエナとハリテヤマを見て驚く。

そんな彼女達にカイトは先程起きた事を伝え、2体の怪我の手当てをした。

「これで大丈夫だ。すぐに良くなるよ」

「良かったなグラエ・・・あく〜カイトのグラエナとは別の・・・」

「青眼のグラエナで良いだろう?」

「そうそう!良かったな青眼のグラエナ」

「キャウツ!」

青眼のグラエナの方はそれほど酷い怪我ではなかった為、元気よく返事をする。だがハリテヤマの方はカイト達とバトルした為、手当てした後すぐに眠ってしまった。

その様子を見ながらカイトはジュンサーに連絡して、ポケモンバイヤーの事を伝える。ジュンサーはすぐさまこちらに向かうと返事をして連絡を切る。シノン達にも伝えてあとはのんびり待っただけだ。

「キャウキャウ／／／」

「ガウ?ガウガウ・・・」

「・・・コーン」

その間青眼のグラエナはカイトのグラエナに熱い視線を送りながら話し掛け続けていた。手当て後もずっと見つめていた上に顔がほんのり赤く染まっている。

そんな彼女をキュウコンは複雑な表情で見つめている。

「どうしたんでしょうかキュウコンは？」

「決まっているじゃないシトロン。キュウコンはグラエナがああ青眼のグラエナと仲良く話をしているのが気になって仕方がないのよ」「えっ？」

シトロンの疑問にシノンは当たり前のように答える。それを聞いて俺もそうだよな〜と思う。ああ青眼のグラエナの視線は誰から見ても熱が籠っていると分かる。まあ、2人だけ鈍感過ぎて未だ分かっていない者がいるけどな。

「コーン！」

「キャウ!? キャウキャウ・・・」

「ガ、ガウ・・・!」

するとどうとう我慢できなくなったキュウコンがグラエナの傍に座り込み、青眼のグラエナを睨み付ける。それを見た青眼のグラエナは初めは戸惑うが、すぐに彼女の想いを察して同じように睨み付ける。

この状況に間に挟まれているグラエナは苦笑する。さてこの状況をどうするかと悩み出した時、突然誰かの声が響いた。

「ランー! 何処にいるのランー?」

「!!」

「ランー! 良かった! 此処に居たのね。心配したんだから!」

「キャウ! キャウ!」

現れたのは黒い長髪に頬にある模様、露出度の高い服装が特徴の女性だった。見た感じ的にカイトと同じ年頃のようなようだ。

彼女は青眼のグラエナの元へ駆け寄り、優しく抱き締める。どうやら彼女が青眼のグラエナのトレーナーなんだろう。感動的な場面だと思うが、それよりも彼女の丸見えのお腹や大きな胸に目が行ってしまう。それはとても立派なモノで、シノンとセレナはつい自分の胸と比較してしまう。

「(な、何て大きさ・・・)」

「(私もあれくらい大きくなりたい・・・)」

2人が胸の大ききで落ち込んでいるとは知らずにシトロンが自己紹介しながら訊ねる。

「あの〜貴方がそのグラエナのトレーナーですか？」

「ええ、私の名はミラ。ポケモンパフォーマーで、相棒のランと一緒にカロスクイーンを指して旅をしていたんだけど、森の中で休憩していた時にランがいなくなっつと探していたの・・・」

「そうだったのですか。良かったなラン、無事に再会できて！」

「キャウ！」

「ねえ、ミラさん。パフォーマーやカロスクイーンって何ですか？」

ユリーカが小首を掲げながら初めて聞く単語について訊ねる。無論カイト達も初めてなので興味津々だ。

「あら、知らないの？ポケモンパフォーマーって言うのはカロス地方の各地で開かれているポケモンの魅力やトレーナーとポケモンとのパートナーシップを魅せて競うパフォーマン大会・トライポカロンに参加する人の事よ。競う内容は2つあって、1つ目はテーマ・パフォーマンス。ポフレ作りやトリミング等のおしゃれコンテストで、各大会ごとにテーマが違うのよ。2つ目はフリー・パフォーマン大会。」

これは全大会共通でポケモンの能力をフルに活かして、トレーナーと一緒にステージで演技をする。そして各大会で3回以上優勝するとマスタークラスに出場する事ができる。そこで優勝したポケモンとトレーナーにはさつき言った「カロスクイーン」の称号が得られるの。ちなみに現在のカロスクイーンはエルさんよ」

「エルって確かどこかで聞いた事あるな？」

「ピーカ？」

「忘れたのかサトシ？以前セレナが教えてくれたポケビジョンでベスト1を取った人だ」

「ガウツ！ガウガウ！」

ポケビジョンと聞いてサトシは思い出す。それにしてもポケモンパフォーマーにトライポカロンか、ポケモンコンテストとどこか似ているな。だがバトルが無いと言うのは少しつまらないぜ。

そう思っている間にもミラと話をして交流を深めていく。

「そのエルさんを越えるポケモンパフォーマーになって、多くの人達の心を癒せたり、元気一杯にさせるのが私の夢なの！」

「良い夢ですね。叶えられるよう応援します！」

「ありがとうカイト君」

「君はいりませんよ。同じ年齢なんですからカイトで良いです」

「そう？なら私もミラで良いわ。あと敬語も無しでね」

「ああ、分かった」

同じグラエナ使いだからか、すぐに仲良くなるカイトとミラ。さらに相棒のグラエナとラン。そんな彼らを見てシノンには内心焦り出す。

「(どうしよう・・・兄様があんな穏やかな表情で話をしている。ミラさんは兄様と同じ年齢な上にあんな良い体をしているし！もし兄様が彼女の事を好きになって、愛する関係になったら・・・ダメダメ！兄様は誰にも渡さない！もし私から奪うと言うなら・・・容赦し

ないんだから!!」

ある意味恐ろしい事をシノンが決意した時、突如空からいくつもの網が振ってきた。

網はグラエナ、ピカチュウ、キュウコン、ランの元に迫り、咄嗟に回避したグラエナを除く3体が捕まってしまった。そして網の先にいたのは勿論ロケット団だ。

「な、何なのこれは!？」

「何なのこれは!?!と言われたら!」

「黙っているのが常だけどき!」

「それでも答えて上げるが世の情け!」

「世界の破壊と混乱を防ぐため!」

「世界の平和と秩序を守るため!」

「愛と真実の悪と!」

「力と純情の悪を貫く!」

「クールでエクセレントであり!」

「ラブリーチャーミーな敵役!」

「ムサシ!」

「ゴジロウ!」

「ミズナ!」

「ロバル!」

「宇宙と銀河を駆けるロケット団の4人には!」

「ホワイトホールとブラックホール、2つの明日が待っているぜ!」

「にやーんてニャー!」

「ソオーナンス!」

「イートマ!」

「エアアー!」

毎度お馴染みであってお決まりの長い台詞を言うロケット団。そんな彼らを見てミラが何者なのか訊ねてきたので分かりやすく説明

する。そして説明が終わったのと同時にサトシがロケット団に向けて叫ぶ。

「ロケット団！ピカチュウ達を返せ!!」

「あら〜それは無理よジャリボーイ。折角手に入れたモノをみすみす返す人なんていないわよ!」

「その通り!念願のピカチュウ&グラエナを遂に捕まえられ・・・って、1匹足りない!?!」

「私達が求めているあのグラエナがないではないですか!?!」

「あつ!あそこにいるじゃん!」

「ニャース!早くもう一度網を出すのよ!!」

「そうは言っても・・・網は4枚しか用意してにやいニャ。それに発射するにも準備が必要だし、今すぐは無理ニャ!」

「ソーナンス!」

「ったくしょうがねえな。行け!マーイーカ!」

「行くのよ!バケツチャ!」

「行くじゃん!シシコ!」

「行きなさい!カメテテ!」

捕まえ損ねたグラエナを今度こそ捕まえようとロケット団はそれぞれ手持ちポケモン4体を出す。

「行くぞグラエナ!キュウコン達を助けるぞ」

「ガウツ!」

「俺達も協力するぜ!行けケロマツ!」

「ケロ!」

「私も!出て来てサーナイト!」

「サーナ!」

対してカイト達はグラエナ、ケロマツ、サーナイトの3体を出してピカチュウ達を助ける為にバトルする。



「マリーカ、サイケ光線！」

「バケツチャ、シャドーボール！」

「カメテテ、ロックブラスト！」

「シシコ、火炎放射！」

「グラエナ、悪の波動！」

「ケロマツ、水の波動！」

「サーナイト、サイコキネシス！」

それぞれのポケモン達が放った技が両者の間でぶつかり爆発が起きる。それにより黒煙が辺りを包んで全員が動きを止めるが、カイトとグラエナのコンビはその隙について素早く動く。

「グラエナ、上空一面に焼き尽くすだ！」

「ガウウツ!!」

グラエナが通常よりも多く『焼き尽くす』を放ち、上空にいたマリーカとバケツチャに命中させる。マリーカはなんとか耐える事ができたが、バケツチャは戦闘不能になった。元々バケツチャが草タイプだからと言う理由もあるが、大切な者を絶対に助けると言うグラエナの想いが籠った技でもあったから一瞬で戦闘不能になってしまったのだ。

「ああ！バケツチャ!？」

「チャチャ・・・」

「よくもやったな！マリーカ、体当たり！」

「シシコは頭突きじゃーん！」

バケツチャの仇を打たんと言うばかりにマリーカとシシコが勢いよく『体当たり』と『頭突き』を仕掛ける。しかしグラエナは素早い動きで2体の攻撃を躲す。

それならばもう一度攻撃しようと2体は向きを変えるが……。

「ケロマツ、シシコに泡だ！」

「サーナイト、マリーカにムーンフォース！」

グラエナに気を捉え過ぎていた為にマリーカとシシコは後ろにいたケロマツとサーナイトに気が付かず『泡』と『ムーンフォース』を食らう。そして直撃だったので2体とも戦闘不能になってしまった。これで残るはカメテテだけだ。

「くっ！ならばこの技で全員倒してあげます。カメテテ、最大パワーで水鉄砲！」

「テエテ！」

「サーナイト、サイコキネシスで水鉄砲を跳ね返すのよ！」

「サーナ！」

最後まで諦めない姿勢を見せながらロバルはカメテテに指示を出す。カメテテは言われた通り最大パワーの『水鉄砲』を放つ。しかしサーナイトが『サイコキネシス』で『水鉄砲』を操って跳ね返し、そのままカメテテや先に戦闘不能になった3体を巻き込みながらピカチュウ達が捕まっている網を破壊した。

解放されたピカチュウ達は上手く地面に着地して、サトシ達の元へ駆け寄る。

「ピカチュウ！」

「ピカピ！」

「キュウコン！怪我はない？」

「コーン！」

「ラン！貴方も大丈夫だった？」

「キャウ！」

「それじゃ皆、最後の仕上げと行くか！」

「ガウッ！」

ピカチュウ達が無事であることを確認した後、カイトの声を聞いて全員が一行に並ぶ。それを見てロケット団は青ざめ、冷や汗を掻きながらその場から逃げようとするが既に遅かった。

「ピカチュウ、10万ボルト！ケロマツ、水の波動！」

「グラエナ、悪の波動！」

「ラン、貴方も悪の波動！」

「キュウコン、火炎放射！サーナイト、ムーンフォース！」

「ピカチュー！！」

「ケーロ！！」

「グウウガアアアッ！」

「ガーウウウウ！！」

「コオオーン！！」

「サーナ！！」

放たれたグラエナ達の技は合体して勢いよくロケット団の気球に命中する。気球はドガン！と大爆発を起こしてロケット団はその衝撃で空へ吹っ飛ばされる。

「あーん！最初は上手くいったのに……！」

「今回も失敗に終わったか……」

「でもあのポケモンバイヤーから隠し金の場所は聞き出せたニヤ」

「また活動資金を得られて嬉しい事です」

「でも今の状況はいつものアレじゃーん……」

「……「やな感じー！！」「……」

「ソーナンス！」

お決まりの台詞を言いながらロケット団はいつものように空の彼方へ飛んで消えていった。

バトルが終了してホツとしながら全員休憩を取る。

それから数分後、ジュンサー達がやって来てポケモンバイヤー・ピルを逮捕した。まだ氷漬け状態かと思っていたが、彼は氷漬けから抜け出せていたが何故かボロボロになっていたとの事だ。その事に疑問を感じながらジュンサー達が連行して行くのを見送り、ようやく一息付けながらミラに声を掛ける。

「ミラさん、今日はとんだ災難に遭ってしまいましたね」

「いいのよサトシ君。困った時はお互い様なんだから気にしてないわ」

「それで、ミラはこれからどうするんだ？」

「そうね、一旦荷物を取りに戻って近くのポケモンセンターに泊まろうかな」

「なら俺達も一緒に良いか？」

「えっ？」

「兄様!？」

「どうせ俺達もポケモンセンターに行つて泊まろうと思つていたし。皆はどうだ？」

「俺は良いぜ！」

「ピーカ！」

「私も良いわ。一緒に行きましょう！」

「僕も構いません」

「ユリーカも！」

「デネネ！」

「わ、私も良いですよ・・・ハハ」

「コ、コーン（汗）」

「そうね・・・ランももつと一緒にいたいみたいだし、私からもお願いするわ！」

「キャウ！」

「決まりだな。では皆、ポケモンセンターに行くとするか！」

全員(?)の了承を得たのを確認した後、カイト達はポケモンセンターに向かうのであった。

そしてその夜、ミラが一人で寛いでいた時にシノンが彼女の元へ近寄った。

「あの、ミラさん……」

「うん?何シノンちゃん」

「あの、その……ミラさんに1つ確認しておきたい事があって……」

「カイトの事かしら?」

「ッ!」

自分の聞きたい事が悟られていた事実にはシノンは顔を真っ赤に染め、その場で慌てふためきそうになるが懸命に耐えて静かに頷く。

「今のシノンちゃんの反応を見て察したから迷わず言うわね。私は……カイトの事が気になっているわ。彼の容姿やポケモンに対する思い等を聞いたり触れたりしてね」

「そ、そうですか……」

ミラの本心を聞いてシノンは胸の奥がチクツと痛くなる。けど彼女は臆さずに真正面からミラを見つめる。

「私もミラさんと同じ兄様が好きです。だから……絶対に負けません」  
「……私も負けないわ」

2人は互いの気持ちを言いながら宣言する。けどその後すぐに笑顔になって笑い出し、いろいろと話をしてから部屋に戻って眠りにつくのであった。

恋のライバルが出現したシノンだったが、彼女は今まで以上に気持ちを高めて旅を続ける。カイト達のシヤラシテイのシヤラジムを目指す旅はまだまだ続く。

## カロスチャンピオン・カルネ登場！

シヤラジムがあるシヤラシティに向かって旅をしているカイト達。その途中に立ち寄った大きな街で、彼らは電光掲示板に表示されている「ある情報」を見て足を止めた。それはこの街で行われるエキシビジョンマッチ開催のお知らせだった。対戦する相手は昨年この街のポケモンバトルチャンピオンである強豪トレーナーと、カロス地方のチャンピオン・カルネとの事だ。

「まさかカルネさんがこの街に居るとはな」

「凄い偶然ですね兄様」

「カイトとシノンはこの人の事を知っているのか？」

「ああ、カルネさんはシロ姉の大親友で、長期休暇の際に互いに休みが重なったりする時は会って話し合う程なんだ。その時に俺達も一緒に会った事があるのさ」

「その際にいろいろと相談にも乗ってくれたり、バトルの相手をしてくれたりといういろいろお世話になった事があるのよ。ちなみにカルネさんはチャンピオンである以外に有名な大女優でもあるの。ほら、アレを見て」

サトシに軽く説明しながらシノンが近くの建物を指差す。そこには彼女が主演の映画「マイスイーツレディ」のポスターが大きく飾られていた。

「あの大ヒット中の映画の他にもいろいろな作品に出演しているのよ」

「そうなの！そしてカルネさんはエレガントで大人の余裕たっぷり、全てにおいて完璧な女性と呼ばれているの。ああ、私もカルネさんの様な素敵な女性になりたい／＼／」

「うんうん！ユリーカもなりたい／＼！」

シノンの説明にセレナが付け加える様に言った後、彼女は頬を赤く染めて手を合わせながらポスターを見つめる。その表情から察する事ができるが、彼女に対してかなり心酔していた。さらにシトロンとユリーカも同じようだ。

「そうなのか・・・よし！決めた」

「どうせカルネさんにバトルを申し込む気だろ？」

「あれ？何で分かったんだ？」

「ピーカ？」

「お前の考えなんてすぐに分かるよ」

「ガウガウツ」

これまで一緒に旅をしてきた者ならサトシの単純な考えなんてすぐに分かる。そう言うかのようにカイトはため息をつきながら頭を振るう。しかしサトシはそんな事は気にせず話を続ける。

「チャンピオンのカルネさんとバトルしたいと言うのは、ポケモントレナーなら当然だろ？だからカルネさんに会ってお願いしてみるんだ！もしもの時はカイトとシノンに頼めばいいしよ」

「おいおい、いくら知り合いだからと言って俺達が頼めば大丈夫と思う「兎に角行って会いに行こうぜ！」のは止めろ・・・っておい！」

話を最後まで聞かずにサトシはエキシビジョンマッチが開催されるスタジアムに向かって走り出した。ポケモンやバトルの事になるといつもこうだなく、と内心またため息を吐きながらカイトも走り出す。それに少し遅れながらシノン達も後を追いつけた。

だが途中カイトが突然足を止めて、ポケモンセンターへ寄りたいたから先に行ってくれと言って皆と別れた。そしてポケモンセンターに辿り着くと育て屋の祖父母の元に連絡して、手持ちのハブネークとあるポケモンを交換してもらってから再びスタジアムに向かうが、その途中にあったスイーツ店を見てまたまた足を止める。

タイミング良くその店が開店した直後で他のお客さんもあまりいなかった事もあって、カイトはその店に入ってある物を予約してから今度こそスタジアムに向かった。

それから数分後、スタジアムに到着したカイトは待っていてくれたいたシノン達に遅くなった事を詫びながら合流して、会場内に入り込んでカルネが待機している部屋を訊ねに行っただが・・・。

「押さないで下さーい!!」

既に多くの報道陣が部屋の前に集まっていて、部屋には近づけない状況だった。そして扉の前でマネージャーと思われる眼鏡をかけた小柄な女性が懸命に声を出して報道陣に説明する。

「えー！本日は一切の取材及び面会をお断りしていまーす!」

それを聞いて報道陣から落胆の声漏れる。そしてサトシ達も同様に残念な表情になる。

「この様子じゃ無理な感じですね」

「サトシ、どうする?」

「うくん・・・カイト、シノン、なんとかできないか?」

「いくらなんでも難しいと思うよサトシ(汗)」

「まあ、一応聞いてみるけどよ・・・」

そう言つてカイトが部屋に近づこうとした時、突如横から制止するかのように誰かの手が伸びて来た。伸びてきた方向を見ると隣の部屋の僅かに開いた扉の隙間からプラターヌ博士が覗いていた。

「やあカイト君、久しぶりだね」

「プラターヌ博士!?!」



予想外の人物がいた事に驚きつつもカイト達は彼に招かれて部屋の中に入り、設置されていた椅子に座る。そしてセレナが皆の代表として質問した。

「どうして博士が此処に？」

「僕が研究所を離れる理由は1つしかないだろ？」

それを聞いたカイトは瞬時に内容を理解した。

「もしかして・・・メガシンカの研究の為ですか？」

「流石カイト君は鋭いね。今回はカルネさんが持つサーナイトのメガシンカを調べる為に来たんだ」

「サーナイト・・・カルネさんの1番のパートナーがメガシンカするのか・・・」

確か昔カルネさんにポケモンを見せてもらった際に1番最初に出してくれたのもサーナイトだった。あの時はただ綺麗なポケモンとしか思わなかったが、今思うとシロ姉のガブリアス同様にかなり強いオーラを出していたな。そんなサーナイトがメガシンカする事ができるのか。

「これは是非とも見てみたいものだ。シノンはどう思う？」

「私も同じ気持ちです。絶対にサーナイトのメガシンカを見てみたいです！勿論この子も一緒に」

そう言ってシノンは自分のサーナイトが入っているモンスターボールを手取る。サーナイトはいつになく興奮しているのか、ボールをカタカタと揺らしている。

その様子を見てカイトが微笑んだ後、未だ話し続けられているサトシ達の会話へ意識を戻した。

「博士はもうカルネさんに会ったんですか!？」

「ああ、僕はもう会ったよ。今は隣の部屋でメイク中さ」

「えくくく!?!あの扉の向こうにカルネさんが!？」

「素敵素敵素敵ー!!」

「こんな幸運滅多にありませんよ!」

憧れのカルネが隣の部屋にいるのを聞いて、ファンであるセレナ・ユリーカ・シトロンの3人は激しくテンションを上げる。

それとは別にてテンションを上げたサトシはバトルを申し込もうと席を立ち、扉に近づこうとする。だがそれをカイトが制した。

「待てよサトシ。今行くのはダメだ。もう少し大人しく待っている」

「えっ、だけど・・・」

「バトルを申し込みたい気持ちは分かるけど、カルネさんの事も考えないとダメよ。大丈夫。私達も一緒をお願いしてあげるから」

2人に言われてサトシも渋々席に戻ろうとした時、扉がゆっくりと開いてそこから1人の女性が出て来た。白い衣装を着て、少し薄めの黒髪を綺麗に結んで、人形のような白い肌と綺麗な顔立ちが特徴のカルネであった。

「博士、お待ちせ・・・あら?他にもお客さんがいるのね」

甘美な香りを漂わせつつ、カルネは温かい目でサトシ達を順番に見つめながら優しく言う。彼女に会えただけでなく、見つめられた事もあってセレナ達は心の底から歓喜に打ち震えた。

「本物のカルネさんだ!!」

「綺麗」

「フッフ、ありがとう。あら?」

セレナとユリーカに褒められたカルネは、微笑みながらお礼を言う。そして再び視線を動かした時、後ろに立っていたカイトとシノンに気がつく。

「カイト君！シノンちゃん！久しぶりね。元気にしてた？」

「お久しぶりですカルネさん」

「はい！私と兄様、そしてポケモン達全員も元気です」

「そう、昨日シロナから久しぶりに電話があつてね。2人が今カロスにいるから会ったら自分が一緒にいられない分、いろいろ世話してあげてねって言われたの」

「やれやれ・・・シロ姉らしいな」

「本当ですね」

カルネの話聞いてカイトとシノンはつい苦笑してしまう。

普段チャンピオンとして威厳ある姿を見せているシロナだが、2人の事になると少々・・・否、かなり過保護になるのだ。その理由は知つての通りシノンが実の妹であり、そんな彼女との間で抱えていた悩みと問題をカイトが解決してくれたからだ。それ故にシロナはシノン同様にカイトの事が好きでたまらないのは余談である。

その後3人が話をして、区切りが良い時を見計らってプラターヌ博士が声を掛けた。

「カルネさん、さっきのお話の件ですが・・・考えて頂きましたか？」  
「キーストーンを預からせてほしいとの事ですが・・・お断りさせていただきますい。勿論、他にできる限りの協力は致します。しかし、このキーストーンは私とサーナイトの絆そのものです。例え一時でも手放す訳には・・・」

話をしながらカルネはキーストーンと言う胸元で綺麗に光って、中に不思議な模様が見える小さな石のペンダントを優しく包むように握る。キーストーン・・・それがメガシンカに必要な物であろうかと

カイトが考えている間、プラターヌ博士は懸命に説得する。  
だがそれを横から誰かが遮った。

「無理です！無理です！カルネさんはこの後もスケジュールがびっしりです。ミアレシティに立ち寄る予定は今のところありません!!」

現れたのは先程まで報道陣の相手をしていたマネージャーだった。彼女は怒った顔でプラターヌ博士を睨み、そのまま詰め寄りながら言う。

「まあまあミナミちゃん、相変わらず怒った顔もキュート・・・」

そんな彼女にプラターヌ博士は何故か口説こうとするが、彼女は持っていた分厚いスケジュール帳で彼の顔を叩き潰しながら断った。そして表情を一変して優しい顔になりながらカルネの元に近寄った。

「カルネさん、スタンバイお願いします」

「ええ、良かったら皆さん、バトルを見て行って下さい」

そう言ってカルネは部屋を後にした。

彼女が去ってから少し経った後全員がスタジアムに移動して席に座り、カルネと対戦相手のトレーナーの自己紹介が行われているところを観戦していた時に、サトシが隣にいるプラターヌ博士に質問した。

「博士、さっき言っていたキーストーンって何なんですか？」

「キーストーンは、メガシンカにとって重要なアイテムなんだ。我々はトレーナーが持つ石をキーストーンと呼び、ポケモンが持つ石をメガストーンと呼んでいる」

「トレーナーが持つ石がキーストーン、ポケモンが持つ石がメガストーン・・・と」

プラターヌ博士の説明を聞きながらシノンは熱心にメモを取る。その頃フィールドでは、カルネがパートナーのサーナイトを繰り出した。華麗に姿を見せるサーナイトの胸には、カルネと同じペンダントを付けていた。

「サーナイトもペンダントを付けているわ!」

「本当だ!」

「あれがメガストーンですか?」

「そうだよ。呼び方はメガシンカするポケモンによってそれぞれ違うんだけど、サーナイトのはサーナイトナイトと呼んでいるんだ」

「サーナイトナイト・・・それではアレはサーナイトだけしか使えない物なんですね」

シノンの質問にプラターヌ博士は大きく頷く。次にシトロンが2つアイテムを揃えばメガシンカする事ができるのかと質問すると、プラターヌ博士は首を横に振るう。

「揃えるだけではダメなんだ。トレーナーとポケモンの心が1つにならないとメガシンカはできないんだ」

「心が1つに・・・?」

「言い換えれば、それだけ強い絆が必要と言う訳だ」

「そっか。だからカルネさんはキーストーンを絆そのものって言ったんだ」

先程カルネが言った言葉の意味をサトシはようやく理解した。ちなみにその話を変装してやって来ていたロケット団がこっそり盗み聞きしていたのは余談だ。

「シノン、そろそろバトルが始まるからサーナイトのボールを出した方がいいんじゃないか?」

「そうですね兄様、生憎席が空いていなかったからボールからしか見せられないけど、貴方も一緒に見ましよう」

そうやってシノン己のサーナイトが入ったモンスターボールを手に持って、見やすい所まで持ち上げる。するとサーナイトはお礼を言うかのようにカタツと動かすのであった。

そうしている間、相手トレーナーは災いポケモンのアブソルを出した。あれはなかなか育てられているなどカイトが思っていると準備が整い、いよいよバトルが始まるのを感じて観客達は静かに見守る。そしてプラターヌ博士は記録する為に持って来たハンディカムを構える。

そして審判からエキシビジョンマッチの開始が宣言された。

しかしバトルはあつと言う間に決着が付いた。

アブソルの『噛みつく』や『サイコカッター』等の攻撃をサーナイトはアイコンタクトでカルネと意思疎通しながら全て避け、効果は今ひとつの『シャドーボール』で大ダメージを与えて、そのまま効果抜群の『ムーンフォース』で忽ち戦闘不能にしてしまった。

圧倒的な強さと華麗さを魅せてくれたカルネとサーナイトのバトルに、全ての観客から激しい歓声が沸き上がった。

そんな中で2人だけ違う事を考えている者がいた。1人はサトシで、カルネの圧倒的なレベルの高さに驚いたが、相手が強ければ強い程燃える性質の為、何としてでもバトルを申し込もうと決心した。

もう1人はカイトで、久しぶりに見た彼女のバトルにより内心潜めていた。強者へ挑戦する。と言う気持ちをさらに高まらせていた。

「あんな凄いバトルを見せられたらもう我慢できないぜ！絶対にバト

ルを申し込むぞ！」

「そうだな。俺も久しぶりに強い人に挑戦したくなった。一緒に頼みに行こうぜサトシ」

「本当か!? 勿論良いぜ！」

「僕ももう一度、頼んでみるか」

こうしてカイトとサトシはバトルを申し込む為に、プラターヌ博士はサーナイトのメガシンカした姿を撮る為に再びカルネが待機している部屋の前までやって来たのだが、そこでは最初の時に見た光景と同じように多くの報道陣が集まっていた。

「申し訳ございませんが、カルネさんは既に映画の撮影の為に移動されました」

そして扉の前にいた警備員の説明を聞いて誰もがガツカリする。

無論カイト達も同様で、残念な気持ちを抑えながらこの後の予定を話し合う。

「この後どうしますか？」

「そうね・・・あっ！此処からそう遠くない所にとつても美味しいガトーシヨコラがあるの。此処に行こうよ！」

「お、この店は・・・」

横からセレナの電子機器を覗いたカイトがつい声を出す。なぜならその店が此処へ来る前に立ち寄って、今提案しているガトーシヨコラを予約したスイーツ店だったからだ。その事を全員に伝えようとするカイトだが、サトシ達は早く食べに行こうと言って走り出してしまった。それを見たカイトはやれやれと呆れ、プラターヌ博士に今回のお礼を言ってから後を追いつけた。

それから少し経って目的のスイーツ店に辿り着くと、そこには多くの人がガトーシヨコラを手に入れようと長蛇の列を作っている光景

が目映った。

「嘘、こつちも人だから・・・」

「うわ・・・」

「今日に行く所行く所どこも混んでいますね」

「ああ・・・」

「本当ね・・・」

「でも負けてられない！突撃よ！」

「イエッサー！」

「お、おいセレナ！ユリーカ！行っちゃったか・・・」

勇ましく行列に加わっていくセレナとユリーカ。そんな2人を見てカイトはまた言いそびれたとため息を吐きつつ、シノン達に席を確保しておいてくれと言って自分も列に並んだ。

それから数十分後、先に店から出て来たのはセレナ達で、持って来たトレイの上には濃厚なチョコレートに粉砂糖をかけてあるガトーショコラが1個あった。

「くたびれた」

「でも、なんとかゲットする事ができたわ」

「お疲れ様。・・・あれ？」

疲れた2人を労うシノンだが、目当てのガトーショコラが1つしかないのに気がついた。

また、カイトの姿がなかったのでセレナに訊ねようとしたが、それよりも先にサトシが手を伸ばそうとした。

「おっ！待ってました。それじゃあ頂きm 「ペシッ！」 ツイテテ・・・」

「ピーカ？」

「コーン？」



しかしそれをセレナが叩き落とすし、ピカチュウとキュウコンがどうしたの?と言うように鳴く。

「何考えてるの!6人で分けて食べるの!」

「ええっ!?!この1個を!」

「もしかして・・・セレナ達で丁度売り切れてしまった感じ?」

「そう!だからこれを均等に分けないといけないのよ!」

仁王立ちで言うセレナを宥めつつ、シノンが今度こそ訊ねた。

「ねえセレナ、兄様はどうしたの?」

「えっ?カイトも一緒に並んだの?」

「うん。セレナ達の後を追うように・・・」

「でも私達見てないよ。ね〜」

「ネ〜ネ」

2人で丁度売り切れてしまったから戻って来ても良い筈なのに、とシノンが思っていた時にカイトが戻って来た。その手には大きな箱があった。

「兄様、随分と遅かったですね。それとその箱は?」

「ああ、目的の品だよ」

そう言っただけでカイトがテーブルの上に箱を置いて中を開けると、そこには人数分のガトーショコラが入っていた。

「ええ!?!なんで持っているの!?!」

「スタジアムに向かう前に見つけたスイーツ店が此処だったんだ。丁度開店した直後だったから美味しいと評判のガトーショコラを予約しておいたのさ」

「なら先に言ってくれても良かったんじゃない?」

「ピーカチュ」

「言う前に皆が走り出してしまったんだよ……まあいい、さつさと食べようぜ。余った1個は後で考えればいい」

「ガウガウ」

そう言つてカイトがガトーシヨコラを皿に移し、全員が席に座つていざ食べようとした時、後ろから女性の落胆した声が響いた。

振り返つてみると店の入り口の前で店員と黒の帽子に黒のコートを着て、大きな黒いサングラスをした女性がいた。

「何と言う悲劇……この店のガトーシヨコラが食べられると思つて遠路遙々やつて来たのに……ああ、この世の終わりだわ」

どうやら女性はカイト達と同じガトーシヨコラを食べに来たが、売り切れてしまったと聞いてもの凄く落胆してしまつたようだ。

そのあまりの様子にカイト達は放つておく事ができず、声を掛けた。

「あの、1つ余っているので良ければあげますけど?」

「本当に!？」

「ええ」

まさかくれる人がいるとは思つていなかった女性は驚きつつもとても喜び、明るい雰囲気を漂わせながら優雅な足取りで近づく。その時グラエナが女性の匂いを嗅いでその正体をカイトに言った。

「ガウガウ!」

「どうしたグラエナ?」

「ガウガ! ガウガ!」

「ほお、そうだったのか」

グラエナによつてカイトが女性の正体を知つたのと同時に女性も

カイト達に気がついた。

「あら？カイト君、シノンちゃん、それに貴方達も・・・」

「えっ？どうして私や兄様の名前を・・・？」

「それはなシノン。この人がカルネさんだからだよ」

「えっ!?カルネさん!？」

目の前にいる女性がカルネだと言うカイトにシノン達が疑問に思っていると、女性は小さく笑みを浮かべながらサングラスを下にずらして顔を見せた。

「私よ」

「「「ええええっ!?カルネさん!!」「」」」

「ピーカア!？」

「ネーネエ!？」

「コーオン!？」

本当にカルネであった事にシノン達は全員席を立って一斉に名前を言う。それをカイトとカルネが落ち着かせて、皆で美味しくガトーシヨコラを食べた。

その後カルネとスイーツの事や女優の事、キーストーンの事などいろいろ話をして、ユリーカのシルププレでセレナ達が離れたのを見計らってカイトが話し掛けた。

「カルネさん、今よろしいでしょうか？」

「あら？どうしたのカイト君？」

「実は久しぶりにカルネさんとポケモンバトルをしたくなって・・・もしお時間があるようでしたらバトルをお願いしたいのですが・・・」  
「いいわ。実を言うと私も久しぶりにカイト君とバトルをしたいって気持ちがあつたの。お相手してくれるかしら？」

「はい！宜しくお願い致します！あと俺の他にもう1人バトルをしていただけませんか？とても面白くて良い奴ですから」

「もう1人？」

「サトシ」

カイトが後ろで控えていたサトシに声を掛けると、彼はとても喜んだ表情になってカイトにお礼を言った後カルネにバトルを申し込んだ。

「俺、マサラタウンのサトシと言います！ポケモンマスターを目指していて、チャンピオンのカルネさんとどうしてもバトルをしたいんです！お願いします!!」

サトシの熱い視線を見ながらカルネは少し考える。自分と同じチャンピオンであり親友でもあるシロナが愛して愛してやまないカイトが推薦したトレーナー。

現に彼の瞳からは闘志の炎とチャレンジャー魂が溢れるくらいに燃えている。なら期待しても良いかもしれない。それに先程のガトーシヨコラのお礼もある事から非公式なバトルを受ける事にした。そしてプラターヌ博士と合流して、市街地から人気のない森の中に移動してバトルの準備を整える。

最初にバトルをする事になったのはサトシで、相棒のピカチュウを出して既に出ていたカルネのサーナイトとバトルを開始した。

勢いよく『アイアンテール』、『電光石火』、『エレキネット』、『10万ボルト』と次々と技を出すピカチュウだが、サーナイトはエキシビジョンマツチと同様にカルネのアイコンタクトで全て避けて、隙をついた『シャドーボール』を放って大きく吹っ飛ばした。

咄嗟にサトシが動いて受け止めたが、バランスを崩して背後の木に背中と後頭部を強く打ち付けてしまった。

「サトシ！」

「ピカピ・・・」

「痛つてて・・・大丈夫だよピカチュウ」

心配するセレナとピカチュウに大丈夫だと言い、逆にピカチュウの事を心配するサトシ。そんな主人にピカチュウは「大丈夫！」と言う。そんな彼らを見てカルネは内心思った。

「(ポケモンの為にあそこまでする熱いトレーナー。そしてトレーナーの為に尽くそうとする熱いポケモン。とても良いコンビだわ。カイト君が気に入る訳ね) サトシ君、まだ続けるかしら？」

「当然です！行きますよカルネさん！」

「ピカチュウ！」

2人がバトルの続きを行うとした時、突如四角い箱のようなメカが投げられた。そしてそのメカから光の檻が出てサーナイトを捕らえてしまった。

突然の事に全員が驚いていると空からニヤース型の気球に乗ったロケット団が降りてきた。

「相手が女優と言うのなら！」

「黙っているのが常だけどき！」

「それでも答えて上げるが世の情け！」

「業界の破壊と混乱を防ぐため！」

「世界の平和と秩序を守るため！」

「愛と真実の芝居と！」

「力と純情の悪を貫く！」

「クールでエクセレントであり！」

「ラブリーチャーミーな敵役！」

「ムサシ！」

「コジロウ！」

「ミズナ！」

「ロバル！」

「宇宙と銀河を駆ける大女優の私には！」

「二ホワイトホールとブラックホール、2つの明日が待ってます！」二  
「にやーんてニャー！」

「イートマ！」

「エアアー！」

いつもとは少し違った長い台詞を言うロケット団。彼らはサーナイトを捕らえた光の檻を回収して気球の下部に取り付ける。その間にセレナがカルネに何者なのか分かりやすく説明する。

「ポケモンを盗むなんて・・・とんでもない人達ね！」

「これはこれは・・・お褒めに預かり光栄です」

「芋女優のポケモンは、この大女優のムサシが戴いたわ」

「大女優？」

台詞の時もそうだったが、今日はやけに女優を言うなどカイトが考えている間、カルネはサーナイトに『シャドーボール』で檻を壊すように命じる。だが撃ち出された『シャドーボール』は光に触れた瞬間に吸収されてしまった。

「フフ、ご苦労様です」

「その檻は技の力を吸収してしまうのニャー！」

「お返しにこれあげるじゃーん！」

ミズナが投げたのは先程のメカであった為、カイト達は捕らえられと思うて身構える。だが出て来たのは光の檻ではなく黒い煙幕だった。

全員が身動きが取れない隙にロケット団はその場から逃走した。

「しまった！」

「逃げられた!」

急いで後を追い掛けようとするサトシ達だったが、それをカルネが制して胸にあるキーストーンを握りしめながら自分が案内すると言って走り出した。

そして走っている最中に撮影中に自分におきた出来事を話し、それを聞いたプラターヌ博士は石同士が呼びあったのではないかと推測する。しかしカイトが別の事を言った。

「俺はきつとカルネさんの心とサーナイトの心が強い絆で結ばれてい  
たからだと思えます!」

「強い絆・・・」

「俺もそう思います!」

「私も兄様の言う通りだと思えます!」

カイトの言葉にサトシやシノン、セレナ達も同意する。彼らを見てカルネは柔らかい笑みを浮かべながら頷き、サーナイトが待つ場所に向かつてさらに走るスピードを上げた。

それから暫くしてカイト達はサーナイトがいる場所に辿り着いた。彼らは近くの茂みに隠れながらロケット団の様子を窺う。

「このサーナイトがメガシンカをねえ」

「コイツを本部に届けたら大出世は間違いないだぜ!」

「当然ですよ。なにしろチャンピオンのポケモンですから」

「夢のメガ出世なのニヤ〜」

「笑いが止まらないじゃーん」

愉快に笑うロケット団を見てサトシが勢いよく飛び出そうとするが、カルネが穏やかに制止する。

「サトシ君達は此処にいて」

「えっ?でも・・・」

「大丈夫」

「待って下さいカルネさん。今回は俺にもやらせて下さい。せつかくバトルができると思っていたところを潰されたのですから」

「分かったわ」

話を終えた後、カルネとカイトは堂々と茂みから姿を現して、ロケット団の前に立った。

「貴方達!大人しくサーナイトを返しなさい」

「ニヤ!」

「チャンピオンにダークボーイ!」

「どうやって此処に!」

「あり得ません。何度も追跡されていない事を確認したのに!」

「フン!何度来たって無駄よ!」

「悪いがそうはいかないぜ。バトルを台無しにされた恨み・・・今晴らしてやる!ヘルガー、出陣!!」

「へール!!」

カイトが出したポケモンはダークポケモンのヘルガーだった。万が一カルネとのバトルをする事に備えてポケモンセンターでハブネークと交換したのがコイツなのだ。さらにこのヘルガーは、グラエナの数少ない弟子の1体でもあるのだ。

「グルルル・・・ルガー!!」

ヘルガーはロケット団を睨みつけながら大きく咆哮を上げる。それを聞いてロケット団は内心恐怖する。対してカルネはヘルガーを見て微笑む。



「いつ見てもカイト君のポケモン達は良く育てられて、鍛え上げられているわね」

「ありがとうございます。なにしろアイツはグラエナの弟子でもありますから。なあグラエナ」

「ガウツ！」

「成程ね。私達も負けていられないわね。サーナイト！私達の絆の力、見せてあげましょう！」

「サーナ！」

カルネが胸のペンダントに触れると強い光が溢れ出す。そしてサーナイトのペンダントも強い光が出て、2つの光は2人の間で結ばれていく。

「サーナイト！メガシンカ!!」

「サー!!!」

カルネの言葉と共にサーナイトの姿がメガシンカした姿に変わった。

初めて見るメガシンカに隣にいたカイトは勿論、シノン達も絶賛する。逆にロケット団は先程のヘルガーの咆哮も加えて、サーナイトのメガシンカした姿を見て弱気になる。それでも技のエネルギーを吸収する檻があるから大丈夫だと言うが、カルネがメガサーナイトに指示した数発の『シャドーボール』で木端微塵に破壊されてしまった。

驚愕するロケット団を他所にメガサーナイトはカルネの前に静かに降り立つ。それに合わせてヘルガーも横に並ぶ。

「カルネさん、一気に決めましょう」

「ええ！チェックメイトよ。サーナイト、ムーンフォース！」

「ヘルガー、オーバーヒート！」

2体のポケモンが技を放とうとするのを見てロケット団は慌てて気球に乗り込み、その場から逃げようとする。

「此処は一先ず退散するニャー！」

「急いでよー！」

「でしたらエアームド！ラスターカノンで妨害するのです!!」

「イトマルは毒針を放つじゃーん!!」

逃げる時間を稼ごうとロバルとミズナはエアームドとイトマルに攻撃を指示する。2体も助かる為に全力で技を放つが、それを遥かに上回るメガサーナイトとヘルガーの技によって技は撃ち消されて、そのまま気球に命中する。

「!!!「やな感じー!!」!!!」

技を決められたロケット団はいつもよりも勢いよく空の彼方へ吹っ飛ばされて行った。

それが終わった直後、カルネを迎えに来たマネージャーのミナミがヘリコプターに乗って現れた。時刻はもう夕暮れ時、カルネのプライベートタイムは終わって、次の撮影場に行かなければならないと言う事だ。

彼女はサトシにバトルが中途半端に終わってしまった事を詫びるが、サトシはカロスリーグに優勝してバトルの続きをすると宣言する。それを聞いてカルネは「期待しているわ」と楽しそうに言う。それが終わると今度はカイトとシノンの元へ行く。

「カイト君、シノンちゃん。久しぶりに話ができで本当に楽しかったわ。けどバトルができなくてごめんなさいね」

「いいえカルネさん、気にしないで下さい。さっきサトシが言ったように俺もカロスリーグに優勝して、今度こそバトルしますのー！」

「その時は私も観に行きます。その時にまたお話をさせて欲しいです

！」

「ええ！勿論よ。それじゃあ皆、また会いましょう」

そしてカルネはカイト達に見送られながら夕陽の向こうに飛び去って行った。

見送りが済んだ後、カイト達はポケモンセンターで泊まり、再びシヤラシテイのシヤラジムを目指して旅は続けるのであった。

## コルニとルカリオ！強者を求めて

今日もシヤラジムがあるシヤラシテイに向かって旅をしているカイト達。

のんびりと木漏れ日が差す道を歩いていると背後からローラースケートを履いた少女が頭上を飛び越えて目の前に現れた。

「トレーナー見つけた！」

「うん？」

「何だ!？」

「ガウウ？」

「ピカア!？」

「何か用ですか？」

「99人目は貴方で決まりだよ！」

「99人？何の話だ？」

「ピーカ？」

「決まってるでしょ？ポケモンバトルー!!」

随分と元気の良い女の子だ。まるでサトシみたいだなく、とカイトが思っている間にシトロンが訊ね、彼女は軽く自己紹介する。

「私の名はコルニ。でもってパートナーは……」

コルニと言う少女はカイト達の後ろを指差す。振り向くと青と黒の色が特徴の波導ポケモンのルカリオが走って来た。リュックを背負った状態にも関わらずルカリオは身軽な動きで頭上を飛び越え、彼女の隣に着地した。それを見てサトシが図鑑で調べる。

『ルカリオ。波導ポケモン。リオルの進化形。相手の発する波導をキャッチする事で考えや動きを読み取る事ができる』

「ルカリオか。なかなか手強そうだな！」

「ピカー！」

「私、初めて見るわ」

「カツコイイ〜！」

各々が感想言っている中、コルニとルカリオは元気よくハイタッチを決め、互いに絶好調であることを確認した。

「つと言う事で、バトルしてくれるよね？私達と！」

「ああ、シヤラジムでのジム戦に向けてトレーニングしたかったからな」

「ピカピカ！」

「へえ〜、シヤラジムへ行くんだ。貴方達もトレーナー？シヤラジムに挑戦するつもり？」

「ううん。私達はジム戦はしないわ」

「ジム戦に挑戦しているのはこの中で2人だけなの」

「でもトレーナーであるのは確かですけどね」

「あつ！私はセレナよ」

「私はシノンと申します。こっちはパートナーのキュウコンです」

「コーン！」

「私はユリーカ。この子はデデンネで、お兄ちゃんの・・・」

「シトロンです。初めまして」

「デネネ〜」

「俺はサトシ、宜しくな。コイツは相棒のピカチュウだ」

「ピカピカチュウ〜！」

「俺はカイト。そして相棒のグラエナだ。サトシ同様にジム戦に挑戦している」

「グガウツ！」

自己紹介が終わった後、カイト達は森の中の広い場所まで移動した。そして話し合った結果、サトシが最初にコルニとバトルして、カイトが審判を務める事になった。

「それじゃ、バトル開始!!」

「カモンサトシ!かかってらっしゃい!」

「よし、行くぞピカチュウ!電光石火!」

「ピカ!」

「ルカリオ、迎え撃て!」

「バウ〜!」

勢いよく走るピカチュウに対抗して、ルカリオも力強く走る。そして2体がぶつかり合うと周りに衝撃波が発生した。本来なら体の大きなルカリオの方が有利なのだが、これまでのバトルで得た経験とカイトとの特訓によってパワーは互角で、同時に後退した。

「続けてアイアンテール!」

「チュウウウウツピカアア!!」

「ブロックだよ!」

「バウウ〜ウアア!」

ピカチュウの『アイアンテール』を両腕でガードするルカリオだが、ピカチュウのパワーに負けてブツ飛ばされてしまう。

「ルカリオ!?!大丈夫?」

「バウ・・・」

すぐさま立ち上がるルカリオを見て、コルニは安心すると同時にピカチュウの予想以上の強さに焦る。

「ルカリオ!あのピカチュウはただ者じゃない。それにトレーナーも一味違う。ここはパワーアップだよ。剣の舞!」

「バオオオオオオオオ!!」

ルカリオが力を込めると周りに沢山の剣が現れて、彼を中心に回り始める。そして『剣の舞』によってルカリオの攻撃力が上がった。続けてコルニは『ボーンラッシュ』を指示した。

「剣の舞は攻撃力を上げる技。そしてボーンラッシュは地面タイプの技。このまま一気に勝負を持って行く気か？」

「そんな！それじゃサトシとピカチュウが危ないって事!？」

「大丈夫よセレナ。普通ならそうだけど、あの様子なら安心していいかも。ホラ……」

シトロンの説明を聞いてセレナが狼狽えるが、シノンが彼女を落ち着かせながら指差す。その先ではルカリオの『ボーンラッシュ』をピカチュウが『アイアンテール』で何度も防御していた。

すると、攻撃が当たらない事に苛立ったルカリオが指示を受けていないのにも関わらず『グロウパンチ』を繰り返した。

「っ!?!ピカチュウ、躲せ！」

「ピカ〜!？」

サトシが指示を出すのが、咄嗟の事だったので遅れてしまい、ピカチュウは『グロウパンチ』を食らって空高くブツ飛ばされてしまう。それでも何とか体勢を立て直して着地し、再びルカリオと対峙する。それを見てセレナとユリーカは安心するが、カイト、シノン、シトロンの3人は先程のルカリオの行動に疑問を感じていた。

「何だ今の……?？」

「勝手に技を出した？」

「どういう訳だ？」

しかしコルニは疑問に思っていない……。

「決まった決まった！渾身のグロウパンチ！このまま一気に逆転するよ。ボーンラツシュ!!」

「バウ!!」

「そうはさせないぜ。ピカチュウ、10万ボルト！」

「ピクカクチュウウウウウ!!」

「アオオオオオオオオツ!!」

「ルカリオ!」

再び『ボーンラツシュ』を繰り出して攻め込もうとするルカリオだったが、それよりも先にピカチュウの『10万ボルト』が決まって爆発が起こった。

そして煙が晴れるとそこには目を回して倒れているルカリオの姿があった。

「ルカリオ戦闘不能、ピカチュウの勝ち!!よって勝者、サトシ!!」

「ルカリオ、大丈夫!」

「バ、バウ」

カイトがそう言った瞬間、コルニがルカリオの元へ駆け寄って抱き起す。ルカリオは弱々しく彼女に「大丈夫」と言う。そこへシノンがバックから取り出したオボンの実を差し出す。

「はいコレ、オボンの実よ。ルカリオに食べさせて」

「ありがとう。さあルカリオ、食べて」

「バウ・・・」

オボンの実を食べた事で、ルカリオは少しばかり元気になった。それを見てコルニはホッと一息ついた後、カイト達にお礼を言いながら話す。

「それにしても君のピカチュウは強いね。それに君も凄腕のトレー



ナーだし、これならシヤラジムでバッジをゲットできるかも！」

「えっ？どうしてそう思うの？」

「だって、私とそのシヤラジムのジムリーダーだもん！」

「何だって!？」

「ピーカ!？」

「やはりな。なかなか良い闘志を感じていたぜ」

「ガーウ」

「君が・・・ジムリーダー？」

「だからあんなにも強かったんだ」

「そう言う事。これがジム戦だったらバッジを渡すところなんだけど、生憎今私達修行中なんだよね」

「修行中？」

「そう！だからバッジはジムに戻ったら・・・」

グウ~~~~!!

真面目な話の最中に鳴り響いた腹の虫。一体誰かと思えばサトシとコルニ、ルカリオの3人だった。彼らは揃って顔を赤く染めて苦笑する。

似た者同士だな、と呆れながら全員で昼食を取る事になった。今日の料理はシトロロンが作ったビーフシチューとサンドイッチだ。どちらも素晴らしい味で、コルニはテンションを上げながら食べ続けた。

一方ポケモン達は、セレナとシノンがモモンの実とチーゴの実を使って作ったポフレを食べていた。誰もが笑顔を浮かべながら食べている様子を見て、作った彼女達は嬉しい気持ちになった。それはそうだ、誰もが自分の作った料理を食べて美味しいと言ってくれたら喜ぶもんだ。

その時ユリーカがコルニの左手のグローブに嵌められている綺麗な石に気がついた。

「ねえコルニ、その石って・・・？」

「ああこれ？これはキーストーンだよ」

「キーストーン？」

「やっぱり！カルネさんののに似ているなって思ったんだ・・・」

「カルネさん？もしかして・・・チャンピオンのカルネさんに会ったの！？」

「ああ、この前会ったばかりなんだ」

「カルネさんはキーストーンを使ってサーナイトをメガシンカさせる。となると、コルニの場合はこのルカリオが？」

「それは無理。だってルカリオはまだメガストーンを持ってないし」「持ってない？」

「それじゃ今はキーストーンだけあると言う事？」

「そつ！これはおじいちゃんに貰ったんだ。あのね！ルカリオを初めてメガシンカさせたのは、私のご先祖様なんだよ」

「ご先祖様？」

「うん、シャラジムのジムリーダーにはメガシンカするポケモンをパートナーにするって言う習わしがあるんだ。私はおじいちゃんからルカリオをメガシンカさせるのに必要なメガストーンがセキタイタウンにあつて、それを手に入れて来いって言われたの。あとメガシンカに必要なのは2つの石だけでなく、パートナーとの強い絆も大切だと言っていたんだけど・・・要するに強くなればいい！だからセキタイタウンに着く前に100人のトレーナーとバトルして100連勝する。私達そう決めたんだ」

「bauer！」

そう言つてコルニとルカリオは意気込むが、その様子を静かにじつと見ていたカイトは考える。

「確かにバトルで絆を深めると言うのはありかもしれないが・・・話を聞く限りじゃどうにも引つかかる。それにさっきの勝手に技を出した件もあるしな」

「兄様、どうかしたのですか？」

「・・・うん？あ、いや、ちよつと考え事をしていただけだ。何でもな

い」

ずっと黙っていたままのカイトを見て、心配に思ったシノンが訊ねる。それに気がついたカイトは心配を取り除くように優しく言いながら彼女の頭を撫でる。撫でられたシノンは恥ずかしく思いつつ、嬉しそうな表情であった。

そんな彼らを他所にコルニはノートを取り出し、サトシ達に見せていた。それにはこれまでバトルし、勝った証として得たポケモンの足形や手形がスタンプされていた。

「どう？これが今まで私達がバトルで連勝した証の記念のスタンプだよ」

「へえ、凄いわね」

「でもサトシが勝っちゃったから98連勝で止まっちゃったね」

「あ、うん……だけど別に気にしていないわ。100連勝するって言っるのは私達が勝手に決めた事なんだから」

「それで、コルニはこれからどうするんだ？」

「おじいちゃんに言われた通りセキタイタウンを目指すわ。早くルカリオをメガシンカさせて、強くなったところを見せたいし！」

「バーウ！」

「ならコルニ、その後シャラジムで俺とジム戦をしてくれないか？」

「ピカ！」

「俺もそうさせてほしい。今よりも強くなったお前達とバトルした方が楽しいからな」

「ガウ！」

「OK！メガシンカしたルカリオなら絶対に負けないんだから！覚悟していてよね」

「バウバウ！」

その時、何処からともなく1台のトラックがやって来た。そして中からメガシンカ鑑定団と名乗る5人組が降りてきた。

「我々ならば、メガシンカしたポケモンがどれ程の強さになり、どのような技を使うか鑑定する事ができますニャ」

「お嬢さんのルカリオはメガシンカを目指している。セキタイタウンにあるメガストーンでね」

「っ！どうしてそれを？」

「先程申し上げました通り、我々はメガシンカに関して何でもお見通しです」

「此処で会ったのも何かの縁ですし、詳しく鑑定しようじゃない」

「ささ、遠慮なさらずに」

そう言つて5人組はルカリオ、ピカチュウ、グラエナ、キュウコンの4体を無理矢理トラックに乗せ、コルニのメガストーンが嵌められているグローブも取ってしまった。

そしてメガシンカの話をするが、コルニが非常識と言う。

「メガシンカに必要なメガストーンは、ポケモンによって異なる。セキタイタウンにあるメガストーンは、ルカリオだけをメガシンカさせるルカリオナイトだよ」

「・・・そう言えばそんな話をしていたな」

「なら今メガシンカ軍団に入るポケモンはルカリオだけと言う事じゃない」

「なによ、それじゃあピカチュウ達を軍団に入れる事はできないじゃない。どうすんのよ？」

「それは後日メガストーンを集めてから入れる事にして、それまでは3体とも候補ポケモンと言う名目で献上する事にしましょう」

メガシンカ鑑定団の話はよく分からないが、雲行きが怪しくなってきた事は分かる。カイト達はグラエナ達を取り返そうとトラックの荷台に上がろうとした時、突如光の檻が出てグラエナ達を捕らえてしまった。さらに荷台が閉まり、変わりにニヤース型の気球に乗った口

ケット団が現れた。メガシンカ鑑定団の正体はロケット団だったのだ。

「ロケット団！」

「ロケット団！と言われたら！」

「黙っているのが常だけどさ！」

「それでも答えて上げるが世の情け！」

「世界の破壊と混乱を防ぐため！」

「世界の平和と秩序を守るため！」

「愛と真実の悪と！」

「力と純情の悪を貫く！」

「クールでエクセレントであり！」

「ラブリーチャーミーな敵役！」

「ムサシ！」

「コジロウ！」

「ミズナ！」

「ロバル！」

「宇宙と銀河を駆けるロケット団の4人には！」

「ホワイトホールとブラックホール、2つの明日が待っているぜ！」

「にやーんてニヤー！」

「ソオーナンス！」

「イートマ！」

「エアーー！」

毎度お馴染みのお決まりの長い台詞を言うロケット団。その間にユリーカがコルニにロケット団が何者なのか分かりやすく説明する。そして今度こそグラエナ達を取り返そうとカイトとサトシ、シノンが空を飛べるポケモン達を出そうとする。

しかしその前にニヤースが四角いメカを投げて黒い煙幕を出して、その隙をついてロケット団はその場から逃走した。

煙幕が晴れた後、急いで後を追いつけようとするカイト達にコルニ

が自分が案内すると言って走り出した。先のカルネの件もあった事からカイト達は疑う事も無く彼女の後を追い掛けた。

その頃グラエナ達は、檻から脱出しようとは必死に攻撃を繰り返していた。だが何度攻撃しても効果がなかった。

「ガウガウ！グガウガ!!」

「コン！」

「ピカ！」

「バウ！」

それならばと、グラエナがキュウコン達に同時に攻撃して檻を壊そうと言う。3体はすぐさま頷き、檻の真上に向かってグラエナとキュウコン、ピカチュウが一斉に技を出し、最後にルカリオが『グロウパンチ』で殴りつけた。それにより合体技は檻を貫通して気球に穴を開けた。気球は空気が抜けた事でバランスを崩して崖に激突する。その衝撃により檻は壊れてグラエナ達は落下するが、4体は何の苦も無く上手く着地した。さらにルカリオはコルニのグローブもキャッチしていた。そしてそのまま逃げようとするが、そう簡単に逃すロケット団ではない。

「逃げられるとも思っているの？」

再びグラエナ達を捕まえるべく、手持ちのポケモン達を全て出して追い掛けて来た。そして少し痛い目に遭わせようと技を出させようとした時、遠くからカイト達の声が響いた。声がした方を見ると、カイト達が全力疾走でこちらに向かって来ていた。

「ゲゲッ！ジャリボーイ達ニヤ!!」

「ルカリオ！大丈夫!？」

「ピカチュウ！無事だったか!？」

「ピカ!」

「グラエナ！怪我はないか?」

「ガウ!」

「キュウコン！良かった・・・」

「コン!」

それぞれ自分のパートナーの無事を確かめた後、カイト達はロケット団を睨みつける。しかしロケット団は怯む事なく、逆に睨みつけた。

「こうなったらポケモンバトルで決着をつけるのニヤ!」

ニヤースの言葉を聞いて、ロケット団は攻撃態勢に入る。カイト達もやる気を起こし、コルニが上着を脱いでグローブを装着してから左右に並ぶ。

「やるぞグラエナ!」

「グガッ!」

「行くぞピカチュウ!」

「ピカ!」

「ルカリオ、宜しく!」

「バウ!」

「やるわよキュウコン!」

「コン!」

互いに準備が整ったのを合図にバトルが開始された。

「バケツチャ、シャドーボール!」

「マリーカ、サイケ光線!」

「カメテテ、水鉄砲!」

「シシコ、火炎放射！」

「ルカリオ、ボーンラツシュ！」

先手必勝とばかりにバケツチャ達は勢いよく技を放つが、ルカリオが『ボーンラツシュ』を出して力強く回転させて防いだ。なかなか面白い使い方をするもんだ。

「まだまだだ！マイーカ、ルカリオに体当たりだ！」

「マイーカ！」

「シシコは頭突きじゃーん！」

「シーシー！」

「ルカリオ、グロウパンチ！」

コジロウとミズナの指示を聞いてマイーカとシシコが勢いよく『体当たり』と『頭突き』を仕掛けるが、それよりも先にルカリオの『グロウパンチ』が命中してブツ飛ばされてしまう。するとルカリオはまた指示も無く勝手に『ボーンラツシュ』で2体を攻撃した。

「また勝手に・・・」

「やはりおかしいですね兄様」

その行動にカイトとシノン、さらに口は出していないが隣にいたサトシや後ろにいたシトロンも疑問に感じていた。しかしその間にもバトルは続き、今度はムサシとロバルがバケツチャとカメテに『シャドーボール』と『ロックブラスト』を放つように指示を出す  
が・・・。

「グラエナ、悪の波動！」

「ピカチュウ、10万ボルト！」

「キュウコン、火炎放射！」

「ピクカチュウ!!」



「グウウガアアアアッ！」  
「ゴオオーン!!」

放つ寸前でグラエナ達の技が命中し、ロケット団は空へ吹っ飛ばされる。

「「「やな感じー!!」」」

「ソーナンス！」

「マイツカー」

「シシー」

「チャチャ」

「メテテ」

お決まりの台詞だけでなく、何故かバケツチャ達の台詞も含めながらロケット団は空の彼方へ飛んで消えていった。

ロケット団を退いてホツとした後、サトシがルカリオがメガシンカするところを見てみたいと言い、コルニが承諾した事でセキタイタウンにカイト達も同行する事になった。

そして7人は楽しそうに走りながらセキタイタウンに向かうのであった。

コルニとルカリオ！メガストーンを求めて

シヤラジムがあるシヤラシティに向かって旅をしていたカイト達だったが、途中シヤラジムのジムリーダー・コルニと出会った。

彼女はパートナーのルカリオをメガシンカさせる為、ルカリオナイトがあると言うセキタイタウンを目指していると聞き、カイト達はメガルカリオを見てみたいと言う事で一緒に旅をする事となった。そして数日経ってようやく彼らはセキタイタウンに辿り着いた。

「此処がセキタイタウンか！」

「ピーカチュ」

「着いたよデネネ」

「デネ！」

「なかなか賑やかな所だな」

「ガウガウ」

「来る前に聞いたけど、セキタイタウンは様々な石の原産地として有名な町なの。その為石を加工する職人も多くいて、その加工した物を手に入れようというんな所から人が訪れるそうよ」

「コーン」

「そうなんだ。それに可愛い町でもあるみたいね」

それぞれ町の印象について言った後、カイト達は早速目的のルカリオナイトを探しに町へ踏み込んだ。町の中はシノンが言った通り、様々な石関連の店が多く並んでいた。それらを見て燥いでいたコルニにサトシが訊ねた。

「ところでコルニ、ルカリオナイトを探すのは良いけど、何処にあるのか知ってるのか？」

「ピーカ？」

「知らないよ」

「はっ？」

今何て言った？知らないだ?!あれ程自慢げに言っていたから  
てつきり知っているかと思っていたのに!

「おじいちゃんはセキタイタウンに行けば分かるって言ってたし、す  
ぐに見つかるかな〜っと思ってる」

「か、かな〜って……(汗)」

「ピーカ……(汗)」

「おいおい……(汗)」

「ガーウ……(汗)」

これには流石のサトシも愕然とし、カイト達も苦笑してしまう。ど  
うやらコルニはサトシと同じ突っ走るタイプのようだ。故に気が合  
うんだな。

「これはうかうかしていたら危ないかもね〜。どうするセレナ？」

「デデネ〜？」

「ふえ!?ど、どどどっどうするって……／＼／＼」

「そんなの決まっているでしょう。サトシに猛烈なアピールをするの  
よ。例えば……腕に抱きついてそのまま寄り添うとか」

「よ、寄り添うってそんな／＼」

「どうしたセレナ？顔が真っ赤だぜ？」

「どこか具合でも悪いんですか？」

「う、ううん!そそ、そんな事ないわ!し、心配しないで／＼」

「やれやれ……」

「2人ともにぶ〜い」

「本当ね」

「ガ〜ウ……」

「コ〜ン……」

「デネ〜」

「ピ〜カ……」

相変わらず鈍いサトシ達に呆れつつ、すぐ傍のお店を覗いてみる。そこには光り輝いている石が沢山並べられていた。

「わああ！綺麗な石が一杯！」

「どうやら石の原産地だけに進化の石も売られているようですな」

「綺麗ー！欲しいー!!」

2人が石の虜になっていた時、覗き込んでいたお店から1人の男性が出て来た。彼の手には先程購入したと思われる太陽の石があつて、それを自分のパートナーであるエリキテルに触らせる。するとエリキテルはエレザードに進化し、男性とハイタッチをするなど喜び合つた。

その光景を間近で見っていたコルニとルカリオはさらに興奮する。

「よーし！私達も早くルカリオナイトを見つけて手に入れよう！」

「バウ！」

「じゃあ手分けしてお店で聞いてみましょう」

「ああ！」

その後カイト達は待ち合わせの場所と時間を決めて、それぞれ別々のお店に行って情報収集を始めた。しかしどのお店に行ってもルカリオナイトの事を知っている者はいなかった。

ちなみにこの時、カイトがニダングルの為に闇の石を購入していたのは余談だ。

それから暫くして時間になった為、集合場所として決めていた石門の所に全員が集まって情報を報告する。

「何処のお店もルカリオナイトと言う石は知らないと言っていましたね」

「そんな筈ない！おじいちゃんは確かに此処にあるって言ったんだか

ら」

「落ち着けコルニ。そんなに簡単に見つかるなら今頃もっと多くのメガシンカが報告されている筈だ」

「ガウガウ」

「うっ・・・」

「と言う事は・・・?」

「やはりとても貴重な石と言う事ね。滅多に見つからないような物つてね」

「じゃあどうやって探すのよ?」

「うくん、そうだな・・・」

「ピクカ」

「そう言えばおじいちゃんが言った。メガシンカには何が必要なのか、それを見つけてるのもお前達の修行だって・・・そうだよ。ここで挫けたらダメなんだ!自分で見つけてこそ本当にメガシンカができるようになるんだから!」

「バウ!」

「コルニ前向き!」

「デネネ!」

「そうだな、諦めるのはまだ早い!」

「ピカチュウ!」

「だけど、これからどうすればいいんだろう?」

「ピクカ・・・」

「そうだな・・・」

「ガウ・・・」

情報収集も上手く行かないとなると完全に打つ手が無い。どうするか全員で悩んでいた時、カメラを背負った男性が声を掛けて来た。

「その御嬢さん達、セキタイタウンへようこそ。私はその写真館のマキタ。旅の記念に1枚写真はいかがかね?」

「記念写真?撮る撮る!」

「デンネ！」

「そうね。折角一緒に旅してるんだもの。記念写真くらい撮ろうよ」「どうします?」

「いいんじゃないか?折角だし皆で撮るか」

「ピーカ！」

「ああ、俺も構わないぜ」

「ガウ！」

「私も同じです。この石門の前で撮りましょうよ」

「コン！」

「賛成!賛成!私もちやんとセキタイタウンに来たよーっておじいちゃんに見せられるから!」

「では皆そこに並んで!」

石門を背景にカイト達は横一列に並んで写真を撮ってもらう。

順番としては左からルカリオ、コルニ、シトロン、シノン、カイト、セレナ、サトシで、ユリーカはシトロンとコルニの前に、ピカチュウはサトシの肩に、グラエナとキュウコンはカイトとシノンの前に並んだ。またシノンはカイトに、セレナがサトシに若干寄り添うように並んだのは余談である。

その後マキタが撮った写真をアシスタントに大至急でプリントしてもらっている間に、カイト達はマキタにルカリオナイトについて訊ねる。

「ルカリオナイトって言うのは知らないが、山の奥で進化の石が採れると言う洞窟があって、それよりもさらに奥にある小さな洞窟で特別な石が採れるって聞いた事があるな」

かなり有力な情報を得られた事にカイト達は顔を見合わせて満足気に笑んだ。特にコルニとルカリオはとても喜び、すぐさまその洞窟に向かうとする。しかしマキタの話はここで終わらなかった。

「だがその洞窟で、資格が無い者が入ると恐ろしい事が起こると言われている」

「恐ろしい事!？」

マキタから恐ろしい事が起こると聞いて、全員が首を傾げる。その中でセレナだけは若干顔を青ざめて体を固くする。

「恐ろしい事って・・・どんな？」

「それは分からん。でも本当に恐ろしい事が起こるらしい。だから町の者はその洞窟には近づかないんだよ」

話を聞き終わった後、セレナはさらに顔を青ざめながら別の場所へ探しに行こうと必死に提案する。しかしコルニは否定し、もうその場所にルカリオナイトがあると思い込んでルカリオと一緒に走り出そうとしたが、マキタからまだ写真を貰ってないと言われて急ブレーキを掛ける。そして写真を受け取るまでそわそわしつつ、大人しく待つ事にした。

サトシ達も同様に待っている中、カイトだけはその間マキタの事について考えていて、それに気が付いたシノンが訊ねた。

「兄様、どうかしたのですか？」

「ああ・・・あのマキタって人なんだが、どうも何かを隠しているような気がするんだ」

「隠している?どういう意味ですか？」

「さっき洞窟に資格が無い者が入ると恐ろしい事が起こるって話していただろ?もしその話が本当ならば、何故町の人達は洞窟の事を何も言わなかったんだ?」

「そう言えばそうですね。と言う事はこの話には裏がある?」

「ガウ?」

「コーン?」

「その可能性が高いだろう。まあ、今は他に行く果てもないし、素直に

その洞窟に行くでしょう」

それから数分後、出来上がった写真をそれぞれ一枚ずつ受け取ってからカイト達は山の洞窟に目指して歩き出した。

カイト達が立ち去った後、マキタは静かに言葉を零した。

「これで良かったんだな・・・コンちゃん」

カイト達が山道を登って暫く経った後、一行は採掘場に辿り着いた。

「此処が進化の石の採掘場ね」

「是非見学したいですね」

「俺も見たいけど、今はルカリオナイトだ」

「そうでした。えっと・・・確かその洞窟はさらに奥でしたよね？」

「ああ、その通りだ」

「じゃあ急いで行きましょう！行こうルカリオ！」

「バウ！」

早くルカリオナイトを手に入れようと、コルニとルカリオは勢いよく走り出す。道は一本道なので、迷う事は無いと思いつながらサトシ達も後に続いて走り出す。だが途中カイトがある岩の前で立ち止まった。

「どうしたんですか兄様？」



「コーン？」

「早く行かないと置いてっちゃうわよ！」

「バウバウ！」

足を止めて訊ねてくるシノン達に答えず、カイトはその岩を触った  
り、じっくり観察したりする。

「・・・やはりそうか」

「やはりって、この岩がどうかしたのか？」

「ピーカ？」

「見ろ、此処に何か重い物を引き摺ったような跡がある。きっとこの  
岩は別の所から運ばれて、両側から中央に向かって押されたものに違  
いない」

そう言った瞬間、ルカリオが何かを感じ取ったようで、カイト達を  
後ろに下がらせてから『グロウパンチ』で岩を弾き飛ばした。すると  
弾け飛んだ岩の先には道があった。

「何と!？」

「こんな所に道が！」

「岩で塞がれていたんですね。これは気付けませんよ」

「隠し扉って事ね！」

「デネ〜」

「でもこれで判明した。兄様の言う通りあの岩は自然に塞いだ後じや  
ない」

「コンコン」

「と言う事は・・・俺達の前に誰かこの道に入ったと言う事か？」

「ピーカ？」

「そう考えるのが正解だろう。それにグラエナも誰かが通った臭いが  
すると言っている」

「ガウガウ」

「どちらにしてもじれで道が分かったわ。お手柄よルカリオ！」  
「バウ！」

その後ルカリオを先頭にカイト達は発見した道を進んで行く。するとルカリオが再び何かを感じとり、まるで引き寄せられていくようにそれが感じる方に向かって歩き出す。その後について行くと、マキタが話していた小さな洞窟の入り口を見つけた。

またまた手柄を立てたルカリオを褒めつつ、コルニは「ルカリオはルカリオナイトを感じ取っているかもしれない」と言う。さらに祖父から「自分とルカリオなら見つけられる」と言われた事も思い出し、コルニはもつと決意を固めて洞窟に入ろうとするが……。

「中はかなり真っ暗なんだけど……」

「こんな事ならフラッシュを覚えたポケモンでも連れて来るべきだったわね」

セレナが怯えながら、シノンが腰に手を当てながら呟くとシトロンがリュックからエレザードの襟巻きをモチーフにした照明器具を伸ばして洞窟内部を照らす。

その光を頼りにカイト達は洞窟の中へ進んで行った。

ちなみにここでの順番だが、先頭がコルニとルカリオ、2番目がシトロン、3番目にカイトとシノン、4番目がサトシ、一番後ろがセレナとユリーカである。

「行くぞシノン」

「は、はい兄様」

「サ、サトシ……は、離れないでね」

「ああ、大丈夫だよ」

「守ってねピカチュウ。グラエナとキュウコンも」

「ピカピカ」

「ガーウ」

「コーン」

この時シノンにはカイトの腕に、セレナはサトシの腕にしがみつき、反対側の手をユリーカがぎゅっと握っていた。後にユリーカを除いた2人は、大好きな異性の腕にしがみついて付いた匂いを嬉しそうに嗅ぐのであった。

その後洞窟を進んで行くと鉄の扉が現れた。その扉を開くと中は1本の道と青い光の輝きを放っている水面、そこから高く伸びる岩の柱が道を挟み込むように連なっていた。

そして奥の祭壇にオレンジ色の輝きを抱く岩石・ルカリオナイトが祀られていた。

しかしその近くにカイト達よりも先に入っていた先客がいた。

「ロケット団!?!」

「ピピカチュウ!」

「ジャリボーイ達!?!」

「もう来ちゃったのかじゃーん!」

「いくらなんでも早過ぎよ!」

「折角道が分からないように岩で塞いだのに・・・これじゃ意味ないニャー!」

「道を塞いだですって!?!」

「じゃあ、あの岩は貴方達の仕業だったのね!」

「バウバウ!」

「その通りです。貴方達が道に迷っている隙にメガストーンを手に入れた、その後やって来た貴方達を襲撃してグラエナとピカチュウをゲットする計画だったのですが・・・これは変更するしかありませんね」

「ソーナンス!」

「ニャース、メガストーンを頂くのよ!」

「了解ニャ!」



そう言った瞬間、ニヤース、ソーナンス、エアームド、イトマルが一斉にバシャーモに飛び掛かる。しかしバシャーモが放った『ブレイズキック』で4体まとめて返り討ちにされ、そのまま後ろにいた4人と一緒にブツ飛ばされる。

「何でこうなるの〜?!」

「聞いてないぞ〜?!」

「あり得ないじゃ〜ん?!」

「残念無念です〜!」

「二「やなカンジ〜!!」二」

「ソーナンス!!」

勢いよく洞窟から追い出され、ロケット団は空の彼方へ飛んで消えていった。

その後バシャーモは次にコルニとルカリオに視線を移す。

「こ、今度は何?!」

「何か怖いよ」

バシャーモに見つめられてセレナとユリーカは怖気付き、それぞれサトシとシトロンの後ろに隠れる。

「兄様、これはもしかして・・・」

「ああ、どうやらバシャーモはロケット団の次はコルニとルカリオが相手だと言っているようだ」

「どうするコルニ? 相手になるか?」

「勿論! 元々私達はルカリオナイトをゲットしに来たんだから!」  
「バウ!」

好戦的に微笑みながらコルニは背負っていたリュックをサトシに投げ渡し、Tシャツとサングラスを脱ぎ捨てる。そしてルカリオと共に

にバシャーモの元へ向かう。2人にとってまさに最後の試練だ。

「サトシ達は下がってて！これはルカリオが進化する為の最後の試練だから！」

「コルニ・・・分かった。頑張れよ！」

「ピカピカ！」

「勿論、私達は負けないよ！」

サトシの声援を背中に受けて、コルニはひらりと手を振り返す。

そしてルカリオとバシャーモが互いに構えて合った後、遂にルカリオナイトをかけてのバトルが始まった。

最初ルカリオはコルニの指示に従って『グロウパンチ』で先制攻撃するが、バシャーモはルカリオに負けないくらいの素早さで躲し、そのまま『ブレイズキック』で攻撃する。そしてさらに猛攻を加えるバシャーモにルカリオは『金属音』で動きを封じた後、また勝手に『グロウパンチ』を出してバシャーモを攻撃した。

「まただ・・・」

「どうなっている?」

「勝手な事をしているのに、何でコルニは可笑しいと思わないの?」

何とも言えない思いがカイト、シノン、シトロンの中に沸き起こるが、今はこのバトルを見届ける方が大事だと思つて黙る事にした。

その間ルカリオはバシャーモに追い詰められていた。技は全て避けられた上に効果抜群の『火炎放射』を受けてしまう。その威力は凄まじく、ルカリオは吹き飛ばされて岩の天井に背中を打ち付けられてしまう。そして力なく倒れ込んだ。

「ルカリオ!!」

コルニはルカリオに駆け寄ろうとするが、バシャーモが彼女の足元

目掛けて『火炎放射』を放つ。何とか急ブレーキして回避する事ができたコルニだったが、この時スカートのポケットから皆で撮った記念写真が滑り落ちて燃えてしまった。

「・・・あつ」

それを見たコルニは悲しい表情になりながら後ろへ倒れてしまう。その光景はルカリオも見ていて、彼女の元へ向かう為に必死に起き上がろうとする。だがそれよりも先にバシヤーマが頭を掴んで壁に叩きつけた。

「こんなの見てられない！止めないと・・・」

「ダメだ！」

ルカリオがやられていく光景に耐えられなくなったセレナが止めに向かうとするが、サトシがそれを制した。

「サトシ・・・でもルカリオが！」

「コルニは自分の戦いだって言った。俺達が邪魔する訳にはいかない。そうだろコルニ、諦めないよな!？」

「サトシ・・・分かってるじゃない。そうよ、私達は負けない！例えどんな相手にだって後ろを見せたりしないんだから！そうでしょう？ルカリオ！」

「バウ・・・ウウ・・・」

コルニの言葉や皆の声援を受けてルカリオは傷の痛みを押し立てち上がった。それを見てカイトは薄く笑う。

「どうやら2人の闘志はまだ消えていないようだな」

「ええ、これなら行けるかもしれないね」

2人の言う通りコルニとルカリオの目と体から闘志が溢れていて、それがさつきよりも強く感じた。

その証拠にルカリオは最初の時よりも激しく攻めていた。両手の『グロウパンチ』で攻め続け、それによりバシャーモの体勢を崩す事に成功する。

すると再びコルニの指示を受けずに『ボーンラッシュ』を出して攻める。

「良いよ、その調子！」

激しい攻めを受けてバシャーモは仰向けの状態でその場に倒れる。その隙をルカリオは逃さず『ボーンラッシュ』を何本も出して動きを封じた。

「バシャーモの動きを封じた！あれならスピードは関係ない」

「このまま行けばコルニとルカリオの勝ちね！」

「確かにそうだが・・・アレではルカリオだけの勝ちだな」

コルニ達が優勢なのを見て喜ぶサトシ達を他所に、カイトはルカリオが勝手に技を出し続ける事を見てため息を突きながら静かに呟いた。

そんな事は知らないコルニは、一気に勝負を決めようとする。

「これでお終いよ！ルカリオ、そのまま決めちゃって!!」

「バアアアアアアッ!!」

「そこまで！」

動けないバシャーモにルカリオの『グロウパンチ』が決まろうとした時、何処からかバトルを止める声が響いた。

その声に驚いていると祭壇の裏側から1人の老人が現れた。



「お前の勝ちだ、コルニ」

「おじいちゃん!？」

「」「「おじいちゃん?」「」「」」

「ピーカー?」

「ガーウ?」

「コーン?」

「メガシンカ親父事、コンコンブルとは儂の事じゃ」

「メ、メガシンカ親父?」

「ピーカ?」

「あの人がコルニのおじいさんなの?」

「そうらしいな」

「でもどうしてこんな所に?」

カイト達から疑問の声が上がる中、コンコンブルはバシヤーマに労いの言葉を掛けながらモンスターボールに戻した。

それを見てコルニは驚きながら質問する。

「どういう事?バシヤーマはおじいちゃんのポケモンだったの?」

「そうだ」

「でも、どうして・・・?」

「お前は必ず修行をやり遂げて、此処へ来るとっておった。だから最後の試練を儂自ら与える事にしたのだ。そして見事試練に打ち勝った。よくやったなコルニ。ルカリオもよう頑張った」

「おじいちゃん・・・」

「バウ・・・」

「さあ、自分の手で掴み取っておいで」

祖父から褒められて嬉しい気持ちになるコルニ。そして言われるがままルカリオナイトを自らの手で掴み取った。

「ルカリオナイト!ゲット!!」

「ワォーン!!」

念願の物を手に入れられたコルニは喜びの気持ちもあつて大きな声で叫ぶ。ルカリオも同じように大きく咆哮を上げるのであった。

それからカイト達は洞窟の外に出て、石門の所まで戻る。するとそこには写真家のマキタが待っていた。

「マキタさーん!!」

「ピーカ!」

「只今〜!」

「デネネ〜!」

「おお、お帰り。探し物は見つかったのかい?」

「はい、何とか」

「そいつは良かった」

「ごめんねおじさん。折角撮ってもらった写真、バトルで燃えちやつたんだ」

「そうか、ならまたプリントアウトすればいい」

「本当!?ありがとう!」

「いいんだよ。ん?よう!上手く行ったようだな。お前さんの孫娘、大したもんじゃないか」

「当たり前だろうが、儂の孫だぞ」

「えっ?」

コンコンブルの姿を見たマキタは、気軽に話し掛ける。コンコンブルも笑いながら応えているのを見ると、どうやら2人は知り合いのようだ。

「いや〜実はルカリオナイトを渡す試練の手伝いを頼まれてな」

「そうそう」

「それじゃあ、最初から知ってて・・・?」

「ピカピカ?」

「ではコルニに話を掛けたのも偶然ではなかったと言う事ですね」  
「ガウガウ」

「いやあ・・・スマンスマン」

「じゃあ資格の無い者が入ると怖い事が起こると言うのも・・・？」  
「作り話だよ」

「そ、そうでしたか・・・」

「コーン・・・」

「だが資格の無い者が入ると、バシヤーモに叩き出されるのだから全くの嘘ではないぞ」

「ああ、そう言えばロケット団が叩き出されていたわね」

「ハハハ、そうだったな」

「ピカピカチュウ」

事の真相を説明した後、コンコンブルは改めてコルニを褒め称えてルカリオをメガシンカさせるように言う。

コルニは頷いた後ルカリオにルカリオナイトを渡し、キーストーンに触れてメガシンカを試す。

いよいよメガルカリオが見られる！そう思っただけ目を輝かせるサトシ達だが、カイトとシノン、グラエナ、キュウコンの表情は少し硬く、嫌な予感を感じていた。

そしてその予感は次回当たってしまうのであった。

コルニとルカリオ！結果を求めて

セキタイタウンに辿り着き、最後の試練を突破して無事ルカリオナイトを手に入れたカイト達。

そしてコルニは手に入れたルカリオナイトをルカリオに渡し、キーストーンに触れてメガシンカを試す。

「ルカリオ・・・メガシンカ!!」

コルニが大きく叫ぶと彼女の持つメガグローブのキーストーンとルカリオナイトから光が現れて、2人の間で結び合う。光が強くなるにつれてルカリオがオレンジ色の光に包まれ、光の中でルカリオの姿は徐々に変化していく。体が一回り大きくなって両手両足に2本の棘が生えて、頭の4本の房が長く伸びた。

そして光が消えるとそこにはコルニが待ち望んでいたメガルカリオの姿があつた。

「変わった！カッコイイー！！」

その姿を見たコルニは瞳を輝かせながらメガルカリオの元へ駆け寄る。カイト達も初めて見るメガルカリオの姿を興味津々に見たり、観察したりする。

一方メガルカリオは、メガシンカした事で自分の体内に溢れる波導が以前よりも遥かに高くなっているのを感じ、試しに右腕を横に振るう。

すると周囲に波導を伴った風が発生して、その場にいた全員の髪や服等を大きくはためかせた。

「OKルカリオ！私、アンタの波導をビシバシ感じる！最強な上にも最強だよ！これよこれよこれよ！これを待ってたの!!」

余程メガシンカができた上に予想以上のパワーアップした事が嬉

しいのか、コルニは喜びのあまりメガルカリオに抱き着いた。  
そんな2人にカイト達は祝福の言葉を掛ける。

「やったなコルニ、ルカリオ！」

「ピカ！」

「メガシンカおめでとう！」

「凄い迫力！」

「感動的です！2人の努力が遂に実を結んだんですね！」

「これで目標達成だな」

「ガウ！」

「ええ、メガルカリオの姿をちゃんとメモさせてもらったわ」

「コーン！」

「皆、ありがとう！」

全員から祝福の言葉をもらってコルニは心の底から嬉しい気持ちになる。そして少し離れた所で見えていたコンコンブルの元へ嬉々として駆け寄ってこれまでの事を報告する。それを聞いてコンコンブルは優しい表情で頷きながら孫の頑張りを認め、隣にいたマキタも「シヤラジムの将来は安泰だ」と褒めた。

それらを見てコルニは益々嬉しい気持ちになり、再びメガルカリオに抱き着く。するとここである事を思い付いた。

「そうだサトシ！今此処で私達とバトルしてくれないかな？ルカリオがメガシンカしてパワーアップした波導の力を試したし、前のバトルのリベンジも果たしたいから！」

「いいぜ。シヤラジム挑戦前の良い腕試しだ！」

「ピッカ！」

突然コルニからバトルの誘いを受けたサトシだが、すぐさま承諾して石門の前の手頃な広さの場所へ移動する。またカイトが再び審判を務める事となり、両者の間に立つとバトルが開始した。

この時ゾロアがまた勝手にボールから出て、一緒にバトルを観戦する事になったのは余談だ。

「どちらも準備いいな？それじゃ、バトル開始!!」

「行くよルカリオ！今度こそサトシに勝つんだから。ボーンラッシュ！」

メガルカリオは頭上で両手を合わせて『ボーンラッシュ』を作り、そのまま2つに割って二刀流で攻める。

「迎え撃てーアイアンテール!!」

向かって来るメガルカリオに対してピカチュウは体を回転させながら『アイアンテール』を放つ。それを右の『ボーンラッシュ』で受け止めようとしたメガルカリオだったが、最初のバトル同様ピカチュウのパワーに負けて振り払われてしまう。そして2体が体勢を崩して倒れている間『ボーンラッシュ』はブーメランのように飛んで岩山に衝突し、大爆発を起こしながら岩肌を傷つけた。

その威力にサトシとコルニ達は勿論、カイトですら驚いた。

「ゴイツは凄いな。メガシンカによってあれ程パワーアップするなんて・・・俺もちよつと手に入れてみたいと思ってきた」

「ガーウ・・・」

カイトの呟きを聞いてグラエナは頷く。すると突然隣にいたゾロアがグラエナの背中に乗っかってカイトに飛びついた後、目をキラキラ輝かせながら告げた。

「だったらマー！オイラが最初にメガシンカ・・・あつ、ニーが最初で、オイラ2番目にメガシンカしたいゾ！」

「おや？1番でなくもいいのか？」

「うん！だってニーがマアの1番の相棒なんだからオイラは2番だゾ！」

「そうか・・・その事をちゃんと覚えていて偉いぞゾロア」

「ガウガウ」

「えへへへ〜」

上位関係を理解しながら言うゾロアをカイトが褒めると、ゾロアは嬉しい表情になって再びグラエナの背中に乗っかってそのまま甘え出した。その様子をカイトが優しく見つめた後、再びバトルフィールドへ視線を戻した。

そこではメガルカリオが『グロウパンチ』で攻撃しようとするが、ピカチュウの『電光石火』による攪乱で攻撃ができなかったり、躲されたりしていた。

「ヴヴヴウ・・・」

その事にメガルカリオは段々と苛立ち始め、先程とは別人と思えるくらい敵意と殺意が籠った目でピカチュウを睨みつけた。

「ピッ・・・!？」

「何だ・・・？」

「ヤバイな・・・」

「ガウ・・・」

「ニー、オイラ怖いぞ・・・」

その目を見たピカチュウは恐怖を感じ、対峙していたサトシや審判していたカイト、シノン達も異変に気がついた。

だがコルニはその事に気付かず、そのまま指示を出す。

「ルカリオ、もう一度グロウパンチ」  
「バヴヴヴヴヴウウー！！」  
「・・・えっ？」





コルニが悲痛な叫び声を上げ、サトシがピカチュウを守ろうと駆け出す。だがメガルカリオの方が早い為、誰もがピカチュウに攻撃が当たると思ったが……。

ドツゴオオオオオオオオオオン!!!

「バウツ!？」

攻撃した場所にピカチュウの姿がなく、メガルカリオが周りを見渡すと少し離れた場所にピカチュウを口に銜えたグラエナの姿があった。どうやら『ボンラツシユ』が命中する前に素早くピカチュウを助けたようだ。そしてグラエナはピカチュウをサトシの元まで連れて行って渡した。

「ありがとうグラエナ。ピカチュウ、しっかりしろ!!」

「ピ……カ……」

サトシの呼び声にピカチュウは弱々しくも返事をする。だが誰から見てもダメージが深く、戦闘不能寸前であるのは明らかだった。しかしメガルカリオは今度こそピカチュウに止めを刺そうと構える。コルニが何度も止めるように言うが、全く聞かなかつた。それを見てカイトは2人を守る為、メガルカリオの前に立ち塞がる。

「サトシ、お前はピカチュウと一緒に後ろに下がっている。後は俺達が行く」

「あ、ああ……すまないカイト。頼む」

「気にするな。ヘルガー、出陣!!」

「へール!!」

モンスターボールから出たヘルガーは素早くグラエナに頭を下げ

ながら挨拶をした後、メガルカリオと対峙した。

「ヴヴヴウウウウ・・ガアアアアツ!!」

「ヘルガー、攻撃してはダメだ。遠吠えでメガルカリオの動きを止めろ」

「ヘル！ヴヴヴヴオオオオオー！！」

「キャウウウツ!!」

突然現れたヘルガーに驚くメガルカリオだったが、すぐさま威嚇して攻撃しようとする。それを見たカイトはヘルガーに遠吠えするよう指示を出し、ヘルガーは力強く不気味な遠吠えをした。

それを聞いたメガルカリオは心の底から恐怖を感じて脅える。さらにサトシ達も同様に恐怖を感じて震えた。

「これは・・・!?!」

「震えが止まらない!?ル、ルカリオ・・・」

「何なの、この遠吠え・・・?」

「お兄ちゃん、ユリーカ怖い」

「デネネ・・・!」

「ヘルガーの遠吠えは地獄の死神が呼ぶ声と言われていたと聞きます。まさにこの遠吠えこそそうだ!」

「だが恐らくこの遠吠えは通常のヘルガーの遠吠え以上の恐怖を感じるぞ」

「ああ、これはもう勝負はついたようだ。見ろ」

コンコンブルが静かに言うと、メガルカリオはヘルガーの遠吠えによる恐怖にとうとう耐え切れなくなり、その場で気絶して倒れ込んでしまった。

それに合わせてメガシンカが解け、元の姿に戻ったルカリオの傍に原石のままのルカリオナイトが転がった。それを見てカイトはヘルガーを褒めながらルカリオの元へ行く。

他の皆もルカリオの元へ駆け寄って心配する中、コンコンブルは倒れたルカリオの頭を人撫でしてからルカリオナイトを拾ってマキタに渡した。

「ルカリオ・・・どうしちゃったのよ・・・」

コルニはルカリオの傍に寄って座り込み、不安な表情で見つめている。しかしいつまでもそのままにいる訳にはいかない為、カイト達は重苦しい雰囲気を漂わせつつもピカチュウとルカリオポケモンセンターへ連れて行った。

その後ポケモンセンターに辿り着いたカイト達は、2体をジョーイに預けてロビーで待機した。先程までの件もあって誰も何も話さず、ただ2体が回復するのを待っていると回復を終えたアナウンスが鳴り響いた。そして治療が終わって元気になったピカチュウをジョーイとプクリンがカートに乗せながら運んできた。しかしルカリオの姿は無かった。

「ピカチュウ！」

「ピカピ！」

カートからサトシの腕の中にピカチュウは飛び込み、元気よく鳴く。どうやら傷はなくなつて完全に回復できたようだ。その姿を見てカイト達が安堵する中、コルニは未だ戻って来ないルカリオの事をジョーイに訊ねた。

「ジョーイさん、ルカリオは・・・？」

「もうちょっと待っててね。ルカリオはかなり消耗して、回復にはもう少し掛かるみたいなの。でも大丈夫、あと少して元気になるわ」

「はい・・・」

まだ回復できないと聞いてコルニは再び不安な表情になる。そこへコンコンブルが歩み寄ってその原因について話した。

「消耗するのも無理はない。初めのうちは力に振り回される事もあ  
る」

「その力って・・・波導の事？」

コルニの疑問にコンコンブルは静かに頷く。それを見て彼女は顔を俯かせ、悲しい表情のままサトシとピカチュウに向き直った。

「サトシ、ピカチュウ、ごめん。私、どうしたらいいか分かんなくて・・・。あとカイト、グラエナ、ヘルガーも本当にありがとう。もしあそこでピカチュウがやられて、ルカリオがあのままの状態だったと思うと・・・」

「大丈夫だよコルニ。そりゃあ俺達もビックリしたけど・・・いきなり凄いい力を持ったんだし、ルカリオも苦しかったんじゃないかな」

「ピーカチュウ」

「俺の方も同じだ。それに仲間を助ける事なんて当たり前の事なんだからよ」

「ガウガウ」

「へーる」

「それにポケモンは進化すると言う事を聞かなくなる例も沢山ありますから、決してコルニのルカリオが特別と言うわけじゃないと思います」

次々と優しい言葉でフオローを入れてくれるカイト達にコルニは嬉しきで涙目になり、ぐっと口元を引き締める。

「元氣出せよ、やっとメガシンカできたんだ！コルニとルカリオならきっと上手くいくよ」

「ピーカチュウ！」

「・・・そうだよ。私のルカリオならすぐに力をコントロールできるよ。ね。そしたら約束通りサトシとカイトと言いジム戦ができるよ！」

「何・・・？」

「ジョーイさん、ルカリオの事を宜しくお願いします！」

「ええ、お任せ下さい」

少しだけ元気になったコルニから頼まれたジョーイは微笑みながら了承し、プクリンと一緒に治療室へ戻って行った。だがこの時、ロビーのソファアームに座っていたコンコンブルがカイト達とジム戦の約束をしていると聞いて眉を顰めたが、コルニは気づく事がなく彼に訊ねた。

「ねえ、おじいちゃんのルカリオも最初はあるんな風だったの？」

「そうさなあ。誰にでも初めてと言う事はあるからな。ただ・・・」

「何々？ただ、何!?!」

「さっきのバトルはとても褒められたものじゃないぞ」

「うっ・・・でも、サトシ達も言ってくれてるじゃん！これからだよ！これから！」

鋭い眼光で睨まれて厳しい言葉を言うコンコンブルにコルニは一瞬怯むが、すぐに反論した。そこへマキタが帰って来て、コルニにルカリオナイトを加工した腕輪と再度プリントアウトした記念写真を渡した。2つを受け取ったコルニは大喜びし、マキタにお礼を言った。

その後カイト達は今後の事を話し合う為に全員集まって席に着いた。

「メガルカリオに何が起こったんでしようか？」

「進化して初めてだから、バトルに集中し過ぎたんだよ」

「サトシとピカチュウはどう思った？」

「・・・最初にバトルした時とは全然違うポケモンと戦っているような感じだったな」

「ピカチュウ」

「兄様はどうでしたか？」

「・・・俺もサトシと同じだな。ルカリオから放たれたあの殺意・・・尋常ではなかったからな」

「ガーウ」

「ヘルー」

「うん、私・・・何か怖かった」

「ネーネ・・・」

「オイラも怖かったゾ・・・」

「ワイルドになったんだよ」

「メガシンカと言ってもポケモンによっていろいろだな」

「俺達、この前チャンピオンカルネさんに会ったんです！」

「カルネさんと言えば、パートナーのサーナイトがメガシンカするね」

「メガサーナイトにも会いました」

「同じメガシンカでも、メガサーナイトはメガルカリオとは全然違う

印象です」

「うん・・・メガサーナイトは優雅で華麗って感じだった」

「でもメガルカリオはそれとは真逆の感じでした」

「ああ・・・確かにメガルカリオは強くなったが、あれではバトルをしているとは言えないな」

それぞれがメガルカリオの事について感想を言うが、内容は皆暗い感じのものだ。カルネのメガサーナイトを見た事もあって尚更だ。それを聞いて居ても立っても居られなくなったコルニはコンコンブルに原因が何なのか訊ねた。

「お願いおじいちゃん！知っている事が教えて欲しいの！あの子が私の言う事を聞かなかったの、初めてだったんだよ？」

「・・・本当にそう思っているのかコルニ？」

「えっ?」

「前のサトシ達とのバトルやロケット団とのバトルの時も、ルカリオはコルニの指示無しに勝手に技を出して攻撃していたんだぞ?」

「ガーウ」

「それは俺も思ったぜ」

「ピーカ」

「私も同じよ」

「コーン」

「僕も気になっていました。何故トレーナーの指示も無しに勝手に技を出すんだろうと・・・」

「そ、それは・・・」

「フム・・・君達4人は優れた観察眼を持っているようだ。まあ、カイト君やシトロン君は当然であるな。なにしろダークマスターとミアレジムのジムリーダーだかな」

「・・・えっ?ええええええええええ!?そうだったの!?!」

「コンコンブルさん、あまりダークマスターとは言わないでくれると助かります。いろいろ大変な事になりますし、それに今の俺はカロスリーグに挑戦しているただのトレーナーですから」

「僕も今はサトシ達と一緒に旅をして修行している身ですから・・・。ともあれ、それもメガルカリオが暴走した原因の1つだと思うのです」

「で、でも!私達これまでずっと頑張って修行し続けて来たんだよ!それなのに・・・」

「それでもメガシンカによる力が、お前のルカリオには強過ぎたと言う事だ」

「強過ぎた?」

「メガルカリオは波導の強さが極限まで高まると考えられている。その為バトルしている間は全神経を集中させていて、戦いの事以外は考えない。その結果、強くなった波導が闘争本能を掻き立てる」

「・・・確かに本能だけで戦っていた。でもカイトのヘルガーの遠吠えを聞いた時、それが再び変わったけど?」

「あの時シトロン君も言ったが、ヘルガーの遠吠えは地獄の死神が呼ぶ声と言われるくらい恐れられている。それを聞いてメガルカリオの闘争本能が防衛本能に変わって防ごうとした。だがカイト君が育てたヘルガーは通常よりも恐怖を感じた為、耐え切れなくなって気絶してしまったのだろう」

「非常な性格にガラリと変わってしまうと言う例はあるにはあるんだからな・・・」

「そんな!？」

「じゃあコルニは、それをコントロールできるようにならなくちゃいけないと?？」

「ピーカ?」

「そうだ。シヤラジムのジムリーダーとしてなくてはならない力だ」

話がある程度進んでさらに話し合いが続こうとした時、突然カートを押す音が聞こえてきた。コルニが音がする方へ振り向くと、奥からジョーイとプクリンと一緒にルカリオが帰って来た。元気になって帰って来た相棒を見て、コルニはすぐさま立ち上がって抱きついた。

「ルカリオ!良かった・・・」

「バウ!」

「もう元気になりましたよ」

「ありがとうジョーイさん!気分はどう? OK? 私の事、分かるよね?」

「バウウ!」

元気に返事をしながら体を動かすルカリオを見てコルニは安心する。カイト達もルカリオが元気になって良かったと言う。そしてコルニは先程マキタから受け取った腕輪をルカリオに見せ、彼の左腕に装着させる。

「似合うよルカリオ!」



「本当！トレーナーとお揃いでアイテム付けるの羨ましいかも！」

「ネネネ〜！」

「気に入ってくれたかな？」

「うん！これはルカリオのお守りだね」

「バウウ！」

「ルカリオ、メガシンカついていろいろ大変だけど、私達ならモノにできる！メガシンカしたらもうこっちのものなんだから！」

「バウウ！」

「・・・コルニ、ちよつと付き合いなさい。1つ、ポケモンバトルという」

「えっ？おじいちゃんとバトル!? 久々だなあ・・・！ルカリオ、次こそメガシンカを成功させるよ！」

「バウウ！」

「・・・お前にはまだ、メガシンカと言うものが分かっていないようだ。表に出なさい」

厳しい声でそう言った後、コンコンブルは外へ出て行く。その後をコルニとルカリオは気合いバツチリと言う感じですぐに追いかける。それを見てサトシ達は不安な表情になり、シノンはこつそりカイトに近づいて耳打ちした。

「コルニの奴、大丈夫かな？」

「ピカピカチュ〜」

「大丈夫だと思いたいけど・・・」

「どう思うお兄ちゃん？」

「あの様子では何とも言えませんね」

「う〜ん・・・兄様、コルニはさっきの話についてちゃんと理解したんでしょっか？」

「・・・お前はと思う？」

「私ははつきり言ってまだ分かっていないと思います」

「そうか・・・残念ながら俺も同じだ。アレではまた暴走するな」

「やっぱり・・・」

「ガウガウ」

「ゴーン」

「マー・・・」

全員が不安な気持ちのまま外へ出る。

そしてお互いにルカリオを出してメガシンカにさせ、メガルカリオ同士のバトルを固唾を飲んで見守っていたが、結果は予想通りコルニのメガルカリオが暴走して彼女の指示も聞かず勝手に技を出しまくった後、コンコンブルのメガルカリオの『波導弾』を受けて戦闘不能になった。

その後コンコンブルはバトルの中で見抜いたコルニとルカリオの問題点を厳しく伝える。しかし2人は納得ができず反論してしまう。それにより・・・。

「バツカモーン!!!」

「ッ!？」

コンコンブルの怒りが爆発して辺り一面に彼の怒声が響き渡る。それを聞いてコルニだけでなくカイト達も震え上がらせた。

そして彼は厳しい声のまま2人に言葉を掛けた。

「お前に新たな修行を命じる。ムスト山に、儂が若い頃から世話になっていたトレーナーがおる。メガシンカするポケモンをパートナーにしている。きつとお前達が、メガシンカの先に何を見ればよいか教えてくれるであろう」

「・・・分かったよ」

コルニとルカリオは悲しい表情になって項垂れながら立ち上がる。それを見た後コンコンブルはカイトとサトシの所へ向かってある事を告げた。

「カイト君、サトシ君。君達に大変申し訳ないんだが、見ての通りコルニとルカリオは新たな修行に出る。その為シヤラジムの挑戦は儂が変わりに受ける事にしよう」

「えっ・・・？」

「ピカ!!」

「それは・・・」

「ガウガウ?」

「なっ!?!ちよつと待ってよおじいちゃん!サトシとカイトのジム戦は私達が受けるって約束してあるんだよ!!」

「バウバウ!」

「残念だがそれは無理だ。はつきり言ってお前達では2人の相手は荷が重過ぎる。どちらも凄腕のトレーナーであり、特にカイト君はダークマスターと言うチャンピオンと同等の強さを持っているんだ。さっきのヘルガーの遠吠えを受けて十分に理解した筈だ。そんな2人を相手に例えメガシンカをコントロールできるようになったとしても、良いバトルができるかどうか分からん」

「それは・・・」

「バウ・・・」

そう言われたコルニとルカリオは先程よりもさらに悲しい表情になる。そこへサトシがコンコンブルに言った。

「コンコンブルさん、お気持ちは嬉しいのですが・・・俺はコルニとジム戦をすると約束したんです。此処でコンコンブルさんとジム戦をしたら、コルニとの約束を破る事になります。そんな事、俺にはできません」

「ピカピカ!」

「俺も同じです。約束はきちんと守らなければなりませんし、折角強くなった2人とバトルしないなんて事は勿体無いですから!」

「ガウ!」

「サトシ・・・カイト・・・」

「そんな訳で、俺達もコルニ達と一緒に修行します」

「ピカチユウ！」

「俺も一緒に修行します！」

「ガウツ！」

「・・・分かった。2人がそう言うのであれば何も言うまい。コルニとルカリオの事を宜しく頼む」

「はい!!」

「ところで、ムスト山の場所は分かるかね？」

「大丈夫です！ムスト山への行き方はもう調べてあるわ」

「ええ、準備も整っていますよ」

「サンキュー、セレナ」

「シノンもありがとうな」

「コルニ、ルカリオ、元氣出せよ。強くなる為だ！」

「ありがとうサトシ。カイト」

「そうそう、皆で行けば修行も楽しくなるよ」

「私も行く！」

「デネ！」

「当然ながら僕も参加します！」

「2人のメガシンカをこの目で見届けたいです」

「コーン！」

全員が当たり前の事のように付いて来てくれる事にコルニは心の底から嬉しい気持ちになった。彼らがいなければずっと悲しい気持ちのままであったであろう。もしかしたらムスト山に行ってもメガシンカを成功させる事ができなかつたかもしれない。

でも彼らと一緒にならば絶対に新たな試練を終わらせる事ができると確信しつつ、一行はムスト山に向かって歩き出すのであった。

## コルニとルカリオ！真の結果を求めて

遂にメガシンカをする事ができたコルニとルカリオだったが、極限まで高まった波導の力を制御できずルカリオは暴走してしまう。それをコントロールできるようにする為、コンコンブルから新たな修行を命じられる。カイト達もその修行に参加する事にして、一行はムスト山目指した。

その途中山へ続く洞窟にてロケット団とのトラブルがあつて離れ離れになったり、メカでパワーアップした彼らの襲撃を受けたりしたが、メガルカリオによって何とか撃退する事ができた。だがその場合でもメガルカリオがコルニの指示を聞いたのは一瞬の事であった。それから数日経つてカイト達はムスト山に辿り着き、メガシンカポケモンをパートナーにしているというトレーナーの屋敷に到着した。

「こんにちは！シャラシテイのコルニです。おじいちゃんに言われてやって来ました！」

「バウバーウ！」

礼儀正しくしながら待っていると、扉が開いて中から後頭部に大きな鰐のような牙を持った大顎が特徴のあぎむきポケモンのクチートが出て来た。

「チート？」

「おや？クチートではないか」

「ガウガウ」

「ああ、久しぶりに見たぜ！」

「ピカピカ！」

「これがクチート・・・結構可愛いわね」

『クチート。あぎむきポケモン。角が変形してできた大きな顎が頭についている。鉄骨を噛み切ってしまう』

セレナが凶鑑でクチートについて調べた後、コルニがトレーナーは何処にいるのか訊ねる。すると後ろから何者かの声が聞こえて全員が振り向くと、そこには沢山の花を載せたバイクに似た乗り物に乗っている老婆がいた。彼女が杖をついてカイト達の前に出るとクチートが笑顔で迎えた。

「チート！」

「お留守番ご苦労様」

「ちゅ♪」

「これはこれは、皆さんこんにちは。私の名はメープルです」

「はじめまして、カイトと言います。こっちは相棒のグラエナです」

「グガウツ！」

「俺はサトシです。こっちは相棒のピカチュウです」

「ピカチュウ！」

「私はセレナです」

「私はユリーカ。こっちはデデンネで、こっちはお兄ちゃん」

「ネネネ！」

「シトロンです。宜しくお願いします」

「シノンと申します。こっちはパートナーのキュウコンです」

「コーン！」

「私はコルニです」

「バウ！」

「お話は何っていますわ。まずは貴方達2人の実力、見させてもらいまししょうか？」

「はい！」

「バウ！」

自己紹介を済ませた後、メープルはコルニとルカリオの実力を見る為に全員をバトルをするのに丁度いい野原へ案内する。そして互いに準備を整えた後、バトルが開始された

「それでは始めましょう」

「行くよルカリオ！メガシンカ!!」

「アオオオオオオオオオオオオン!!」

「・・・立派な波導です事。クチート、メガシンカ!!」

「チイイトオオオオオオ!!」

コルニがルカリオをメガシンカさせたのを見て、メープルも持っていた杖に加工してあったメガストーンに触れてクチートをメガシンカさせて対峙する。

一方カイト達は、初めて見るメガクチートの姿に目を輝かしていた。

「見て見て、クチートも・・・!」

「デネデネ!」

「へえ、アレがクチートのメガシンカした姿か」

「ガウ」

「こつちも強い力を感じるな。どんなバトルをするのか楽しみだぜ!」

「ピカピカ!」

それぞれ感想を言っている間、コルニはメガルカリオに『グロウパUNCH』を命じる。しかしメガクチートは素早い動きで攻撃を躲す。それに苛立ったメガルカリオは、また勝手に『ボーンラッシュ』を出してしまう。

「ボーンラッシュ?成程・・・」

「よし!ガンガン行くよ!!」

「クチート、躲すのです」

再び攻撃するメガルカリオだが、メガクチートは先程と同じように素早い動きで躲していく。その様子を見て、カイト達はいつもの癖が

出てしまったと表情を硬くする。

「また指示無しに攻撃してしまったか……」

「なかなかあの癖は直りませんね」

「そうね……長年一緒に過ごしてきた分、コルニはアレで良いと思っ  
ているからね」

「けどあのままじゃいつまで経ってもメガシンカをコントロールする  
事なんてできない。コルニ！」

「えっ?……あ、そうだった。これじゃ駄目だったんだ」

サトシの声を聞いて、コルニはコンコンブルに言われた事を思い出  
す。そしていつものバトル方法を変えようとメガルカリオに指示を  
出そうとした時、今まで躲していただけだったメガクチートが反撃に  
出た。

「クチート! アイアンヘッド!!」

「クチート!!」

メガクチートの『アイアンヘッド』が決まり、メガルカリオは空高  
くブツ飛ばされる。何とか上手く着地して体勢を立て直したが、また  
自分自身の波導に振り回され、メガルカリオは暴走を始めてしまっ  
た。

「ヴヴヴウウガアアアアアアオオオオツ!!」

「ルカリオ、頑張つて! 私の指示を聞いて!」

暴走するメガルカリオに必死に声を掛けるコルニだが、メガルカリ  
オは彼女の声を全く聞かず、再び指示無しに攻撃してしまった。しか  
しメープルは勢いよく突撃してくるメガルカリオを見つめながら冷  
静にメガクチートに指示を出した。



「クチート！妖精の風です!!」

「チィィィトオーー!!」

メガクチートの放った『妖精の風』を真正面から受けて、メガルカリオはまたもや大きくブツ飛ばされて地面に倒れた。同時にメガシンカが解けて、戦闘不能になってしまった。

それを見たカイト達がルカリオに駆け寄る中、メープルはクチートを労いながらメガシンカを解いた。

「ルカリオ、しっかりして・・・」

「ウアウ・・・」

「大丈夫、すぐにコントロールできるようになるよ。だってその為に来たんだもん。メープルさん、私達頑張ります！宜しくお願いします!!」

「ええ、しっかり教えてあげますよ。けどまずはルカリオの治療をしませんとね」

「チート」

そう言つてメープルとクチートは、カイト達を連れて屋敷に戻り、ルカリオの治療を行う。そしてそれが済んだ後、メープルは沢山の花が置いてある部屋へと案内した。

「わあ〜！綺麗なお花だ〜！」

「そうね。これは全部メープルさんが摘んできたものですか？」

「ええ、そうです。どれもとても綺麗だし、コルニさんとルカリオにも活けてもらいたいと思ひましてね」

「えっ？あの・・・私達修行とか特訓とか、そういうのをやりたいんですけど？」

「バウー！」

「まあいいじゃないですか。良かったら皆さんも活けてみませんか？」

「本当に？」

「いいんですか!？」

「構いませんよ。パートナーとご一緒にやって御覧なさい」

「分かりました。ありがとうございます! やりましょうキュウゴン」

「ゴン」

修行とは言えない内容にコルニとルカリオは困惑するが、メイプルに言われた通りに花を活け始める。カイト達も同様にパートナーと一緒に花を活けて、それぞれ個性的で違った作品が出来上がった。

この時シトロンが自信満々にメカを出して、それで花を活けようとしていつものように爆発を起こしてしまったのは余談だ。

「よく出来ましたね。皆さんの個性、しっかりと作品に表れていますわ」

「クチ」

そうやってメイプルはカイト達が活けた花の作品の良さと感想を言う。そして最後にコルニとルカリオの作品の元へ行つてじっくり観察する。

「この作品はコルニさんとルカリオ、それぞれが活けたのかしら？」

「そうだよ、素敵でしょ？」

「パウ！」

「ええ、あなたの方が似た者同士で深く理解し合っているとこの作品からも窥えますわ」

「でしょ？ 私達、小っちゃい頃からずっと一緒に、固い絆で結ばれているの」

「バウ」

「固い絆ね・・・アレではあまりそうは見えないな」

「ちよ、兄様・・・！」

コルニとルカリオは笑顔で頷き合う中、カイトは少し複雑な表情をしながら小さく呟く。それを隣にいた事で聞こえたシノンが苦笑しつつカイトを睨む。しかしそれは仕方がない事だ。なにしろどちらも別々の花を活けていたからだ。なのでその事を言うとするが……。

「……………(フルフル)」

「ヌツ……………」

咄嗟に目が合ったメープルが静かに首を横に振るう。フム、どうやらこれが修行みたいだったようだ。なら今は何も言わないでおくでしょう。

「成程、では明日も良い作品ができるように頑張ってください」

「明日も生け花ですか!？」

「嘘!?修行は?特訓は?」

「バウウ!？」

「焦りは禁物ですよ。兎に角明日も頑張ってくださいね」

そう言っただけでメープルは部屋を後にした。一体どう言うつもりなのか?答えが分からず誰もが呆然とする中、カイトが「兎に角言われた通りにしよう」と言った事で全員その日は屋敷でゆっくり過ごす事にした。

それから夜が明け、再び生け花をする為に部屋に集まるとメープルから生け花をする為に必要な花を自分達の手で摘みに行つて欲しいと言われる。カイト達はそれに従い、籠を持ってそれぞれお目当ての花を探しに行く。

「では、行って来ます!」

「気を付けるんですよ」

「綺麗なお花を探さぞ〜!」

「デネ〜!」

「俺達も行くぞ！」

「ピカチュウウ！」

「私達も早く行きましよう兄様」

「コン！」

「ああ！」

「ガウ！」

「待って！」

「コルニさん、ちよつといいですか？」

「ん？」

「バウ？」

「山の景色をじっくり見るといいわ。パートナーのルカリオと一緒にね」

「景色？」

「そうすれば、きっと良い事がありますよ。きっとね・・・」

メープルの助言に首を傾げながらコルニとルカリオは花摘みに行く。そして言われた通りルカリオと一緒に景色を見て花を摘み、摘んできた花を活ける。そんな毎日を繰り返して行く為、誰もが飽きてしまおうだろうと思うが、ムスト山はかなり広くて見る景色やいろんな種類の花が沢山ある。それによりカイト達は毎日楽しく様々な作品を完成させた。

「皆さん今日もよく頑張りました。明日もこの調子で素敵なお花を活けて下さいね」

「えっ？明日もですか？」

「ピーカ？」

「そう、明日も明後日も」

「！！！！ええ！！！！！！」

まさかこの花を活ける事が修行とは思っていないサトシ達は驚きの声を上げる。唯一その事に気が付いているカイトはそれを見て苦

笑する。

そこへとうとう我慢できなくなったコルニがメープルに訴えた。

「そんな！お花はもう結構です!!」

「バウー！」

「そう言わずにもっと見せて下さい。コルニさんとルカリオが心を通わせて作ったお花を・・・ね？」

「っ・・・」

必死の訴えも聞いてもらえず、コルニとルカリオはガツカリした表情になる。うくん、このままだと今後の修行に悪影響を及ぼすかもしれない。ちよつとだけアドバイスしようかなとカイトが近づこうとした時、先にサトシが2人に近寄った。

「そんな顔すんなよコルニ。ルカリオ。今はこうでも、いつか必ずメープルさんは修行してくれる筈さ。それに花を活けるなんて滅多にない体験なんだから楽しまないと！」

「サトシ・・・」

「それに俺もコルニやセレナ、皆の作った作品をもっと見てみたいしさ」

「ピカー！」

「・・・うん！そうだね。よーしルカリオ、明日はもっと遠くの方へ行ってみよう！」

「バウー！」

サトシの言葉を聞いてコルニとルカリオは再びやる気に満ちた表情になる。さらに彼女だけでなく、セレナも顔を少し赤くしながらやる気満々になった。本当にコイツは女を落とす事に関して天才だな。

それからコルニとルカリオは毎日いろんな花をそれぞれ取りに行行って活け花を完成させ、それをメープルに見せた。そしてある日の事・・・。

「どうですか？」

「バウ？」

2人が持つて来た花は鈴蘭に似た花で、ピンク色の花瓶に挿してあつてとても綺麗な作品であつた。また彼女自身気に入つたのか、余つた鈴蘭を腕飾りにしていた。

「うん、今までで一番良いですよ」

「本当ですか!？」

「バウバウ！」

それを見たメープルはにつこり微笑みながら褒めて、2人は手を取り合つて喜んだ。

その後カイト達はツリーハウスの寝室に戻り、各々ベットや椅子に座つてのんびりする。そんな中、コルニとルカリオは外の景色を見たいと言つて外に出ていった。それと同時にセレナがぐったりしながら呟いた。

「ちよつと飽きちやつたかな。毎日毎日お花とにらめっこだもん。いくら綺麗でもこれじゃあねえ……」

「そうかな？私はとっても楽しいよ！」

「ネーネ」

「そうよセレナ。前にサトシが言つたように滅多にない体験なのよ？ユリーカの言う通り楽しまないかね」

「うう……そうだけど〜」

「それにしても……こんな事を続けるなんて、メープルさんはどういうつもりなのかな？」

「ピーカ？」

「う〜ん、何か考えがあるんだと思いますが……カイトはどう思いますか？」

シトロンは窓から外の景色を眺めていたカイトに訊ねる。話を振られたカイトが室内に視線を戻すと、全員が期待を寄せた視線を向けていた。それを見てカイトは少し苦笑しつつコルニ達がいけない事を確認してから話し出した。

「俺の考えでは、これがメープルさんがコルニ達の為に与えた修行だ  
と思う」

「ガウ」

「修行？生け花が？」

「どう言う事なのカイトさん？」

「ネネ？」

「うん、これまでコルニ達が活けた作品だけど、互いに別々の花を  
活かしていただろう？その為俺はコルニが固い絆で結ばれていると言った時、  
そうは思えないと感じてしまった。しかし今日の作品は1つの花で  
活かしていた。それを見て俺は2人の気持ちが1つになったなど感じ  
たよ」

「成程、確かに兄様の言う通りかもしれないね。2人の心を1つに  
させる為にメープルさんが生け花をさせたんだと思うわ」

「コーン」

カイトの説明を聞いて誰もがこの生け花の意味を理解した時、突然  
ドアからノック音が響いた。1番近くにいたシノンがドアを開ける  
と、そこには紅茶が入った人数分のカップを乗せたトレイを持って  
立っていたクチートがいた。

「わあ、良い香り！」

「ありがとうなクチート」

「チーと」

クチートにお礼を言いながらトレイを受け取ろうとした時、突然窓

のガラスが派手に割れて、外から大きな手のような物がグラエナ、キユウコン、ピカチュウ、クチートの4体を連れ去った。

「ピカチュウ!?!」

「グラエナ!?!」

「キユウコン!?!」

「クチート!?!」

連れ去らわれたグラエナ達を追って外に出ると、騒ぎを聞きつけたコルニ達がやって来た。そして彼女達に事情を説明していると空から聞き覚えのある高笑い声がした。顔を上げるとそこにはニヤース型の気球に乗ったロケット団がいた。さらに下部分には檻に閉じ込められたグラエナ達もいた。

「貴方達は!?!」

「貴方達は!?!と言われたら!」

「黙っているのが常だけどさ!」

「それでも答えて上げるが世の情け!」

「世界の破壊と混乱を防ぐため!」

「世界の平和と秩序を守るため!」

「愛と真実の悪と!」

「力と純情の悪を貫く!」

「クールでエクセレントであり!」

「ラブリーチャーミーな敵役!」

「ムサシ!」

「コジロウ!」

「ミズナ!」

「ロバル!」

「宇宙と銀河を駆けるロケット団の4人には!」

「ホワイトホールとブラックホール、2つの明日が待っているぜ!」

「にやーんてニヤー!」



「ソオーナンス！」

「イートマ！」

「エアー！」

毎度お馴染みのお決まりの長い台詞を言うロケット団。その間にシトロンがメープルにロケット団が何者なのか分かりやすく説明する。その間ロケット団は捕獲用ロケットランチャーを取り出してルカリオを捕まえようとする。しかしルカリオはコルニの素早い指示に従って躲す。それならばとロケット団はそれぞれ手持ちポケモン4体を出した。

「行け！バケツチャ！」

「お前も行け！マリーカ！」

「行くじゃん！シシコ！」

「行きなさい！カメテテ！」

飛び出した4体に加えて、ミズナとロバルはイトマルとエアームドもバトルに参加させる。それによりイトマルはバケツチャの体に飛びつき、カメテテはエアームドの足に掴まり、シシコはマリーカの触手に抱き抱えられるようにして構える。

それを見たカイト達も空を飛べるポケモンで対抗しようとモンスタールボールに手を伸ばそうとした時、ルカリオが手で制しながら前に出た。

「ガガウ！」

そして戦闘態勢を取りつつコルニに振り返って一声かける。それを見てコルニは頷いて拳を握りしめながら決心する。

「そうだよね！私達が皆を助けなきゃ！行くよルカリオ！メガシンカ！！」

「アオオオオオオオオオオオオオオ!!」

コルニのキーストーンとルカリオのメガストーンが結び付き、オレンジ色の光がルカリオを纏ってメガシンカさせる。それにより波導の嵐が巻き起こって、ロケット団の動きが一瞬止まる。

「ルカリオ！グロウパンチ!!」

「させるか！マリーカ、サイケ光線！」

「シシコ、火炎放射じゃーん！」

ロケット団の隙をつこうとコルニは素早く指示を出し、ルカリオはバケツチャに『グロウパンチ』を食らわせようとする。しかしマリーカの『サイケ光線』とシシコの『火炎放射』に阻まれた上に攻撃を受けてしまう。どちらも効果抜群だった為、メガルカリオは膝を付いてしまう。それを見たロケット団は追い打ちを掛けように『シャドーボール』、『糸を吐く』、『ラスターカノン』、『水鉄砲』を放つ。

「バウ・・・！」

次々と放たれる攻撃によってメガルカリオは次第に追い詰められていき、木からジャンプした際に着地に失敗して地面に叩きつけられてしまう。

そこへバケツチャ、マリーカ、エアームドが三方から取り囲む。コルニは急いでそこから脱出させようと指示を出そうとした時、ゆらりと立ち上がったメガルカリオの雰囲気が変わった事に気がついた。

「ヴヴウ・・・ガアアアアアアアッ!!」

またもやメガルカリオは波導に振り回され始め、目に殺意と敵意を込めて鋭い犬歯を剥き出した暴走状態になる。それを見てコルニは不安な表情になり、カイト達も彼女達を助けるべく今度こそモンス

ターボールを投げようとする。だがそれをメープルが止めてゆつくりとコルニに近づき、そつと彼女の左手を握る。

「貴方ならできる！」

「……はい！」

メープルから激励を受けたコルニは、真つ直ぐメガルカリオを見つめる。そして先程メープルが言った言葉を内心呟く。

「(心は1つ、景色は2つ。状況をよく見て、ルカリオを助けてあげるの！)」

その間メガルカリオはロケット団のポケモン6体の猛攻に劣勢を強いられていた。

バケツチャとイトマルが『シャドーボール』と『糸を吐く』で攻撃し、それを躲して反撃しようとしたところへエアームドとカメテテが左側から『鋼の翼』と『シエルブレード』で攻撃する。さらにマリーーカとシシコが右側から『体当たり』と『頭突き』で追撃した。

次々と攻撃を受けて地面に倒れるメガルカリオだが、ゆらゆらと立ち上がって本能のままに飛び出そうとした時、コルニが両手を大きく広げて目の前に立ち塞がった。

「ヴヴヴ……ガアアアアアアアアアアッ!!」

突然現れたコルニを見てメガルカリオは一瞬動きを止めるが、すぐにまた犬歯を剥き出して何の躊躇いもなく彼女に襲い掛かる。

しかしコルニは恐れず、腕を交差させて噛みついてきたメガルカリオの牙を受け止めながら必死に呼び掛けた。

「ルカリオ……ルカリオ、聞いて！心は1つ、景色は2つ。2つの景色を束ねて、戦う力に変える！」

コルニの脳裏にこれまでルカリオと一緒に歩んできた大切な記憶が映し出される。さらに腕飾りにしていた鈴蘭の花も揺れて、偶然にもそれが視界に入ったメガルカリオは、あの時の喜びが甦ると同時にコルニの声が次第にはつきりと聞こえ出す。

「ルカリオー！ルカリオ！！私達の心は1つ！波導に身を委ねて！！」

コルニがそう言った瞬間、メガルカリオの凜猛な瞳の中が正気になってゆつくりと腕から牙を離す。それと同時に鈴蘭の腕飾りが千切れて、白い花がぽあぁ、と宙を舞った。

「何さつきからゴチャゴチャ言ってるのよ！バケツチャ！悪の波動！！」

「チャチャー！」

先程から攻撃を仕掛けて来ず、変な事をやり出した2人に痺れを切らしたムサシがバケツチャに再度攻撃指示を出した。

放たれた『悪の波動』がコルニに命中するかと思った時、メガルカリオが『ボーンラツシュ』で防いだ。

「ルカリオー！」

「バウウ！」

コルニの呼び掛けにメガルカリオは答える。その瞳は正常で、暴走していた名残は無い。どうやら波導を制御する事ができたようだ。静かに2人の様子を見守っていたカイト達は喜びの声を上げ、メープルは満足気に頷いた。

そしてコルニとメガルカリオは背中合わせで並び立ち、強い意志を込めた目でロケット団を睨む。

「ルカリオ、行くよ！皆を助け出すんだ!!」

「バウ！」

「小癩な！サイケ光線3度目!!」

「火炎放射で焼き尽くすじゃーん！」

「迎え撃つわよ！」

技を放とうとするマージャーカとシシコを空中で迎え撃とうとするメガルカリオの死角を狙って、バケツチャ、イトマル、エアームド、カメテテの4体がそれぞれ『シャドーボール』、『糸を吐く』、『ラスターカノン』、『水鉄砲』を構える。

しかしコルニは彼らの動きを冷静に見極めており、メガルカリオのもう1つの目となりながら指示を出した。

「ルカリオ、左右から来る！ボーンラツシュで打って上に避けて！」

「バウ！」

指示を聞いたメガルカリオは空中で器用に体を捻らせて技を全て避け、さらに『シャドーボール』を『ボーンラツシュ』で打ち、その反動で上に飛び上がる。それによりマージャーカとシシコの放った『サイケ光線』と『火炎放射』が誤ってバケツチャとイトマルにそれぞれ命中してしまった。

「ボーンラツシュ!!」

同士討ちをした事で動揺するロケット団の隙をついて、コルニはまた素早く指示を出す。そしてメガルカリオは、ダメージで動きが止まっているバケツチャとイトマルに『ボーンラツシュ』を連続で攻撃した。

それは一撃一撃が重く、2体はまったく反撃する事ができなかった。そして強烈な一撃を食らって大きくブツ飛ばされてしまい、そのまま気球の檻に激突した。それによって檻は壊れ、捕まっていたグラ

エナ達は外に投げ出された。

「グラエナ！」

「キュウコン！」

「ピカチュウ！」

「クチート！」

「ガウ！」

「コーン！」

「ピカピ！」

「クチート！」

落ちてくる4体に向かってカイト達は駆け出し、両手を前に出してしっかりと受け止めた。大切な相棒を取り戻せて全員が安堵の溜息を洩らしながら笑みを浮かべる。そして全員がコルニ達に向き直ってお礼を言う。

「コルニ、ルカリオ、2人ともありがとうな！」

「おかげでグラエナ達を取り戻す事ができた。本当にありがとう」

「ええ、貴方達には感謝しきれないわ」

「いいのよ、当然の事をしたまでだから。それよりも！」

コルニが睨み付ける先には折角捕まえた獲物が逃がされた事と、手持ちポケモンを傷つけられて憤慨しているロケット団がいた。

「よくもやったニャー！容赦はしないニャー!!」

「その言葉、そのままお返しします。クチート、メガシンカ!!」

今にも攻撃してきそうなロケット団に怯まず、メープルは杖を持ちあげてメガストーンに触れてクチートをメガシンカさせる。

メガクチートはそのままメガルカリオの横に移動して並び立つ。

「これで終わらせるじゃん！火炎放射!!」

「サイケ光線だ!!」

「妖精の風!!」

2体が放った『火炎放射』と『サイケ光線』をメガクチートは『妖精の風』で押し返し、マリーカとシシコはブツ飛ばされて気球に激突する。

それならばと、ロケット団はエアームドとカメテテで倒そうとするが、それよりも先にグラエナ達の『悪の波動』、『10万ボルト』、『火炎放射』を食らって同じようにブツ飛ばされてしまった。

そこへメガカリオが両手を構えてある技を放とうとする。それはコルニにとって初めて見る技であった。

「ルカリオ、それって・・・覚えたのね！」

「ワウ！」

「よし！お見舞いしてやろう！波導弾!!」

「ウウウ・・・バウウ!!」

メガルカリオが新たに覚えて放った技は『波導弾』であった。その強力な技はロケット団の手持ちポケモン達全員を巻き込みながら気球を大爆発させた。

「「やな〜!!」」

「カンジ〜!!」

「ソ〜ナンス！」

「「あああああ〜!!」」

お決まりの台詞を言いながらロケット団は空の彼方へ飛んで消えていった。

「やったねルカリオ！」

「バウ！」

ロケット団を撃退できた事にコルニとメガルカリオは大きな満月の下でハイタッチを交わし、そのまま手を組んで見つめ合う。

ようやく得た本当の絆を2人は暫くの間喜び合い、それをカイト達は静かに見つめたのであった。そして一夜が明けて、出発準備を整えたカイト達をメープルとクチートが見送りに来た。

「ありがとうございます！メープルさんに会えて本当に本当に良かったです！」

「波導を制御できたからと言って安心してはいけませんよ。更なる高みを目指して、これからも頑張ってください」

「はい！頑張ります！」

優しい表情でコルニのお礼を受け取ったメープルは、そのまま優しい言葉で彼女達に激励を送る。それを聞いてコルニはさらに輝かしい笑顔で頷き、力強く答えた。

そこへサトシがタイミングを見計らって話し掛けた。

「コルニ、此処でお別れだ」

「えっ？」

「突然で悪いが、そうさせてもらう」

サトシから突然の言葉を聞いた上にカイトもそれに同意する様子にコルニは驚いた。それは後ろにいたシノン達も同様で、シノンが代表して2人に理由を訊ねた。

「どうしてですか兄様？このままシャラジムに行ってコルニ達に挑戦した方が良いのでは……」

「いや、今回の件でコルニとルカリオは波導を制御できるようになった。なら俺達もそれを越えられるように鍛えなければならぬ。そ



うでなければ最高のバトルを楽しめないからな。なあサトシ？グ  
エナ？」

「ガーウ！」

「ああ、鍛えて強くなってバトルに勝ち、絶対ジムバッジをゲットして  
みせる！そうだろうピカチュウ！」

「ピーカ！」

「うん！サトシとカイト達とのバトル、楽しみにしてるよ！」

「バウ！」

2人の理由を聞いたコルニとルカリオは、勝気な笑みを浮かべて頷く。そして彼女はシューズのスイッチを入れてローラーを出して走り出した。

「皆ー！またねー!!」

「バアーウ!!」

「さよならコルニー！ルカリオー！」

「気を付けてねー！」

「また会いましょうー！」

「御爺さんにも宜しくお伝えくださいー！」

「それじゃ、出発するか！」

「ああ、皆行こうぜ！」

こうしてコルニ達と別れたカイト達は、更なる強さを求める為に修行の旅へと歩き出すのであった。

## 熱い漢のバトル！ノクタスVSゴロンダ

ムスト山の件の後でコルニと別れたカイト達は、彼女とジム戦をする為に鍛えながらシヤラシテイに向けて旅を続けていた。

その途中にある森の中を歩いていた時……。

「見て見てお兄ちゃん！ポケモンがいるよー！」

「ネネネ〜」

先頭にいたユリーカがある方向を見て指を差す。カイト達はその方向に目を向けると、そこにはミネズミ、オタチ、パチリスの3体が木の下に空いた穴の中に集めて来た木の实を入れていた。

「アレはミネズミですね」

「それにオタチとパチリスか……別地方のポケモン達と一緒にとは珍しいな」

「ガーウ」

「ああ、それに3体ともとても仲が良さそうだぜ」

「ピカピカ！」

「本当ね。それにどうやらあの木の穴が彼らの食糧貯蔵庫のようね」

「コーン」

「ああやって皆で協力して集めた木の实を保管しているのね」

「さっ、邪魔しちや悪いから行こうぜ」

「そうだな」

「二「はい／うん」二」

サトシの言葉に同意して、カイト達は静かにソツとその場を後にした。だが少しするとミネズミ達の悲鳴が響いた。

「なっ、何だ!？」

「さっすきのミネズミ達の声だ」

「何かあったのかしら?」

「戻ってみましょう」

悲鳴を聞いたカイト達は先程ミネズミ達がいた場所に戻ると、3体は木の上で震えていた。そして木の下には冬眠ポケモンのリングマが穴の中に入って、ミネズミ達が集めた木の実を全て持って出て来た。どうやら木の実を独り占めしようとしているようだ。

「あのリングマ、皆が集めた木の実を持って行こうとしているのね!」

「あんな小さな子達から木の実を奪うなんて・・・」

「酷い事をしますね!」

「見ていて胸糞悪いし、止めに行k・・・ってユリーカ!サトシ!」

リングマの悪行を止めようとカイトが向かうとした時、それよりも先に居ても立っても居られなくなったサトシとユリーカが飛び出した。

「ねえちよつと!返してあげて!!」

「デネネネ!」

「ピカピッカ!」

「よしピカチュウ!取り返してやろうぜ!」

「ピカ!」

そう言つてサトシとピカチュウがリングマから木の実を取り返そうとした時、森の中から1体のポケモンが飛び出した。そのポケモンは木の枝を軽々と飛び渡つて頂上まで登ると、両手を大きく広げたポーズで姿を現した。

「あつ、あれは・・・!?!」

初めて見るとポケモンだった為、サトシがすぐに図鑑を開いて調べ

る。

『ルチャブル。レスリングポケモン。華麗な動きで戦い、華麗な技を極める事に強い拘りを持っている』

ポケモン図鑑の説明を聞いた後、さらに調べてルチャブルが飛行・格闘タイプである事も分かった。しかし目の前にいるルチャブルは、図鑑の絵と比べて顔が色鮮やかな薄緑色であった。

「図鑑と顔が違う・・・？」

「ピーカ？」

「色違い・・・にしてはちよつとおかしいな」

「ガウウ」

「チャブ！」

カイト達が首を捻る中、ルチャブルは顔を・・・いや、マスクを空高く投げ飛ばして素顔を見せた。するとマスクは宇宙で弾け、無数の木の葉が周りを包み込んだ。

それによりルチャブルのカッコ良さが魅せつけられた。

「わあ！木の葉のマスクだ!!」

「デ〜ネ！」

「ピ〜カ！」

「へえ〜面白い奴だな」

「ルチャブルはリングマからミネズミ達が集めた木の実を取り返そうとしているんでしょうか？」

「そうらしいな。勇ましい奴だ」

そう言っている間にルチャブルとリングマのバトルが始まった。

リングマはルチャブルに飛び掛かるが、効果抜群の格闘タイプの技や飛行タイプのスピードが合わさった連携技で返り討ちにされてし

まった。

「やったぜ！」

「ピカ〜！」

「凄い！空手チョップから飛び膝蹴りの連携技だ」

「それに技を出すスピードやパワー、そして体力、どれも見事なものだ。かなりレベルが高いようだ」

「ガウガウ」

「あの子やるわ！」

「本当ね」

「コーン」

「ルチャブルって強いんだね〜！」

「ネネネ！」

「・・・チャブ！」

誰もが勝負あつたと思つている中、ルチャブルは倒れたリングマから背を向けて再び木の頂上に登る。そして登場した時と同じ両手を大きく広げたポーズをとつた。

「どうしたのかな？」

「ネネ？」

「あれはいつもの決めポーズだよ。大技の前にアレをするのが彼のポリシーなんだ」

突然後ろから声が聞こえたのでカイト達が振り向くと、レンジャーのような恰好をした優しい表情の男性がいた。彼はカイト達の傍まで歩くと一緒に見守る。

「決めポーズ・・・ですか？」

「でもポーズなんて決めてたら・・・」

シノンとセレナが決めポーズなんかしている場合ではないと言うとした時、ルチャブルが勢いよく飛んで大技を仕掛ける。だがポーズを決めている間にリングマは意識を取り戻し、横に転がって技を躲した。それによりルチャブルは地面に激突してしまった。

「ああ！ルチャブル!!」

「いつも最後の最後に大技が避けられちゃうんだ」

「ピーカ！」

「そうでしょうな。あんな決めポーズをとっていたら・・・(汗)」

「ガクウ」

「でも、なんでカッコつけるのかしら？」

「カッコつける暇があるのならば、攻撃して倒せばいいのに」

「コンコロン」

「ネくネ」

「例え逃げられても、カッコつけずにはいられない。そういう戦い方もあるんだよ」

「ふくん。やっぱり面白い奴だな」

「ルチャブルの戦いの美学って訳さ」

そうこうしている間にミネズミ達は木の下に降りて集めた木の実を取り戻す事ができ、ルチャブルにお礼を言った後、リングマに二度と盗られない別の隠し場所へ持って行った。そこへ技を躲してその場から立ち去った筈のリングマが戻って来た。しかも両手に大岩を持っていた。

「グマアアアアアー!!」

「アイツ！」

「あつ、君！」

大岩をルチャブル目掛けて落とそうとするリングマを見て、我慢できなくなったサトシがルチャブルの元に駆け寄って庇った。

「リングマ、それ以上は止めるんだ!!」  
「グマ?グマァー!!」

突然現れたサトシにリングマは驚くが、自分の邪魔をした事に怒ってそのまま大岩を落とそうとする。だがそれよりも早くサトシがピカチュウに『アイアンテール』を指示する。そしてピカチュウの『アイアンテール』が大岩を割り、そのままリングマの頭を攻撃した。

「グウウウマァァァ……!?!」

頭に強烈な一撃を食らったリングマはゆっくりと後ろに倒れる。その後痛む頭を押さえながら必死に立ち上がり、今度こそその場から立ち去って行った。

それを見送った後、サトシはルチャブルに手を差し伸ばして立ち上がらせた。

「大丈夫か、ルチャブル?」

「チャブ……」

「それにしてもお前って熱い奴なんだな。気に入ったぜ!」

「チャーブ」

彼らが良い感じに話し合っていたところへカイト達がやって来る。

「サトシ、大丈夫?」

「ああ」

「ピッカ!」

「どうなる事かと思いました」

「本当だよ」

「ネネ」

「だが無事で何よりだ」





「待て2人とも、ここは俺達に任せろ。ノクタス、出陣!!」  
「ノーク！」

カイトが素早くモンスタールボールを手にとって投げると、中からノクタスが飛び出して来た。そしてノクタスは素早くゴロンダに接近して、腹に向かって『不意打ち』を食らわせた。

「ゴッロ……!?!」

いきなりノクタスが現れた上に、強烈な一撃を腹に食らったゴロンダはその場に膝をつく。だがすぐに立ち上がって、自分の邪魔をしたノクタスを睨み付ける。対してノクタスもゴロンダを睨み付ける。

「ゴ〜ロ〜……」

「ノ〜ク〜……」

暫く睨み合っていた両者だったが、痺れを切らしたゴロンダが腕を大きく上げて『アームハンマー』を繰り出す。しかしノクタスが素早く『ニードルアーム』で攻撃を防ぐ。拳同士がぶつかって辺りに強い衝撃が発生する中、両者はぶつけ合ったままの姿勢だ。だが突然ゴロンダが拳を離して、クルリと背を向けてそのまま森に向かって歩き出した。

しかし途中再び振り向いてノクタスを睨み付けると、一言鳴き声を上げて今度こそ森の奥へ消えて行った。それを見てノクタスもカイトの元へ戻った。

「ご苦労だったなノクタス」

「ノーク！」

「しかし、お前も厄介な奴に目をつけられたな。次会ったら必ず倒す！なんてゴロンダに言われてよ」

「ノ〜ク……ノクク。ノークター！」

「フツ、次会ったら今度こそ叩き潰すか。そうだな、お前ならできる。俺も協力するしよ」

「ノーク!!」

カイトにそう言われて、ノクタスはさらにやる気になって両手の拳を何度も叩いた。最初はいつもの事だと思つて黙つていたが、少し経つても続いたのでグラエナが「止めろ」と言つて止めさせた。その光景に全員が苦笑する中、ルチャブルは今度こそカイト達の元から去つて空高く飛んで行つた。

「あれ?ルチャブルが・・・」

「ルチャブルは野生のポケモンだからね。恐らく自分の住処へ帰つたんだろう」

「そうですか。それにしてもアイツ・・・カツコイイな!」

「ルチャブルを気に入ったのかい?」

「あの、ルチャブルに詳しいんですか?」

「ピーカ?」

「ああ、私はこの森の管理をしている者で、彼らとは長い付き合いだ」

「じゃあ、ルチャブルの事をいろいろ聞かせてもらえないですか?」

「フフ・・・ええ、いいとも」

それからカイト達は男性の後を付いて行き、彼が住んでいるウツドハウスにやつて来た。そして温かい紅茶を渡され、各々飲んで一息ついたところで自己紹介した。

「私はカナザワと言う。改めて宜しく」

「こちらこそ、俺はサトシです。こっちは相棒のピカチュウです」

「ピカチュウ!」

「シトロンと言います」

「私はユリーカ、宜しくです。こっちはデデンネよ」

「ネネネ〜!」

「私はセレナです」

「俺はカイトと言います。こっちは相棒のグラエナとノクタスです」

「グガウツ！」

「ノーク！」

「私はシノンと申します。こっちはパートナーのキュウコンです」

「ゴーン！」

「こちらこそ宜しく」

「あの・・・」

「ん？ああ！ルチャブルの事だね。アイツはある日、フラリとこの森にやって来たんだ。この森には格闘自慢のポケモンが多いからね。きつと力試しに来たんじゃないかな？」

「力試しか・・・ではあのゴロンダも？」

「いや、あのゴロンダはずっとこの森に棲んでいてね。さつき言った通り強さを求めて数多くのポケモン達と戦ってこの森の上位クラスであるんだ。そんなゴロンダを始め強者ポケモン達をルチャブルは次々と倒して、今では森のチャンピオンと呼ばれているんだよ」

「チャンピオンですか！」

「ピーカ！」

「カッコイイですね」

「ゴーン」

「大人しいポケモンを虐める乱暴者をやっつけてくれるんで、僕達も助かっているよ」

「さつきもそうでしたね」

「今日は負けちゃったけどね」

「ネネネ」

「攻撃に時間掛かり過ぎかも」

「そうだね。アレはちよつとね（汗）」

「コン」

「ポーズなんか取らなきゃリングマに勝てたんじゃ・・・」

「彼は独自の美学を持っているんだね。例え失敗しても戦いの美学を貫きたいんだろう」

「アイツ、人一倍こだわりの強い奴なんですね」

「ああ。そうだ、サトシ君が興味あるならルチャブルが特訓している場所へ案内してあげようか？」

「えっ!? いいんですか? お願いします!」

こうしてカイト達はカナザワの案内の元、森の中を進んで滝がある場所へ辿り着いた。

彼が言うにルチャブルはいつもこの場所で『フライングプレス』の練習をしているとの事だ。すると滝の上で技の練習をしているルチャブルの姿を見つけた。

「あつ・・・いた! よし!」

「あつ、サトシ?」

ルチャブルを発見した途端、サトシは走り出す。そして『フライングプレス』を完成させようと水辺に飛び込み、這い上がるルチャブルへ手を差し伸べた。

ルチャブルはいつの間にかいたサトシに驚きつつも手を掴んで引き上げてもらった。

「俺はサトシ。そのフライングプレス、受けさせてくれないか?」

「チャブ!? チャブル・・・」

「心配するなつて。俺はお前のその技を一緒に作りたいんだよ」

そう言つてサトシはじつとルチャブルを見つめる。そんな彼を暫く見つめた後、ルチャブルは首を縦に振った。

それから2人は一緒に特訓を開始し、カイト達はそれを少し離れた所から見守る。

「本当にサトシだったら! ポケモンの技を受けるなんて無茶過ぎよ!!」

「ああ、普通ならそう考えるよな。だがセレナ、アレもある意味良い特

訓の1つだ」

「えっ・・・!?!」

「何で何でく?」

「デネく?」

「動かない的より動く的の方が技の命中率が上がったりしてバトルのシミュレーションがしやすい。そして一緒に特訓する事で一体感が高まり、お互いの絆が深まるしな」

「確かに・・・それは言えますね」

「けどやっぱりポーズを決めてからだと簡単に避けられてしまうわね。何かもつと良い方法を考えないと・・・」

シノンの言う通り、ルチャブルが何度も『フライングプレス』を繰り出すのが、その度に失敗してしまう。ポーズさえなければ確実に命中するのだが、それではルチャブルの美学を捨てなければならぬ。美学を貫きつつ、技を決める良い方法は無いかと誰もが考えていた時、サトシとルチャブルの悲鳴が響いた。どうやらルチャブルの『フライングプレス』をまともに受けてしまったようだ。カイト達が駆け寄って怪我がないか訊ねると、サトシは「平気だよ」と軽く笑いながら言う。

「それより思いついたんだ。逃げる隙を与えず、ルチャブルの美学も貫ける良い方法が!」

「ほお、それはどんなh「ガルルく!」ツ!どうしたグラエナ?」

サトシの考えた方法を聞こうとした時、突如グラエナが唸り声を出した。そしてある方向を睨みつける。またノクタスも何かを感じて同様にその方向を睨む。2体が睨みつける方を見ると、森の奥からあのごロンダが現れた。

「アレはゴロンダ!もう来たのか!?!」

「ゴロゴロー!ゴンダアアー!!」

「ふむ、あのゴロンダの事だ。君のノクタスに挑戦したくて、傷が癒えたと同時にやって来たんだろう」

「本当にバトル好きなポケモンね・・・」

カナザワの言う通り、ゴロンダはノクタスに「リベンジマッチだ！勝負しろー!!」と叫んでいる。それを聞いてシノンは呆れながら吹き、カイトも苦笑しつつノクタスの傍に寄る。

「二応聞くが、挑戦を受けるかノクタス？」

「ノークタ!!」

訊ねられたノクタスは「勿論!!」と言わんばかりに鳴き声を上げながら両手の拳を叩く。彼の意思を確認したカイトは頷き、こちらを睨んでいるゴロンダに言う。

「ゴロンダ！お前の挑戦を受ける!!準備はいいな？」

「ゴーロ!!」

「よし・・・行けノクタス!!」

カイトの命を受けたノクタスは勢いよく走り出す。同時にゴロンダも走り出して、2体がぶつかると思った時、別の方から何かの鳴き声が響いた。それを聞いたゴロンダは驚いた表情となりながら足を止めて声が出した方を向く。それを見て流石のノクタスも必死に足を止めた。

そして少しすると別方向の森の奥から3体のポケモンが近づいてきた。

1体は先程のリングマ。もう1体は筋骨ポケモンのローブシン。カナザワ曰く、この2体は「森の嫌われ者」との事だ。そしてそんな2体の真ん中で堂々としているポケモン・・・怪力ポケモンのカイリキーであった。

「リキイイイイイツ!!」

「ゴ、ゴロ・・・!?」

「チャブル・・・!」

「カイリキー・・・久しぶりだね」

「ご存知なんですか?」

「ああ、実はね・・・あのカイリキーは以前森のチャンピオンで、森の平和を守る役もしてくれたんだ。そんな彼に憧れたのがあのゴロンダで、必死にお願いして彼の弟子になって修行していたんだ。そんなところへ突然森に現れたルチャブルとライバル関係になって何度も勝負した。しかし・・・次第に負けが込んでしまい、森のチャンピオンの座をルチャブルに明け渡し、それ以来姿を隠してしまったんだ。その変わりにゴロンダがルチャブルに勝負を挑むようになった」

「成程、そう言う事だったのか・・・」

「うん、その後カイリキーは山に籠って修行していると噂だったが・・・リングマ達に連れられて、ルチャブルにリベンジマッチと言う事かな?」

カナザワからカイリキーの事について話を聞いている間、ゴロンダはカイリキーの元へ駆け寄る。彼を見たカイリキーは微笑みながら話し掛け、ゴロンダも嬉しそうに話す。そしてある程度話をした後、カイリキーはゴロンダを下がらせて再びルチャブルに向けて大声で叫んだ。

「フム、今一度チャンピオンの座を掛けて勝負か・・・これは勝負が終わるまでお前のバトルはお預けだなノクタス」

「ノクタ・・・」

今の状況に流石のノクタスも空気を読んで大人しく引き下がる。だが彼の顔は明らかに不機嫌であった（汗）

その様子に内心呆れている間に2体は真正面からぶつかっていた。互いに相手の技を受け止め、自慢の技で攻めると言った熱いバトルを

繰り広げる。

だが暫くした後、カイリキーの後ろで観戦していたリングマとローブシンが動き出してルチャブルに不意打ちを仕掛けた。

「何．．．!?!」

「ガウ!」

「これは一体!」

「どう言う事なんだ!?!」

「ピーカ!」

「1対3なんて卑怯よカイリキー!」

「待ってセレナ!カイリキーの様子がおかしい。きっと彼も今の状況に戸惑っているのよ」

「シン君の言う通りだ。どうやらあの2体は最初からルチャブルへの仕返し目的だったかもしれない。その為にカイリキーを利用したんだろう」

その推測は正しかった。リングマとローブシンは戸惑うカイリキーに一瞬ニヤニヤしながら振り向いた後、不意打ちによるダメージで動きが鈍いルチャブルに何度も攻撃した。

「グマグマ〜!」

「ローブ〜!」

「リキ!リキリキ!!」

今まで散々自分達の邪魔してきたルチャブルに仕返しができて、2体はさらに笑みを浮かべる。それを見てカイリキーは止めるように言うが、2体は全く聞かなかつた。そしてルチャブルに止めを刺そうとそれぞれ技を繰り出そうとするが．．．。

「ノークター〜!!」

「ゴツロنداアアア〜!!」



技が決まるよりも先にノクタスとゴロンダが走り出し、2体の頭目掛けて『ニードルアーム』と『アームハンマー』を繰り出した。彼らの卑怯なやり方に我慢できなかった上に、バトルをお預けにされたり、師匠のバトルを邪魔されたり等の怒りが含まれた一撃は強烈で、2体は倒れてそのまま戦闘不能になった。それを見てノクタスとゴロンダは同時に勝利の鳴き声を上げた。その様子に俺はため息をつく。

「やれやれ、ノクタスの奴め・・・勝手な事をしやがって」

「ガルル！ガウウウウツ」

「ああ、分かっているよグラエナ。今回は大目に見てやるさ」

そう呟いている間、カイリキーがノクタス達に近寄って先程のリングマ達の虐めを代わりに止めてくれてありがとう、とお礼を言う。そして全てが丸く収まった後、カイリキーはリングマ達をそれぞれ片腕で抱えて森の方へと歩き出す。しかし途中ルチャブルの方に振り向いて、一言呟いた後再び歩き出した。

「兄様、カイリキーは何て？」

「ああ、チャンピオンの座を掛けたバトルは改めて行おう・・・だどさ」

「そうか、カイリキーも熱い奴だったんだな！」

カイリキーの思いや先程までのバトルを見ていたサトシは、バトルへの熱い心に火が付いてある決意を込めた表情でルチャブルに話しかけた。

「ルチャブル、カイリキーとのバトルで決着が付けられず残念だったな。代わりに俺と熱いバトルをしてくれないか？」

「ルチャ？」

「俺、お前の事気に入ったんだ。だからお前をゲットして、一緒に旅を

したいんだよ」

「・・・ルチャ。チャールブル！」

「よし！」

「ピカ！」

「やったねサトシ！」

「なら俺達の方も待たされてしまったバトルをしよう。いいな  
ノクタス？ゴロンダ？」

「ノーク！」

「ゴロゴロ！」

こうしてサトシはルチャブルと、カイトはゴロンダとそれぞれバトルをする事となった。互いに邪魔にならないように広い場所へ移動し、他の者達は邪魔にならないように少し離れた所へ行つて見守る事になった。

そしてサトシはケロマツを出すと同時にすぐさまバトルを開始した。

「もう始めたか・・・全く気の早い奴らだ。まあこっちも同じけどな。  
行けノクタス！ニードルアーム！」

「ノークタ!!」

カイトの指示を聞いたノクタスは勢いよく走り出し、そのまま『ニードルアーム』を繰り出す。それを見たゴロンダは両腕を大きく広げて『辻斬り』で切り裂こうとする。しかしノクタスは前転で躲す。それならばとゴロンダは『アームハンマー』で攻撃しようと迫る。対するノクタスも再び『ニードルアーム』を出して迎え撃った。

ドゴオオオオオオオオオオン!!!

2体の拳がぶつかり、周りに大きな音と衝撃波が発生する。しかし両者はそれを受けても揺るがず、そのまま技を再び繰り出して拳をぶ

つける。その後数回ぶつけても両者は一步も引かなかった。

「あのゴロンダ・・・予想以上に粘るな」

流石はカイリキーの弟子とも言うべきか。だがこのままでは埒が明かない。遠距離技の『ミサイル針』等を使えば有利になるが、ノクタスの奴が卑怯と感じて承諾しないだろう。ならばこの手でいくか。

「ノクタス！雷パンチ！」

戦況の流れを変える為、カイトはノクタスに新たな指示を出す。拳をぶつけつつも指示を聞いたノクタスはすぐさま『ニードルアーム』から『雷パンチ』へと変えて繰り出す。そして技が2、3度ぶつかった後ゴロンダに異変が起きた。

「ゴ、ゴロオ・・・!？」

突然その場に膝をつくゴロンダ。どうしたのかと自分の手を見ると、電気が僅かに流れてブルブルと痺れていた。これは『雷パンチ』による特殊効果で麻痺状態になったのだ。勿論その隙をカイトは見逃さない。

「二気に決めろノクタス！渾身のニードルアーム！」

「ノークタアアアアアアッ!!」

必死に立ち上がろうとするゴロンダに素早く接近したノクタスは、彼の腹目掛けて全力を込めた『ニードルアーム』を放つ。それは見事に決まり、あまりに高い威力だった事でゴロンダは空高く吹っ飛んで砂煙を舞い上がらせながら地面に落ちた。そして暫くして煙が収まると、その場には目を回しながら倒れているゴロンダがいた。

「よし！行け！モンスターボール！」

カイトの投げたモンスターボールは一直線にゴロンダに当たり、モンスターボールは数回揺れた後音を鳴らして止まった。

「よし、ゴロンダ、ゲット完了！」

「ガウウツ!!」

「ノーク!!」

「おめでとうございます兄様！」

「コーン!!」

新たなポケモンをゲットできた事にグラエナとノクタス、さらにシンノンとキュウコンと一緒に喜び合うとした時、突如背後から大きな音が響いた。何事かと思つて振り返ると、そこにはケロマツとルチャブルが共に目を回して倒れていた。どうやらサトシの方は引き分けて終わったようだ。

「残念な結果になってしまったなサトシ？」

「あつ、カイト。ゴロンダは？」

「見ての通り勝つてゲットできたぜ」

「そうか、おめでとう。でも俺はあまり残念とは思つてないぜ。だつてルチャブルと良いバトルができたんだから」

「・・・そうか」

本当に最初の頃に比べてサトシは成長したな。親だったらきつと感動して泣いているだろうな(笑)そう思いつつも2体を回復させて元気になった後、サトシはルチャブルにお礼と別れを言う。だがルチャブルの表情は何処か迷っている様子だった。それを見たカナザワは優しく言う。

「ルチャブル、サトシ君と行きたいんじゃないか？」

「えっ?」

「チャブル・・・」

やはりそうか。雰囲気的にそう感じていた。だがルチャブルは未だ迷っている様子だった。するとそこへカイリキーの声が響いた。全員が声のした方を向くと滝の上にカイリキーがいて、力強く腕組をしながら頷く。それはまるで「森の事なら私に任せておけ」と言っているかのようだった。そしてカナザワからもさらに勧められた事でルチャブルの決意は決まり、サトシの顔をずっと見つめる。

「ルチャブル、お前・・・」

「ルチャア!」

「ありがとう。これからも宜しくな、ルチャブル!」

そう言つてサトシがモンスターボールを手に取つてルチャブルに向ける。対するルチャブルも腕を伸ばしてモンスターボールに拳を合わせる。そしてモンスターボールの中へ吸い込まれ、そのままゲツトされた。

「ルチャブル、ゲツトだぜ!!」

「ピツカピカー!」

「ケロケロー!」

「サトシ君、カイト君。私からもルチャブルとゴロンダを頼んだよ。もつともつと熱いバトルをさせてあげてくれ」

「はい!」

戦いの美学を持つルチャブルと、常に強さを求めて己を磨き続けるゴロンダの2体をそれぞれゲツトしたサトシとカイト。

新たな仲間と一緒に再びシャラシティのシャラジムを目指して旅は続けるのであった。

## 灼熱のスカイバトル!!

今日も元気にシヤラシティに向けて旅をしていたカイト達一行。その途中、迫力満点の大渓谷・カロスキヤニオンへ訪れていた。

「わあく凄えな!」

「ピカチュウ!!」

「此処が有名なカロスキヤニオンよ!」

「大した所だ」

「ガウ〜!」

「本当ですね。とても雄大だわ」

「コ〜ン!」

「なにしろ自然が何万年もかかって作り上げた景色ですから」

「どうデデンネ。凄いでしょ?」

「デデンネ〜!」

カロスキヤニオンの景色を見た全員がその凄さを感じた後、折角と言う事もあってその場で休憩を取る事となった。そして折角だからと言う事で各自モンスターボールからポケモン達を出す。

するとポケモン達（ピカチュウ、グラエナ、キュウコン、デデンネ、ケロマツ、ノクタスを除く）は初めて見るゴロンダとルチャブルに驚いたり、少し警戒したりする。それを見てカイトとサトシがすぐさま説明した。

「そう言えばまだ自己紹介していなかったな。コイツはゴロンダと言って、一緒に旅をする新たな仲間だ」

「こっちはルチャブルだ。皆、宜しく頼むな」

「ゴロンダ!!」

「ルチャ!!」

説明を聞いたポケモン達はすぐさま挨拶をし、ゴロンダ達もマツス

ルポーズをとりながら挨拶した。この様子ならすぐに仲良くなれそうだと思つた時、突如俺達の上空を何かが通り過ぎた。全員が顔を上げるとそこには特殊なスーツを着て空を自由に飛んでいるトレーナーがいた。

「アレは・・・?」

「えくと・・・カロスキャニオンではスカイトレーナーが有名って書いてあるけど、アレがそうなんじゃないの?」

「スカイトレーナー・・・確かにその名にピッタリなトレーナーね」「ゴロン」

セレナの説明を聞きながら見ていると別方向からもう一人スカイトレーナーが現れて、互いに飛行タイプのポケモンを出してポケモンバトルが始まった。一方はエアームドで、もう一方は初めて見るポケモンであった。見た目と繰り出す技から飛行・炎タイプかな?と思つている間にもバトルは進み、そのポケモンが放つた『大文字』を食らつてエアームドは戦闘不能となった。

「バトルは短かったが、なかなか面白いものだったな」

「ガウ!」

「ああ、俺もやってみたいぜ!」

「ピカチュウ!」

「君達は此処に来るのは初めてかい?」

突然知らない人に話し掛けられて全員警戒するが、その男性が気の良さそうな感じだったので話をしてみる。すると彼はスカイトレーナーを指導するコーチで、先程の空中バトル・スカイバトルをしてみたいと言うと渓谷にある施設に案内してくれた。そしてカイト・サトシ・シノン・セレナ・シトロンの5人が特殊スーツ『ウイングスーツ』を着て体験する事となった。ユリーカは残念ながらサイズが合うスーツが無い為、体験する事ができなかった。その為不機嫌になる彼

女にカイト達はポケモン達を出してご機嫌取りをするのであった。

「いいですか？あのカロスキヤニオンでは、渓谷を吹き渡る風が上昇気流となつて吹き上げて来ます。それを再現したのがこちらの装置になります。これは下から空気が吹き上げて来ますので、それに上手に乗って飛んでみて下さい」

「「はい!!」」

説明を聞いた後カイト達は装置の中に入り、コーチのお手本を見ながら体験してみる。すると運動神経が良いカイトとサトシは少し練習した後すぐに飛べるようになり、シノンとセレナも同様に飛べるようになった。ただシトロンだけは運動が苦手なせいか上手く飛べなかった。

その後も練習していた時、サトシがある事を提案した。

「あの、ポケモンを出して一緒に練習してもいいですか？スカイバトルはポケモンと一緒に飛べないとダメなんですよね？」

「確かにサトシの言う通りだな。実際にやる時に飛べなかつたら話にならないから」

「その通りですね。では皆さん、飛べるポケモンを出してください」

コーチも賛成してくれたのでカイトはプテラ、サトシはヤヤコマとルチャブル、シノンはビビヨンとウォーグルを出して一緒に飛ぶ練習をする。それから暫く練習をして大分慣れてきた時、外から誰かに声を掛けられた。

「ねえ貴方達、私とスカイバトルしない？」

「えっ?」

「ナミさん?」

話し掛けてきた者は先程スカイバトルをしていた女性だった。彼



女はスカイトレーナーで、インストラクターのナミと言う人であった。どうやら先程のバトルでは相手が弱過ぎて物足りないらしく、もっと強い相手を探していた時に俺達を見つけて話し掛けたと言う事だ。

「そのポケモン達は貴方達の？」

「はい！その通りです」

「どれも良い目をしているね。ねえ、バトルしてみない？」

「やります！やらせてください!!」

「俺も是非宜しく願います」

「私も大丈夫です。たまにはこの子達と一緒にバトルしたいですし」

まさか実際にスカイバトルができるとは思っていなかったカイト達は、このチャンスを逃さないと言わんばかりにバトルを受けようとする。だが隣にいたコーチは少し厳しそうな表情をしていた。

「うくん・・・君達は運動神経が良くてかなり慣れたから大丈夫だと思うけど、やはりまだ習い始めたばかりだからキツイんじゃない」

「大丈夫！少ししか見てなかったけどさつき気持ち良さそうに飛んでいたじゃない。それに私が付いているしね」

「はい！」

「では最初誰からやる？ジャンケンでもして決めるか？」

「それも良いですけど・・・ちなみにナミさんは誰からか希望ありますか？」

「そうね・・・ならこの子に決めてもらおうかしら！」

そう言つてナミはモンスターボールを取り出し、先程バトルをしていた鳥ポケモンを出した。それを見てサトシがすぐに図鑑を開いて調べる。

『ファイアロー。烈火ポケモン。絶えず高温で燃える炎袋を持つ。戦

闘など激しく活動すると更に火力が強まる。ヤヤコマの最終進化形」  
「へえ〜ヤヤコマの最終進化形か」  
「そして炎・飛行タイプか。バトルを見ていた時も感じたが、間近で見るとさらに強いポケモンであるのが分かる。これは楽しめそうだな」  
「・・・ヤツコ〜。ヤツコヤツコ〜！」

目の前にいるファイアローが結構強いポケモンだと分かったので、これから行われるバトルが楽しめると内心喜んでいた時にヤヤコマが翼を大きく広げながら鳴き声を上げた。どうやら自分の最終進化形であるファイアローに挑戦したくなったようだ。

だがファイアローはヤヤコマをじつと見た後、顔を横に向けた。

「ファイアーファイ〜アー」

「ああ・・・ヤヤコマだと話にならないって言ってるわ」

「えっ?」

「ヤコ!?! ヤツコヤコ!!」

ファイアローの言葉にサトシは驚き、カイトとシノンは苦笑する。そしてヤヤコマは怒りの声を上げて抗議するが、ファイアローは気にせずに残りのポケモン達をじつと見つめた後あるポケモンを指名した。

「ファイア、ファイアー!」

「分かった。ファイアローがそのプテラとバトルしたいと言っているわ」

「プテラとやるならば俺もだな。バトルはするかプテラ?」

「プラー!!」

「ヤツコ〜〜!!?」

指名されたプテラは翼を広げて勇ましく鳴き声を上げる。だがそれによりヤヤコマの悲しみの鳴き声が響いた。余程ショックだった

のか、サトシの肩の上で顔を下に向けてしよぼくれていた。流石に心が痛むな。

「そう落ち込むなヤヤコマ。なら俺とプテラが勝ったらファイアローとバトルをする。どうですかナミさん？」

「ええ、別に問題ないわ。ね、ファイアロー？」

「ファイアロー」

「ありがとうございます。と言う訳でサトシ、シノン。悪いが最初は俺からやらせてもらおうぞ」

「分かった。必ず勝てよカイト！」

「私も大丈夫です兄様。でも今回はヤヤコマの為に最初から全力で頼みますね」

「ああ、分かっている」

こうしてスカイバトルを行う為に一同は外に出て溪谷に向かう。そして着くと同時にナミはファイアローと一緒に空に飛んで準備を整える。

それに続くようにカイトとプテラも空を飛ぶ。その様子を全員が近くの岩場で座って見上げている中、ヤヤコマだけは俯いたままだった。どうやら先程のやり取りにまだショックを感じているようだ。それに気がついたユリーカとシノンが話し掛ける。

「元氣出してヤヤコマ。あのファイアローは、ヤヤコマが小さいから見くびっているのよ。そんな事気にしない気にしない」

「そうよ、それにさっき兄様が言ったでしょう？プテラが勝ったらバトルするって、だからその時に思いっきり見返してあげなさい。それに小さくてもできる事は沢山あるのよ」

「・・・ヤコゥ・・・ヤッコ！」

2人の言葉を聞いてヤヤコマは先程とは打って変わって決意が籠った表情で前を向く。それを見てシノン達も微笑みながらバトル

の方へ視線を移した。そしてコーチの合図と共にバトルが開始された。

「先手必勝よファイアロー！突く！」

「ファイア！ファイア！」

「躲して岩なだれ！」

「プラー!!」

素早い動きで『突く』を繰り出すファイアローだが、プテラも同様に素早い動きで躲す。そして『岩なだれ』を大量に放つが、ファイアローは全て躲した。

「あのファイアロー、かなり速いな」

「ピーカ」

「それに空を飛んでいますからなかなか決まりませんよ」

「そうよね」

「これは一瞬でも隙を見せた方が負けるわ」

「ガウ」

「コーン」

シノン達の言ってる事はカイトとナミも分かっている、どちらも真剣な表情で指示を出した。

「鋼の翼！」

「翼で撃つ！」

互いに翼を大きく広げて突っ込んで激突する。ぶつかった際に周りに衝撃が起きるが、どちらも体勢を崩さず飛び続けた。

「やるわね。だったら次は・・・ブレイブバード！」

「ファイアー！」







たのを確認した後、サトシがナミにバトルをお願いした。

「ナミさん、俺とヤヤコマとのバトル…是非宜しくお願いします！」  
「ヤッコー！」

「勿論受けて立つわ。私達もちゃんと約束を果たさ「ファイアー!?!」…えっ!?!」

突然ファイアローの悲鳴を響いて全員がその方を見ると、ファイアローが大きな網に捕まってもがき苦しんでいた。

「な、何なの!?!」

「な、何なの!?!と聞かれたら!」

「黙っているのが常だけどさ!」

「それでも答えて上げるが世の情け!」

「世界の破壊と混乱を防ぐため!」

「世界の平和と秩序を守るため!」

「愛と真実の悪と!」

「力と純情の悪を貫く!」

「クールでエクセレントであり!」

「ラブリーチャーミーな敵役!」

「ムサシ!」

「コジロウ!」

「ミズナ!」

「ロバル!」

「宇宙と銀河を駆けるロケット団の4人には!」

「ホワイトホールとブラックホール、2つの明日が待っているぜ!」

「にやーんてニヤー!」

「ソォーナンス!」

「イートマ!」

「エアアー!」



網が出されている先にいたのは例の如くロケット団であった。彼らは今回もお決まりの長い台詞を言う。そんな彼らを見てナミが何者なのか訊ねてきたので分かりやすく悪党だと説明する。その間ロケット団は長居は無用と言わんばかりに逃亡しようとする。いつもならこのまま逃亡できたであろうが、今回のカイト達は一味違った。

「私のポケモン返しなさい!!」

「兄様、追い掛けましょう!」

「ああ、絶対に逃がすものか!」

「待てロケット団!」

「早く返しなさいよ!」

ナミを先頭にカイト達は次々と空を飛ぶ。それを見てロケット団は驚愕した。

「ええっ!? アンタ達、いつから飛べるようになったのよ!」

「あり得ないじゃーん!」

「卑怯だぞお前ら!」

「ウイングスーツのおかげよ!」

「これで私達は空を飛べるの!」

「ニヤ々空を飛べるなんて羨ましいニヤ々」

「いいなく俺も飛びたいなく」

「言ってる場合ですか!? 早く逃げないと追い付かれますよ!!」

ロバルがスピードを上げようと急いで操作するが時既に遅く、カイト達はファイアローを捕まえている網と紐にしがみつき、セレナとシンロンがフォッコとウォーグルを出して『火炎放射』と『エアスラッシュ』で気球を破壊した。それによりロケット団は地上に落下した。だが彼らもすぐに体勢を立て直してそれぞれ手持ちポケモンを出した。

「行け〜！バケツチャ！」  
「行け〜！マリーイカ！」  
「行くじゃくん！シシコ！」  
「行きなさい！カメテテ！」

出てきた4体に対してすぐに応戦しようとした時、ヤヤコマとウォーグルが前に出た。そしてサトシとシノンも前に出て「自分達にやらせてほしい」と頼んだ。ヤヤコマは兎も角、ウォーグルは久しぶりのバトルに燃えているのかな？まあ2人の実力は確かだし、此処に任せようとカイト達は後ろで観戦する。

「マリーイカ、体当たりだ！」  
「シシコ、頭突きじゃーん！」  
「マリー！」  
「シーシ！」  
「ヤヤコマ、カマイタチ！」  
「ヤツコ！ヤツコ〜コココ！」  
「ウォーグル、エアスラツシュ！」  
「ウォーグ！」

迫るマリーイカとシシコに対してヤヤコマは『カマイタチ』で、ウォーグルは『エアスラツシュ』を繰り出してダメージを与える。さらにその隙にヤヤコマが『鋼の翼』で網を切って、ファイアローを救出した。

「クーツ、悪の波動！」  
「こちらは水鉄砲です！」  
「躲して突く！」  
「こつちも躲して思念の頭突きよー！」

放たれた技を2体は素早い動きで躲し、そのまま『突く』と『思念

の頭突き』を食らわせる。それによりバケツチャとカメテテは倒れる。だがロケット団は諦めずに今度は『サイケ光線』と『火炎放射』を放たせる。その先にいたのはファイアローで、彼も素早い動きで技を全て躲す。

「お返しよ！ファイアロー、大文字！」

「ファイアロー！」

指示を聞いたファイアローは、先程の捕まえられた分の怒りも込めて『大文字』を放つ。それを食らったロケット団は空へ勢いよくブツ飛んだ。

「飛べた！空を飛べたぞ！」

「自分の力で飛んでる訳じゃないのニャ」

「それじゃ意味ないじゃん」

「ダークボーイ達はあのスーツで自由に飛べのですから・・・」

「あのスーツ欲しい！」

「「「「やな感じー!!」」」」

「ソクナンス！」

今回もお決まりの台詞を言いながらロケット団はいつものように空の彼方へ飛んで消えていった。それを見届けた後、全員ファイアローの元に集まって特に怪我がない事を確認してホッとするとファイアローがヤヤコマを見つめて話し掛けた。

「ファイア。ファイファイアア！ファイア!!」

「ヤッコ？ヤッコヤッコ！」

「えっと・・・カイト、何て言っているんだ？」

「うん、さっき助けてくれてありがとう。そして全力のバトルをしよう・・・とさ」

「フフ、どうやらファイアローは貴方のヤヤコマを認めたようね。勿

論私もね。だからサトシ君、私からもバトルをお願いできるかしら？」

「はい！宜しく願いします！」

「ヤッコ！ヤッコ！」

「うんうん、それとシンノンちゃんもその後バトルの相手をしてくれな  
いかしら？そのウォーグルもかなり強いみたいだしさ」

「私達も大丈夫です。お願いします！」

「ウォー！」

その後ヤヤコマとウォーグルは約束通りファイアローとバトルをした。しかもその最中にヤヤコマはヒノヤコマに進化した。そして見事勝利を得る事ができた。またウォーグルの方も同様に勝利を得られた。

スカイバトルと言う新たなバトルを体験でき、新たな力も得る事もできたカイト達は、再びシヤラシテイのシヤラジムを目指して旅は続けるのであった。

ポケモンサマーキャンプ！新たなライバル登場！！

シヤラシテイに向けて旅を続けるカイト達一行。その途中、彼らは街や森など様々な所に訪れた。特に印象に残ったのは『うつしみの洞窟』と言われる場所で、洞窟内の至る所に鏡のような水晶がある幻想的な洞窟だ。その鏡の1つにサトシが引きずり込まれて別世界の自分達に会うという貴重な体験をしたのだ。（この時まさか自分までいるとは思わなかったカイトが激しく動揺したのは余談だ）

その後も旅をしていた時、プラターヌ博士から彼が主催するポケモンサマーキャンプに参加してみないかと誘われた。当然カイト達は参加する事を決めてキャンプ場に向かい、辿り着くと出迎えてくれたプラターヌ博士に再会の挨拶をして、そしてコルニのメガルカリオについて話した。

「・・・という訳なんです」

「ピーカチュ」

「んんんんんマーベラス！素晴らしい体験をしてきたんだね。メガルカリオに会ったなんて！」

「ええ、とても貴重な体験でした」

「ガーウ」

「やっぱり凄いですよメガシンカ！技の威力も何もかもパワーアップしてて、とにかく強かったです！」

「特に印象的に残ったのはやはり波導です。通常の時よりも遥かに強力だったんです」

「コーン」

「そうか・・・私も本当に見てみたかったよ。だがそんな強力なメガルカリオにサトシ君とカイト君はジム戦でぶつかる訳だね？」

「はい、俺は相手が強ければ強いほど燃えてくるんです。絶対バツチをゲットしてみせます！」

「ピーカー！」

「俺も同じです。あれ程の強さなら本気でバトルする事ができる・・・」

楽しみだなグラエナ」

「ガウウツ！」

それから暫しプラターヌ博士とサマーキャンプの件も含めて話をした後、ソフィーの案内でカイト達が泊まるコテージへと案内された。

そのコテージの前にある看板にはケロマツの絵が飾られていた。

「参加者の子供達にはそれぞれチームに別れてもらってるの。皆はチーム・ケロマツね」

「チーム・ケロマツか・・・」

自分達のチーム名を確認した後カイト達はコテージに入った。中は予想以上に広く、2段ベットが3つあっても広く感じる程だった。その後各自荷物を下ろしてベットの上に転がったり、窓から海を眺めたりしていた時にシトロンが訊ねた。

「そう言えばキャンプで思ったんですが、サトシとセレナは初めて出会った時の事を思い出すんじゃないですか？」

「そうだな、また良いキャンプにしようぜセレナ」

「勿論！」

笑顔になってそう言いながら2人は見つめ合う。なんだか急に2人だけの世界が出てきたなく、と思った時に浜辺の方から沢山の人の声とポケモンの声が聞こえてきた。

何だだろうと思って浜辺に向かってみると、ちょうどポケモンバトルが行われていた。戦っているのはゼニガメとローブシンの2体だ。

「ああーゼニガメだ!!」

「あれがゼニガメね・・・」

『ゼニガメ。亀の子ポケモン。甲羅に閉じこもり、身を守る。相手の

隙を見逃さず、水を吹き出して反撃する』

「もう一方はローブシンか。さてどんなバトルを見してくれるかな？」

そう言った瞬間にバトルが始まった。ローブシンは『ばか力』で攻撃するが、ゼニガメは素早く華麗なステップで躲す。そして一瞬の間隙をついて『ロケット頭突き』でローブシンを戦闘不能にした。

「ゼニガメの勝ちか。しかしあのステップを使った戦法、なかなか面白かったな」

「ああ！俺もバトルしてみたくなかったぜ！」

目の前でバトルを見た事もあって、居ても立つても居られなくなったサトシはすぐにゼニガメのトレーナーにバトルを申し込みに行く。

「なあ！次は俺とやろうぜ!!」

「ピカピカ！」

「オーライ！勿論やるよ。僕はハクダンシティのティエルノ。パートナーはゼニガメだ」

「ゼガ！」

ゼニガメのトレーナー・ティエルノは陽気な性格の者で、少し話をしただけでも良い奴だと分かった。そして互いに自己紹介とチーム名を教え合っただけでバトルをしようとした時、セレナを見たティエルノが突然目を瞬かせた。

「え？な、何・・・？」

「分かった！君はあの！こうしてはいられない!!」

何故自分を見て目を瞬かせているのか分からず、困惑するセレナを他所にティエルノは何かを思い出して声を上げ、その巨体には合わない

いスピードで走り出して少し離れた所にいた女の子を連れて戻って来た。

「ホラー！この子がそうだよね？」

「本当だ！初めまして！貴方がセレナだよね？」

「えっ？何で名前知ってるの？」

「だって見たもん。ポケビジョン」

ポケビジョンと聞いて全員が以前皆で協力して撮影したプロモーションビデオの事を思い出した。あの時出来上がった作品をネットで公開したが、その後確認する事もなくほぼ放置していたままだった。どうやらこの女の子はネットでセレナのポケビジョンを見た事があるようだ。

ちなみにシトロンのポケビジョンもせっかくだからと言う事で一応公開したが、そちらの方も放置したままだ。当の本人にとって黒歴史に等しい動画を思い出してもの淒く恥ずかしがっていた。

「私はサナ。宜しくね」

「サナね、宜しくね」

「私ね！セレナの事もフォッコもとってもキュートって要チェックしてたんだよ！」

「あ、ありがとう」

彼女はセレナと同じポケビジョンを撮影しており、その評価等をチェックしていた時にセレナのポケビジョンを見て知り、その素晴らしさに心を惹かれたと言う。

その為カイト達はポケビジョンの評価をチェックする為にポケモンセンターに戻り、2人が撮影したポケビジョンを見た。

「凄いじゃないセレナ。再生数が高い上にいろんな人から良いコメントを貰っているわ」



「本当・・・これ、そんなに多くの人に見られているんだ／＼」

「当然だよ。だってセレナのポケビジョン、とても良いんだから！そ  
うだセレナ、フォッコに会わせてくれない？」

「うん、いいよ。出て来てフォッコ」

「フォッコー」

自分のポケビジョンが多くの人に見られて、高い評価を貰えている  
事にセレナは恥ずかしがる。

そこへサナがフォッコを見てみたいと頼み、それを受けてセレナは  
すぐにフォッコをモンスターボールから出す。実際にフォッコを見  
たサナはメロメロ状態になる。

その間シンロンがパソコンを操作し、サナが撮影したポケビジョンを  
見ていく。

「成程、サナもいろんなポケビジョンを撮っているのね。特にフシギ  
ダネとのビデオが多いね」

「そう！いつでもどこでも私の一番！出しておいでフシギダネ！」

「ダネダネ」

そう言つてサナは腰にある1つのモンスターボールを取り出し、彼  
女の1番のパートナーであるフシギダネを出す。

「これがフシギダネ。こつちもキュートね」

『フシギダネ。種ポケモン。生まれてから暫くの間は背中の種から栄  
養を貰って大きく育つ』

「ゼニー！」

「・・・」

図鑑の説明が終わると同時にティエルノの肩に乗っかっていたゼ  
ニガメが飛び降りた。そして久し振りに会ったフシギダネに挨拶す  
るが、彼女は一瞬目を向けた後すぐ顔を背けてしまった。

だがそんな事は気にしないと云わんばかりに今度はピカチュウとフォッコが挨拶するが……。

「ピーカー！」

「フォッコー！」

「………(フン!)」

2体の挨拶に対してもフシギダネは無視した。その事にピカチュウとフォッコは大きなショックを受け、涙目になって悲鳴を上げながら固まってしまった。それを見てグラエナとキュウコンが苦笑しつつ前足を肩に乗せて慰めた。

「フシギダネは人見知りなんだね」

「そうなの(汗)」

自分のパートナーの様子にサナは肩を竦めながら苦笑する。その時、カイトとシトロンの腰にあるモンスターボールからそれぞれゾロアとハリマロンが勝手に飛び出した。

「マー！オイラも皆と一緒に遊びたいゾ！」

「ハロハローン！」

「ああ、いいぞ。遊んでおいで」

「ハリマロンもどうぞ」

「それなら俺のケロマツも！」

「ケーロ！」

3体はグラエナ達の元に向かうと挨拶をし、いろいろ話し合うとすぐに打ち解けて仲良くなった。ただフシギダネを除いて……(汗)

一方カイト達はゾロアが喋れる事に驚くティエルノとサナを落ち着かせていた時、階段を駆け上る小さな足音が段々と近付いて来るのに気付いた。

「カゲエー!!」

その者は階段を登りきると鳴き声を上げながら勢いよくポケモン達の輪の中に飛び込んだ。それは尻尾の先に火を灯し、全身オレンジ色のポケモンのヒトカゲであった。

「カゲカゲ！」

「おお、元気の良いヒトカゲだ」

「この子がヒトカゲね」

『ヒトカゲ。蜥蜴ポケモン。尻尾の炎は命の灯。元気な時は炎も力強く燃え上がる』

元気一杯なところをアピールするヒトカゲ。まさかのカントーの御三家が勢揃いした事に皆が驚き注目する中、シトロンが「トレナーは何処に？」と呟く。するとサナが階段の方を指差しながら言った。

「ちゃんというよ。ほら、あの子だよ」

階段の方を見ると首にカメラを掛けた小柄な少年が息を切らせながら上がって来た。さらにその後ろから2人の男女もやって来た。

「トロバ、大丈夫？」

「しっかりしろよ。ティエルノとサナはあそこにいるぜ」

「ハアハア・・・は、はい」

2人に励まされながら小柄な少年・トロバは、フラフラしつつサナ達の元へ向かう。

「トロバ達ったら遅い！」

「すみません！ヒトカゲが来る途中でまたやっちゃって・・・(汗)」  
「また？」

「ねえねえ、やっちゃったってどう言う事？」

彼らにしか分からない言葉のやり取りにユリーカが不思議そうに訊ねる。それをサナが説明しようとした時、ヒトカゲが突然『炎の牙』でピカチュウとフォッコに噛みつきこうとした。2体は咄嗟に後ろに尻餅を付けながら避けたが、その技により火の粉が飛び散り、不幸にもそれがハリマロンの頭に引火して燃えてしまった。まさかの事態にハリマロンは慌てふためくが、すぐにゼニガメが『水鉄砲』で鎮火して大事に至らなかつた。しかしヒトカゲの暴走は止まらず、次は誰にしようかと周囲を見渡し、グラエナに気付く。

「カゲー!!」

「・・・ガウツ」

勢いよく突撃するヒトカゲだが、グラエナは慌てる事も無く傍にいたキュウコンにゾロアを任せて、前足を突き出して頭を押さえて受け止める。

必死に両足に力を込めるヒトカゲだがグラエナの方が強く、暫くして疲れたのか前に倒れてしまう。その様子を見てグラエナは溜息を吐き、キュウコンは苦笑した。

ちなみにゾロアは、キュウコンの尻尾で戯れていた。

これらを見てカイト達はサナが何を説明しようとしたのか察した。

「あのヒトカゲ、喧嘩っ早くて(汗)」

「皆さんのポケモン達に本当に申し訳ありません!!」

「ま、まあまあ・・・ハリマロンも無事みたいだし、グラエナが止めてくれたからそんなに謝らなくてもいいよ」

直角90度で腰を折りながらトロバは何度も頭を下げる。

これはきつと随分と苦勞しているんだなく、とカイト達は内心思いながら苦笑いし、シノンが代表して大丈夫だと言う。その後サナが改めて紹介する。

「彼はトロバ！私達3人、幼馴染なんだ。そしてこちらが旅の途中で友達となったエリナとローグよ。今回のサマーキャンプに参加してみない？って誘ったの」

「トロバです！本当に皆さん、すみません」

「もうトロバ、もう謝らなくていいと言ってるから止めなさいよ」

「は、はい。すみません・・・」

「ハア、やれやれ・・・あつ、私はエリナよ。皆宜しくね！」

「ローグだ。宜しくな」

自己紹介をする2人、エリナは茶髪のスインテールに白と水色の長袖シャツ、黄色のキュロットスカートに黒いストッキング、ピンクのシヨルダーバッグを身につけた服装が特徴だ。

ローグは少し跳ねてポリウムある赤髪に黒色のキャップ、黒色の半袖シャツ、青色の長袖ジャケット、黒色のカーゴパンツ、少し大きめの青色のリユックサックを身につけた服装が特徴であった。

3人の自己紹介が終了後、カイト達も自己紹介する。するとカイトを見たエリナとローグは驚いたように目を見開く。

「カ、カイト・・・って!？」

「もしかして・・・ダークマスターのカイト・・・!？」

「何だ？俺の事を知っているのか？」

「や、やっぱり本物なんだ!!」

「マ、マジか！まさかあのダークマスターに会えるなんてよ!!」

首を傾げるカイトを他所に2人はさらに興奮していく。それを何とか宥めつつ、サトシが理由を訊ねる。どうやら2人ともポケモンバトルが好きで、どちらもチャンピオンになるという夢を目指して旅を

しているとの事だ。その為各地方のチャンピオンの事は勿論、同等の実力を持つカイトの事も知っていた。そんな彼が目の前にいると言う事実には2人とも瞳を輝かせながら喜ぶ。特にエリナは頬を赤く染めていた。

ちなみにこの時、ようやくカイトの正体を知ったティエルノ達は本日2度目の驚きの声を上げる。そんな彼らをシノン達は再び落ち着かせるのであった。

「あ、あのカイトさん！も、もしよろしければ、その・・・私とバトルしてもらってもいいですか？あつ、今すぐとは言いませんから・・・」  
「お、俺もお願いします！チャンピオンになる為にも、カイトさんとは1度でもいいからバトルしてみたかったんだよ！あつ、いや！してみたかったんです!!」

「どうしますか兄様?」

「そんなの決まっているシノン。売られたバトルは買うのが礼儀！勿論受けて立つぞ。だがこの後もう少ししたら開会式の挨拶があるよ。うだから、それが終わってからでいいか?」

「ガウツ!!」

「ツ!!はい！ありがとうございます!!」

緊張しながら2人はカイトにバトルを申し込み、彼から了承を得られて喜んだ。

その後カイト達は互いにいろいろな事を話し合い、そして最終的にそれぞれどんな夢を持って旅立ったか言った。

だがこの時、セレナだけは会話に入らず、隣にいるサトシの方を向いたまま固まっていた事に誰も気づかなかった。

すると突然館内にチャイムが鳴り響き、サマーキャンプ開始の挨拶が行われる旨を聞いて、カイト達は外の集合場所へ急いで向かった。

「・・・夢か」

「うん?どうしたのセレナ?」

「……う、ううん。何でもない！」

1人足を止めてその場に立ったままのセレナに気がついたシノンが呼び掛ける。それに気付くと慌てて頭を振り、皆の後を追って走り出した。

それから暫くしてサマーキャンプの会場に、36名の参加者が集まった。彼らを前にプラターヌ博士は開会の挨拶を言う。

「トレーナーの諸君！今回の参加ありがとう！このキャンプは他のトレーナー達との交流を通じて、より深い絆を作り上げてもらう事を目的としている。今日から1週間のプログラムを存分に楽しんでくれたまえ！」

それからプラターヌ博士はキャンプで皆をお世話になるポケモンセンターのジョーイ、このキャンプ地の管理人のマダム・カトリーヌ、臨時に雇った5人のシェフを紹介した。

そして1日のプログラムごとにポイントが与えられ、最終日にポイントが1番高いチームが殿堂入りトレーナーとして認定される事を説明した。

「ちなみに現カロスチャンピオンのカルネちゃんも皆と同じくらいの歳にこのキャンプで殿堂入りしているのよ！」

マダム・カトリーヌのこの一言を聞いて、参加者全員の活気がさらに上がって必ず殿堂入りをしようと意気込んだ。

「では、1日目は恒例の顔合わせ、ポケモンバトル大会からスタート！ポイントは無いから自由に相手を選んで存分にバトルしてくれ！」

それを聞いてサトシはティエルノ、セレナはサナ、シトロンはトロボとそれぞれ相手を決める。残ったカイトとシノンも相手を決めよ

うとエリナとローグの方を見るが……。

「私がカイトさんとバトルするのよ!」

「いや、俺がカイトさんとバトルするんだ!!」

2人はどちらかがカイトとバトルするか周りの目も気にせず激しく言い合う。その光景にカイト達は呆れる。

「こうなったら、もうこの手しかないね……」

「ああ、そうだな……」

「カイトさん!2人同時に相手して下さい!くれ!!」

「それだとルール違反になるだろ!?!ジャンケンで決めろ!ジャンケンで!!」

カイトの説得を受けて2人は素直にジャンケンを行い、結果エリナがカイトと、ローグがシノンとバトルする事になった。

その後それぞれのペアが広いビーチに散ってポケモンを出し、バトルの準備を整えていく。

「今回はお前にするか。チゴラス!出陣!!」

「チーゴ!!」

「カイトさんはチゴラスか……それなら私はこの子で!アチャモ!!」

「チャモチャーモ!」

「兄様がチゴラスを出したなら私はこの子で……行きなさい!アマルス!!」

「ルース!」

「アマルス……氷と岩タイプか。なら俺の相棒が有利だぜ!行けミズゴロウ!」

「ガラゴロ!」

今回カイトとシノンが出したのはチゴラスとアマルスだ。2体と



も初の公式バトルと言う事もあってかなり気合が入っている様子だ。対するエリナとローグはハウエン地方の御三家、アチャモとミズゴロウを出した。この2体も気合いが籠った鳴き声を出した。

そして全員がポケモンを出してバトルの準備が整ったのを確認した。プラターヌは、首から提げているホイッスルを口に運ぶ。

「用意はいいかい？それでは・・・バトル、スタート!!」

ピーーーツ!!

高い笛の音がビーチに響き渡った。

それにより各地にてトレーナーとポケモンの声が聞こえ、技が放たれてぶつかる音が響きながら激しいバトルが開始された。当然カイト達の方も同じだ。

「チゴラス、岩なだれ!」

「チーゴオオ!!」

「アチャモ、電光石火で躲してつつくよ!」

「チャーモ!」

先手必勝とばかりにチゴラスは『岩なだれ』を放つ。対してアチャモは『電光石火』で躲し、そのまま『つつく』を繰り返す。しかし岩タイプで、防御力が高いチゴラスには効いていなかった。

「今度はこちらの番だ。チゴラス、噛み砕く!」

「チゴ!チーゴ!」

「チャーモー!?!」

反撃とばかりにチゴラスは、今もなお『つつく』で攻撃しているアチャモに『噛み砕く』で攻撃する。さらにそのまま体を銜えて、勢いよく投げ飛ばした。それによりアチャモは砂浜に何度もバンドして

ようやく止まった。大きいダメージを負ってフラつくアチャモだが、その目から闘志は失っていない、じつとチゴラスを睨みつける。それを見てエリナも諦めずに指示を出した。

「負けないでアチャモ！私も貴方と同じで、どんな状況でも絶対諦めない！ニトロチャージ！」

「チャモ！チャモチャモチャモ!!」

「その諦めない姿勢、とても良いぜ。こいつは久々にバトルを楽しむ事ができるかもな。チゴラス、ドラゴンテールで迎え撃て！」

「チーゴ！ゴーラ!!」

炎を纏わせて、勢いよく走りながらアチャモは『ニトロチャージ』を繰り出す。対するチゴラスは『ドラゴンテール』で攻撃するが、技を出す度に追加効果でスピードが早くなるアチャモになかなか当てる事ができなかった。しかしアチャモも炎タイプの技である為、効果はいまひとつだった。だが両者共に気を緩めず、相手の隙を窺いながらバトルを続けるのであった。

一方シノンとローグの方では……。

「ミズゴロウ、水鉄砲だ！」

「ガーラ！」

「アマルス、凍える風！」

「ルース！」

効果抜群の『水鉄砲』を放つミズゴロウ。しかしアマルスは『凍える風』で防ぐ。それを見たローグは次に『岩砕き』を指示するが、シノンは『岩石封じ』で防ごうとする。

「ミズゴロウ、そんな岩なんて全て壊してしまえ！」

「ガラー！ガラーガラー！」

大量に落ちてくる岩石をミズゴロウは全て破壊する。しかし最後の岩石を壊した後、流石に疲れがでたのか動きが一瞬止まってしまふ。その隙をシノンは見逃さず、素早くアマルスに指示した。

「アマルス、フリーズドライ！」

「ルルス!!」

「ガラー!?」

「ミズゴロウ!!」

勢いよく放たれた『フリーズドライ』は、一直線にミズゴロウに向かって命中する。本来氷タイプの技はあまり効かないミズゴロウだが、この技は水タイプにも効果抜群になってしまう技の為、ミズゴロウは大きなダメージを負ってしまった。

「大丈夫か、ミズゴロウ!?」

「ガッ・・・ガッ」

「自分で言うのもなんだけど・・・こう見えて私達、結構強いよ」  
「ルルス！」

シノンとアマルスの強さにローグは怯みかけるが、ダメージを負いつつも立ち上がるミズゴロウを見て再び闘志を燃やした。

「そ、それでも俺達は負けない！最強のチャンピオンになる夢の為に負けるもんか！行くぜミズゴロウ!!」

「ガラー!!」

「そう、大きな夢ね。でも私達も負けないわ！アマルス、行くよ！」  
「ルルス!!」

再び立ち向かって来るローグ達にシノン達も気を引き締めてバト

ルを再開した。

その後バトル大会は夕方まで続き、各ペアの勝敗が決まる中、カイト達全員は引き分けの結果に終わった。しかし彼らはこのバトルを通じて打ち解け合い、夕食も一緒に食べ合いながら談笑するほど良い関係となった。

こうしてポケモンサマーキャンプの1日目は、良き友人かつライブルと出会いなど中々良いスタートを迎えるのであった。

だがその夜、フオツコと共に外の景色を見ていたセレナだけは、どこか暗い表情をしていた事に誰も気がつかなかった。